明治四十五年二月廿五日印刷納本（毎月一回廿五日印刷納本）明治廿七年十二月十九日第三種郵便物認可

三月號

女子文壇



第八年第三號

（通卷第百十二號）

東京女子文壇社發行

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不姙娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所　中西葆光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

鮫島大浪先生著

新刊

わかれたる女の日記

四六版
艶麗無比
定價四十五錢
郵稅四錢
（どこの本屋でも取つぎます）

ある女の大膽なる告白——小說以上の小說——

破天荒の快著述

發賣元　京橋區西紺屋町　良明堂

女子文壇三月號（第八年第參號）目次

小説『不如歸』論

口絵


ヴワイオレット
ねり製 水製
壽美禮おしろい
西洋色白くなる
壽美禮あらひ粉
壽美禮おしろいは即座の化粧に適し使用最も簡便にして濃くも淡くも自由にして殊に多量の花精を含み温雅なる芳香を放ち湯上り等に用て爽快を覚へ美は益々艶を發揮す
べし
壽美禮煉白粉
壽美禮水白粉
壽美禮粉白粉
壽美禮打白粉
製造本舗
東京東両國元町
壽美禮堂
電話浪花二七六五番

花の段階



以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田磧弘報舘で販賣す

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

萬物製法秘術寶典

目錄、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●癇癪玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●罐詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジャエール●蜜柑水●甘酒●味噌●醤油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**（器械不用）**早印刷法**等が百餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は藥店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目錄鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を九呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●箱に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法 附錄 **驚神的大魔術** 其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺悪き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢（郵券代用は廿五錢）

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目錄天に文字を顯す術●白晝を闇黒にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙の妖術●モルモット術●金錢自由吸術●**切支丹バテレン**集の妖術●縄拔の妖術●火渡の奇術●武道竹折術**隱身術**人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不働金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揭げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如し、そして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。（**ウラ**見よ）

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡屆其他澤山。郵税共廿三錢

男女無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。（他人に見えぬやう密封にて送ります）定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易素人治療法

●感冒●胃病●痔●淋病●子宮病●眼病●寢小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黑くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

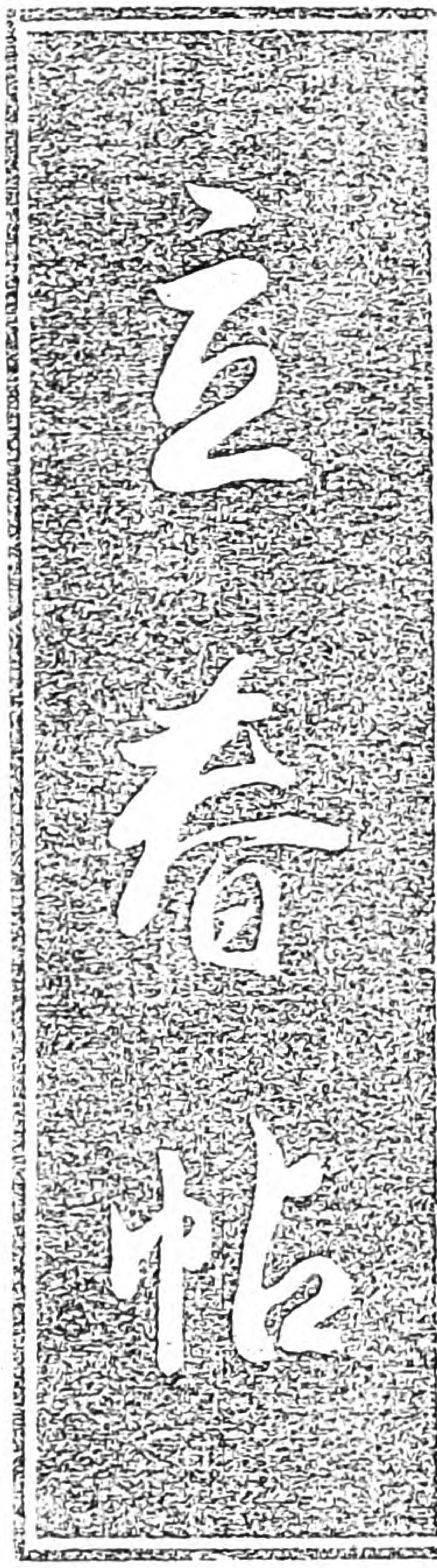
振替 東京一六九二八番 大阪一四五一七番 三重縣桑名矢田磧 **弘報舘**

（割引）上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割増

多田親愛翁遺墨

▲手蹟の美醜は直に其人品の高下を想見せしむ

多田親愛翁は上代和様の書風を傳へたる近世無雙の妙手にして其書の高雅優美なる遙に一世に冠絶せり是れ其書の國文家及び貴婦人間に特に尊重せらるゝ所以なり本書は和漢朗詠集の春の詩歌を揮毫せるものにして幾多遺墨の逸品たり今之を原寸大の寫眞金屬版に附して最上質の鳥の子紙に印刷したれば神韻風動して毫末も肉筆本に異ならず以て和樣書風の好模本と爲すべき也



寫眞金屬版印刷
用紙鳥の子
絹表紙折手本
全一冊
正價金七拾五錢
郵稅金四錢

▲是れ社交上に於て手蹟の特に大切なる所以なり

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部 振替口座一二三番

發賣所 東京日本橋區本町 博文館 振替口座二四〇番

御婦人の寶

歐米にて盛んに用ゐらるゝ安全帶衣を每月用ゆれば子宮病にかゝる事なし

御婦人方が生涯無病で御過しなさるには月經の處置が最も大切です。從來の樣に脱脂綿等を挿入しされては。經水の滯るのみならず綿纖が殘り乾落し子宮病ヒステリー等の病原となり醫家の嘆かるゝ事です。安全帶衣は藥學士の發明にて消毒完全吸收力は脱脂綿の數倍で博士方へ甚く賞用されます故。月經時には極く重寶便利で如何程經水の多い方でも經漏する事はありません且つ起居動作極安全で旅行にも白血長血帶漏等にも妙です。



東京市下谷區池之端七軒町四十二番地　本舖　安全堂

關西一手販賣　大阪西區阿波座上通一ノ二三角　洋々堂分堂

定價　安全帶…(甲)一筋壹圓貳拾錢、(乙)八拾錢、(並)五拾錢　一筋にて四五年使用出來升

安全衣は一打入一箱金四拾錢

小包料一組(帶、衣共)金十二錢、一組を増す每に二錢を増す

高等化粧料　ほとゝぎす

本品は歐米先進國化粧品界に於て選びたるゼルッ種ミルク鷄卵とを用ひて精製したる品なるが故に高等化粧料として各國人に貴重され皮膚の荒性の方やニキビ、ソバカスの爲に御こまりの方は『ほとゝぎす』を御用ひになれば大効が有ります化粧下に用ひて白粉の附着、伸暢とを好くし衛生上この上もなき品なるが故に化粧界の唯一品として溥愛せらる紳士貴婦人方廉價にて化粧料として最も原料の好き品故に一本御試し下され

(注意)御使用の時は瓶を二三度振盪し御用ひ被下さるよう

送料　小瓶定價金四拾錢

無料　大瓶定價金七拾錢

各國化粧品卸　安全帶本舖　ほとゝぎす　發賣元　安全堂

東京市下谷區池之端七軒町四十二番地

第十二巻第四號

三月一日發行

菊判紙數二百八頁
口繪 石版 寫眞版 澤山
正價 廿錢
郵稅 二錢

女學世界



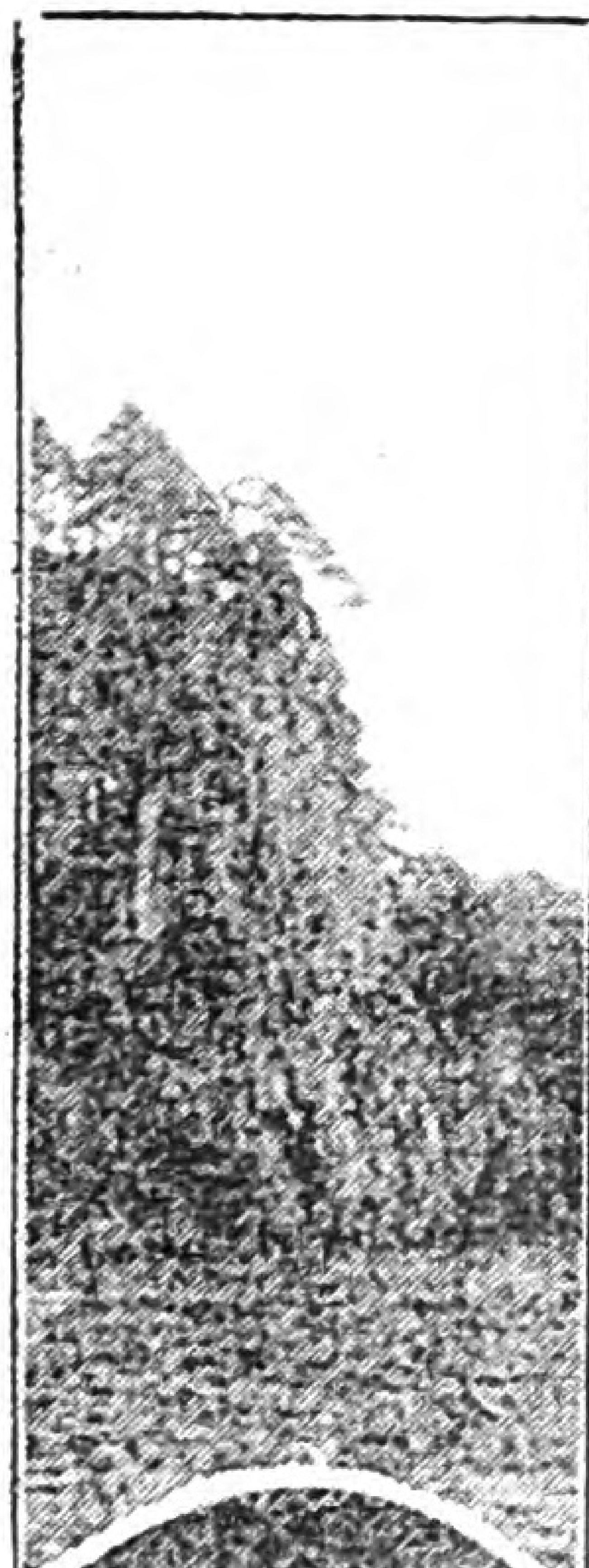
△新案懸賞十二支合せ（賞金壹百圓）

東京 博文館 本町

山階宮安子女王殿下



（最近御撮影）

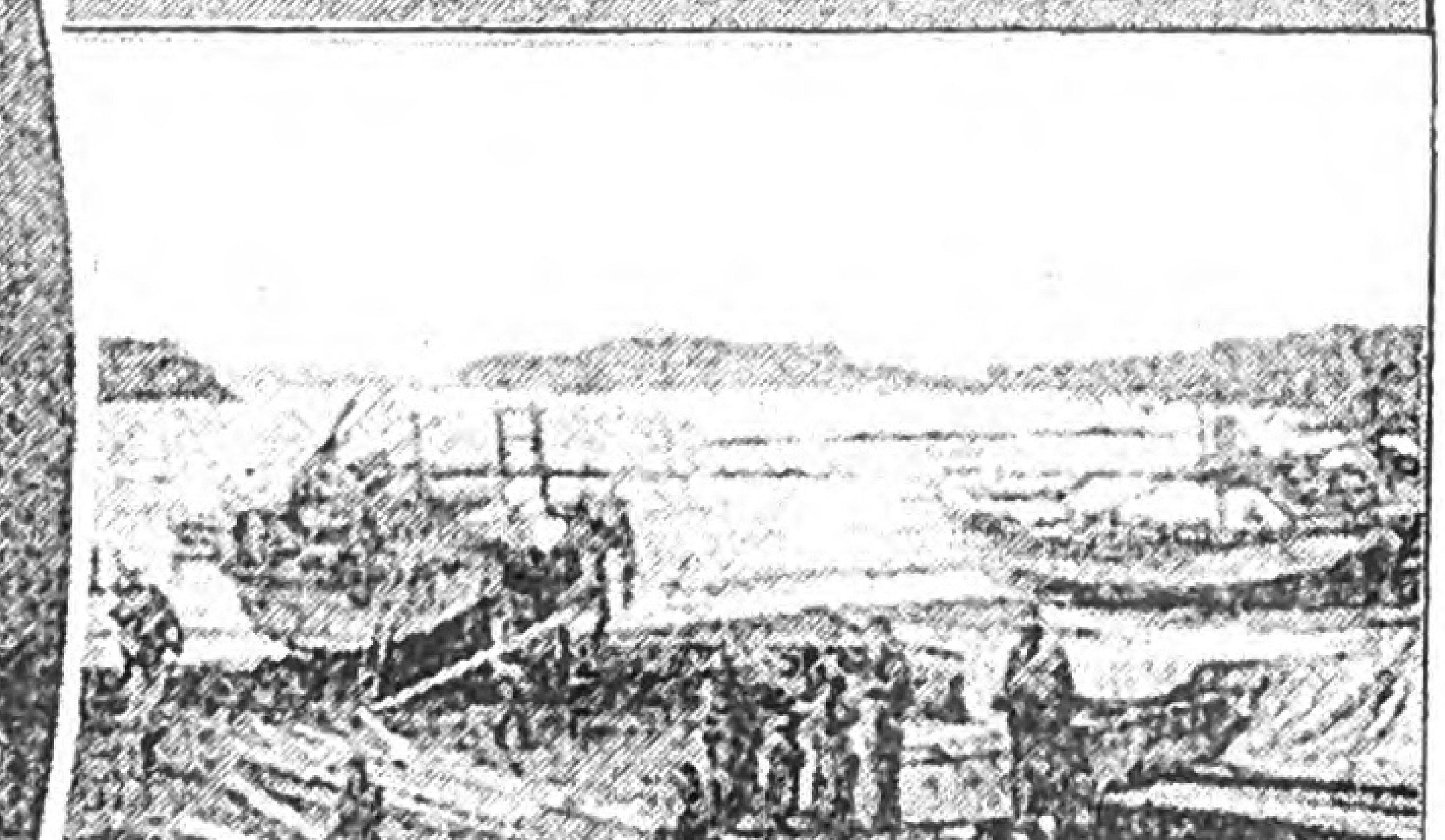




博文館主大橋新太郎氏令嬢文子（三輪田高女在学）



紳商龜屋鶴五郎氏令嬢



翠黛

小山田秋子講述

最新女子裁縫講義

女子に取りて最も大切な仕事は裁縫である。女の生命とも云ふべきものも亦裁縫である。女として裁縫の出來ぬものは女でない所謂女の不具者である。本書は其不具者を出さゞらんとして一より百迄總て裁ち縫ひに關する事は極平易に解釋したれば如何なる初學の者でも直に上達する近頃得難き良書です是非一册を皆々樣にお勸め致します。

菊版頗美本
定價四十五錢
特價三十錢
郵税六錢

發賣元 東京市本郷區春木町三ノ十五 振替口座東京壹壹〇六番 菁莪堂書店

ニキビ そばかす にて苦悶者は藥學界の泰斗が半生の心血を注ぎて漸く

藥學士藤本理先生

發見せられたる特種の奇藥ウヴル！を使用して速に苦惱を脱せよ但し本劑希望者は本劑購求前又は同時に本劑の說明書を要求せられ其特効たるを確信の上使用を乞ふ

藥價 輕症用五拾錢 送料市內四錢地方八錢清韓臺灣卅錢

東京 東京本郷區切通坂町三十四番地 長田商會 振替口座東京一一一三五番

經通丸

調劑元

[illegible]

東京市丸の内 有樂町二ノ三 江戸屋

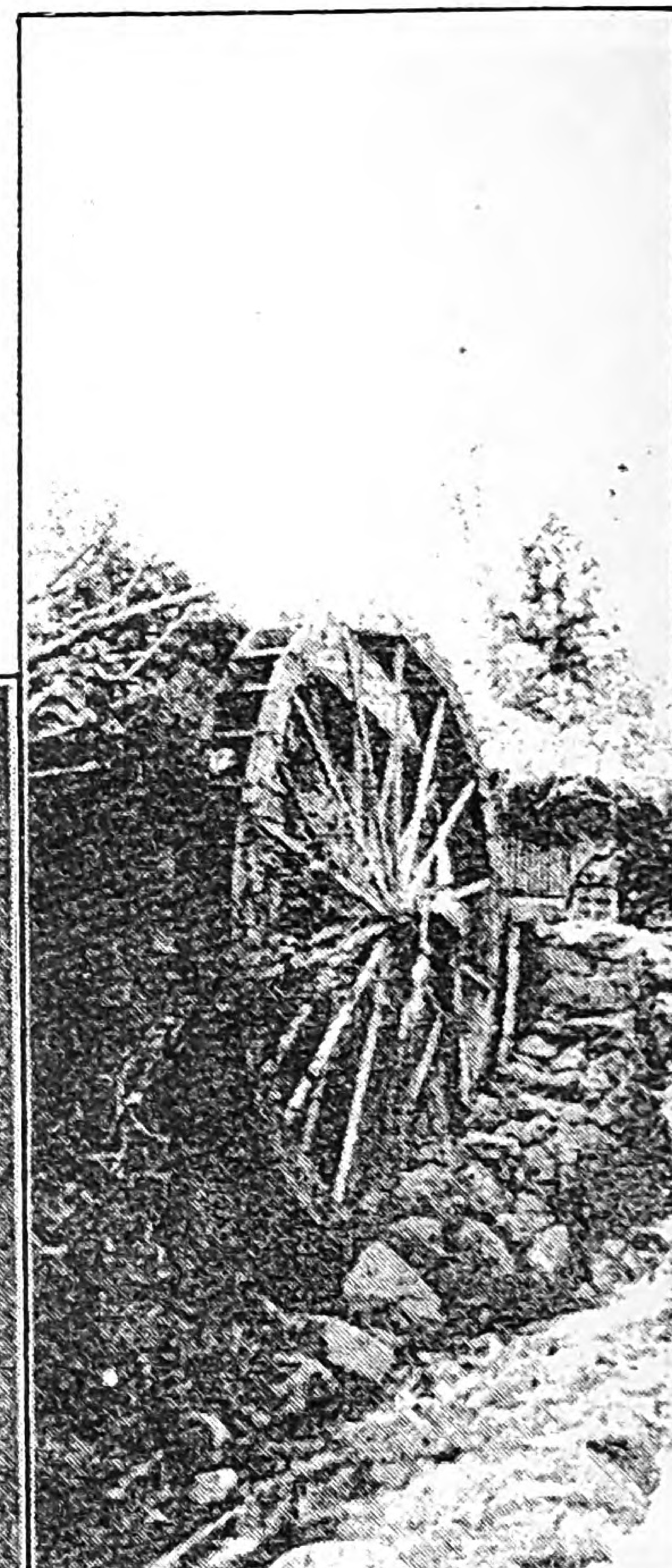
惡戯して御褒美

君ちやんは本年六歳になります可愛い丶兒ですが惡戯が好きで時々母親さんや姉様達を困らせます。今も何やら白壁に惡戯書をして居りますから母親さんは又かと思つて叱らうとして見ると如何にも上手い字で到底も六歳の小兒の書いたものとは思はれません、不思議に思つてよく／＼聞いて見ますと姉様達が日頃から習つて居る帝國習字速成學會の專賣特許の習字速成法で稽古したのださうです。母親さんは叱る代りにかへつて褒美を遣りました。――實際同會の習字速成法は小兒でさへこの通り





うまくなるのですからどんなに字の拙い人達でも二三ケ月練習すれば見違へる程上達します、手本は有名な小野鵞堂先生ですから御婦人には適當です、同會へ入りたい方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會へ『ハガキ』で（電話なら下谷三〇一一番か三三一〇番へ）御申込みになれば直ぐ見本つき會則を無代で送つて參ります



雪解水

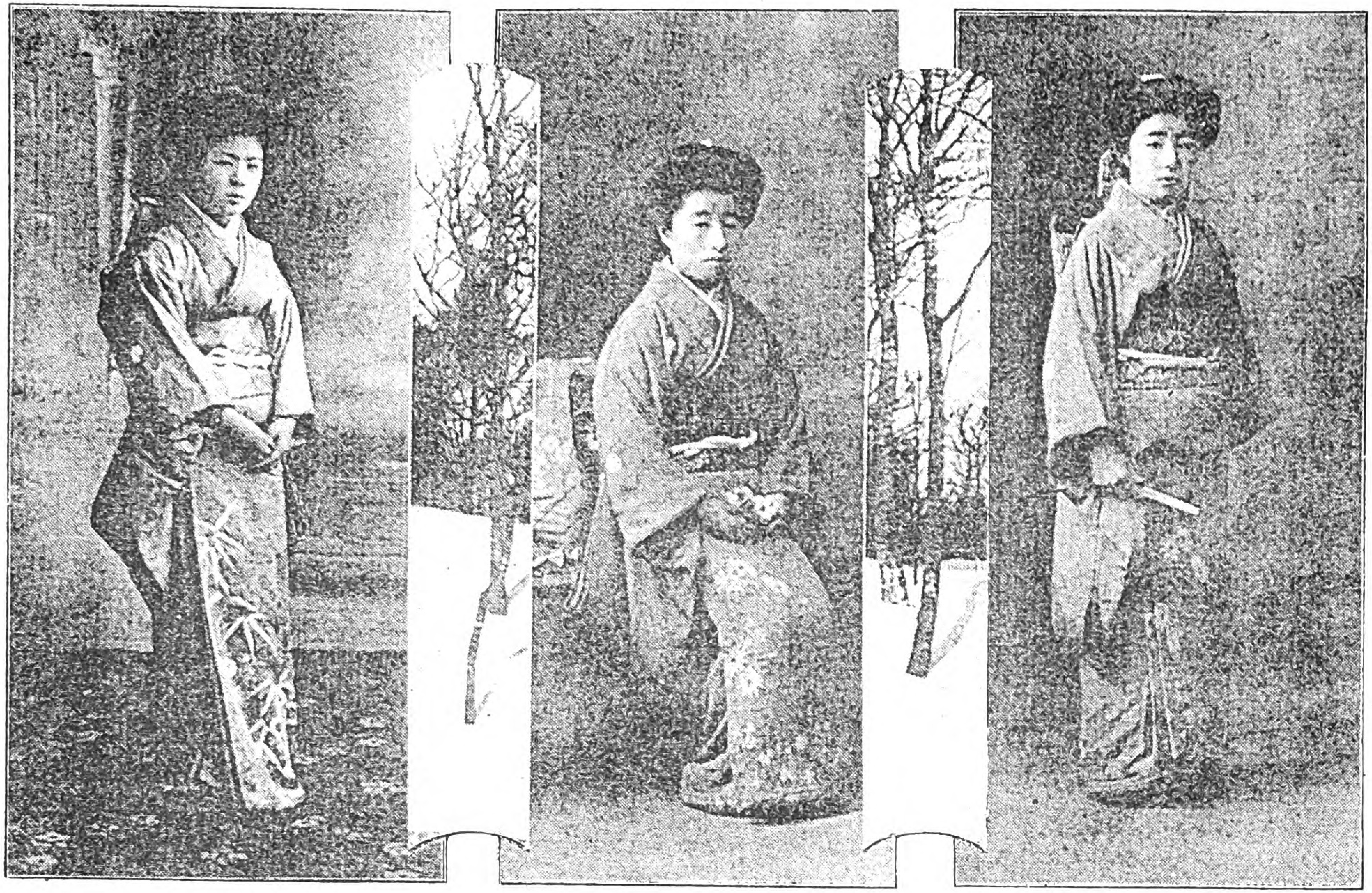
梅一輪

一輪づゝの
あたゝかさ



山形縣前縣會議員伊藤孝右衛門氏令孃智惠子

かげろふ



東京製綱株式會社取締役山田昌邦氏令孃君子

山田昌邦氏令孃照子

米澤市中條病院長令孃富士子

ハイカラタスキ



片たすきの圖



はすにせなかへかけたる圖



そでを前へかけたる圖

（御使用法注意）

時代の要求に應じて生れたるハイカラ襷は御覽の通り袖が自由自在いろ〳〵になります女學生諸君女子事務員、奥さん、女中さん共に必要

各女學校御用品

（新案特許 一九五〇三）

特色

一 今までの襷とちがひ袖へ（しは）のつく心配がなく掛けはずしにも面倒でなく御便利です

一 せなかへ（はす）に掛けると右の袖がうしろへ引かれる故水仕事の時には最もよろしく腕を充分に出そうとするには袖口の近くへ（ばね）を御付になれば自由に出ます

一 十文字になりませんから暑中などには衣類へあせが付かずおつか一尺五寸位の紐さへ御取りかへになれば永年御使用が出來て甚だ御經濟です

御使用の節は必らず兩袖へ（ばね）を一ツづゝ付てから後でいろ〳〵に御掛になればよろしいのです

定價 一個入金八錢 送料二錢　五個入金卅八錢 送料四個迄八錢　十個入金七十五錢 送料二個迄八錢

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店

電話芝二八八四番　振替東京三二二三番

㊟特約販賣希望の方は郵券十錢封入を乞ふ見本及規則書送付す

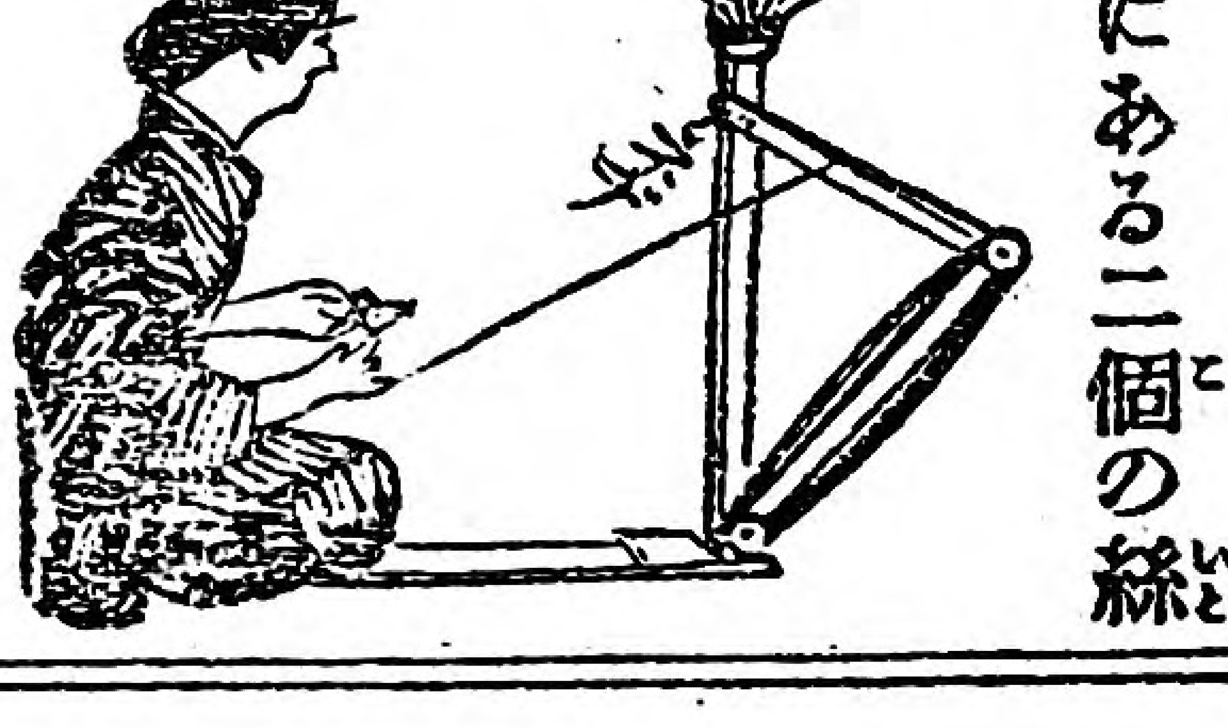
特許竹中式絲掛付絎臺

●御婦人方の新福音！

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絓糸を糸巻にまき取る時に一々人樣の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリタ、ミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る樣に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に糸巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



「定價」

御誂朱塗製	金七拾錢
御誂黒塗製	金六拾錢
特製	金參拾錢
上製	金廿五錢
並製	金貳拾錢

美麗なる箱入なれば進物用に好適也●市内は一本にても御一報次第無料配達す●送料地方は拾錢●清鮮臺襷は三拾錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店

電話芝二八八四番　振替東京三二二三

㊟特約販賣御望の方は御照會あれ

文學博士　森鷗外先生序
文學博士　上田敏先生序

新譯源氏物語

與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

上巻二十一帖目次

上巻既成特價提供

紫式部の源氏物語に關する注釋類や梗概の續出は本書の現代化の要求を證據立てる然るに古典の精神をかみわけて言文一致に譯すことは西歐文學の飜譯よりも困難なる大事業である譯者は此困難を切拔けて見事に成功した而して現文壇の權威たる森上田兩先生は本書に序して我國第一の古典文學源氏物語の譯者として晶子女史が現代第一人たるを論じ其成功を激賞されたのは正に此新譯に裏書したるものである加ふるに中澤畫伯の華麗雅典とうぐなる源氏繪卷五拾四帖（奉書刷木版極彩色密畫五十四葉）は内容の優美と相俟ち彷彿として平安朝の榮華を展開し平安朝の天才と明治文壇の天才とに日本唯二人の才女の合作を飾つて居る

鳥子紙繪卷物風極彩色金文字入ギルト附頗美本全三冊
上巻中澤畫伯木版極彩色畫廿一葉挿入正價各冊金參圓
特價各冊貳圓五拾錢
小包料拾六錢
中巻三月○下巻五月中發行

上田博士序
晶子女史著

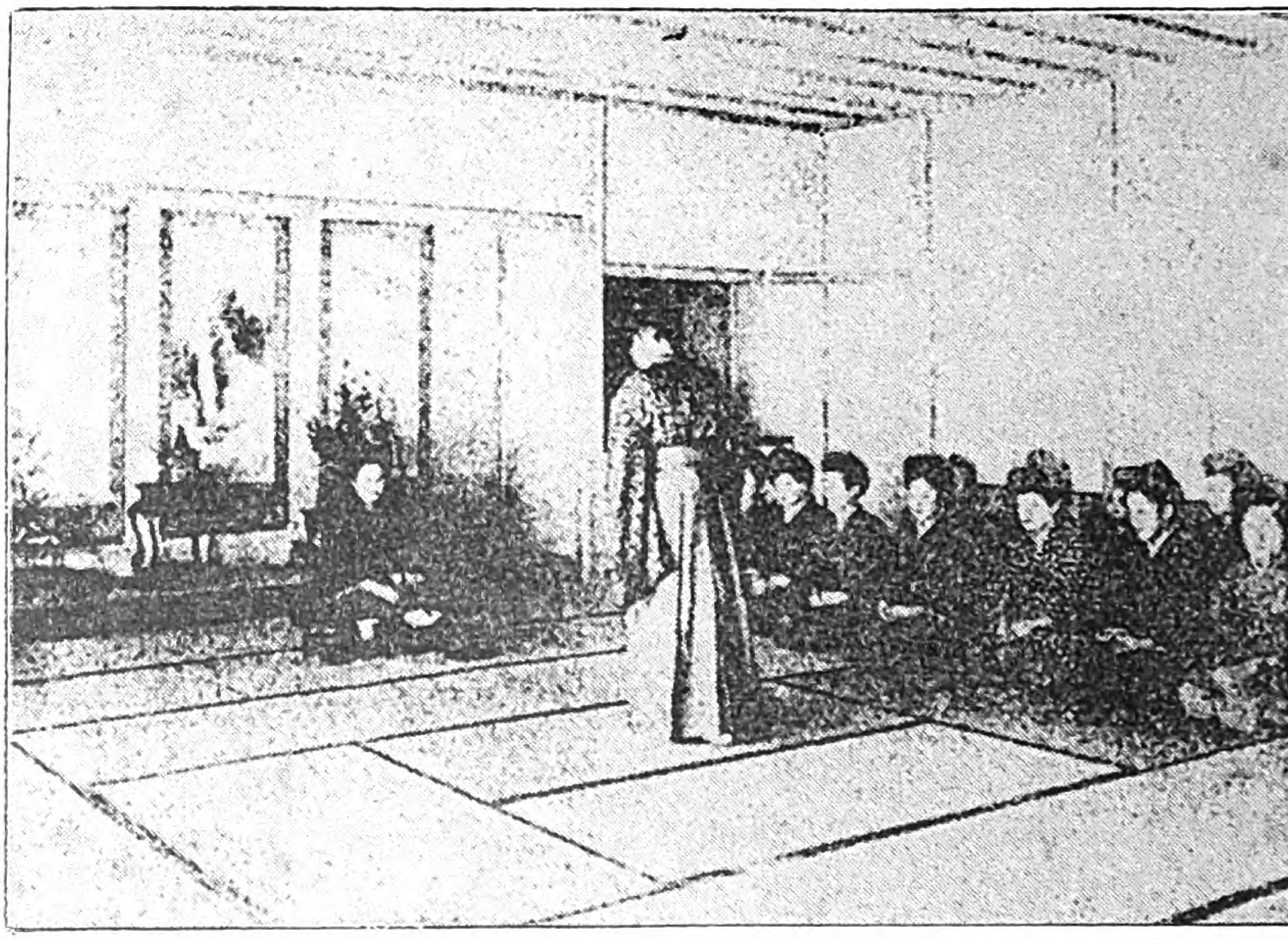
春泥集

三版

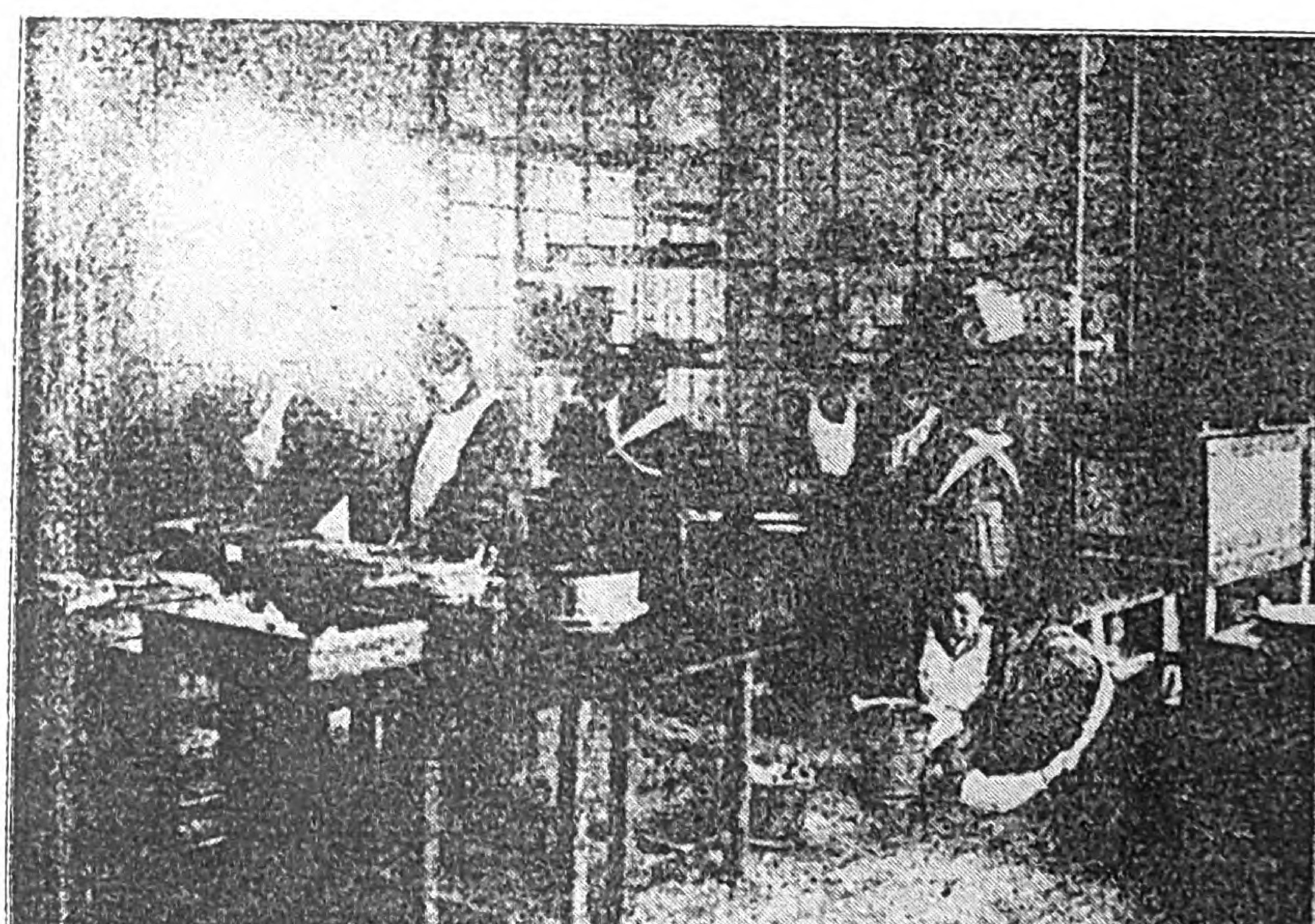
藤島武二先生裝釘
中澤弘光先生彩畫
女史最近の短歌六百餘章を收めたり
金壹圓　稅八錢

發兌　麴町平河町五　振替三八一七　金尾文淵堂
神田錦町二　振替二〇六　勉強堂　發賣

舞鶴高等女學校生徒實習



四年生の配膳　（正面の三幅對軸は同校教員角田水哉氏揮毫）



（佐藤一風氏寄贈）

補習科生の割烹

春潮



實業家横山長次郎氏夫人勝子





田中製革所長嗣夫人ふじ子

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

コールドクリーム

定價 五十瓦入 金壹圓
送費 市内四錢 地方八錢 滿韓臺灣三十錢

コールドクリームの美顔料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も縷々これが有効なることと且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて賞がれて居るコールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても、似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。從來藤波先生は皆樣方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが僅かづゝ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆樣方に御わけすることにしたのです。コールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顔なり御手なりに擂込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方は、アブラの出るのを防ぎアレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剥げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し「コールドクリーム」は美顔剤で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちませんお化粧下用としては「艶肌剤」が適當で「艶肌剤」と「コールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹剤です。

女子文壇化粧問答顧問
藤波芙蓉先生
實驗發明

艶肌剤

定價 五十瓦入 金六拾錢
送費 市内四錢 地方八錢 滿韓臺灣三十錢

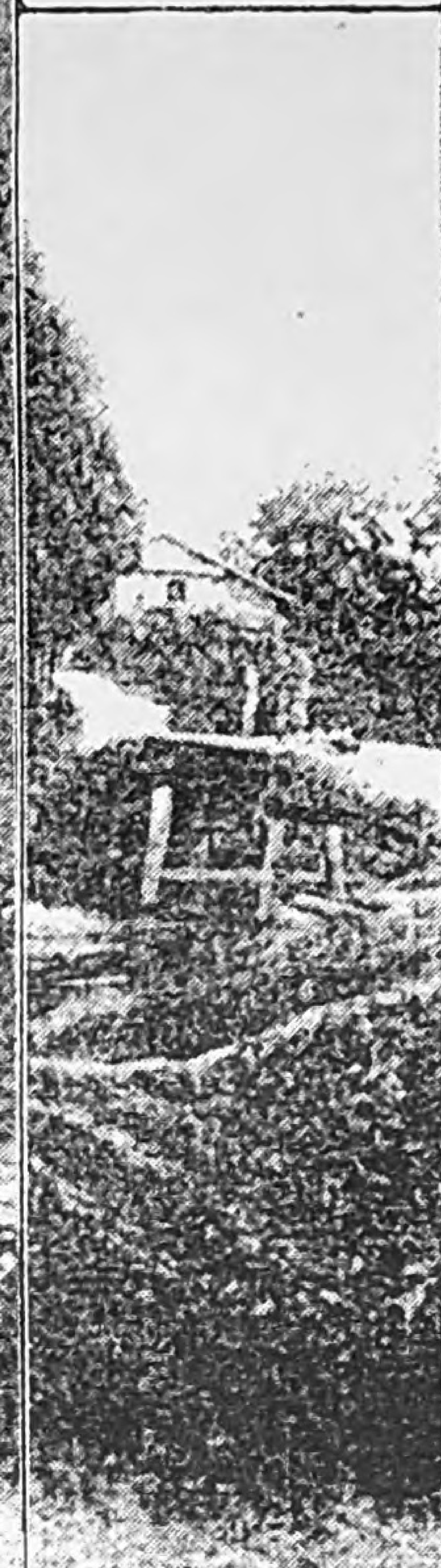
文明とは時間を儉約することです、「何か一品で、顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌剤であります、右の某侯爵夫人の御望みは夫人御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆樣方に本剤を御わけして差上げることにしたのです。

專賣元 東京京橋區大鋸町十二番地 振替口座東京第壹七貳九番 (電話京橋二六〇七番) 女子文壇社代理部

和氣洋々



岩谷松藏氏及夫人と愛兒



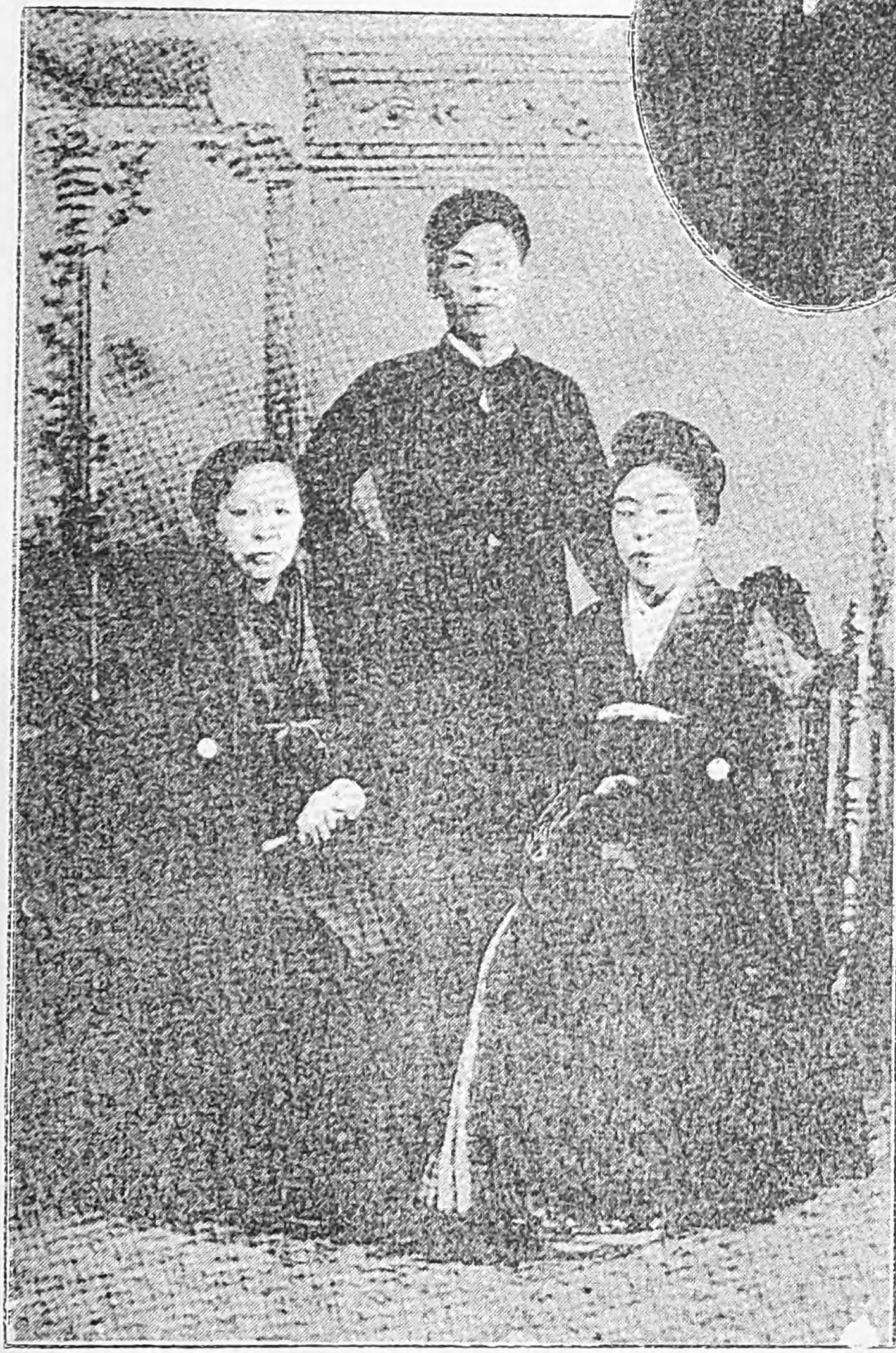


井上呉軍港建築課長夫人と愛孃

本誌の化粧顧問



藤波芙蓉氏最近の撮影



十二年前新婚當時の藤波氏と夫人

本會員帽章　　開講　　本會員徽章

（實物三分の一大）
新學期
（實物二分の一大）

文學研究の唯一機關出で[illegible]此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會員及本會卒業生の特典

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる雜誌新文學を無代頒布す◎本會員には事情に依り無料講習の便あり◎本會員及卒業生には學費貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者に就職の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし種々の便宜特典を與ふ

初等文學講義錄

教授科目
文典。論文。小說。書翰文。記事文。新聞學。和歌。俳句。新體詩。國語。漢文。日本文學。外國文學。文學概論。雜科。

各科講師は專門の學士文士

見本附き
規則書
無代進呈

五ヶ月卒業　會費一ヶ月金廿五錢　全學期壹圓廿錢　[illegible]東京神田區西小川町　振替東京五二一九番　大日本文學會

造花術獨習の唯一機關出であり[illegible]此際入會者に限り種々の特典を與ふ

造花の修得は家庭の福音

造花術は花簪、花輪、花籠、及教育參考品たる植物の標本室内の裝飾各種の徽章或は冠婚葬祭の贈答に適す可き花卉其他の美術品を製作するものにして婦人令孃が日常の娛樂として修得せらるべきは勿論總べて一般の家庭に内職として最も有利のものなり

新學期開講

造花の修得は婦人の優技

美術造花講義錄

本會發行の講義錄は本會講師が多年苦心の結果完成せる最新式のものにして講義錄の外二十餘種の原料十餘種の器械に製品見本十數種を添へて會員に頒つものにして是れに依つて修得せば僅々二箇月にして男女の別なく老幼を問はず容易に熟達し得るものなり

製品見本並に規則書は郵券拾錢送るべし

速成二ヶ月卒業　會費全學期分金三圓也　[illegible]東京市神田西小川町一ノ一　振替口座東京九一四八番　美術造花講習會

THE LADY'S GRAPHIC.

婦人畫報

三月一日發行　三月卷　一冊廿五錢

郵二五三八錢六一五三十冊圓十錢
稅錢厘冊十　冊圓十錢二二九四

村乙女

中澤弘光氏作洋畫

畫報

圖 北白川宮殿下の御家庭
愛らしき少女の仕舞と謠曲……
圖 朝香宮妃殿下
女學生のスキー競爭……
圖 兩妃殿下御台臨
大谷伯の盆栽觀▽廢物利用……
圖 光榮ある預選歌人 園權典侍 其他
納豆うりと女工の二孝女……
圖 渡米の小笠原伯長幹夫人
婦人專用電車▽女學校便り……

いろ〱の櫻の活け花……
圖 伏見宮御邸庭の溫室……
嵯峨侯爵の家庭▽小庭さき……
圖 テームス河畔の女畫家
途上雜觀▽お誕生まで……
圖 名家の雛祭り……
諸名家令孃かゞみ▽春の日……
圖 人形と三令孃……
東京の奧樣と田舍の花よめ……
圖 大島女の髮形……

讀物

□婦人と風習……加藤博士
古今名媛の逸話……ひね子
□自覺した女……中島德藏
醫者より見たる家庭食物……額田學士
□お壽司としるこ……矢野文雄
育兒十二ヶ月……加藤博士
□妻の手料理……三輪田元道
客に出すたべ物……櫻井ちか子
□家庭と食物……嘉悦孝子
其日其日……三宅花圃

卒業後の思ひ出……三宅やす子
□昔の女と今の女……宮田修
廢物利用一百種……村上武三郎
□未亡人としての私……鳩山春子
現代の女すがた……跡見花蹊
□取り次ぎのよしあし……山脇房子
家庭で注意すべき詐僞……山口警部
□途上の女……戸川秋骨
春さきの身だしなみ▽この頃の料理
□若き女の心……久保學士

東京麴町區飯田町四ノ四　東京社　振替東京一一八一八　（全國書店にて販賣す）

國民教育の一大寶典

婦人畫報增刊
改訂第拾七版

曩に皇室を始め奉り、皇族各宮殿下の御繁榮を永遠に紀念せんが爲各皇族當局に本書發刊の事を請ひ奉りしに、幸に其微意を諒とせられ、特に各御眞影御貸下の恩命を賜はりたるを以て、弊社は感激措く能はず、謹みて事に當り、版を重ぬる事實に十六回既に百萬部以上の大部數を頒布し盡せるの盛況を得たり、本年は畏くも天皇陛下御還暦に當らせ賜ふを以て深く之を紀念せんが爲め茲に最近の各御眞影を請ひ奉り改訂第十七版を發行せり弊社の光榮何物か之に過ぎんや本書は眞に御還暦の紀念たると同時に亦國民教育の大寶典たり冀くは我が至誠至忠なる國民諸君この絕好機會を逸することなく速に一部を藏し子々孫々に至るまでも聖代の御恩德を傳へられんことを敢て警告す

皇族畫報

愈々出來

（一冊定價郵稅共金四十錢）

內容の盛觀

- 口繪　兩陛下を始め奉り各宮殿下、同妃殿下、王子殿下、王女殿下に至る御六十八方最近の御眞影を謹載す。
- 讀物　兩陛下の御日常、皇太子同妃兩殿下の御日常より各宮殿下に至る御家庭を謹記して漏さず。

君國に忠良なる人士は必ず本書を藏せざる可らず

東京麴町區飯田町四ノ四
東京社
電話番町二三三九
振替東京一八一八

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠

國文學士 小森松風先生編

好評

女子美文作法

全一冊大判二百卅頁 賣價貳拾錢 郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する諸嬢には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査 女子遊學便覽

全一冊中判洋装 賣價拾五錢郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元 東京市京橋大鋸町 女子文壇社（振替口座東京二七貳九番） 賣捌 各書店

青鞜

第二巻第三號

三月一日發行

定價貳拾五錢

内容

發行所 青鞜社 振替東京 一一三六七七〇六
發賣所 東京堂 電話本局 三一二四四八

青年雜誌界の覇王

秀才文壇

(趣味雜誌)

本誌の定價表

一册郵稅共金十六錢○三ヶ月分金六十九錢○半ヶ年分金一圓三十五錢○一ヶ年分金二圓五十錢(郵券代用壹割增)

特約販賣 (東京市) 東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、上田屋、良明堂○大阪盛文館○其他到る處の書店取次販賣す

女子文壇



第八年第三號

（明治四十五年三月一日發行）

小說『不如歸』論

特に教育家の反省を希ふ

水野葉舟

『不如歸』と云ふ小說は私は非常に古く讀んだ。それで小說にある藝術上の氣分、或は技巧と云ふ事は殆ど記憶が無い。唯斯樣云ふ樣な境涯に居る人が、此の樣な事をし、此の樣な事を話したと云ふ事實の記憶ばかりが殘つて居ると云ふ迄である。顏や言葉、即ち聲容から受ける心持は殆んど忘れ去つて、彼の人は奈何云ふ事をしたかと云ふ事だけを覺えて居るに過ぎない。それで私としては、『不如歸』が奈何云ふ樣な價値があるか、また如何なる處に、藝術としての存在權があるかと問はれると、私には解らないと云ふより外はないのである。

然し私は、『不如歸』を中心として、日本の民衆の趣味とか、智識とか、ものを味ふ力、或は考へる力と云ふ方面の研究をしたならば、それが却つて面白かろうと思ふ。『不如歸』から私が興味のある問題を選ぶならば、寧ろ其の方に多く傾きたいのである、そして若し

出來るならば、そういふ樣な研究は非常に面白いに相違ない。であるがそれは、一朝一夕に出來る仕事ではない。今こゝには考へて見て、ぼつぼつ思ひ付く事を話して見ようと思ふ。

『不如歸』が如何に讀者を多く持つて居るかと云ふ事は、或る出版業者の談片の中に、もとより眞僞の處は知らぬが、『不如歸』の賣れ高によつて、民友社では、印刷機械を新しくする事も出來たし、猶工場を新築する事も出來たと云ふ事である。それから此の『不如歸』はどれ位、餘計に書店に積んで置いても屹度賣れて了ふと云ふ事である。九十九版を刷つた時に、最早今度は然う賣れなからうと思つて、二萬あまりも刷つたのが、何時と云ふ事もなく賣れて了つて、更に百版を重ねたと云ふ話である。兎に角、日本では、今迄の處で一番多く賣れた小說と云へば、『不如歸』であら



と思ふ。それならば、奈何して『不如歸』がそんなに多くの讀者を得たのであるかと云ふと、其の第一の原因は、私は群衆の雷同であると思ふ。一體『不如歸』は極めて、通俗的な小説であつて、いづれから見ても極く粗雜な、――人間と云ふ者に就いて、何も書いてはない、唯泣く頃合の小説であるに過ぎない。またそれが民衆の一般の頭腦に理解され易いポプラリユチイのある作爲であると云へる。

　であるが、唯それだけであるならば、彼れ丈の讀者を持つ所以であるとは云へない。『不如歸』が泣くに頃合の小説だと私は云つたが、極めて普通な人の涙をさそふにはいかにも其の話の組立て方が相當して作られて居る。極めて普通な低級な人には、誰の胸にも觸れる一種の理解し易い悲劇を組み立てゝあるので、從つて、『不如歸』は何人にも理解せられ易く、且つ同情を得易い譯である。然し、矢張是れが主要なる原因であるとは云へないのである。若しかう云ふ點で云へば、他に幾何でも讀んで泣ける小説もあり、氣分の好い小説が多くあるので、決してあの多數の讀者を持つて居る唯一の口實とはならない。そこで私はどうしても、前に云つた通り、群衆の雷同であると云ふ事に歸着すると思ふ。猶あれが書かれて、書物になつて出て、非常な勢で賣れたと云ふ者は、其の背景となり、其の材料になつた人物、つまり、川島とか浪子とかのモデルとなつた人物に人が多くの好奇心を起したと云ふ事もあらう。又あゝ云ふ樣に感情を刺擊する小説が當時少なかつたと云ふのも第二の理由となるであらう。

　彼の書物を一番始めに讀んで刺擊せられたのは當時の學生であつたに相違ない。出た始め位の『不如歸』の讀者は學生であつたので、其の若い軟い心には非常に早く傳はり易かつたのである、其の中にそれに依つて種々な興業物が出來た。さう云ふものであふられて、低い鑑賞をする階級の人達の胸に一つの迷信を作つたのである。それが雷同の迷信であると思ふ。今少しくも文字を解する人、小説を讀む人であつて、『不如歸』を讀まなかつた人は少いであらう。それであつて、

『不如歸』と同樣のものがまた賣れなければならない譯であるが、決してそうではない。殆んど比較の出來ない程賣れてないのである。是れで見ると、日本の讀書をする人は、實際に書籍を愛してそれぞれの人が自分から積極的に、書籍を求める力を持つ事が乏しいと云ふ事が出來るのである。從つて日本人は、讀書を喜ぶ心の幼稚なことを表白したものであらうと思ふ。



私はもう一つ『不如歸』について云ひたい事がある。それは寧ろ敎育家に對して聞いて貰ひたい意見である。外でもないが敎育家の側で、此の『不如歸』を健全な小說の中に入れて居る樣である。新聞紙上で、健全なものと云ふのを標準として、種々の書名をあげた中に、敎育家が『不如歸』を加へて居つたのを見たのである。いづれ多勢の人の意見ではあらうが、私はどうしても、『不如歸』

を健全な小説とする事が出來ないと思ふ。なせなれば、『不如歸』は、何故に、殘酷なる人の行爲を書いてあるか、先づ是れから考へなければならぬのである。姑が嫁に向つて、非常に殘酷な事をして居る樣な事は、それは世間には、もつとひどい、比較の出來ない程はげしい事が澤山あるに違ひない、『不如歸』にある事實などは生やさしいものであらうと思ふ。けれども私が殘酷と云ふのは、其の方面ではない。作者が人間に對して取つた態度が、非常に不道德であると云ふ事である。如何となれば、『不如歸』の作者は人間を書くのに、善と惡とを簡短に、明瞭に書き別けてあるのである。女主人公、主人公は惡い事を少しもなして居ない。而して女主人公の悲しき運命を、酷く感ぜさしめる爲に、惡事を働く人を作つて、殊に姑などには、凡ての點から、辯護の出來ない樣に作られてある。是れが極めて不道德であらうと思ふ。何故であるかと云ふと、彼の小説に依つて解釋をすると、實に不自然に惡人で作られてある。あれを讀む低級の讀者は必ず人間の惡いと云ふ事、若しくは惡事と云ふ事を理解する事が出來ないに違ひない。人間を一種の型を作つて描き出す結果は、人間の生きた善惡と云ふ事を理解する事が出來なくなる。敵とか、敵役とか、惡い者とかゞ必らず讀者の頭に漠然として、理知の判斷が出來ぬであらう。そこで、彼云ふ小説を讀んで、非常に泣かされて居る人達は、判斷力の幼稚な人である事が解るであらう。ものに極めておほまかな型を作つて敎へられると、其の人の眼も亦、矢張、おほまかな型を作つて世間を觀ようとするのは當然である。それが健全な人間と人間との關係を敎へる所以のものではないのである。何故に世間の敎育家が是れを健全と云ふかと云ふと、敎育家自身が健全と云ふ事を知つて居らないからである。所謂敎育家は、道學者的議論をそのまゝに人格化した、極く粗雜な人物を、作者が勝手氣儘に踊らして居るのを見ても、一向矛盾を感じない人達である。其の人の頭が健全だと自稱するのである。是れは是非排斥しようと思ふ。人間は生き物である。人の心も生きもので

ある。ものに感ずる場合は類型的な概念に對してではないのである。巧利的な意味で文學と云ふもの丶効用を説くならば、人間と云ふ者が泌々と人生を理解し得られるやうにするのが、文學の唯一の仕事であり、又大目的であると思ふ。それに對して、此の『不如歸』は好い感化はあたへるものではないのである。

『不如歸』を透して觀たる現代式の女性

廣津柳浪

徳富さんの『不如歸』は若い人達に繰り返し讀まれて居ると云ふ話も聞いた、芝居にして大入であると話す人もあつたが、私は其の小説も讀まず又芝居も見て居らぬので、一寸話し難いけれども何か考へて見ませう。

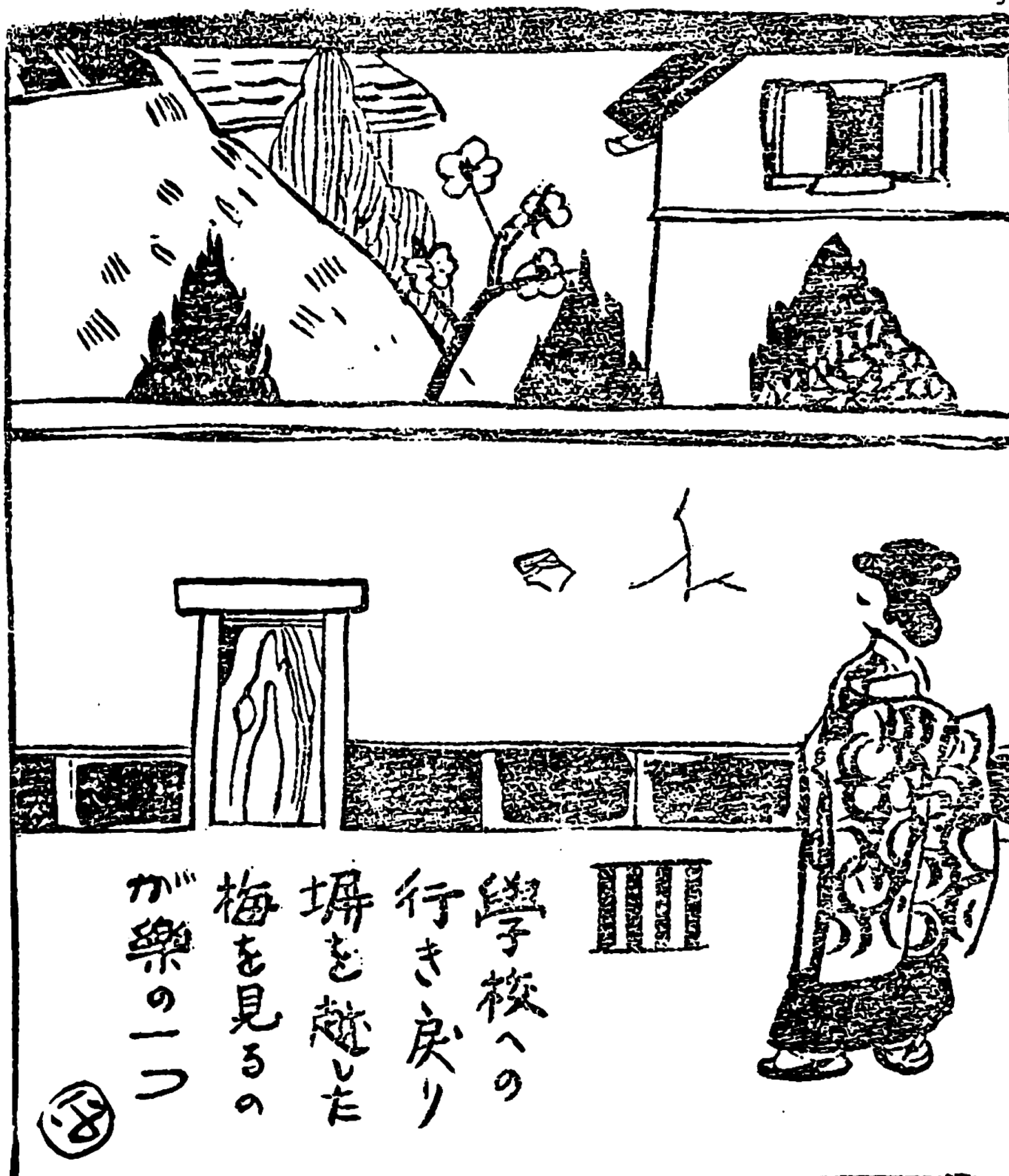
彼の『不如歸』を芝居で見、小説で讀むと婦人達は殊に若い女の人は、大抵涙を溢すと云ふ事であるが、『不如歸』に泣く女は實に優しいと思ふ。『不如歸』の浪子の運命に同情して涙を溢す女は實に女らしい女である。一部の人に云はすれば、舊いと云ふかも知れない。又低級な讀者だと云ふかも知れない。然し私は心から『不如歸』に同情して泣く女が日本にまだ多いのを喜んで居る。と云ふのは、彼の『不如歸』と云ふ小説の出版された十年前の若い女の心持と、今續々女學校から出る婦人達の心持とは非常に變化した處があるに違ひない。最近十年と云ふ間に、文物の變移は云ふ迄もなく、若い男子にも餘程變化が生じたが、男子に比較して一層甚しい者は女性の動搖であらう。奈何云ふ様に動搖したかと云ふと、私は決して善傾向であつたと云ふ事が出來ないのである。解放と云ひ、自覺と云ひ自由と云つて、新しい思想を得たりとする現今の女性を見て、私は不覺に危ぶまない譯には行かないのであ

る。

何故であるかと云ふと、幾許口をきはめて自由を說いても、結局は家庭に入らなければならないものである。家庭に入ると云ふ此の一事を思ひ起した時には、今の所謂或る一部の女性、ひねくれた心を持つて不謹愼に身を持ち扱ふて居る若い婦人達は、奈何しようとするのであらう。家事を治める力もなく、夫、或は子供に對しての考が果して圓滿に立つであらうか、私が危ぶむのは其れである。而して此の毛色の違つた女性は『不如歸』を讀んで泣く女ではないのである。『不如歸』を讀んで泣かぬ現代の女は年々多くなつて行くやうであらう。從つて、女らしい女も少くなり、溫和な優美な女性も乏しくなるのではなからうか。斯樣考へて見ると日本の女子の前途に横たはる危險を感せずには居られない。婦人ばかりに止まら



す、當今の日本は從來の習慣が盡く打ち破され取り崩されて了つた。從來のものが破されて了ひ、崩されて了つたから其れならば何が變りに出來たであらうか。從來に勝つた習慣或は思想が生じたかと云ふと其れは一つも出來ては居らぬのである、混沌として唯動搖に動搖を續けて居る今はもう凡てのものがどんぞこまで行き詰めて、徐々に成立して來るのを待つより外に何の手段も無いのである。



現今の女性が色色新しき方面に活動しようとするのは可い。古いものを破壞したのも可からうが、かはりに何を得たであらうか。何も得ては居らない事を私は認める。私は衷心より婦人達が戒愼を要すると思ふ。先日『人形の家』と云ふ劇が演ぜられたに就て私が思つた事がある。西洋の方では、あれが大層人氣に投じて『ノラ』と云ふ

婦人に同情者も多く、隨分婦人を覺醒さしたものだと云ふ話である。是れが今日本で演ぜられたのに就て、若い女達はどの樣な感じを起したであらうか。『ノラ』を眞から理解して同情したであらうか。私の考へるところでは、『人形の家』は、現今日本の狀態には痛切に觸れては居らない。殊に、あの樣に、夫に云はずして妻が他人から金を借りた其の金の爲めに、夫が苦しむと云ふ樣な事は、日本にも無い事はない。有つたに相違ない。然し日本の家庭であると、『ノラ』が家を出ると云ふ事に至るまでに、とつくに解決のすんだ事であると思ふ。何故なればといふと日本の男子はあの場合に怒る事がないであらう。又日本の女は決して、『ノラ』の樣な行爲をしないで西洋と日本とは其處に大なる相違があるのである。要するに私は、『不如歸』に泣く女と、泣けない女とを並べて、孰を取るかといへば、『不如歸』に泣く女を取りたいと思ふのである。

殘されたる『不如歸』

窪田空穗

『不如歸』は始め出た頃は大變虐待をされたものです。彼れが『國民新聞』で發表された時は二度出ては一度休むと云つた樣に、都合次第で漸く完結した樣な有樣であつたと思ひます。もとより其時の讀者にはあんまり喜ばれた方でもなかつたし、新聞で表れた、『不如歸』の最初の讀者は極く少數であつたと思ひます。

それですから、『不如歸』が一冊の書物となつて店頭に出たのも、新聞にあらはれてから可成の時日を經てからでありました。あれが其後非常に世間に讀まれる樣になつたと云ふ動機は、私が思ふ處では、たしか本鄕座と思ひますが、新派の俳優達が、彼れを芝居にしたので、偶然に、人氣を得たのだと思ひます。

『不如歸』から思ひ付く事を話して見ますと、今の時代は、男の方から云へば、老人と若い者とが對抗をした場合に、若い者の方が老人に壓迫せられると云ふ時代を何時と云ふ事も無く、已に通り越して了つて、若い者の力が當然老人の方に認められる樣になつて居る時代であると思ひます。何時から認められる樣になつたかと云ふ事は、私が考へる處では、日露戰爭と云ふ事實――つまり彼の戰爭が、若い者の力を老人に認めさせる一つの階段であつたらうと思ひます。出て戰ふのも若い者であつた。留守をするものも若い者であつた。若い者が眞に活躍して見せたのが彼の戰爭當時でありましたから、其の力を認めるのは當然の事でありました。戰爭後はどうかすると、若い者の力が老人の方に押し迫つて行くと云ふ有樣が見えるではありませんか。其の傾向は讀書界の方でも認められる樣です



即ち、此頃、論語の讀み直しとか、忠臣藏の讀み直し

とかが出版せられて、其れが老人の方に讀まれて居ると云ふ事が、今の書籍は殆ど若い者を對照としたものばかりであつて、老人に讀み易い書物が乏しくなつたと云ふ。若い人の勢力を認める一つの事實ではありませんか。

然し此れは主に若い男子の方の事であつて、女の方は、まだ〱、同じ程度の男ほどに認められては居らないと思ひます。女の方は矢張今も、老人の爲めに、又古い習慣の爲めに壓迫をせられ　征服をせられて居る時代であります。若い男子は皆蹈み通つて居る新舊思想の暗闘と云ふ處に女子は猶取り殘されて居ると思ひます。尤も男の方は智識とか實力とかの方面から進むのであるから、智識を土臺にし、個人を土臺にして蹈み通つて行くのが割合に容易であるとも云へます。それにひきかへ女子は感情の世界に住んで、感情を土臺にして進まねばならぬ。而も感情と云ふ者はどうしても古い事に支配せられるし、萬事が保守的であるので自然後れがちになるのも無理はないでありませう。

家を單位にした考と、個人を單位にした考へとが色色の暗闘を生ずると云ふ場合を、男の方は女にくらべて、比較的、個人を單位にした考で、勝ち得て居ると思ひます。說をかへて云ひますと、男に取つては、それ程問題としなくなつた、家庭對個人の問題について女は今猶、暗闘をしつゝあると云へませう。智識の命ずる通り突き進んで行きたいと云ふある目標はありながら、家庭、或は習慣と云ふ事に束縛せられて、始終はばまれて行くと云ふ處から、莫大なる悲しみを持つて居る女が、程度の差はあつても、如何なる處にも隨分多くあるだらうと思ひます。

先日、自由劇場で『寂しき人々』が演じられましたが、彼の樣な寂しい感情は、日本にも澤山の人々が今現に嘗めつゝある事であります。『寂しき人々』から宗敎の關係を取り去つて了つて、若い者は、智識、理性の命ずる通り突き進んで行きたいと思ひ、老人の方はもう今迄の靜な境遇から出まい。安んじて行きたいと思ふ。其處に雙方の理解が付かないと云ふ樣な事は現

代にどれ程あるか解りません、其の寂しい心持を『寂しき人々が、見せて居る樣に『不如歸』は意識するしないに拘はらず、皆の心持の上に降りかかつて居る問題を兎に角具體的に見せて居る。此れが多くの人に讀まれて行くと云ふ主なる原因となるであらうと思ひます。先づ此れ丈が『不如歸』に關する私の極く大體の考でありますが、まだ云ひ得る事は、此の小説には作者の蘆花さんが基督敎の感化から流れ入つて居ると思はれる處が澤山あると思ひます。彼の女主人公の浪子は非常に人間として純粹な、可憐な要求をして居ります。例せば逗子の海岸の場の浪子の心持です。人間として死にたくない。千年も萬年も生きて居たいと語つて居ります。未來と云ふ者もあると信じたいと語つて居る。斯樣云ふ事は世故に慣れた心持、常識的、知識的の心持から云へば無理な駄々ですけれども、人間の純粹な心から云へばそうありたい希望ぢやありませんか。『不如歸』の全體にはかう云ふ氣分が沁々と流れて居るだらうと思ひます。美しく圓滿に平和に、互に愛し合つて行きたいと云



ふのはあらゆる人の願であります。其の願は誰の胸にもある。然し人の心に矢張惡い心持があつて、同時に其れを崩して行きます。本來の痛切な願が同時に人間の手によりて崩されて行くと云ふ事が、明瞭に觀念的に『不如歸』にはあつかはれて居る樣な氣がします。斯樣云ふ事が古い詩でも讀む樣に、皆の胸に優しく柔らかにまつはりついて行く。其れに應じて文章も其の氣分にかなふ樣に古い敍情詩風にのべられてあります。此の筆付きに引づられて心持よく讀むと云ふ事も多いだらうと思はれます。

猶『不如歸』が文學的にどんな價値を持つて居るかと云ふ事はもう定評もあるから、今私が云ふ必要もなからうが、古く讀んだ私の記憶から申せば『不如歸』に表れて居る各人物は、生きて居る人として書かれては居らない。唯千々岩と云ふ男の性格が一番生きて居る樣に、比較的人間として見られる樣に描かれて居ると思ひます。然し其の生きて書かれた人物は却つて、讀者には一番厭な人になつて居ります。此の一番よく人間として表れて居る人物が一番に惡まれる人物になつて居ると云ふ事が、『不如歸』を文藝品として見た價値を語つて居るのでありませう。

＊　＊　＊　＊

劇としての『不如歸』

中村吉藏

小說は書齋で讀むものである。讀んで沁々と興味を感ずるものである。劇は舞臺にあらはれて、眼にうつたへて感覺を樂しませるものである。小說と、劇は最初から、目的も違つて居るし、行き方も違つて居る。隨つて、其の取り扱ひ方に於ても全然相違して居るのである。それで小說を劇になほすと云ふ事は非常に困

難な事でもあり。また奈何かすると、小說で讀んで、非常によかつたものが、劇にして見ると、原作の味を失ふと云つた樣な場合がないでもない。そうでない迄も、小說は小說としての面白味があり、劇にして見て其の面白味を感じられぬと云ふ場合が多からうと思ふ。

『アンナカレンナ』と云ふトルストイの小說が、小說として讀むと非常に藝術の香の高い作である。然しそれを劇場に上したのを見ると。小說で讀んだ味は失はれて居つた。小說程に面白くはないと云ふのが當時の批評であつたのである。

偖、『不如歸』と云ふ小說、若しくは劇は決して現代的のものではないのである。姑と嫁との關係も極めてセンチメンタルな事實である。普通一般の婦女子が、讀み、或は觀て、淚をおとす、一般的は同情を得るにすぎないものである。現實暴露など丶云ふ深刻な響のない。センチメンタルな小說であるから、劇としても矢張其の以上の事はない。伊香保の蕨つみの場であるとか、逗子の不動堂の場であるとか、離別せられた處とか、或は旅順で、武雄と片岡中將の逢ふ場であるとか、何處も同樣である。

此の間文藝協會で、試演をした、イプセンの人形の家の『ノラ』と云ふ樣な女主人公と、『不如歸』の女主人公の浪子とは、其處に大なる世紀の隔たりがあると思ふ。

要するに『不如歸』は現代的な、突込んだ處のある、現實を暴露した深刻なものでない。劇も矢張センチメンタルな劇であるにすぎないと思ふ。而して『不如歸』としては、劇としてよりも、小說として、讀んで面白いものである事は云ふ迄もない事である。

五個の要點

山路愛山

(一)上流社會を善く捉へた事。
(二)人々意中の景象を映射したること。
(三)『判官びいき』の人情に投じたること。
(四)抒事精細、婦人の『デリケート』なる感情に投じたること。
(五)蘆花君文字に忠誠也。一字一句も忽にせず。悉く實

驗より出でたる語なること。
世間の歡迎は此忠誠の報酬也。但し最近の大流行は流行が流行を追掛けて又流行するもの也。

＊　＊　＊

其當時では代表作

德田秋聲

あの位評判の高いものですから、一度は讀んで見やうと思ひながら、例の不精でまだ一度も見たことがないのですから、御質問にお答をすることは迚も出來ないのです。尤も芝居では二三年前に一度見たこともあります。

芝居で見たところでは、筋がいかにも單純化されたもので、而かも架空でないらしく、事實の力と云ふやうなものが可也に舞臺面にも出てゐたやうに思ふ。そして出てゐるとが思想も單純、經驗も淺いと云ふやうな良家の子女や一般の女學生などには、尤も同情を惹易い事實である。たとへば浪子の嫁入道具が、そツくり實家の玄關に積まれてある場面だとか、病室の場だとか云ふやうなところは、あれが出てから類型の芝居が幾箇も出來たやうなもの丶、その當時では實際强い印象を與へたに相違ない。それから新舊思想の衝突と云ふほどでもないが、親と子との衝突、それが犧牲となる嫁、それらが其後作られた類似の芝居と比べて、夫々の箇性を代表してゐるところなども、此作の特色であらう。

『不如歸』が新聞に出たのは、まだ紅葉全盛時代で『金色夜叉』のやうな東京の子女が花柳界や下町の家庭、多少意氣な方面から、盛んな人氣を吸收してゐた頃かとおもふ。それに對して、女學生とか、新家庭の婦人とか、看護婦とか、日清戰爭前後に人となつたやうな新時代の婦人連の人氣を集めるべく、當然の要求に投じたのが『不如歸』であつたともいへよう。又、『金色夜叉』となると思構も大分込入つた作爲が施してあり、文飾もこつてり造りで、藝術上の面白味は加はつてゐるにしても、それだけ趣味の淺い一般社會には讀むのに臆劫な點もあつて、しかも事實の印象が薄い。これが『不如歸』の人氣が寧ろ『金色夜叉』を凌駕する所以であらう。

婦人と食物の智識

農學博士　澤村　眞

世の中に金錢を勘定せずに受け渡しをするものはないであらう。若し其の樣な事をする人があつたならば世間の物笑になるに相違ない。然しながら世の中には是れに似寄つた事柄が往々行はれて居る。養分や種類や分量に頓着しないで食事をするのは恰度、金錢を勘定せずして受け渡しをするのと同じで誠に亂暴なことである。

人が食事をなす目的を達しようと思ふならば、必らず食物に關する智識を充分に飲み込んで居らなければならぬ。一體飲食物はいろ〱な目的に用ひられるものであるが、其の主要なる目的は、生命をつなぐ事と娯樂の爲めである。

人は生れて丁年に達するまでは、日々生長する、又何人も多少の力わざをし且絶えず體温を生して居る。生長をするには、食物から養分を取つて之にて身體の骨肉を作らねばならぬ、又體温を生じたり、力を出したりするには、身體の中で養分を分解しなければならぬ。されば生命のある間は食物を採らねばならぬ。

さて食物として種々のものが入用であるが、比較的多量に要するものは、蛋白質と、脂肪と、炭水化物とである。蛋白質は主に肉を作り、脂肪はあぶら、炭水化物は、葛や砂糖を以て代表するものである。食物は此の三養分を含んだものである、が各養分の分量は、食物によつて多少の相違があるものである。例へば蛋白質は、魚肉や獸肉に多く、脂肪はあぶらてい食物に多く。炭水化物は、穀物や野菜類に多いのである。

人が此三つの養分を要する割合は一定でなく、場合によつて違ふものである、例へば子供が成長するときとか、力業をする時とか、婦人ならば乳の出るときとか、或は休息のときとか、病氣のときとか、病氣から回復をするときとかには養分を要する量も割合も異なるものであるから場合場合に應じて、食物の種類や分量を變へなければならぬ、即ち其の場合々々に應じて三つの養分を適當に配合するやうに、食物を選擇しなくてはならない。それには各食物がどれだけの養分を含んで居るかを委しく知らなければならぬのである。

今飲食物が養分を含む割合の異なることを二三の例にて示せば次の如くである。

百分中	蛋白質	脂肪	炭水化物
米飯	三、一六	〇、五〇	三二、二八
牛肉	二〇、〇〇	七、五〇	―
鷄肉	一七、六五	三、〇七	―
大根	一、二三	〇、〇六	三、〇七

食物の養分合量を知らずに食量を定むれば或は多きに過ぎて、無益になることもあらう、又少きに過ぎて健康に害あることもあらう、恰度金錢を勘定せずに受け渡しすると同じことになるのである。

それからまた料理の仕方によつて、食物の養分を失つたり、むだにしたりする事がある。料理をするには養分の損がない樣にしなければならない。それでどう云ふ場合に、養分が損失をするか、或は冗費になるかは、矢張、食物に關する智識を充分に知りて後に始めて解るのである。

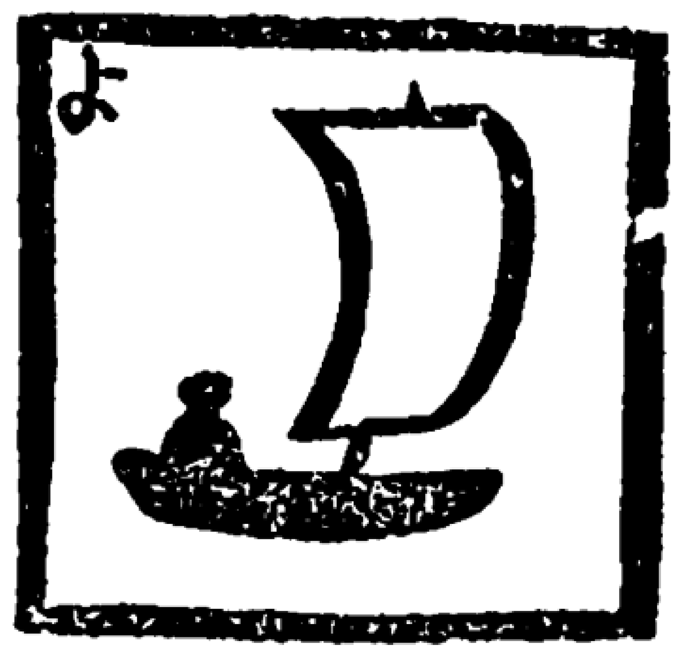
それから又食物は娯樂の爲めに取る場合もあるからそれが爲めには、もつとも味好く食物を料理しなければならぬ、如何にせば味好く料理するかも食物に關する智識がなくては出來ぬ事である。

又食物の代價は、いづれの家庭でも、生計費の大部分を占めて居るのである。それで出來得る丈僅かの費用で、澤山の養分を貰ひ得られる樣に務めなければならぬ。實に食物の經濟は、一家の經濟に大なる關係を持つて居るのである、最小の費用をもつて最多の養分を得ようと思ふならば、矢張、食物に關する智識を充分に得て居なければならぬ。

健康を維持する上から云つても、一家の經濟の上から云つても、食物に於ける智識は人生に缺くべからざるものである。從來は臺所の仕事は專ら女子の務であつて、近頃は世の變遷につれて、婦人の職業が餘程出來た樣であるけれども、臺所の仕事は永久に婦人の務であつて百年の後もかはるまいと思ふ、されば婦人は是非とも食物に關する智識を充分たくはへて、一家の幸福を進むるに努むべきことであらうと信ずる。（談）



右は農科大學の敎授で、食物辭典を著はされた澤村先生のお話ですが、如何にも婦人は食物に對する智識を持つてゐないと一家族の健康は勿論其他にも不都合があらうと思ひます。（記者）



私は佛教を信じてゐます

子爵夫人　小笠原秀子

私共では六年前から日蓮宗になりました、姑も、主人も、私も每朝每晩お經を讀みます。子供等には朝は第一に皇居を拜ませ、續いて先祖の靈に禮拜をさせ、それから祖母、兩親に挨拶をさせます、夜就寢ます時も同じやうに致させます、それを習慣にさせて居ります、何と申しても家庭の平和は、宗教と云ふものが根柢になつて、其信仰が基礎となつて居なければ平和は續きませんし、圓滿には行かないだらうと思ひます。

「英國人を結合するものは宗教なり」と云ふことを聞きましたが、國を治めるのも、家を治めるのも同じ道理で、一家に宗教と云ふものが無かつたら、一家族を平和に結合することが出來ません。

私は常に親鸞上人の信仰を深く味ひたいと思つて居りますが、上人が其師、法然上人を信ぜられたお言葉は、私の忘れることの出來ない信條の一つでございますそれには斯う云ふことが書いてございます。

親鸞におきては、たゞ念佛して、彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて、信ずる外に別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄に落つる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりとも、更に後悔すべからず候。そのゆゑは自餘の行をはげみて、佛になるべかりける身が、念佛をまをして地獄にも落ちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行

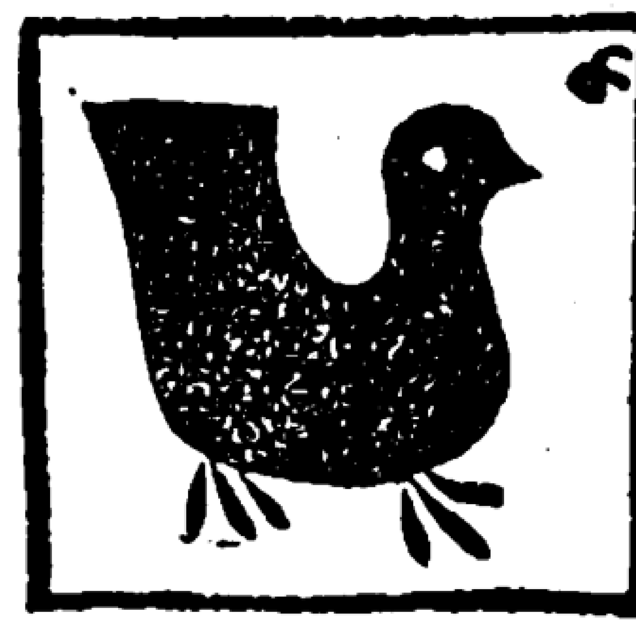
も及びがたき身なれば、とても地獄は一定のすみかぞかし。

此文章は親鸞上人の告白の要點でございます、之を能く考へてみますと、親鸞上人の眼中には、自分に信仰を傳へられたる法然上人を信ずることゝ、佛陀を信ずると同じ心で信じ、自分の生死も運命も、凡て絶對的に法然上人と同じくされたといふことが判ります。斯る信仰は師弟の關係に表はるゝばかりでなく、人生問題の凡ての上に表はれて力あるものです。

ですから家庭といふものも、信行の上から解決いたします時は、單に人間の力で結びつけるものでなく、信仰の力に據つて結びつけるものだといふことになります。若し信仰の力で結びつけられた夫婦ならば、恰も親鸞上人と、法然上人との師弟の關係の如く、夫は妻を信じ、妻は夫を信じて、二人の關係が信仰の上に成立つて、其信仰の滅びない以上、永遠に家庭の平和は護られるのでございます。

親鸞上人の言行は、いろ／＼の書物にも出て居りますが、上人の夫人は玉日姫と申しまして、師法然上人の命で結婚せられたのでございます。併し結婚以前に於て、上人が京都の六角堂に參籠せられた時、玉日姫と結婚すれば極樂に生ずとの觀音の靈告があつたのでございます。之に因つて考へて見ますと、上人の精神には、玉日姫との結婚も既に信仰から來てゐるのでございます、佛より命せられたものだといふ信念がありますから、終生玉日姫を信じられたに相違ございません。玉日姫も亦上人に對して同じ信仰を抱いて居られたので、後年上人が流刑に處せられて、越後、信濃、常陸等の國々へ傳道せられた時にも、常に内助の力を盡くし、後剃髮して惠信尼と云ひ、天晴宗敎家の妻として婦徳を完ふせられたのでございます。

親鸞上人が永眠られた翌年、惠信尼が娘の彌女方へ送られた文の中に、私は或る時夢に法然上人は大勢至菩薩、親鸞上人は觀世音菩薩の化身なりと見た、然し父上人の在世の時は口外しなかつたが、既になくなられた上は、此事を汝に告げると書き遺はされたさうです。之なども夫婦の信仰を子に傳へて、其感化を與へられたものでせうが、信仰の力も此處まで確實になりますと味へば味ふほど意味深く感ずるのでございます



其儘に實行の出來ぬ家政學

實業家岩崎重次郎氏夫人　岩崎延枝子

私は他家樣の御夫人方のやうに、交際も廣くございませんし、朝から晩まで家に引込んでゐて、それからそれへと用事を片附けて參りますから、自分一個の趣味とか、道樂とかには心を傾けてゐる暇もございませんが、只一家全體の趣味に同化して、姑や、主人と愉快に其日其日を送つて行くことを、何より結構だと存じて居ります。

一家を愉快にする爲には、私自身といふ觀念を捨て、家庭の女と云ふ立場に立つて實行を努めて居りますが、思ふ通りになりませんので、潜かに自分ながら恥入る次第でございます。

學校で學びました家政學も、凡ての點に於てなかなか好い心得になりました、併し只心得になつたと云ふだけで、家政學其まゝを實行して好いかと云ふに然うではございません、學校で學んだ通りを實行しようものなら大間違ひが起ることもございます。各位も仰やるとですが、料理の獻立のやうなものでも、蛋白質が何れ丈で、澱粉質が何れ丈でと云ふやうな事から割出して獻立を致しました處が、それ〴〵好嫌がございますから却つて折角の獻立が無用になるのでございます只家政學なら家政學を上手に應用して活動させて行けば宜しいのでございます。

然し學んだと、學ばないのとは大變な相違がございます。中等教育を受けられる方はお仕合せです、けれども餘り生理とか衛生とかでも知つてゐると、折々深く考へ過ぎて不可ません病氣の原因とか、發生とか知

つて居りますと、一寸胸が痛くても肺病ではないかと思つたり、動悸がすると心臓病ではないかと思つたり餘計な心配をするものですから却つて一寸した風邪にも方々が痛くなつたりして、自分ながら病氣を引出すやうなことがございます。田舎者や、智識の無い者は何も知りませんから、却つて健康を保持してゆくやうな合もございませう。

全體今の教育家の中には、人間を四角な箱詰にしようとする人もございますが、十人十種で人は種々な性質を持つて居りまするに、殘らず同じ型に嵌めて了はうとするのは無理なお話です、惡い處だけを矯正すのなら宜うございますが、凡て同じ型に入れて、凡て十把一束の平凡な人にしようとするのは間違つて居ります、私はそんな箱詰にすることは嫌ひです、少しは融通の利く人を作りまんではと、折々憤慨するのでございます、梅の枝を下へ垂れさせ、柳の枝を上へ釣り上げて御覧なさい、不自然なものになつて了ひます、恰度それと同じ樣な教育の仕方は、宜しくないことゝ思ひます。



夜雨を訪ふ記

平井晩村

（一）

草長うして瑠璃色の　山は常陸に秀づれど
野の花に見る紫の　月波に君も離れ行くか
立つに惱まば我が肩に　倚れと囁く妹の
無邪氣なる顔見れは　放しともなき諸手かな

これは月波根詩人横瀬夜雨君の詩の一節である。寂れゆく冬空を窓に眺めて、行く雲の彼方に暮るゝ大寶湖の涙の音をおもふと、常陸は我になつかしき國である。

桑の根瘤の霜に啼く小鳥の嘴に、山國の日は蕭やかに、風落つる小貝川のほとり、暁かけて夜雨君の辛き枕に、如何なる夢がまつはる事であらう？然なきだに慈母は子故に綿弓を引き給ふとか、何不自由なき里居のなかに、夜雨君の痛める身體だけが我も人もの思ひの種である。

われも蠶飼の上毛に子守唄を聞きなれた身で、山と海との常陸の空に、忘られぬ追懐の旅のいく夜を過したのは、宿世ながらの由緒であるかも知れぬ。——僕が初めて常陸の國と云ふ言葉を懐かしく思ひ初めたのは、十五六の頃であつた。未だ中學の新入生で、郷里の書肆に新らしい雜誌を漁つて居た頃、先輩の某氏から詩集『夕月』を借りて讀んだ事がある。二三本の芒に夕月を配らつた表紙畫は、其頃の心に何となく淋しくも沈んだ詩調に相應はしく考へられた。利根の瀬音の燈火に忍ぶ一夜、僕は夕月の巻を讀み耽つて惱まし

き詩人の心に惹きつけられる樣で、さま〴〵に筑波の裾の平原を想像して見た。

その後初めて常陸の國の土を踏み筑波詣の草鞋の紐を結んだのは十七の秋、中學の修學旅行で遙々山路を辿つたのであつた。名知らぬ鳥もかくれ啼く麓を抜けて息杖高く男體女體の霧に濡れつゝ筑波の町の江戸屋と云ふに足を洗つて夕餉の膳に湯上りの膝押並べた級友のうちにも、夜雨君の詩を口癖のやうに唄つて居るものがあつた。石垣錆びし神社の鳥居も潜らず、旅籠の二階に寢ころんで靜かに『夕月』の一節を思ふた時ほど、しみ〴〵心の澄んだ事はなかつた。夜霧こめゆく何處の峽に、今も猿の啼く事か、風ざわ〳〵と窓をうつ早き落葉に、曉は江戸屋と書いた軒行燈が何となく顧みられた。



山を降り、坂を繞り、雨に降られて蕭々と着いた停

車場は何と云つたか——水戸から船で湊町の棧橋に着いたのが、山家に馴れた狹い瞳に、綿津海を見た初めである。涯知らぬ海の蒼さ、掌ほどの雲が幾つとなく浮いた沖には、秋の日晴の帆の影が動くてとなく眺められる。此處から眞直に行つたら何處へ着くだらう、亞米利加？、なぞと眞面目に唇を解くものもあつた程で、やがて名高き祝町の家並を後に、砂山つゞき大洗に向つて急いだ草鞋の跡、『十日でも宜い、恁う云ふ海岸で遊でゐたいな』と誰も彼も我を忘れて、繰返した、磯吹く風に松もさびて、石を雜へぬ砂丘は蹈むに任せてざく／＼と快よかつた。

貝細工の店に群れて、姉に土産の根がけを買ふもの或は渚の船板に腰をかけて、煙るが如き月影に、船蟲の聲を聞くもの、僅か隔てし磯濱町の漁家の灯は、貝殼敷ける裏垣に、日和みる船頭の後手を淋しく照した

(二)

然うした思ひ出のある常陸の國へ、僕が圖らず旅したのは四年前の夏の事で、月波根詩人夜雨君の病氣を見舞はん爲であつた。

筑波にかゝる雲もない日。下妻から俥を雇つて村々を縫つて行くと、杜にも並木にも蟬の聲が降るやうに青葉を戰がせ、ところてん突く掛茶屋の噴井の傍に、葵の花が暑苦しく咲いて居た。とゞろと渡る橋の下には、水泳ぐ子が雜魚網を持つて走り廻つて居た。在所在所の家々には、居穢なく瓜剝く女の肌も露はに、たま／＼出逢ふ藥賣の白い洋傘が小さく／＼青葉の村へ逃れてゆく。總てこれ『花守日記』に收められた夜雨君の詩境であるのだ——お才出て見よ越後の國の、雁が來たにとだまされて——それに似た町がへりの女も見た。

『旦那、あ、、、そこに見える大がい家が然うですよ』と梶を放して指さす處に、大寶村の舊家たる夜雨君の家は、こんもり茂る青葉がくれに錆びた甍を見せて居る、時しも篠突く夏の雨は、用捨もなく破れた幌か

ら顔へ飛沫く。やうやく夜雨君の家へ着いて見ると、夜雨君は森の家へ行つて留守、御親父に逢つて訊いて見ると、病氣と云ふのは思ひの外輕く、常に惱める人としては變つた程の事もないのでやれ〳〵と安堵した

夏蠶飼ふらし、そゝくさと多くの男女が立働らいて居たが、雨は一刻ばかり烈しく降つてさらりと晴れた其ではと待たせて置いた俥に乘つて、隣村の森の家を訪れべく大寶村を出た。名にのみ聞いた小貝川は、いさゝか雨に濁りつゝも、濡れて色濃き堤の草には、早やチロ〳〵と蟲の音が雜つて居た。其時俥の上から見た筑波嶺の涼しき姿、煙るともなく翠を纒うて神代ながらの夏雲を戴いて居る峰の何處に、幾年前か古き草鞋を捨てた事が、江戸家と書いた山の旅籠の掛行燈に今宵は甚麼旅人が笠の紐解く事であらう。

その頃を思出でては、何となく旅の夕の寂しさに送られて行くと、其處でも此處でも蜩がカナ〳〵と啼き立てる。橋幾つ、村幾つ。

森の家は大きな構であつた。夜雨君の姉君が嫁がれた先とあつて、濠を繞り見上げる樣な門を潛つて、間もなく一間で久し振で夜雨君に逢うた。その夜の話は書けども盡きぬ、繪を書く人、詩を想ふ人、更けては夜雨君と二人、廣い蚊帳に寢もやらで曉近く迄語りつゞけた。

翌日は是非水戸まで行かねばならぬので、森の家を辭し夜雨君に別れて又一人になつた。水戸で用事を濟ますと日はとつぷりと暮れたが、僕は急に大洗へ行つて見たく、消えがての提灯を便りに、夜道に車夫を急がせて金波樓に旅装を解いたのは十二時近くであつた潮湯の暖もり快く一夜は明けた、僕は嘗て祖父の伴して起伏した樓上の一室の前を往つたり來たりして見た濱撫子は昔の儘に咲いて居たけれど、僕の心は昔の儘では無かつた。千鳥の聲も、物賣りの顏も、僕には悲しき追懷の種であつた。

あゝ懷かしき常陸國原、僕は寂しき追懷に活くべき性質を幸福と思つた、月波山下の便を待つて居るのだ。

雛五十句



桃さくら配り歩くや少女の子
段の雛清水坂を一目かな
もどかしや雛に對して小盃
折菓子や井筒になりて雛の丈
うまず女の雛かしづくぞ哀なる
ふなつきや馬に附け行く雛の箱
旅人の桃折て持つ節句かな
眉ふりて蟲喰雛の惡女かな
振舞や下座に直る去年の雛
箱を出る顔忘れめや雛二對
雪信が屏風も見えつ雛まつり

羽紅　其角　其角　嵐雪　桃隣　桐亘　一口　去來　蕪村　几董

姉妹肩そろはねど雛の[illegible]
高殿に雛のまゝ焚く煙かな
土雛や鼻のさきから日は暮る
雛の駕花の陰より見え初めぬ
雛の口飯粒つけて泣きにけり
おはしたに木兎もあり雛座敷
雛のさま宮腹々にましくける
綿とりてねびまさりける雛の貌
雛の座を追出されたる弟かな
煤けたる壁ほのくらの紙ひいな
雛の燭斎士が焚く火を思ふかな

紆巌　英萊　秋左　士朗　天弓　其角　其角　其角　東雲　雪芝　保吉

雛五十句



桃柳さはるや雛の額つき　蝶夢
袖合羽着たる雛や旅すがた　風彈
萬葉の姿ゆかしや紙びいな　機石
たらちねのつまゝでありや雛の鼻　蕪村
雛立て局になるや娘の子　りん
ころんでも笑ふてばかり雛かな　千代
昔男昔女やかみひいな　乙児
みよしのゝ吉野に古き雛かな　升六
うれしいな今日は物言へはたか雛　專跡
片づかぬ女どゝろや雛の暮　可設
雛たちの春の夜何となくさめん　癸亭
蠟燭の匂ふひいなの雨夜かな　白雄
賣られにし身とは雛の知らず貌　可升
蚕子もくるや雛の膳まはり　士朗

宿直する雛守る子等や更るまで　嘯山
有常は娘育てゝ家のひな　召波
雛の宴五十の内侍酔れけり　召波
雛店に彷彿として手毬かな　召波
留守に来て雛の座敷のすゞめかな　杜旭
雛を見に奥まではひる男かな　此筋
春風にこかすな雛の駕の衆　荻子
鬼の子に餅を据うるも雛かな　如行
雛より小さき嫁を貰ひけり　虚子
雛の日や蔵から都遷しけり　也有
雛店の灯を引く頃や春の雨　蕪村
雛の間の客や桃かた櫻かた　暁臺
古雛の眠たさうなる眼元して　鳴雪
思ひ出に雛と遊ばん夜もすがら　子規

耳袋（三）　猿丸太夫

▲呉醫學博士の話に姙娠すると發狂し、姙娠すると發狂する珍らしい女の事があつた。水門臺の木助といふの丶妻は産の度腰が脫けて了つて何日でも這つてゐる。やつと起つやうになつたと思ふと、又候産をしては這ふ。をへねいなく〱と親爺がこぼすと、誰のせいだいと嬶もおこる。慘や、言ふに忍びず。常陸の人。▲岡山縣吉備郡山田村で此程妙な結婚があつた、花嫁は山内お菊とて六十九才、花婿は木口忠七と言ひ今年七十才である、お菊の家は昔界隈切つての富限者であつて忠七はお菊が十六七才の頃、同家の下男に雇はれてゐたもので二人は何時の間にか戀に上下のへだてなしとなつた、それをお菊の父が怒つて忠七を追ひ拂ひ、養子を二度まで貰つたが、二人とも死んでお菊は此頃他家の厄介になつてゐた、一方の忠七も其の後女房を迎へたが其れも死んで了ひ女手欲しく思ふて居た所とて結婚は初戀の昔に返りて若やかに行はれたのだ。七十になつて「女手ほしく思つた」もおめでたいが、婆さんのお白粉づらが見たかつた。▲丹波の須知に教師をしてる男、嫁を貰つてやるから歸れと言つても歸らず、もう定めた何時何日には嫁を引取ると言つても歸らない。親爺さん仕方なしにわざ〱出て來てうちへ連戾つた、當日、簞笥七棹長持三棹きらびやかに飾立てた嫁君が來たけれど、どうしても座敷へ出ると言はない、その時まで番をつけて逃ぬやうにしたのは甘かつたが、まさかに子供ぢやなし、やつと席へはつかせても、持たうとせぬ手に杯は持たせられず、オヤヂ禿頭から湯氣を立て丶怒つた所で間に合はない、では内所へ行つてから盃させますといふことにした、集つた手合も神武このかた杯なしの祝儀は初て見たと言つたさうだ。それはまだ也。内所へ引込んでからも跳馬の聟殿どうしても嫁樣の部屋へ行かず。これはきつとキマリが惡いのだらうと、大勢して無理に六曲屛裡へ押込んで、念の爲中人夫婦姉叔母といふ連中が襖の外に殿居した。「：：むし衾和やが下に帶解くと、そのゝく指を取られなば夢にや死なん現なの」と詩人の歌

へる外の嫁入の羞かしさは思ひやられるのに、これはだんごの串を抱へて二階へ逃げるどころではなかつたらしい。春閨夢しばく〜驚いて曉の鐘枕に落ちぬ、金釵鬢に觸れて聲有れど人悄として殘燈に對せり、聟樣は次の日京都へ來て了つた。▲これは篠山在の熊とも取組まうといふ男、盆踊に御寵愛が外の男と踊つたといふので、田圃の中へ引ずつて行き、尤新しら絞か何かの浴衣を着てたさうだ、それを頭から泥田の中へ押へしてんで、曰く、外ぢや盆踊をしてるけんど、宅は遅れてエヘン今日がわさうゐでムいます。▲福島縣飯阪に私生兒認知の訴を起された男あり、當の相



TSUMASADAME

手のタチヨといふ女が其問題になつてる子供を抱いて親仁と一しよに傍聽席に居るにも拘はらず、とぼけ切つて子供が自分に似てるといふ評判は聞かぬが、村の與吉に肖てるといふ話は聞きました」と逃げると、待ちかまへてた原告の代言が「幸當法廷に原告が子供をつれて來てをりますから參考の爲子供の顏を見られたしと演べる、裁判長は笑を含んで「さうですな」と早速タチヨをさし招ぐと、タチヨはぼて〜〜と肥太つたる可愛らしき子供を抱へて判事の前に立つた、「紺絣の

よく似合ふ色白の丸ぽちやにて優しき眉涼しき目鄙には珍らしき別嬪……」と書いてある「福島日日」の記者先生中々目があると褒めたい所だが、次に口元の少少緩みをるが玉に瑾なりとケナシてゐる。判事はつくづくと子供の顔とこの顔と別嬪の顔とを見比べて、咳一咳して「女親にばかり似てるやうですな」と言ふ。辯護士「さやう母親の方へ多く似てますが、まだ半年位でよくは何ですけれど、この生際の邊から目つきなどが被告に似てるといふ評判ですが」と難有いことを言ふ。往來では犬が吠えずにはおかぬやうな服を着て、眞面目臭つて首實檢をするのだからしまひには可笑しくなつて判事も檢事も扇子で口元をかくすし被告の安二郎まで俯向いて名の知れぬ笑を洩す、まるで、大岡政談に有りさうな光景となつた。けれど「一人まじめなりしは傍聽席のタチヨの親仁なりき」とあり親仁のシヤチコバリ方を想見するに足ると共に、記者の鋭き觀察眼にも敬服すべし、▲海軍々醫學校敎官×××軍醫の細君、過し昔××公のおもひ者たりしことを忘れず、お三などに向ひては「私は中々お前や旦那樣なぞと膝を交へて話するやうな者ではない、私は尊い××樣い奥樣だつた……身分が違ふのだからお前達も其積りでゐた方がいゝよ」と業ざらしの女だ。▲十二月中第四師團附の某少尉が軍刀を振廻して壽司屋の親仁の股をチヨン切つた。『朝日』記者「大阪兵を弱いなどゝいふのは怪しからん、少尉殿が鮓屋で軍刀を振つて亭主の股を切つた、戰場へ出たら何位强いか解つたものぢやない、何で弱いことがあるぞ」と威張つてゐる。▲世界各國人の身長を平均して見ると、一番長いのはパタゴニア人で、五尺九寸、其次はネグロで五尺七寸、英吉利人は五尺六寸、日耳曼人は五尺五寸佛蘭西人は五尺四寸、日本人は五尺三寸、ラップ人は五尺、ブッシマンは四尺六寸である▲寂しい道で狼藉に遭ひあぶなく純潔？を棒に振らうとした女「貴樣何を爲るのだ、下吉間の巡査の妻だ」と、串談すると承知しないよと威しつけ、組伏せられた手から脫した女會津に在り、疊屋の女房だが、智惠はたしかに亭主以上だ。▲「それ達人は大觀す大隅山の狩倉に」といへる琵琶歌が有る、故海舟伯の作と傳ふ、某地の方言睾丸をカンスと呼ぶ、一小學生に炎症の結果大小を爲せるがあつて、友達がそれ達人は大觀す廣瀨權平も大カンスとうたふので、學校へ行く振しては連日林の中などを彷徨して歸るのがあつた。



雪の山路

吉江さだ子



雪に埋つてゐる峠の麓の病院に私は一人寂しい日を送つてゐるのです。

何處を見ても雪が深く、向ふに見える白馬岳の頂にはいつも灰色の雲がかゝつてゐて、見る〱その雲が廣がつて忽ち雪が一面に降りかゝつて來ます。

三日前、私が、此處よりは猶一層雪の深い北の谿合から人の背に負はれて出て來ました日は、幸に一日ぢう晴れてゐて、吹雪に捲かれる危險もなかつたのですが、此處へ着いてからは一日として曇つて雪の降らない日とては無いのです。四里北の谿間、其處には私の女の兒が、生れて百日も立たないで乳を求めて泣いてゐるのです。

兒にも分れ、夫とは百里も東の都に離れて、一人此の寂しい峠の麓の病院に泣いてゐるのです。

去年の暮、產褥へ着いてからは、どうも肥立ちが好くなくて、貧血はする、乳は出なくなる、心臟に異狀が出來る、といふので醫者もない雪の中では到底、全治の見込が立たないといふので、天氣を見定めて、人に背負つて貰つて家を出たのでした。

色の黒い骨格の逞しい、よく喋る三十位の男の人の背に負はれて、兄と下男とが前と後に附いて深い谿の中から土の途に出たのでした。雪は地上に五六尺以上も積つてゐます、姫川の谿は一面に眞白く、脊中の上から覗いて見ると、深い深いその谿の中の處々に雪を被つてこんもりと黒い杉の木立が見えてゐます。其谿の中から吹き上げて來る風の冷たさといつたら、幾重

も幾重もくるまつてゐる毛布の中の足の先まで凍つてしまひます。

貧血し切つてゐる私の身軀には、この冷たい空氣を吸ふのがいかにも苦しくて、心臟の鼓動が高く耳に響きます。少し許り殘つてゐる身内の血は盡く頭へ上つてしまうのではないかと思ふと、今にも胸が張り裂けるかのやうに呼吸苦しくなつてまゐります。眼を閉ぢると、ぐら／＼して來て、私の身軀は深い谿底へずん／＼落ちて行くやうに思はれます。こんな苦しい思をしても私は兒を置いて行かなければならないでしやうか。

それでも二里許そんな苦しみを耐えてまゐりますと杉林の中には小村があつて親戚の宅がありますので、其處で暫く休ませて貰つて、また雪車に乘せられてもう二里南の病院までまゐる筈なのです。

雪途を雪車に乘せられて行く途中の苦しさといつたらそれこそ御話にもならないくらゐです。船にも車にも弱い私は、馬に引かれて行くこの雪車に乘せられた時から、もう頭が重くなつて、ものゝ一町も行かないうちから眼が眩んでしまひました。兄は耐えず傍から注意して呉れましたり、脊中を撫でゝ呉れたりしますのですが、もう此まゝ命が無くなつても好いから、雪の中に動かず捨てゝ置いて貰ひたかつた事が何度あるか知れません。

たゞ眞白な私の周圍がぐる／＼廻つて、身軀もちぎれて了ひさうに思はれます、朝から何も頂かないので吐きたいと思つても何も吐く物もない、たゞ胸の動氣の烈しくなる度に幾度血を吐くのではないかと思つた事でしやう。すると、急にぱつと周圍が明るくなつて夫の姿がその雪の上へ不意に見えてまゐります。取りすがりたいやうに思ふと、思はず手を伸ばしますと、此度は、赤兒の泣き聲が雪の中から、それも私の身の周圍の雪の中から一度に聞えてまゐります。はつと思ふと、その泣き聲がだん／＼遠く小さくなつて、雪の中に消え込んでしまひます。私の呼吸のだん／＼遠くなつて、雪の中へ頭が埋つてしまふやうに思ふと、も

う何もかも忘れてしまひました。

不圖氣がつくと私は、何處か室の中の臥床の上に寢て居ります、そして、兩手でしつかり、胸を抱いて赤兒と添臥しでもしてゐたやうな心持になつて居りますと、兄の聲が耳にはひります。叔父の顏も見えます、從妹もそこに居ります、知らない中に私は、病院のある村の叔父の家へ連れられて來てゐたのです。



翌日病院へ連れて來て貰ひました。

二階の八疊で南向の日當りの好い室でした。お光さんといふ看護婦が親切に世話をして呉れます、お醫者さんは付きの惡い人でしたが、それでも丁寧に診察して一ケ月も入院してゐたら歩けるくらゐには健康が快復されるだらうとの事でした。

夜になると、風が狂ひ出して雪が烈しく吹き付けで

まゐります、睡るでもなく睡らないでもなくうつらうつらして居りますと、まだ不意にその風の中に赤兒の泣き聲が聞こえだしたり、兒の顔が闇の中に浮び出したりして、その度に心臟の動氣が高く打ちます。泣いて泣いて赤兒の魂が雪の中へ迷ひ出したのではないでしやうか。こんな事をしてゐる、それで私の健康はいつ快復される事でしやうか。

折々叔母の從妹が尋ねて來て夜も遲くまで話をして行きます。それでも苦しい寂しい中に一週間經過しました。

今日はいつになく心持が好いので、障子を開けて外面を見ますと、白馬岳がくつきり白く、濃い碧の空は聳えて居ります、森も田も何處も一面に眞白に光つて居ります。それでも、此樣に積つてゐる雪が溶ける時があるでしやうかしら、雪が溶けて、馬車が通るやうになつて、私はその馬車で「南」へ行く時があるでしやうかしら。

最う三月も末になりました。厚い雲の間から日が洩れて射すと、それでも積つてゐる雪が少しづつ溶けると見えて、何處となく雪の下でチヨロ〳〵水の流れる音が聞えてまゐります。私は不思議になつかしく、その水音に耳傾けて聽いて居ります、何が悦しといつて何が樂しいといつて、この雪の下の水の音くらゐ、雪國の者の胸に希望を抱かせる物音はないのです。水音が高くなつて、その度に青々と芹が伸びてまゐります。旅人の草鞋の跡に水が溜つて、そのうちに荷馬車が見えてまゐります。と、馬車のラッパが聞えてまゐります。あゝさうなると、私も待ち憧れてゐる「南」へ出られます。

軒端の雪の落ちた瓦の上に、雀がいくつも〳〵も集つて鳴いて居ります。これ等の雀も親も子も兄弟も夫も妻もあるのでしやう。私一人が親にも子にも夫にも分れて、こんな寂しい所に捨てられたやうな感がして耐らなくなります。

向ふの方から學校歸りの生徒等の姿が雪途の上へ、見えてまゐります。雪沓を穿いて毛布を頭から冠つて

面白い姿、それが元氣好く駈けながら、右に左に分れて次第に遠くなつて行くのをじつと見て居りますと、妙に人懷しく涙が湧いてまゐります。

あゝ一筋の雪途、眞直ぐに北に行けば、赤兒が雪の中に、祖母や叔母の手に抱かれて泣いて居ります。北の空はまた暗くな



つて來ました。また雪が降つてゐるのでしやうか。

南へ走るこの同じ途に來た時は夫と二人で向ふに見える峠の坂を降りて來たのでした。あの雪の深い峠、あれを越すと、湖水があつて、南の方へ空が青く遠く開けて居ます。あの坂路を登つて、峠から早く「南」へ向ひ

たい、南の空、青い空、私は何だかまた胸が苦しく動悸が烈しく打って居ます。ほんとに、此雪の中を脱れて、赤兒を抱いて南へ出られる時があるのでしやうか

お光さんが來て藥を飲めと慫めます、日が薄くなつて泣き出したくなりました。今夜もまた恐ろしい吹雪が來るのでしやうか。

忍術

加藤爲子

つと走り群に投じてわづらひも忘れはつてふ忍術はよし。

よろこびも悲しみもはた口惜しさも時雨の如くしづかに來る。

大いなる錘の下に伏す吾もうつら〳〵の夢みつゝあり。

みじろがず何なきさまの横顏をさびしとぞみる秋の入日に。

あめつちに唯この吾れを賴むよりはかなき旅をなぐさめとする。

三日の旅わすれかねつと書くは誰れ旅の女のわすれかねつと。

西東旅より旅に終らまし白駒並べ若きわがどち。

天地にひとり生くとし思はれてこの山上の去りがたき夜。

曉の東天に在るわさき星博士來ずやとふと駈けてみる。

歌ごゑに耳そばだてゝふと擧げし瞳は君にきられけるかな。

淋しくば二人住へとのたまひぬ此の一人さへもてあます身に。

歌ふこと口に上らずキイ打てどを指走らずうつむきて泣く。

けんばんに額埋めて思ひやみ思ひ疲れてうたゝねぞする。

ちら〳〵と枯葉の柳ふく風も煩やすとわびし秋のくれがた。

赤きもの一もつけざる吾姿木綿きものゝ物足らぬ時。

白日

三ケ島葭子

白日は明るしされど君にわくわが涙こそ明るかりけれ

狹き世を出でんとすれば思ふこと我に及びて悲しくなりぬ

言はずとも悲しき女音に立てゝ我の嘆くは人におどけん

影の我よこしまの我魔のおのれ滅びて寂し君を思へば

みづからを花とまさしく思ふべき少女の前に春のこしかな

あはれにもひとたび逢はんその願それぱかりをば戀とするわれ

幾夜にもつづかんとするわが夢を晝の斷つてこそ悲しかりけれ

すさまじきわがうづまきのただ中に消えじと思ふ一點の夢

みづからの缺く幸をあめつちの備へぬものとあはれみて泣く

我知らず怒れることに氣のつきて俄に落つる涙をな見そ

男らの燃ゆる世界を覗かんと君が心の管玉をとる

戀をせず思ひあがらず泣かずしてあらんとせしをみづからに恥づ

わが犯す罪を擧げんとまづ一つ生くるを數へ心失なふ

悲しさにをりをり次の世を思ふその世に似たる大空の青

たゆたふは口惜しけれど胸をわれなほ天のいましめとする

若き血はならはんとしぬ春立つ日屋根よりはしる雪どけの水



木の芽時

長曾我部菊子

夜が明け放れたと見えて主婦さんの聲が臺所でする ひとりで十三ばかりになる飛白の着物を着て居る子が雨戸を開けて行く。此家の一人子だ。雨は止んで居る起きやうとして凛子さんを見るとあちら向になつて穩かに眠つて居る。髮の末が少しゆるんで疊の上になびいて其間から白い襟元がくつきりと見みる。緣側に出て小庭を眺めると昨夜の雨でぽか〱と持ち上つた黑土の色が柔かく目に映る。楓らしい木に芽がぽつちりと高くなつてゐる。其向方の雜木は張り切れさうになつて、南の方の枝には二つほど開けて居る芽がある。ぢつと見守つてゐると、お隣の高窓が開いて白い女の顏が出た。ちらと私の方を見てすぐ顏をひつこめたが聲がする。

「××さん。木の芽がふきましたよ。木の芽頃になるともううか〱出來ないね。ぢつきもう春だわ、心がそわ〱するわ。」

と云つた。私は其れを聞いて私の言ひたい通に女が話したので盜まれた樣な、けれども心持の好い感じがした。

ふと氣がつくと凛子さんも緣側に出て同じ樣に木の芽の庭を見て居る。

此の樣な頭腦のすつきりとした朝に取り合した樣にお膳にはわかめのおみをつけがぷんと香つた。女中が其處へ這入つて來て端書を置いた。無論凛子さんである、誰から？、ちらと見えたのは歌らしかつた。

後で凛子さんは私に歌を書いて自分の心を仄めかした。『我が心白刄の如き男の子等に交れり、友ははらはらと見る』凛子さんは私の顏を、まあもの〻わからぬ人よ。あなたにはとても私の心持の片端だつてわかりませんわと憫れむ樣な目の色をして見るのであつた。其憫むらしい目元やら、熱して紅くなつた美しい雙頰にはあり〱と明るい女の誇が浮んで居るのであつた其時の凛子樣の容貌は永く忘れられぬものであつた。私は沈默つて目を外らして居た。

習字の手本は良き書を選べ

文學士　久保天随

女子教育が盛になつて、女が學問する樣になつたので、女の智識も進み、女の品性も高くなつたであらうが然し、其の所謂教育を受けた學問のある女、高等女學校を卒業した女達の、文字に乏しく、筆蹟の拙いのには驚かざるを得ぬ。先づ彼等の手紙を見るがよい、ペンで拙い字をぬたくつて、文章と言へば口語體で誤魔化して居る。若し毛筆を持たして候文でも書かしたら、滿足な手紙を書く人は恐らく寡なからうと思ふ斯う言ふことは決して悦ぶべき現象でない、幾許外國語が出來て、科學上の智識が進んでも、日用の手紙一つ滿足に書けぬ樣では、決して立派な女と言ふことは出來ぬ、手蹟や文章は其の人の品性や人格を代表するものであるから、假令高等の教育を受けたにしても、拙い手蹟で、滿足な文章も書けぬ樣では、其の人に對して決して尊敬の念は起らない、品性までも劣つて見える、故に、苟も智識ある人間として世の中に出ようとするなれば、手蹟と文章だけは普通出來て居なければならぬ、少なくとも人に見られて恥をかゝぬまでにして置かねばならぬ。

然しながら、何事でもさうであるが、殊に手蹟や文章などは一朝一夕に巧になれるものでない、速成に學べるものでない、であるから手蹟でも文章でも、人の前へ出せる樣に修養しようとするには、如何しても子供の時分から其の心掛が無ければならぬ、されば教育家も注意せねばならぬことであるが、父兄も亦充分の注意を拂はねばならぬことである、學校で一週に幾時

間と言ふ樣な習字では到底立派な字の書ける譯がない子供の時分から家庭に於て習字をさす樣にせねばならぬ、無論無暗に字を書かせればよいと言ふ譯でない、其の習ふべき手本にも亦注意をしてやらねばならぬ。字體を習ふのも必要であるが、字の眼目は風韻である、手蹟に依つて其の人の品性の忍ばれるのは文字の風韻である、であるから習字手本はなるべく風韻のあるものを選む必要がある。そして餘り手本の筆者の變るのはよくない、一つのものを充分習ふ樣にした方がよい近頃流行して居る女子用の習字本と言ふものを見るがなる程字體は綺麗で、見た眼には美しいには違ひないが、どうも風韻に乏しい、世間では流行して居るが、私は斯う言ふ字は好かぬ、文字に風韻のないのは花に香のないのと同じで直ぐ厭が來る、男の手蹟でも女の手蹟でも、風韻の必要なことは同じことであるが、殊に女の手蹟には風韻がなくてはならぬと思ふ。

　文章も亦手蹟と同じく、一朝一夕に上達するものでない、これも亦子供の中から父兄並に教育家が注意して、學校の教科書以外に文學的の書物を讀ます必要がある。これは無論勝手氣儘に亂讀さすことはよくない文章を學ぶと同時に品性を陶冶すべき書物を選んで讀ませねばならぬ。學問と言ふものは教科書のみで出來るものでない、教科書以外の良書は出來るだけ讀む樣にせねばならぬ。斯う言ふ樣に讀書力を養ふて行つたならば、修養にもなり、又文章も學ぶことが出來て、所謂一擧兩得である、それを思はないで近頃の女學生イヤ女學生ばかりでない男學生もさうであるが、こゝでは女の爲めに言ふのであるから、女學生を指して言ふのである。女學生は一生懸命に勉強して居るのは結構であるが、その勉強たるや點取り主義で、何でも彼でも試驗の成績さへよければよいと言ふので、教科書以外の書物などには眼も移さず、朝から晩まで教科書と首引して居るのである。これは決して惡いと言ふのではないが、前にも言ふた通り、學問は教科書のみで得られるものでなく、且つ斯う言ふ勉強の結果、折角卒業しても手紙一本滿足に書けぬ樣では困ると言ふの

習字の手本は良き書を選べ



である。では如何したらよいかと言ふと、學校の科目も必要であるが、教科書以外の良書を讀むことも亦必要である。教師又は父兄に選んで貰ふた文學的の書物を出來る限り多く讀んで、充分文想を養ふて置かねばならぬ。斯う言へば、さう言ふ書物は學校を卒業してから幾許でも讀める、學校に居る間は教科書だけで澤山だと言ふ人があるかも知らぬが、特別の境遇に居る者は別として、普通の者は學校を卒業してから書物などを讀んで居られるものでない、卒業してから讀まうと思ふて居ても、遂に讀むことが出來ないから讀まずにしまう、のみならず俄仕込で文章などの書けるものでないから、如何しても學生の時分から讀んで置かねばならぬ、要するに手蹟と文章は女にとつて最も必要なものであるから、何を置てもこれだけは充分學んで置かねばならぬと言ふのである。

世間が實際的になるほど、手蹟や文章が輕忽にされる恐があるから、假令實際的になつても、此二つは女子の品性上深く養ふべきことを忘れてはならぬ。

○新刊

○黴　德田秋聲著

私は德田君の描く淋しい小說が好きで、能く讀んだ、今度の『黴』も電車の中で每日二三十頁づゝ幾日もかゝつて讀了つた、此小說は一氣呵成に讀んで了はうと思へば苦しくなつて、飛び越したくなるかも知れぬ。併し私のやうに每日二三十頁づゝ讀んでは、其作中の人物、もつとはつきり云へば笹村と云ふ男と、お銀と云ふ女が、別れよう〳〵として別れられない心持を考へ考へして、またゆつくり次を讀出して行くと成程と感ぜしめる處がある。此小說には著い言葉で云ふ筋と云ふものがない、事件の進行と云ふものが少しも小說的でない、けれども一度讀みかけると終まで引張って行かねばやまぬと云ふ魅力がある。それは實際的人生を見せられるやうな氣がして、自分等も同じ道を步いてゐるのではないかと思ふ處に此作の魅力があるのであらう。慾を云へば心理描寫が物足りぬ、だから主人公笹村のやうな世の中を考へてゐる人の心持が明かに反映して來ない、却つて心理描寫などを要しないお銀の方が女性として生きてゐる、兎に角此小說は秋聲君の代表作たることは疑はれないやうだ、終に臨んで著者が我に此書を寄贈されたことを感謝して置く（醉茗）

（定價　五十五錢、飯田町三、新潮社發兌）

○自叙傳　森田草平著

この著は「煤煙」の後篇で鹽原山中で情死をはかつて、遂げられず其處から伴れ戾された所から描き始めてある。昨年の文壇に一產物として、讀書界を賑はしたが殊にこの作の價値を認むべき點は巧妙な、なだらかなその描寫である。風葉氏の作品に見る完璧に近い文章や行届いた描寫の巧妙な點と共通した處があるやうに思はれる。その感情や場景を直截に裕々と描寫して餘蘊なからしめてゐる所はこの作家の特色とも云ふべきであらう。その他の手法に就ては批評界で大分、是非の論があつたが兎に角、この作一卷を通じて、淀みなく流れて居る描寫の一點だけでも本誌の讀者諸君や若い人達の一讀を促したい。表裝も優に机上を飾るに足る書である。（M）

日本國中見渡勘定

七分三分の見立

勸進元　神道　五分

差添人　儒者　五分

武士	七分
出家	八分
學者	一分
關取	五分
淨瑠璃	五分
玉役者	一分五厘
美貞女	一分一厘
侍女	一分五厘
誠忠義	三分
義理知る人	一分
信心まゐり	一分
やうき參り	六分
男の綿帽子	七分
金持	三分

百姓	三分
法尼	二分
不學	九分
前相撲	三分
行司	二分
三味線	三分
人形使ひ	二分
大根役者	八分五厘
玄妻	八分九厘
飯焚女	八分五厘
勤忠義	七分
不義理	九分
なんぎな時に神願ひ	三分
女の羽織	三分
質置	七分

諸職人	三分
名醫	一分
能書	一分
神社	四分
歌三絃	七分
太鼓持	一分一厘
本粋	五厘
後家	五分
乳母	四分
篤孝行	一りん
慈悲正道	一分
朝起	一分
長者	一分五厘

諸商人	七分
藪醫	九分
無筆	九分
寺院	六分
こと	二分五厘
鼓弓	五りん
あへらの太鼓持	八分九厘
不粋	九分五厘
娘子	五分
子守女	六分
表孝行	九分九厘
慾の鵬	九分
朝寝	九分
貧者	八分五厘

器物の部

提灯	九分
草履草鞋	八分
扇子	七分
うちはん よこつち	六分
煙管	五分

釣鐘	一分
下駄雪駄	二分
團扇	三分
つき臼きね	四分
墨筆	五分

生類の部

はと	五分
むま	六分
いぬ	七分
しらみ	八分
ねづみ	九分

すゞめ	五分
うし	四分
ねこ	三分
のみ	二分
いたち	一分

此見立番附は徳川の末に出來たものらしく・當時の風俗人情を知るには面白き參考なり・昔ばかりでなく今の世にも當てはまる處ありて・春の日ながのつれづれに考へて見たまふも讀者の好き慰めなるべし記者識す（和田信次郎氏所有）

女性の姙孕力（三）

大阪高等醫學校教授　田中祐吉

▲魚肉と姙孕力

更に進んで營養物の姙孕力に及ぼす影響を觀察しますと、主として魚肉を食するものは姙孕力も盛んなるが如く見えます。ダウィは魚肉を好食する婦人は美麗で、且能く姙娠することを唱へ、又モンテスキユーも日本及び支那の人民の繁殖力の强大なるは、魚肉の多食に關係があるのではないかと謂つたことがあります、之に反して獸肉を偏食する者は姙娠力減少するが如く、彼の專ら獸肉を食する獵夫が、子を擧げることの頗る少數であるのは掩ふべからざる事實でありますが、併しては固より一般に當て嵌まるべきことでありません、彼の「ラテン」種族よりも肉食することと遙に大なる英國の婦人は、姙娠力頗る大なるものであります。

バックルは英國文明史に於て、人口の增殖は固とより種々の狀態に由て影響を受くるものであるが、食物の貯藏量の多き時は人口增殖し、之に反する場合には人口の增殖は靜止するか、或は減少すると論じましたが、スペンサーも食物の增加するに從て、人間の繁殖力も增加することを認め、適當なる食物の攝取は人種の姙孕力に原因的關係あることを說きました。

酒精飲料が女子の姙孕力を減少せしむること特に大なるは、實に注意すべき所で、リッピッヒの說に依れば酒精中毒に罹れる婦人百名中、其二十三、八は全く姙娠力を缺乏して居つたといふことであります。又ダンカンは酒精の特に女性生殖器に有害作用を及ぼすこと

を信じて居りました、蓋し酒類の濫用は、全身を障礙するの他、多くの場合に於て、生殖器關に作用し屢々慢性の卵巢炎を發起すからであります。

▲氣候と妊娠の關係

氣候及び四季も妊孕力に對して一定の關係を有して居るやうに見え、殊に氣溫の增加は妊孕力を促進するが如き觀があります。ヘークラットが「スコットランド」に於て統計的に調査した所では、氣溫の增加と共に妊娠數も增加し、氣溫の華氏一度を增すに從て、妊娠數は「六パーセント」增加することを觀ました。之を動物界の現象に徵しましても、熱帶地方の動物は孳尾期の來ること早く、且數回反覆するものであります併し歐洲に於て、北國の住民は南國の住民に比して妊娠さる割合の多き事實を顧みますれば、高溫の必ずしも妊孕力を促進するものに非ざるとが明であります四季の中で、春季は妊娠すること甚だ多き時季で、ケテレーの統計では、妊娠數の最大限は、五月なることを示し、春季にては、人間の生活力が亢盛する結果、妊娠することが多いのであると述べました。ウイルレルムは之に反して五月六月の候に於て、妊娠數の增大するのは、社會的及び經濟的關係の然らしむる所で、春季及び初夏の頃は種々の會合や祝宴が催ふされて、男女相接するの機會多く、從て婚嫁する者も多い故、妊娠數も增加するものであると謂ひました。

▲生活の激變及び血族結婚

甚だしく調和を失ひたる生活法の變化は、妊孕力に不良の影響を及ぼすものであります。ダーウインは厩にて乾燥せる食物のみを取りたる牝馬を、一時露しげき綠草の生ひ茂れる牧野に放つ時は、一時妊孕力を失ふことを記述しました。又歐洲人が熱帶地方に移住しますと、氣候劇變の結果として、妊孕力の著しく減少するものでありまして、病理學の大家ウイルヒヨウの説に依れば、熱帶氣候に馴化したる歐洲の婦人は徐徐に其妊孕力を失ひ、一二代にして速に其家系の亡

滅を來たすとのことであります。

血族結婚をなしたものは一般に姙娠することが尠いやうに論ずる人があります、ゲーレルトの調査した所では、血族結婚者の三十六、二乃至五十七パーセントは不姙者であるとのことでありますが、併し他に之と反對の實驗も多く、ダーウインは、血族結婚者九十七名中、不姙であつたのは僅かに十四名に過ぎなかつたと云ひ、又マンテガッツアーも五百十二人中、唯八乃至九パーセントが不姙者であつたと記載して居ります

▲都會に於ける姙娠の減少

近時の趨勢を觀まするに、夫婦間に於ける姙娠分娩の數は、逐次減少するの傾向があります、獨逸に於ける分娩數の百分比例を見るに、

千八百七十二年より同七十五年迄	二九、七％
千八百七十九年より同八十二年迄	二七、四％
千八百八十九年より同九十二年まで	二六、五％

の割合で、此の如く逐次分娩數の減少して參りますのは、主として大都會に於て見る所で、田舍では却つて多少の增加を認めるやうであります。

	千八百七十二年より千八百七十九年迄	千八百九十四年より千八百九十七年迄
伯林	二三、八	一六、九
他の大都會	二六、七	二三、五
田舍	二八、八	二九、〇

フハッヘルが各國の人民に就て、一夫婦間に有する平均兒數を調査した所に依ると、佛國にては二人、伊國にては三人、獨逸では四、八人、英國にては四、九人、露國にては五、一人の割合であります。

▲男子生殖力の永久性

月經の停止し姙孕力を失ふに至るの時期は、前既に申しました如く、四十五歲乃至五十歲の間でありますが、併し時としては、之よりも早く始まることがあります。スカンツオニーは月經の早く始まつた者、例之ば十歲頃より始まつたものは既に四十歲乃至四十二歲位で姙孕力を失ふことを述べました、此の如く女子は四五十歲に至て其の姙孕力を失ふものでありますが、之に反して男子の方は、四十歲の時代に至て生殖力の高潮に達し、六十歲の後半頃より漸く生殖力を失ふのが普通であります。併しこれは隨分多くの例外がありますので、八九十歲の垂死の高老に至るも尙ほ生殖素を有するものがあります。

（をはり）



和歌の浦には
名所がござる

衣通姫

一に権現
二に玉津島……

澤田撫松

一

我國昔から美人も少くはないが、衣通姫ほどの美人は稀であつたらう。衣通姫と云ふ名は其容貌の美しい處から世間の人が附けた名で、玉の肌の美しさが衣服を透して、周圍に輝くと云ふ處から衣通姫と呼ばれたのであつた。姫の名は弟媛と云つた。

さゞ波や滋賀の浦わに程遠からぬ坂田の里に詫住居する衣通姫は、深き物思ひに沈んで居た。

美しく生れた爲に――。

衣通姫には忍坂大中姫と言ふ姉君があつた。醜いと言ふほどではないが、容貌は妹の姫に及ばなかつた。この大中姫の時の帝の皇后になつて居たのである。ところが其年十二月に御殿の新築が出來たので、新殿に於て帝は文武百官を召して御宴を張らせられた。其の時帝自ら琴を執つて之を彈じ給へば、皇后起つて手に三十九枚合したる檜扇をサツト開げて舞ひ給ふた。差す手引く手も鮮に舞ひをさめて扨て愈々慣例の一段になつた。慣例とは外でもない、斯る場合には必ず皇后から帝に美女を奉るのである。此時も亦皇后は然るべき美女を見立て帝に奉らねばならなかつた、然し皇后は如何に慣例とは言へ帝に美女を奉るのを心苦しく思つた。然れども慣例は何としても破る譯には行かぬ、どうしても美女は奉らねばならぬ。玆に於て皇后は一計を案出した。其の謀と言ふのは美女として奉る女に皇后の妹衣通姫を選ばうと思つたのである。それが何故謀

かと言ふに、慣例であるから何としても美女を奉らねばならぬが、他の女を選むだら必ず召に應ずるに相違ない、そこで我が妹の衣通姫を美女として奉るべき女に選むで置けば、慣例の儀式はそれで濟み、そして愈愈帝から御召があつたところで衣通姫は姉の自分に義理を立て召に應ずる氣づかひはない。と、さてこそ衣通姫を美女として奉ることにしたのである。

帝は皇后が其の妹衣通姫を美女として奉ると言ふのを聞こしめされて非常に滿足に思召された。と言ふのは衣通姫の美人であることを知ろし召して居たからである。早速勅使を遣はして御召しになつた。然れども衣通姫は召しに應じない、再び勅使を遣はされたが辭を左右に託して何としても召しに應じて參内しようとせぬ。三度勅使を遣はされたが固く固辭して御受を申さぬ。その後四度五度六度遂に七度めの勅使を遣はして御召になつたが、衣通姫は矢張頑として召しに應じない、然し斯く數度の勅命を背く上からは、都の住居も心苦しと、斯くは坂田の里に佗住居する身となつたのである。

斯く七度までの勅命に背きしことなれば、何處如何なる端に住むとても、この儘では濟むまいと、衣通姫は母の身を案じ、我が身を思ひ煩うて居るのである。

『どうしたら可いか知ら、私はほんとうに困つたわ、幾許勅命でも、姉妹が………』

衣通姫が斯う呟いて居たところへ第八の勅使として烏賊津と言ふ舍人が來たので、澁々對面すると、案の定舍人は言ひ出した。七度も勅命を受けて之に背くとは不都合である。此度こそは是非御受けをせねばならぬと切に說き勸めるのである。然れども衣通姫の心は動かなかつた。

『勅命の重いと言ふことも知つて居ます、又勅命に背く罪の輕くないことも心得て居りますが、マーものを考へて見てください如何に勅命なればとて、この事ばかりは郎君からよい樣に謝絶を願上ます。』

衣通姫は凜然と言ひ放つた。この一言に烏賊津も凹まされたが、然しこのまゝ凹まされて歸つては勅使の

役目が濟まぬのみならず如何なる咎を受けるやも知れぬ。如何なる手段を以てしても衣通姫を伴れて歸らねばならぬと、豫て期したることゝて烏賊津は少しも騒がず。

『イヤ仰せ一々御道理と思ふ、然し何としても姫を伴れ來よとの勅命を受けて此所へ來たのですから姫が御承諾くださらぬからとて、おめ／＼とこの儘歸る譯に



はまゐらぬ、若し姫を御伴れ申さずに歸つたなれば申譯の爲めに切腹して死なければなりませぬ。同じ死ぬなれば御迷惑ながら此所で死なして貰はう。』

と庭前に飛び下りて、庭上に伏した儘びくとも身動きしない、衣通姫や侍女やらが心配して種々宥めても如何しても起き上らぬ。三度の食事を持つて行ても見向もせぬ、三日四日

七日になつても動きもせねば食事もせぬこれには衣通姫もほと〳〵困つて了つた。

（三）

烏賊津は七度勅命を受けて之に應じなかつた衣通姫のことであるから、尋常一樣のことでは應じないと、豫め用意して來た物がある。それは外の物でもない糒である、七日の間庭上に伏して食事を斥けて居たのも、實はこの糒の用意があつたからである。そんな事とは衣通姫は少しも知らず、七度勅命に背きしさへそら恐しい心地がするのに、忠臣烏賊津が自分の爲めに生命を絶たんとするのを眼の前に見ては義理や理窟は言ふて居られず、流石は女性の氣も弱り、遂に勅命に從ふ旨を答へた。

烏賊津は大に面目をほどこし衣通姫に供奉して倭の春日に着いた。帝大に悦び給ひしが、皇后の嫉妬を恐れて姫を宮中に召さず、藤原に別殿を構へて此所へ姫を置かれた。この事が皇后の耳に入つたので、一問着が起つたのを漸く治めて、其後皇后に内證で藤原の宮に通ふて居られた。或夕衣通姫は天皇の幸を待ちつゝ、

わがせこが、くべき宵なり、さゝかにの、
くものふるまい、かねてしるしも。

と詠じて居た。この歌の意は、今蜘が巣をかけて居るのを見たが、これは兼々聞て居る何か吉瑞のある徵であらう、さては帝の來ます前兆かもしれぬと言ふのである。

果せるかな、其所へ帝は來たまひ、姫の歌を聞こしめし、

小車のにきしの紐を、解きかけて、
あまたはねずと、たゞ一夜のみ。

と詠じて美しき夜を明し給ふた。

斯く帝が姫の所へ通ひ給ふことが皇后の耳へ入つたので、又々皇后の嫉妬が始り、姫もほと〳〵困つて、帝に向ひ。

『私は御寵を蒙るのは誠に嬉しう思ひますが、斯うして姉上の宮居の近くに居りましては居辛うございます

から、少し離れた所へ移してください。』と、思ひ込むで頼むだので、帝も道理と思召し、河内の茅渟に宮室を造つて其所へ姫を移し、それからは日根野の狩に行くと言つては姫の許に通ふて居られた。

姫は海が好きで、帝に海へ行くことばかり誘めて居た。帝も姫の切なる願ひを入れてある時和歌の浦に舟遊びをせられた、帝は愛しき姫を伴ひ、浪靜かなる和歌の浦に舟出して、平生から海を見たがつて居た姫の満足さうな顔を見て、帝も欣喜せられた。すると今まで風靜に浪穏なりし和歌の浦に、サット吹き起す一陣の怪風と共に、狂瀾怒濤忽ち至つて、驚くべし、鏡の如き眼を輝かし、焰の如き舌を出した大蛇の將に帝の舟を一呑みに呑まんとするのである帝はあなやと、驚き給へど、姫は泰然自若、少しも騒かず。

日本は、あまつひつぎの、みことのり、



我が大君の、國としらずや

と詠じた、不思議なるかな、今現れた恐しき大蛇は影もなく風止むで、浪靜かに、舟の搖もなくなつた、帝の危難は姫が歌の德で救はれたのである、それも其の筈姫は人丸、赤人等と共に本朝和歌三神の權化と言はれた一人であつた。

其の後、光孝天皇の御代に、天皇に御惱があつた、其の時天皇夢に衣通姫を見給ひ、姫が、

立ちかへり、またも此世に、あとたれむ、
名もおもしろき、和歌の浦波、

と詠じたと思ふと夢は覺めた。さしもの御惱もこの夢以來忘れた樣に御全快遊ばした。天皇悦び給ふて仁和三年九月十三日、右大辨源隆行を勅使として和歌の浦に遣し、衣通姫を神に祭らせ給ふた。これぞ和歌の浦には名所がござる、一に權現、二に玉津島……と木遣音頭にまで殘る歌の德、和歌の浦玉津島明神の由來である。

春愁

なやましい明るさに――
暗い方へ行かうとしても
あの雲が動いてゐるやうに
動いて行きたい、明るい方へ
春と一しよに明るい方へ――
柔かい若草の手ざはりに
あら〳〵した人間の肌のはづかしさ
せめて今斯うしてゐる間だけでも
私の柔かな心を
そつとして草の上に置きたい
美くしい血と、大空と
一つに暖かくなつて行く春の力よ
私は靜かに、靜かにして
私の上に過ぎて行く時を
雲のやうにながめてゐたい



碁盤

夢殿守

『紅茶をいれてくれないか』

瓦斯の光が蒼白く、明るく流れてゐる室、簞笥の上の鏡臺が言ふに言はれず美しく輝いてゐる、……それを横にしてさつきから、パチーン／＼と一人で碁を打つて居た夫は、ふと思ひついた樣にかう言つて一寸こつちを向いた。

「ハイ」と立つて長火鉢の横手の茶棚から、がちやがちや道具を取り出すと、やつといろ／＼の物思ひから離れて手さきにばかり心が集る、……あゝ樂だつた！と氣の付いた時はもう、紅茶を夫の前へ持つて行つて再び自分の座ぶとんの上に見飽きた夕刊を又膝へのせた時であつた、……又苦しい……夫は何かうなづきながら、「成程」と一人うちして黒い碁石をパチンと置いた。

……それは雨模樣のしてゐる暗い日の夕暮近くであつた、まだお歸りには早いが、と思ふ時刻に門の戸がガラリと明いた、「郵便だろうか？」と耳をたてる間もなく續いて玄關の格子が開いた、「今日はお早いおひけで御座いましたこと」とはあやの聲がする。あはてゝ玄關へとび出す……と、そこに、今外套をぬいだばかりに、碁盤と碁石らしい包みをさげて嬉しさうにいそいそと此方へ來る夫を見た。此刹那に私の心は、ほつと息がつけた樣な氣がして我しらずニッコとした。

「何を笑つてゐるんだい」と笑ひながら夫はかう言つた、「今夜からそれをなさるんでせう」「うん」二人は顏を見合せて又笑つたがそれは思ひ／＼のほゝえみで有つた…………。

結婚した當座、朝夕はどうめぐるか憶えなしで居られた、十一月の始め頃から何となく緣日や夜見世が面白く成つて、二人はよくあそこよ、こゝよとさがし歩いた。カンテラの灯の續いてゐる暗い樣な明るい樣な道をぞろ／＼と人に押されて、あれよ、これよと、たあいもないものを買つてはひつそりと成つた夜の街を家の門に歸つて來て、ガチヤ／＼と鍵の音をさせながら暗い家の内に這入る。パッと灯をつけて買つて來た包みをそこへ投げ出す、其中から定つて何かお菓子の

袋が出る　それを喰べながら熱いお茶をすゝるのがどんなに樂しかつたろう。チヨコレートクリームのまぢつてゐる時は定つて、私が一つづゝ多く貰つた。かうして一日一日は又夢の樣に過ぎてしまつた。

年の市のそは〳〵した空氣の中を、お銚子よ、お吹物椀よと買ひ集めては、お勝手の道具が一日一日ふえてゆく嬉しさに平和な新年を迎へて一しきり、カルタ取りもずんで了つた。此頃。暖い年とはいふものゝさすが爭はれない寒の風が冷たく吹く、街は通る人の下駄の音も何となく「歸りをいそぐ」らしく、響いて面白づくに表へ出るといふ心持はく〳〵じけてしまつた。

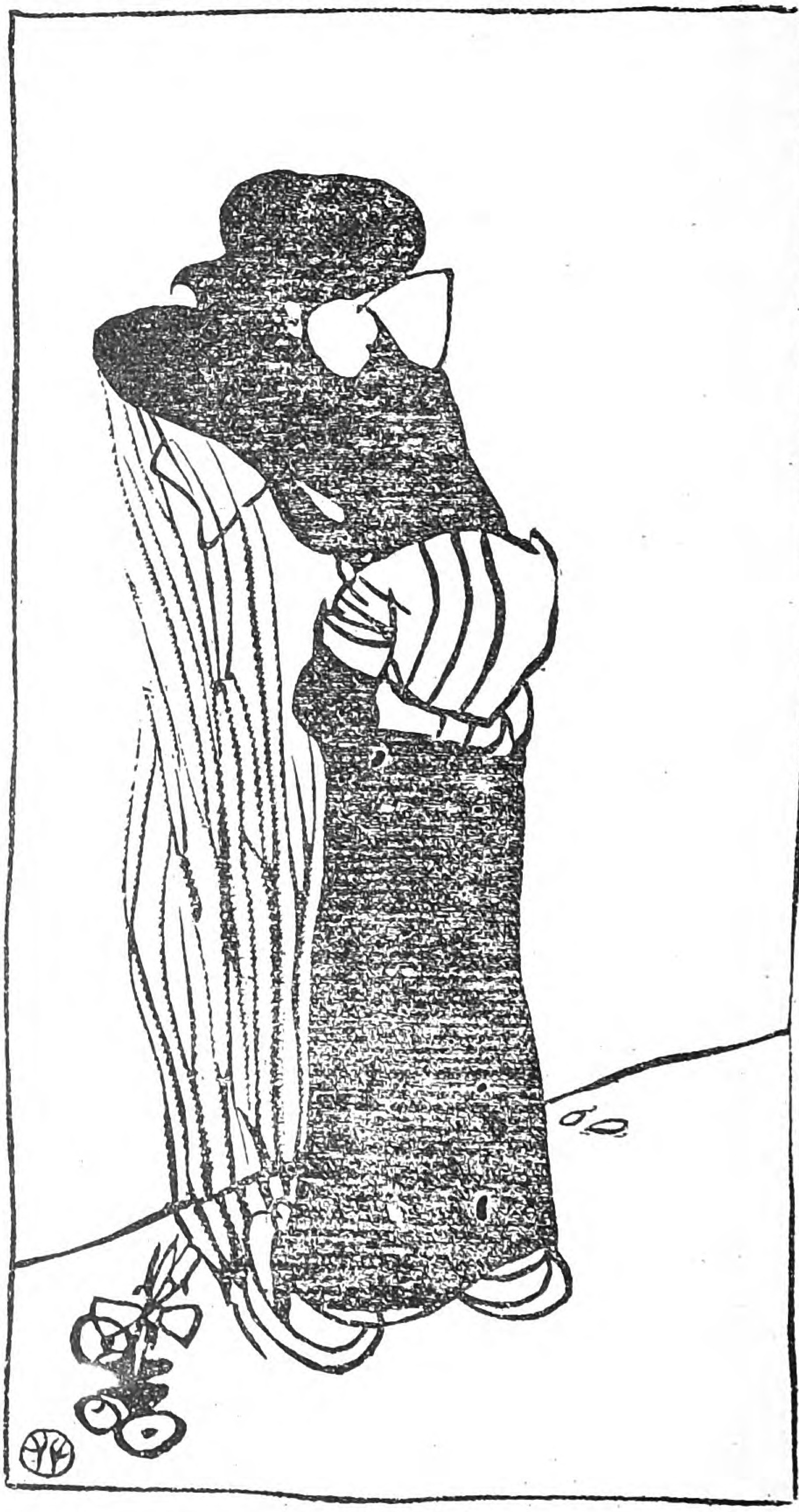
朝の十時が出勤の時間、あとはばあやと二人きりのひつそりした家に、暖な日光がいつまでも〳〵射す、髮を結ふ、お湯にゆく、こんな事が僅に靜まりかへつた家の空氣に、そつと小さい小波をたてるぎり。八百屋が來る、魚屋が來る、肉屋が來る、毎日毎日同じ樣なものを呼びたてゝ來る、其毎日の獻立が漸く苦痛に成つてきた。もつと何か思ひ切つて變つたものはないかしら……まぐろにさわらにかれいに鯛に……牛肉も鳥も考へて見れは可笑しい程變化がない、よくまあ之に氣が付ずに廿餘年過ぎたものだ、……と思ふ樣に成つてから毎日毎日の御用聞の聲を聞くとひやりとする又お定まりのもの、何をどうして勞れて歸つて來る夫の心に快よい刺戟(?)を起させよう、と思ふと、馬鹿な事、それはみんな自分の趣味から割出してゐるんじやなかろうか、と思つて見ても、やつぱり自分が承知しないじれつたい。

四時が鳴る、定つて聲の好い豆腐屋が行き過ぎると一日こんな事でむしやくしやした心が甦つた樣に生々と成つて、夫の歸りを待つてゐる、唯、待つてゐる。此間の心がやつと人間らしく、一ぱいに張りつめてきり〳〵と廻つてゐる。

お夕飯がすむ、たあいもない話の種が盡きて了ふ、「ア、ア、」と勞れた樣な聲を聞きながら時計を見る、七時。……火事でもあればいゝな……ふとこんな事が心に浮ぶ事すら有る、……二人では單調だ、獨身でゐた時よりも單調だ……と言つて、それなら此家に誰れか外の人を加へるのは、それはいや〳〵〳〵、だうしてもいや、早く暖に成ればいゝ、緣日にでも行きたい……寒い、夜が長い……。日が長い……。

碁盤を手はじめに此頃は、室内遊戯の道具の殖えるのが樂しみ、何んでも彼でも此「たいくつ」な時間を持

つて行つては埋められるものをとあさつてゐる。
どうせてんな時が長く續きやうはない。子供が出來る、何が出來ると渦巻は大きく成るばかりだと、明らかに「人間の家」、のあはただしさが分つて居るのだけれど、今まで餘り急峻な山路を飛び越えて來た心の墮力は却つて平坦の路に疲れたのであらう。
光線の暗い日は心が鈍くなつて、理由のない壓迫が苦しかつたり、晴れた日は、だるいやうな、眠いやうな、只此まゝにながく〱じつと動かずにゐたいやうにも思ふ。私は何かしなければならぬ、斯うして居るのではないと思ひながらも、斯うしてゐるのが何かずるより安全なのだとも思はれたり、あんまり行く前途が開けすぎて、もうゆつくり歩けばいゝとも思はれて來る。こんな抽象的なことを考へて居て何にならう、何にもなりやしない、それよりか本でも讀まう、日記でも書かう、と毎日〱思ひながら、矢張たいくつしたやうにしてゐる、けれど之が人間の一生なのかも知れぬ。





銀の瓶子

百合香

來ない〱と思つてゐた毛利さんからも、今朝の賀狀の内に交つて御名刺があつた。あゝ今日はもう五日だ。獅子のはやし太皷の音、萬歳の聲才藏の姿も賑はしく、行交ふ人の衣服は晴やかに女の髮は黑く艶々しう匂ふ。羽根つく少女の可愛さに、引き入れられるやうに微笑んで見ながらも、あゝ昔は自分もあゝした罪のない子であつたものをとしみ〲思はれる。人に顏見らるゝもつらく、見るも苦しくて、うつむきかげんに足早に歩み、いつのまにか日章旗をくゞつて××樣の御玄關に立つた。敷つめられた絨氈の心地よさ。和洋折衷の大座敷、何となく希望の光ある室よ。おゝ若草の室よ。

とんす張の椅子により懸りつゝ、徐ろに裝飾を見た一間半の床には誰の筆やら、勅題松上の鶴の大幅。水盤に生られた松竹梅は生々しく違ひ棚に置かれた鉢植の白梅は今を盛りである。壁に懸る馬の額の多さ！紫檀二間の飾り棚の置物の數々。其處此處に並ぶ銀瓶には、水仙が薫る。暖爐の溫さに上氣した頰をさわりながら白い卓掛の上におごそかに目を引く銀瓶子の一組を見た。菊の御紋章刻まれた物である。夢のやうな五分間よ!!叔母樣の美しい御聲がしたと思ふと懷かしい御姿、鐵色地無垢の御重ね、品位ある御顏のわけて尊く仰がれる。まもなく武子樣もおいでになる。三組の天盃をすゝめられ、毎年の事ながら幽かに躍る胸。武樣は銀瓶子をとつてなみ〲とおつぎになる苦しさほんのまねばかりでおとそを納め、公卿風のお雜煮頂く。御幼少の時から、至尊の御側近う仕へて御覺え目出度叔父樣は、今年はあだかも至尊陛下御還曆元旦の子の日を祝し奉り、子の置物を獻上遊はさるゝのお心組みの處二日は叔父樣のお生れ年に當つたを恐れ多くも、上には御記憶あらせられて、貴き置物や人形を御下賜になつたと承るさへ君の御惠の有難さにむせぶ。武子樣のお居間にゆき、來賀狀を拜見するに、德川、鍋島、松平、蜂須賀、堀田樣など皆公侯伯子男の何れかの令嬢の許り、君とは重なる從姉なれど、私の處は……ね、「夕美樣、私の親類には獨が多いのですよ

あなたも、尙樣も私もひとりよ。」あゝ、尙樣尙樣は侯爵の姫君「さうね、あの尙樣とは私の從姉妹になりますけれど、御存じなのでせうかあちらで……。」あはき悲哀の浮ぶ胸よ。二人は無言で火箸を一本づゝもつて、炭火をいたづらしながら……。××會の新年會彈奏初を御心配なさる君。華やかな袖口から出して華奢な、そ



りのいゝ御指を見苦しい我手にのせてにつこり「ピアノ遊ばす方は御指の御運動が、よすぎて困りますね。」「まあいや、そんな事を!!。」と晴やかに仰有る美しき御顔だちの、あけて貴き御鼻すぢをみてつくづくよき姫君と思ふ。かくして他愛なげに談笑すると、いつ迄もくかうしてゐたいと思ふ。親鶴のよき翼の下にはぐく

まれてすら〳〵と育ちし雛鶴の尊さと、目出度さにたとへようか？。よき家柄の子爵家の一人の姫君として御いつくしみ厚き御親の御情に成長し年よりも賢き、性質の才媛の御名高きを、春まだ淺き十七の、香ぐはしき花の姿よ、輝く御おもて、何の煩ひがあらう苦しみがあらう、美しく溫き風は、胸に滿ち〳〵て、たゞすら〳〵と輝ける君が前途よ!!! 幸多くおはせ武樣！。あゝ、私も若い夢みる子であつたら、いつ迄もかうして何も思はぬ優しい子でゐたらうに、過去の傷手未來の苦痛。思ふまじとはすれど、暗雲に閉されて亂るゝ胸よ！。苦しい。だまつて柔かい御手にさわつた。まもなく叔父樣御歸邸。お座敷は早くも花電氣まばゆく叔父樣、叔母樣、武樣と私は、二間の卓を同うして今日宮中の新年宴會に叔父樣が召されし時の御膳部。金銀の水引もて飾られた燒鯛の尊くも美しさよ。松下の鶴の飾臺の上にのせられた。よき御料理の數々其の御もてなしにあづかつて、溫き談笑のうちにお箸をおさめる。電光をまともにうけて光輝を放つ銀瓶子よ。殿下に召されて叔父樣はまもなく東宮御所へ參殿遊ばす。對の絨氈敷かれた隣れる御書齋の大火鉢にあたりながら、華やかに語る。

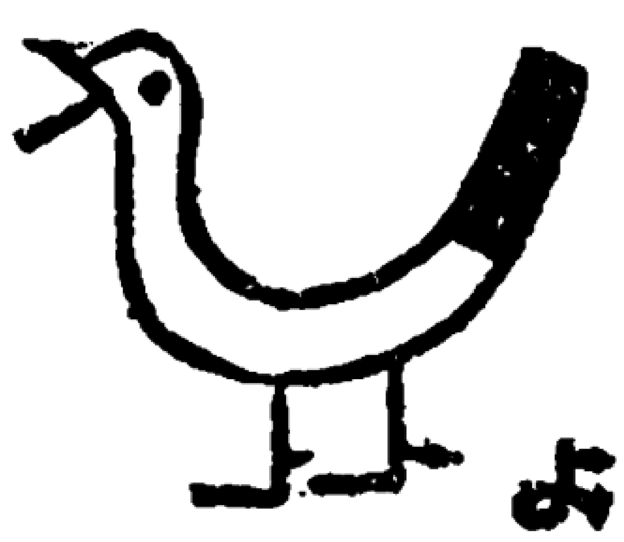
　麝香の香漂ふ御胸のあたり、白綸子の襟に重ねた紫矢絣のお召縮緬の袖の長さ、三ケ日に伺へば、振の長袖つゝましく、日毎に變る御召模樣の美しさもみしれるけれど。「まあいゝお帶！」と仰有つて黑地に金糸入の私の厚板をみつめて。「まあ、およし遊ばせよ、婆じみたのあなたこそ？」「私のはこんなのよ、」と心持色づいた御顏、友禪の御被布の下は燃えるやうな緋朱珍の花紅葉、矢の字に遊ばしてか、背のあたり高くして「まあ!!! お可愛い！。」紅地の帶捨てし身にはさすがに妬ましく、無意識のうちに云ふ。卓の上にうち散る札の數々、あゝ三年前までは、これこそお正月の命よと樂んだ百人一首だ。女中三人も交つて暫くは數を競ふ廣き邸の瑞氣あまねき表座敷、華やかな笑聲は口々にもれて曇れる胸も暫時は、此無邪氣な君にふれて、晴やかであつた。十時近くさす時計の針に驚き歸りがたなの思を强いて、送らるゝ車に辭せば、外は寒月高く人影もいと稀にして、都大路とは云へ山の手の夜は、電車の響の數少なくなりゆくとゝもに、音もなく更けゆく淋しさを思ふ。

　母上樣に御挨拶もせぬに、近き△△樣から留守中幾度かるたに、御呼び下さつたと伺つて鏡みる暇もなく

すぐゆく、若き賑やかな笑聲のもれて、すべるやうな御廊下を傳ひながら後れゆく姿、一齊に顔見らるゝが耻かしくもあつた、朗々たる吟聲!!! 電光あまねき渡り青春の氣溢れた室よ。強き香水の香ダイヤの輝は入り亂れて胸も躍るやうなり。勝を爭ふ心には、異性の手も覺えず、温きにふれてかつと心付きホッと波立つ少さき胸のうち!!。されど戀やすでに昔。春風、歡樂笑聲、たゞ此一室に滿つ。おゝ春の宵や永かれ。タイムよ止まれ!、暫し我が寂寥を忘れ、歡樂に酔ふ昔の少女にかへるまで。

世はうつくしきかゞやきに
つきものぼりぬ日もさしぬ
わがみひとつにかへりみて
くらきはなにのかげやらむ
うまれのよきがやるせなく
ものおもはるゝをんななかな





神戸の港

柴井やよ

△海岸

大らかに照りわたる日光の底にホテルの塔は高くつき立ち、商館の旗はびら〳〵と飜り、下には强き面もちした洋館がひし〳〵と立ち並んで、巨船小舟の數多浮いた神戸の港に相對してゐる。その扉は忙しげに開閉し、若い人は靴音正しく歩んで行く。

人足が倉庫にと運び行く箱は何なのか澁いやうな引きしまつた匂ひがする。酸いやうな匂ひもする。海岸に築いた漆喰の堤防のうちら、長く續く松林には、髮黒き若者がやるせなき苦痛の瞳をあげて、あたりを見廻しつゝ何物をか求めんとするやうに、歩いてみたり止まつてみたりしてゐた。

艀のつく所の側に一團になつて談笑しつゝゐる車夫等にせめて名殘りの一瞥をやり乍ら、足にも力なく神戸の地より吐き出される落人や、野心滿々、肩聳やかしよそ國にゆく人の强き微笑や、好奇の眼きら〳〵と上陸する人や、それらの人々の雜多な心持ちにも、些の同情もなく、羨望もなく、平氣な顏してくだらない話を大聲に語りつゞける車夫等の、擂りへつた感傷のあとのあはれさよ。そばには屋臺店に關東だきがぶつぶつと煮えてゐる、湯氣の上に鼻の赤い老人の顏がぼんやり見えた。

△港の後の山

夢野には幽草の花咲いて初秋はどんなに可憐な匂ひがあらう。と、うねつた路を行くと、さゝやかな橋があつて夢の橋と云ふ。湊川を埋められてその河水はちよろちよろとすゝり泣くやうに白砂の上を流れて隧道に入つてゆく。堤には細い草が在りました。ぶざまな間取をした燻つた家の斷續した道に添うて、時々、薔薇の目さめるやうな畑があり、菊畑に淸かな蕾が立ち、くすんだ姿のアスパラガスの茂みの隣には、朽ちかゝつた木柵の内に、白斑の牛が草を食むでもなく弄むでもなく頭をさげてゐる。

路は爪先上りになつて人家が稍密になると、色の黒

い子供たちが面白さうに飛びまはつてゐ、角には種々の商ひを兼業した萬づやに、古びた品が並べてあつた。店前に鉢巻した子守がぽつんとしてゐる。

夢野村をつきぬけやうとする所、松五六本の社があつて其後から緑の山の並びがはじまつて、右の方に續いて見える。湊山はどれなのか。八坂の塔は木の間に赤寂びて見えた。

登りゆく山道の陰には小沼が多かつた。重苦しい水の色が古びて、曇つた水面に朽ちかゝつた芝が寫り、水際には痩せた蘆がまばらに生えて居た。迫るやうな畑の土の香が遠のいて、誘ふやうな木の匂ひが微かにたゞよふて來る。

土をつむべく空車ひいた馬がせい／＼馳け上れば、その音が全山に響き渡つて、われもかうにとまつてた赤蜻蛉は驚いて飛んでしまつた、木や草や深くなり行けば視界には、陰になつた草木の暗緑と踏み行く路の白けた赤土の色のみである。音の世界は更に單調で枝と枝と、葉と葉と摺れあひ搦み合ふ、低調な然しがさつな聲のみである。

銀杏返しの娘とおばこのお婆さんと並んではあく／＼上つてゆく、二人とも裾をからげてゐた。刈つた草をうづ高く載せた荷車の置かれた處を二曲りするともう嶺きだ。

「ああ辛度」

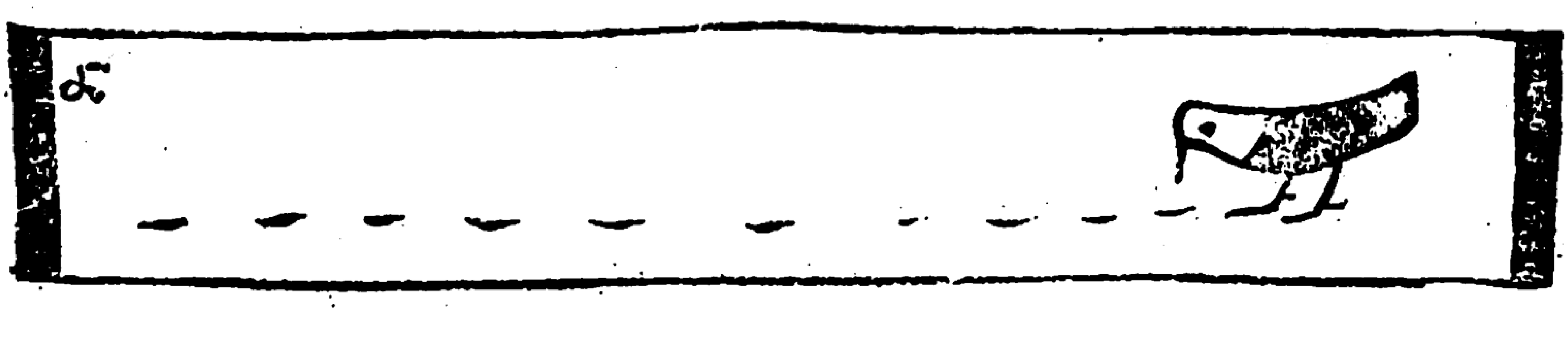
お婆さんは風呂敷を草の上に廣げて足をなげ出し、甘さうに煙草を吸ひはじめた。木のかげをくゞつて來た今迄から急にひらけた大きな天には、華やかな碧が空いつぱいに漲つて霧のとけたやうな爽やかさがあつた、その空氣を忙しく吸ひながら、娘は汗ばんだ顔を手拭でほとほとあふいでゐた、ふと足元からそぎ取つたやうな崖をみるとぞつとした。頭の上に足のせて人ならば十二三人、重なろう——麓までの間には小さな灌木や草など生え滿ちて、その先も同じ色である。緑の色のつきた所に小さな村があり、銀色の川が流れ、黒い小さな箱がずるやうなのは、須磨行きの電車であつた。

東南には、頂きに松の列ある高取山を左の端にして高いのや低いのや、濃い色のや、薄いのや、まるで人だかりの頭の重なりをみるやうに迫つたのが、娘には可笑しかつた。突然、笹原から青大將がぬる／＼と、横ぎつたので、はつと立ちすくみ泣きたいやうな顔をした。お婆さんの煙草の煙が、白く動いた。

川柳婦人界

張物をいけどりにする俄か雨
針仕事手の輕くなるはとゝぎす
奥様と取上婆が云ひはじめ
持ちなさい女は後にふけるもの
衣類までまめで居るかと母の文
縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり
柏餅妹の乳母は手傳はず
振袖は言ひそこなひの蓋になり
穴ぐらで物いふ様な綿帽子
取り揚げ婆屏風を出ると取りまかれ
梓弓下女の泪は土間へ落ち
こはさうに餡の升を持つ女
火吹竹持つて薪屋を叱りつけ
四五人の袖とは見えぬ錘の袖
嬉しい日母は澤でかしこまり
張りものに嫁は結ばぬ頰かぶり
子を抱けば男にものが云ひやすし
寢て居ても團扇の動く亂心
髮を結ふ時に女は目がすはり
髮結の四五あしならす下駄の音
乳母が手へ渡ると羽子も二つ三つ
朋輩が亭主見るとてよりたがり
好い娘母も惚れ手の數に入り
見ぬ顔をすれどちよつ〳〵と針が止
石山につくねんとした美しさ
氣違ひになつたで嫁の理が聞え
耳のわきかき〳〵お七側へ寄り
下女のはれ何ぞと云ふと黃八丈
中直り鏡を見るは女なり
雛店で花見に行かぬはずになり
湯氣のたつ形ちで鏡のふたをとり
大こくにや嫌た〳〵とさくら姫
座輿だと云つても娘泣きやまず
美しい貌で楊貴妃豚を喰ひ
新世帯强めしにできかゆにでき
岡崎を子の引くほどは母もひき
こゝをよく見やと母親三はり縫ひ
縞がらを見て反のまゝ肩へ當て
かんざしはかゆい所へ直にさし
詮議して見れば玉藻は無籍なり
機織れば軒には蜘の絲仕事
山出しの下女は眞綿とつかみ合ひ
いく久しうが花嫁の口一ぱい
いそがしさ見かねて嫁が縫かき
母のしつけは縫物でよくわかり
ふり袖が立つと蠟燭ひいらひら
美しさ歌は鳶にたとへられ
仕合せは嫁だと石屋朱をつぶし
師の影を踏んで覺えるをどりの手
洗ひ髮漬菜の様にしぼりあげ

臺町生抄



見よ◎月經なき女子◎病める婦人

本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

有効確證



其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて専用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢三劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◎肥滿病新藥（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◎ぶと〳〵ふとり◎血太り◎肉太り◎酒太り◎水太り◎顏赤◎にきび◎ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は白となり誓て美顏美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



藥一劑一圓五十錢三劑四圓卅錢送料
價二劑二圓九十錢四劑六圓半 十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七七番 小宮愛生堂

◎美膚消毒ニコ〳〵液

責任ある藥劑の提供

ニコ〳〵液は左の難症に最も特効を奏す

(A) にきび 其他吹出ものゝ一切に偉効を奏し且つ慢性頑固の症には特に顯著

(B) 赤はな 赤顏……今迄特効藥なかりしも本劑によりて容易に全治すべし

(C) たむし インキン白雲の如き難治の疾病も數回の塗布にて迅速に根治す

本劑の奏効確實なるは専門家の立證的賞讃に依りて判明せん

關谷學士 鈴木ドクトル 酒井愛知學士

益々好評なるニコ〳〵エキは大學病院に於て土肥博士指導中野學士が數多の患者に實驗せられ其効力の卓越せる新藥（獨逸ドクトル、フベ先生發見欧米及日本専門大家の評論を抄録し能書に添付）を基とし之に専門病院の秘密藥を配合調製院主自ら使用奏効後數年も經るも再發せざるを確め官許を得て今回發賣す是非御使用の上何分の御高評を乞ふ

藥價並製金五十錢特別製金壹圓印紙代用貳割増送料市内四錢市外八錢樺滿韓金三十錢

◎縮れ毛の婦人に告ぐ 本院主

多年研讃の頃日に至りて漸く特効を奏する外用藥を得たるを以て御困の方に説明書を無料にて送呈す返信料三錢封入の事

發賣元 東京本郷駒込神明町三八一 東洋美容院

若き婦人の誇

女子文壇増刊 好評

新文章

紙數二百頁美裝
特價拾錢
送料壹錢五厘

◎一呼吸

△生の斷片
△覺めし際の淋しみ
△自ら警める記
△學生の都會
△初夏の人々
△寢息

◎七色の虹

○男子の手紙に迷ふ
○不縹緻な私の哀愁
○父と娘が別れの涙
○尼になつた若い女の記
○楊子江畔の新婚生活
○落日のかなた
○私の心は破れてゐる
○更衣室

◎轉宅（小説）

◎淋しい道（小説）

◎溫泉宿（小説）

△梅雨日記
△姉の家
△心の離散
△黑き洋傘
△別れてゐる間

○呪ふべき時代
○年のあぢはひ
○生立のつらさ
○解けし謎
○五月の水邊
○繪筆

◎課題

△顏△髮△浴場
△山△海△劇場

◎和歌、俳句

執筆婦人

服部貞子　早川花子　長曾我部菊子　小川夢の女　小笠原ゆり子　太田喜志子　若杉はま子　河野楨子　加藤筆子　高橋りう子　田中港い女　內藤千代子　野村きやう子　山田邦枝子　八代やゑ子　松田梅子　松田妙子　前島櫻梨子　松村らく子　月蜀子　江森美子　佐藤滿壽子　佐分雛影　木村あやの　夕ほし　三宅やす子　三島よし子　平塚白百合　ひなげし　鈴木春子

◎發行所　東京市京橋區大鋸町十二番地　女子文壇社　（振替口座第七壹貳九番）　賣捌全國書店◎

◎興味と實益に富みたる日本一の理想的少女教育雜誌◎

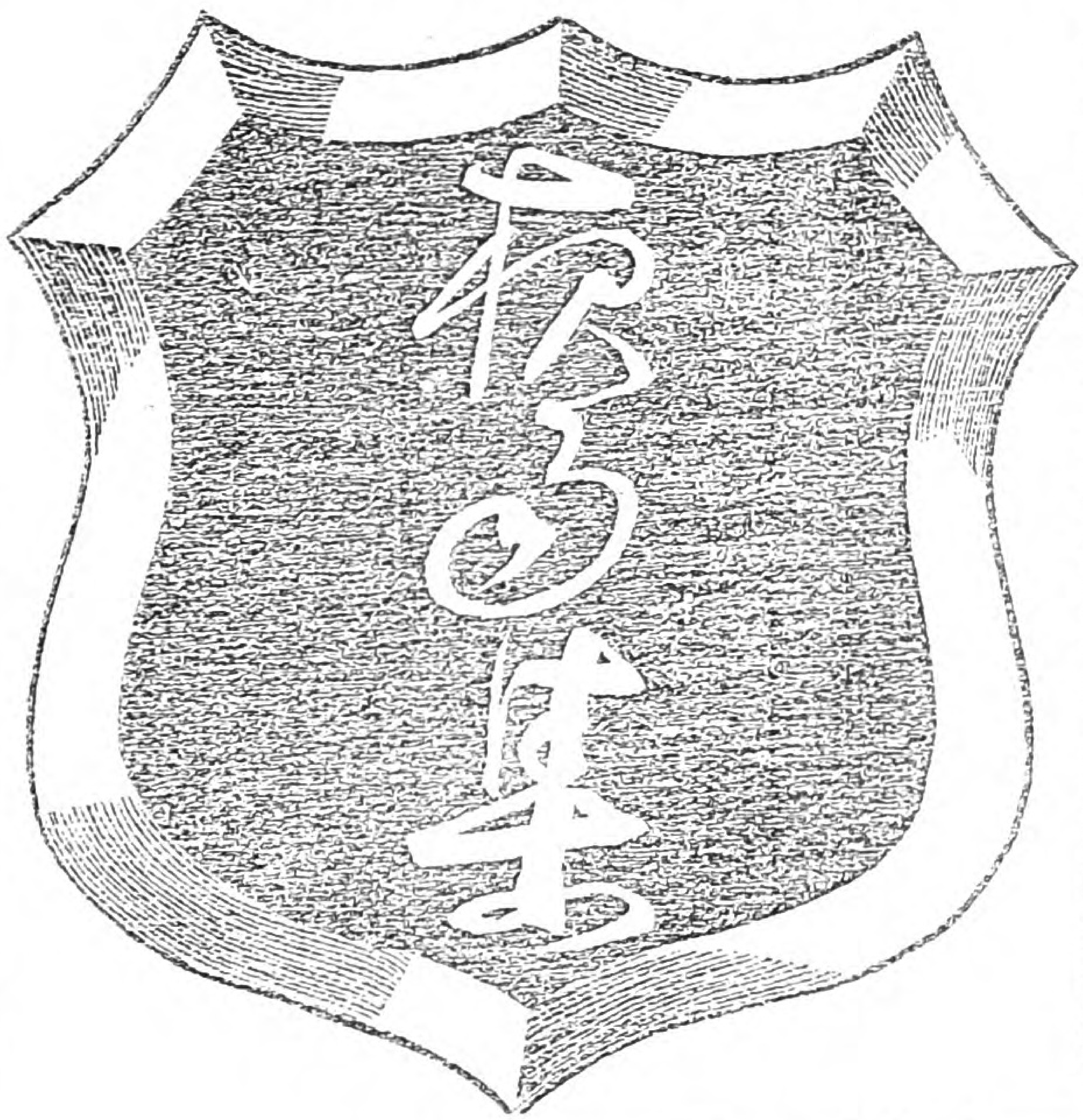
面白い三月號

少女

第四卷 第參號
（通卷第參拾壹號）

横瀬夜雨先生新著　大好評

（四十五年一月新版）



全一冊上製

四六判三百三十頁
舶來紐紙印刷鮮明
色クロス天金美裝

定價金八拾錢——送料金六錢

▼國民新聞（二月）

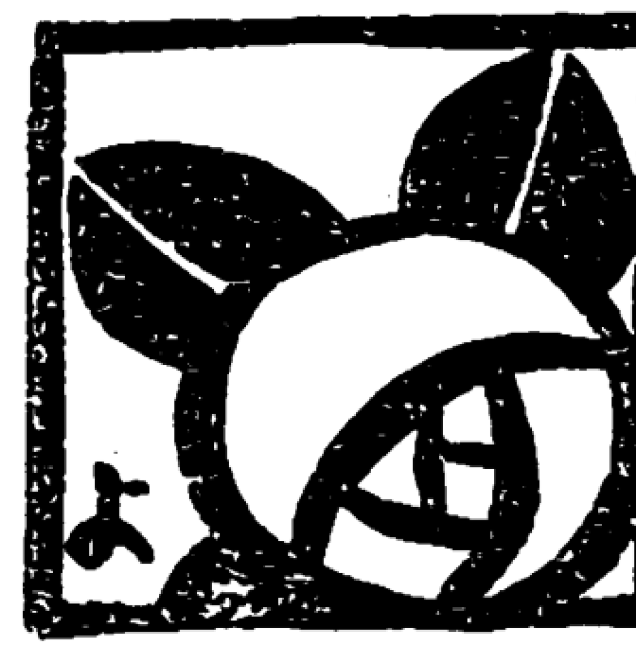
評して曰く。　夜雨は天成の詩人也自己を飽までも其懊悩の出立點とする處は夜雨の先天的境遇已むを得ざるに出づる處夫だけ狹けれど深し陰欝にて且つ沈痛也殊に此集には戀に對する執著の影に人間としての詩人の現世に對する苦悶を描いて多恨胸を搾つて痛恨せしむ文藻の豊麗と相俟つて彼の詩に醉ふものに無限の感銘を與ふ新調と否とは早や問題に非らず

▼萬朝報（二月）

評して曰く。　著者は今筑波山麓に不斷の坐禪にあらざるべからざる薄倖の青年詩人にして坐禪の夢と想との凝つて成れるもの卽ち此集なり詩、小品、紀行、日記、隨筆、手紙等集むる所凡て十九篇、新しいロマンチツクな幻影に獨特の筆致と相集つて自ら一種の色彩をなし紀行日記最も見るべし裝釘又瀟洒

出版元　東京市京橋區大鋸町　振替口座東京壹七貳九番　女子文壇社

特約販賣○東京堂、北隆館、東海堂、至誠堂、上田屋、良明堂○大阪盛文館



年始

たへ子

去年の冬嫁いたお金と、半年程後れてその秋に嫁いた妹のお正とが新年早々新夫婦で里の家の年始に出かけてきた。それは前から知れてゐたのでその日には他の店へ勤めに入つてる長兄の駒吉も次兄の由次も歸宅てきて姉等夫婦の來るのを待ちうけてゐた。遠い新宿の方から來るお金の方が反つて早かつた。―「お正ちやんはまだ？」お金は入ると突如誰にともなしに斯うきいた。「お正は姑さんもちの嫁さんだもの、お前みたいなわけにはいきませんよ。」柄の少さいお袋は後へまはつてお金の肩からコートをぬがせながらつぶやく樣な聲で斯う云つた。お金は默つてきいてゐたがそこだけは自分の方が幸かしらと心の中で思つて見た。―

「サア宮田さんどうぞまあ此方らへ。」お袋は先へ立つて奥の座敷へ這入つて行つた。

「宮田さん、サア此方へ坐つて下さい。令夫人も呆然してちやいけないぢやないか。」駒吉はハキ〱した愛想の好い顔付で上手にもてなした。

お金も妙に改たまつた心持で、設けられた、席へ良人と並んで坐り込んだ。

二幅對の掛物をかけた床の間の飾品や、高い天井から幅の廣い唐紙、丸い桐胴の客火鉢まで何となく、何にもない新世帶に馴れたお金の眼には重々しく立派に思はれて、深い馴染の我家ながら今さらの樣に眺められた。日の光る縁側の硝子戸から晴れ渡る空の色も長閑に眺められた。

「お幸さん、お祝儀だから、義兄さんにもお屠蘇一つね。」お袋に云はれて妹のお幸はこれもお金にはお馴染の高蒔繪のお銚子を持つて宮田の前へ坐つた。―

「義兄さんにあカラい方でなくちあー」向合つて坐つてる駒吉が云つた。「え〻今支度してますの」お幸はお銚子を下へおいて長兄の顔を見た、薄色の重ねに金茶の光つた帶を立矢字に結んでゐた。厚化粧でませた格好の束髪に結つてゐた。丈が馬鹿にのびてすべての態度が少し見ぬ間に恐しく大人ぶつて了つたものだと思ひ乍らお金は妹の樣子を眺めてゐた。

「お幸さんは十八でしたね。なか〱格好がよくつて

ゐらつしやるよ。宮田は無遠慮にお幸の身體を眺めた
お幸は耻かしい樣な顏をして俯むいて了つた。「形ばかり大きくても、あなた、から赤ん坊で仕方がございません。」お袋は傍から引とる樣にして斯う云つた。――「イヤどうして　立派なお嫁さんですよ。お幸さん今日は是非お得意をきかして頂きたいもんですね、毎度姉さんからお噂をきいて居ります。」……「イヤ宮田さん、此の連中のお得意はお噂位の處が無事かもしれませんよ。本氣でやられた日には事だからな。」斯麼事を云つて笑ふ駒吉の傍から由次も時々飄逸な事を云つて一座を笑はせる。由次も駒吉も氣の利いた店員風の角帶姿だつた。お金の胸には二三年前までの、兄弟皆學生だつた頃の、賑やかだつた、無邪氣だつた長い間の生活を夢の樣に思ひおこさずには居られなかつた。年が餘り違ふのでいつも仲間はづれにしてた其の妹の時代になつて了つたんだもの、斯う思つてお金はお幸の姿をしげ〴〵眺めてみた。「お幸さんお稽古は進んだでせうね、今何に？」ときいた。「今、三味線は床の月、唄は二人椀久。むづかしくつていやんなつて了うの。」と少し甘つたれた樣な聲をした。

「好いやね、末子は何にしろ德だよ、何でもみつちりと仕込んで貰へて。」お金は學校にばかり氣を入れて、しみ〴〵身にしみて稽古事も出來ずに了つた自分の娘時代を今更の樣に淋しい氣持がした。お幸は反抗する樣に「あらちつとも德ぢやなくつてよ。」そう云ひ乍らもどこか得意らしい顏色なのを、お金はあれで一番出世する氣で居るんだらう、それにお母さんもあの娘計しは大事にかけて容易ぢやあ手放しつこはないんだから、だがちつとも若々しい情のみえぬ理智ばかり勝た充らぬ娘だ、氣が利かなくともしまりがなくとも、お正ちやんの方が餘程人好きのする性分だつた、お金は獨りでこんな事を思つてゐた。大分酒がまはつて座が亂れた。お幸の三味線はなか〳〵きかされなかつたが駒吉の義太夫や、宮田の柄にない獨々逸のきれいな聲なんぞがさかんにきこえてきた。

「酒をのむ人眞から可愛い、醉ふてくだまきあなほ可愛いてなあ……君眞理ぢやないか。」宮田は場所を忘れて了つた樣に平氣でこんな事を云つた。そんな時には駒吉も負けてゐなかつた。

「世の中にたで喰ふ蟲がない故に私しあ今でも獨り者！」……二人は浮れ上つてる樣な聲でこんな唄をうたつた。酒を飮まぬ由次は音なしく二人の顏を眺めて笑

つてゐた。お金は座を立つて茶の間の方へ行つたり二階へ上つたり落つかぬ心でお正の來るのを待つてゐた餘程すぎてからお正夫婦の俥が門の中へ這入つたお金は玄關へ走つて行つた。

「ずゐ分遲かつたでせうお客がきたもんだから。」お正はセカ〳〵とかける樣に座敷へ入つてきた。

「ヤアー芝田さん、おそいねエ。待ちくたびれたよ。」赤い顏した宮田が醉た聲で斯う云つた。

「どうも大變におそくなつて……」芝田は唐紙の傍へ坐つて挨拶しかけた「アー芝田さんそこぢやいけない、まアこゝへ坐つて下さい、きまりがつかないから、」お袋と駒吉が手をとる樣にして宮田の隣りへ坐らせた。紋付羽織の宮田と並んで芝田はブロックコートの窮屈な姿で坐つた



ザッと挨拶がすむとお正は待ちかねた樣に自分の坐を立てお金の傍へくつついて坐つた。桐胴の手あぶりへ指輪の光る小さい手を突込む樣にして、「私早くきたかつたんだけどお客があつたり、髮結が來なかつたりして。」と結ひたての髮へ手をやつた。「丸髷が大變によく似合ふよもつと眞赤な手柄おかけなさいな。」——「オヤこれ姉さんのとお揃ひだつてね、私。だつて何だか赤つて色イヤなの、ならば水淺黃でもかけたい位よ。生意氣なのね。」お正は自分で云つて笑顔した。「正さん、今夜とまるんでせう。」「え、とまるつもりよ。姉さん今

夜寢ないで談しませうね、私澤山談したい事があるんだわ。」「あゝ屹度ね。」お金はお正の手を握りしめた。「あゝそう〳〵正ちやんに好いもの見せて上げ樣か。一寸きてごらん。」お金は先へ立つて自分が居間の方へ立つて行つた。お正も急いでついて行つた。洋だんすの上の亂箱に重ねてある今年の年賀狀をもち出してお金に仔細らしく坐つた。「此の中にね、思ひがけない人からの年始狀が、私たちの宛名できてるの、誰だろう？」お金はお正の不審想な顏を眺めて面白想に笑つてみせた。片手に名刺の入つてる小さい袋を持つてゐた——「サア……と、小林さんの利さんぢやないかしら？」ふつとそう云つて姊の顏を眺めた。「オヤ、こりあふしぎ、よく當つたね、どうして解つたらう。」お金は意外な顏付でその名刺を出しながら妹の顏をみた。「あら、ぢや、矢張り利さんなの、まア、私ふつとそうかしらと思つて云つてみたの、でもまさか當つちあゐまいと思つてたわ。でもよくよこしてね。」お正も意外な顏色で、うけ取つた名刺をしげ〳〵と眺めてゐた。「正ちやんの事を想つてるからさ。まだ嫁いた事を知らないんだらう、手紙おやりよ、手紙ね！」「矢張り濱町だわね、私手紙やろう。本當に手紙書くわ、何つて云ふだらう。逢つてみたいなあ。」お正は自分の身分を忘れて了つた樣に平氣でそんな事思つてゐたお金も何となく逢してみたい！、そうして今になると二人がどんなまねをするか、遠くから傍觀てゐたい樣な、そんな物好きらしい心持もしてゐた。——二人は暫くこゝで勝手な談をつゞけてゐた。座敷からは本調子の三味線の音が流れる樣にきこえてきた。

お銚子を運ぶ急がしさうな足音も入亂れてきこえてゐた。——「宮田さんの夫人も芝田さんの夫人も旦那樣うつちやり放しで何にしてるんだな。暢氣で困るぢやないか。」由次が氣にして呼びにきた。お金はそんな事無頓着に自分の氣儘な事を喋つてゐた。「小兄さん今年のお正月は家でも充らないわね、何かつて云ふと花形役者だつたお正さんも他家の人になつて了つたし兄さんたちも店へ入つて了つたし、むつつりやのお幸さん獨りぢや仕樣がないわね。」としみ〴〵感じた樣に斯う云ふ。お金の口についてお正も「全くね。女はもうお嫁にゆくと其れつきりですもの、泣きたくなつて了ふわ。」と、それは昔のまゝの我儘な口調で斯う云つた。由次は卷煙草咬へて懷手したまゝだらしのない樣子をして勝手な事を喋り合つてる妹たち二人の姿を默

つて少し笑つた目付で眺めてゐた、だが少したつてお袋の忙しげな聲に呼ばれて由次が一番先に座を立つた。

「あゝ然う充らない」とお金は投出した樣に云つてきれいな妹の顏を眺めたお正は先刻の名刺を懷へ突込んで「仕方がない、晩にゆつくりと談しませう。」とお金の袖を引張る樣にして先へ立つた。座敷からは大薩摩を彈く三味線の絲が冴反つてひゞいてきた。

* * * *

うやむや物語

宇田すが子

今も昔も、人にはみな〳〵、臀部と申すものありけり女のもてるは、男の子のよりも、たぶ〳〵とあぶらづきて、殊さら目出度きものなりけり。

又の名をおいゝ、しりとも云ひ、なほやさしきをのぞまば、いゝ、おいどとなん申しはべる。

女ありけり、こえふとりたるからだながら、臀部いみじうすぐれて、大なりけり。

されば、おのづとねり出す樣も、あひるの如く秀逸なりけり。

蒲柳と申す女ありけり、やなぎの如くかすかなる風にたえざらんとする、おのがすがたを、ほこりて、ふとれる女を、なにかとわる口してけり。

ある時、ふとれる女にむかひ、

衛生の、美人と云ふは、君ならん、
胡蝶のまひを、一目みたけれ

と、見さげたるさまに、云ひて、一人笑みてけり。

ふとれる女、心にはまぬことゝは思ひながらも、ぢつとこらへて、何氣なく、すまし居たりけり。

後年、蒲柳、產をしてけるが、初產なれば、ことさら、苦しく、二日ふたよさ、床にて、うめきあへぎけり、つひに、かの女にあはれみを乞ひけり、かの女蒲柳のまくら許に至り、

傾世の、美人臀部の大ならば
産土のたびのやすからましを、

と云ひければ、蒲柳さきの無れいをはぢたりとぞ、かゝることは、うきたることなれど、世に美をほこる女ほど、見つともわるきものなかりけり。

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉

○愛讀者諸子へ従來私と直接手紙の交換をされ又現にされつゝある御方々は勿論この化粧問答欄で間接ながら質疑解答の關係ある御方々は是非御寫し繪の一葉を私宛にて文壇社なり拙宅なりに御惠送下さいませんか、御望みによつては私のも御返禮に差上げませう、而して今日より文壇の口繪に一頁御兩名乃至御三名を限り掲載することに決りました、で實は其御寫し繪の御本人の御住所や御姓名をも記すのが本意ですけれど、御當人の思召で御名だけなら兎も角、住所や姓名まで出されては困るとあれば無論御希望通りに致しますから、何卒一面には本誌のため且つ私のため一葉だけ御惠與を御願申上げます、それで今月の本誌には先以て自分等の寫眞を出すことゝなりましたが妻のは最近のが間に合ひませんために十三年前のを、うめ草に致しました。

問　博文館からは新式化粧法、實業之日本社からは合せ鏡を御出しになつてあるのに、何故わが女子文壇社からは同種の著書を御出し下さらんのでせうね、合せ鏡は先日注文してやつたばかりでまだ入手致しませんが、新式化粧法は、所々に(失禮の申分かは存じませんけれど)理論が交へられてありますので、私共のやうな學問の淺い者にはチヨツと解りにくい點がありますから、今度はこの化粧問答で御答下さるやうな御心持ちで極平易に直ぐ應用の出來るお化粧の本を何卒御出し願ひ度う存じます(京浴、白百合)

答　これは恐入りました、何も別に理由があつて文壇社から出させないのではありません博文館と實業之日本社とから賴んで呉れと依賴を受けたから書いたので、當社からは何の注文もないから出さないまでのことです、所が今度御許樣外五六名の方より御同樣の要求が參りましたので、社長から今までの著書と全然趣を異にした極めて實際的の化粧法を書けとの特命を蒙り、いよ〳〵其後の新研究と新實驗とを吐出すことに決めましたから、近き將來に於いて必ず皆樣方の玉の御手に觸れさして頂く時が來るであらうと存じます、猶これと同樣の御質問を下すつた花曆樣外五名の御方には これを以て御答に代へます。

問　私は先生とは五丁と距たぬ御近所に住つて居りますので、成ることなら御宅に伺つて親しく御教を承りたいのですが、御差支はないせせうか(牛込、夢見草)

答　月雪にふぎぞ煩ふあばら家ですが、それさへ御厭いなくば何卒御出下さい、午前中なら大抵毎日宅に居ります。

問　私は十八年この方、秋から春にかけて毎年手足が凍傷で困つて居ります、よい療法を(群馬、ちよ子)

答　アブラ性でしたらエムピロフ、オルム三匁、クロ、ホルム及び安息香酸丁幾各二十五匁を合せたもの、若しアレ性であつたらカンプル三匁、ラノハン及び黄色ワゼリン各十五匁、純鹽酸二匁を煉合せて朝夕二回御つけなさい。

問　私は數年前から頭髮が毛根と共に脱けまして昨年の夏頃から一層はげしく或部分の如きは禿となりました、一たん禿となつた以上は再生の見込はないものと存じ諦らめては居りますが、せめては脱落だけでも防止したいと思ひますので、然るべき適劑を御教願ひたうございます(神戸、梅本)

答　無論その原因がなくてかなはぬことゝ存じます、その原因についてはよく御尋ねをせぬことには分りませんが、禿だからとて絕對に失望なさるには及びません、兎も角その禿げた所へ、花肉荳蔲油をブランデーに交ぜた液をすり込んで御覽なさい、其處が赤くなるやうでしたら再生にタシカです、脱毛を防止するにも其原因を見極めないではシカとしたことは申されませんが、タンノプロミン二匁五分、チゲノール三匁をアルコール百匁に混ぜて頭皮に御つけなさつたら大抵止まるだらうと存じます。

問　(一)、白粉をつけますと艷が消えて見つ

ともなくて困りますが、つけた上を皮か何かでこすりましたらよいでせうか、(二)御社で御わけ下さる姉妹剤を使ひまして、それから何おしろいをつけたら宜しうございませうか、(三)藤波先生の御住所を御教へ下さいまし、(四)五年程前から餘り澤山でもありませんが顔にオデキが發生致しまして殊に秋になりますと一入多くなります、或醫者は成分の强いためだと申し、他の一人は皮膚の弱いためだと申しますので、隨分と治療に手を盡しましたが、今以てサツパリ致しません、いろ〳〵の藥をつけましたゝめに白かつた顔が何となく薄ぎたなくなりました若しや今度御社から御わけ下さる姉妹剤をつけましたら直りますでせうか、それとも外によいお藥でもございますなら、何卒御教へ下さいまし(桐生、淋しき女)

答　(一)御尋ねの姉妹剤を御つけになつた上にお化粧なされば白さと艶が出ます皮などでこすつては白粉が剝げて了ひませう、但し小羊のナメシ皮で其上を叩けば一入の艶をまさせます。(二)何おしろいでも別に構いませんが、キヤロル粉白粉が殊に適當です。(三)牛込赤城下町六二です。(四)シカとしたことはよく御體質や其他につき御伺した上でないと申上げられませんが、大抵なら御察しの通り姉妹剤が適當の良剤と存じます、一應御ためしなさつて御覧なさい。

問　三十五歳の女、顔に一錢銅貨大の白ナマズが生じましたので、種々の藥をつけましても一向に効目なく、醫師に燒いて貰ひましたが更に取れません、何かよい法はございますまいか(和歌山、静世)

答　どんな藥を今まで御つけになつたか知りませんけれど、若し藥物療法で効を奏し得ぬ程頑固な質のものとすれば、パシキス氏の發明した入墨法を應用するより仕方がなからうと存じます、燒いて白ナマズを取るといふ法は、拙者寡聞にして今まで耳にしたことがありません、その入墨法と申すは、硫酸バリツトと朱と赭石とグリセリンとを合せて皿に入れ、其程度は周圍の皮膚の色よりも稍や白く見せるやうに混ぜてそれをアルコールランプで泡の發生するまであたゝめ、ナマズの上を針かバラのトゲで細かに刺し、その上に右の混和剤を小さいヘラでぬりつけるのです。

問　(一)白色剤として使用する過酸化水素水の使用法を御教へ下さい、(二)コールドクリーム、キセロールクリーム、オードトワレット等の製法を御教示願ひます、(三)入墨はどうしたら取れませうか(京都、嵯峨女)

答　(一)別に六ケしいことはありません、只眉や生際につかぬやう顔にすり込めばよいのです、若し毛につけますと毛色まで脱白させるからです。(二)コールドクリームもキセロールクリームも油を水に混和させるので、それには火の加減と油に水をつぎ加へる加減とが大變六ケしいので、現に今日までもこれが處方を澤山の御方々に御示し申しましたが、何れも製法が不成績に終つたと云ふので私に其調劑方を依賴して寄越された程ですから、重ねて茲に製法を申上げた所で御用には立ちますまい、又オードトイレツトにも色々の製法がありますけれど、これは誰にも容易に出來ますから、其一處方を御教へ致しませう、醋酸とカンプル丁幾とベンヅイン丁幾を各六匁づつ合せて、それを百匁のアルコールに混ぜるのです、(三)入墨した部分が廣くありましたら電氣分解法を應用せねばなりませんが廣くなかつたら其部分に濃厚な丹寧酸水溶液を塗つて其上を針で刺し、硝酸銀棒で强くこするのです。

問　(一)切髮の多いのはどうしたら直りませうか、(二)過酸化水素水と塗身香と何れがよく効くでせうか、(三)私は何うしても牛肉を食べることが出來ませんが、外に痩せる法はないでせうか(岡山、はる子)

答　(一)頭皮にタンノブロミン一匁、ペーリユーバルサム二匁を豚脂三十匁に混和したものをすり込み髮にはオルモンド油と椿油とを等分に合せたものを御つけなさい、(二)その人の體質によつて何れとも一定する譯には參りません、(三)では致方がありませんから沃度丁幾〇、三を三號の水に溶解さして一日三回に三月程のみつゞけて御覧なさい、併し沃度丁幾は劇藥ですから、餘程の御注意を要すべく、私は深く御すゝめは致しません。

問　(一)先生の御發明になつた(クセ毛)を直すといふ美髮劑は全體如何なる毛を直すのですか、(二)はえ毛を抜く藥はございますまいかありましたら五十錢位の處を一ビン代金引替便で至急御送り願ひます(北見、松田)

答　(一)讀んで字の如く、クセのある毛を素直な髮に直すのです、(二)硫化ナトリユーム三匁、苛性加里、澱粉各一匁を水に混和し、稍

や薄目の糜粥状に溶き充分に塗布し三十分程したら、それを洗ひ落すのです、すると綺麗に脱毛致します、代金引替便などで御送りすることだけは御氣の毒ですが御斷り致します。

問　(一)私は海邊に住んで居りますから汐風のために自然色が黒くなるやうに思はれますこれを防ぐ方法はござゐますまいか、(二)ある本に煉おしろいと水おしろいとを使ひますれば長い間お化粧がくづれないと出て居ましたが本當でせうか、(三)鼻頭から脂肪が澤山に出ますがどうしたら防げるでせうか(海邊の女)

答　(一)今度文壇社から御わけすることになつた姉妹劑を終始御つけになれば只にその害を防ぎ得るのみならず、汐風のため黒くなつた皮膚も綺麗に白くなります、(二)事實そんな事のあるべき筈はありません、恐らくは化粧術の何たるを御存じない齊東野人の一時の戯言でせう、(三)ナフトール五分、カムプル五匁、アルコール百匁の溶液を御つけなさい。

問　御社から私共に御わけ下さる洗粉は成程他の〇〇洗粉の類と選を異にして、正しく肌膚がスベ〳〵となり髮の毛などもスル〳〵となりますが、これを使ひます時に、ザラ〳〵して皮膚をいためはせぬかと思はるゝ位です、と申して一度使つて了ひますと、どうしても外の洗粉は使ふ氣になられないので、この上の欲望には、あのザラ〳〵するのを何とかして取つて頂く譯には參りませんものでせうか(阿波どみ子)

答　何とも申譯がありません、實は原料を取そろへると大層ひまどり、皆樣方からは社の方に、いつ迄るといふて矢の督促、急いで調べましたので粉末が大分粗々しく出來上りましたので再び精製して御送りしようと思つたのでしたけれど社としてはいつまでも皆樣に御待たせして置くわけに行かぬといふ事情から、止むを得ずその儘御送りすると共に右の事情を葉書で御わび旁々御斷りを申上げた筈でしたが貴女には其葉書が着きませんでしたか、今度からのは無論ザラ〳〵するやうな事は決してありませんから御心配なく御使ひ下さい。

問　密陀僧を人乳で煉つてつけるとニキビが直るとの御敎を受けましたが、その人乳を得るに至つて困りますので、若し成ることなら、別に手數のかゝらないもので、よい療法はございませんものでせうか(長崎、とよ子)

答　本誌とは姉弟の關係ある秀才文壇の發行所文光堂へ宛て、諸方の讀者諸子から、女子文壇の藤波に依賴してニキビの良劑を調らへて貰つて呉れと云ひ越さるゝこと屢々なので、船日堂主がわざ〳〵私宅に參られ是非ニキビ劑をわが秀才文壇の愛讀者のために調製して欲しいとの、たつての御話でありましたので今月から同堂より本社の例にならつて希望の御方々に御わけすることになりましたから、それを求めて御つけ下さつたら一番御便利のことゝ存じます。

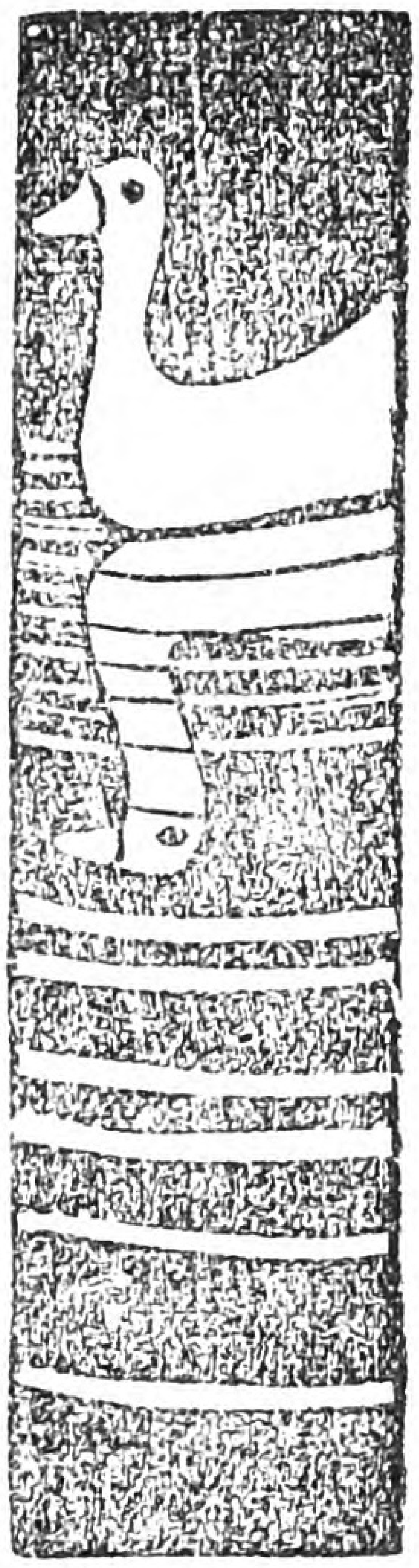
問　私の母はまだ三十五歳といふ年の若さでありますのに、どうした譯やら、左の片鬢に白髮が發生しまして大層に氣にされて居りますが、これを染めますよい藥を御敎示下さいまし(大阪、はま子)

答　無害なる染毛劑はどうして調へるかといふことは實に世界的宿題の一つで日本は申すに及ばず歐米に於いても劉下毛染藥として使用されて居るものは、フエニーレンヂアミンでなければ沒食子酸、若くは硝酸銀劑で、何れも中毒症狀を呈するもの左なくば煆製石灰劑の皮膚病を招致する恐れのあるもの、類のみですこの間に只一つ比較的害の少ないのはトマッチエスキー氏の發明にかゝるオイガトールといふのですが併し比較的無害であるといふだけのことなら、何も高價を拂つてオイガトールを御求めにならんでも鉛霜を梳櫛につけて度々御梳になれば染毛劑にまして色艶よく黒くさせることが出來ます、實は私も或る皇族家の家令よりの依賴で純植物性の無害の染毛劑をつくるべく苦心を致し、どうやら成功になん〳〵としたのでしたが、染まるには染つてもそれが其儘ついて居りませんのでこれが色止めとしてはどうしても過酸化水素を使はねばならんのでしたが、これは毛髮に障害を與ふる性質があるので斷然その計畫を棄てゝ目下前途の良劑を實驗研究中でありますが、今以て此世界的宿題に滿足な解答を提出することが出來ずに居るのは誠に殘念慨入つた次第です。

▲化粧問答はどなたでも御自由にお問ひ下さい▲成るべく一人二問以下▲ハガキでも他の原稿同封でもかまひません▲問には化粧問答と云ふ字を添て下さい



誌友欄



小說

○犀川

水野葉舟選

信濃　優梨子

姐さん！澄江姐さんが死んだの、昨晩。あの丹波島の橋から犀川へとんで……

妾ね昨晩夜中に起されてそれを聞いた時は、どうしても嘘だと思つたのよ。だつて昨晩梅ケ枝亭のお座敷へ一緒に行つたんだもの。けれど〳〵澄江姐さんは眞實に死んだんだわ、奥の四疊半には顔へ白い布を掛けた澄江姐さんが、氷の樣に冷たくなつて、白い着物を逆にかけて貰つたまんま、いつまでも〳〵寐て居るもの

姐さん、妾情ないわ、一番妾を可愛がつて呉れた姐さんが何一言云つても呉れないで、こんな事をするんだもの。皆ネ、「小春ちやん澄江姐さんはお前さんに何か云はなかつた？」つて聞くけれど、眞實に澄江姐さんは何一言それらしい事なんか云つちや呉れなかつたのよ、まだ遺書の樣なものも見附からないの。

今朝ネ、明けがたにお巡査さんが附いて姐さんの死骸を運んで來た時、千代香姐さんもあやめ姐さんも京ちやんも皆ばた〳〵と取次へ驅け出したけれど、妾はどうしても怖い樣な氣がして見に行かれないで、獨り凝と藝妓部屋の炬燵へ俯伏して居たの、けれど何だかまたそつと見たい樣な氣もして居ると、

「小春ちやん被入いよ」とあやめ姐さんが、茶の間の處まで後もどりして呼んで呉れたので、

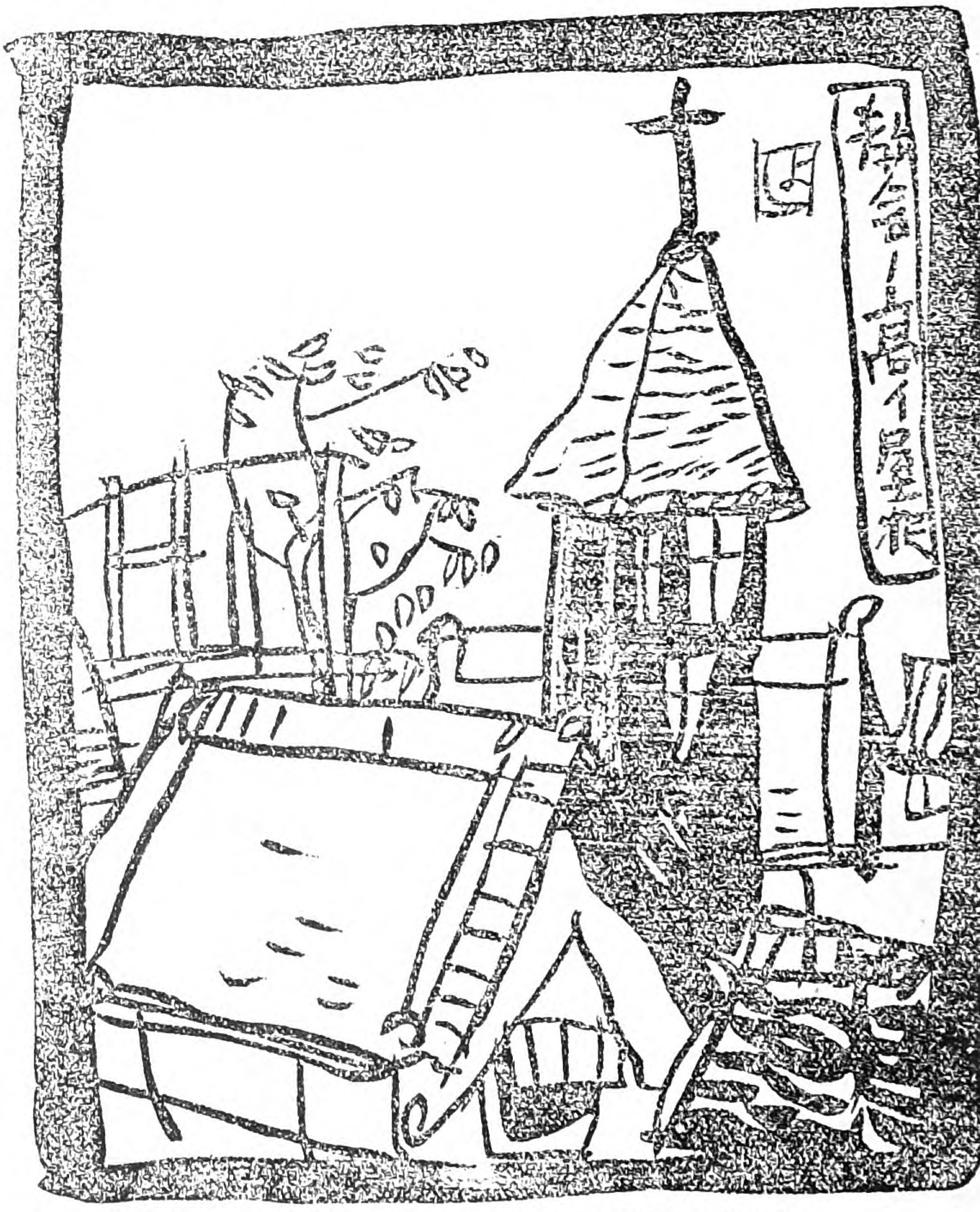
「ハーイ」とそれをしいをに驅け出して、しつかりあやめ姐さんの袂を捉へて後に隱れて居たの、だつて妾もう怖くて胸がどき〳〵して居たんだもの、けれど矢張り見たくてあやめ姐さんの高い肩越しに伸び上つてそつと見て居たの。

外には一杯の人が立つて居たわ、今朝一時にぱつと其噂さが廣がつて、もう近所の騷ぎつてないのよ。

釣臺が入る樣に格子戸を二枚端した入り口へ桐油紙のかゝつた澄江姐さんをそつと下された時は、妾思はずぞつとしてきやつとあやめ姐さんの手を握り締めたの、桐油紙の間から、青い〳〵水ぶくれした姐さんの

顔がチラト見えたんだもの、「まア澄江ちやんとんだ事をして呉れたネ」と眞先にお女將さんが斯う云つて氣味惡さうにそつと桐油紙を端したの、

「まア……」と皆な小さい聲で云つて、顔を顰めて默つて見て居たわ、妾一目見ると身體がぞく／＼つとしたの、あの眼の好い色艶の奇麗な澄江姐さんの顔が、それは凄い樣に氣味の惡い顔になつて、御年始廻りに一度着たきりのお座敷着がびつしより身體へ着いて居るの、澄江姐さんがそれは氣に入つて喜んで居た金泥入りの結び蝶の裾模樣も何も泥が附いてだいなし、島田の根はがつくり端づれて居るしネ、斯う頸ばつかりぐたりと橫にして居るところなんか、妾よりまだ怖がりの姐さんが見たら屹度氣が遠くなつちまうわ澄江姐さん足袋を何處で脫ぎ捨てたか素足なの、下駄は橋の上にあつたつて云ふけれど妾ネ、どうして澄江姐さんがこんな氣になつたんだ



（貸地）都會の屋根　麴町　安西よし子

ろうと思ふともう胸が一杯になつて、澄江姐さん！て抱きつきたい樣な氣がしたの。

其内に濱の家さんからも松三好さんからも大勢姐さんが來て、妾達は邪魔だから京ちやんと二人で默つて藝妓部屋の炬燵にあたつて居たけれど、妾ばつかり耐えても〳〵涙が出て、何だか京ちやんに恥しくて困つたわ。

姐さん！どうして澄江姐さんは死んだんでせう、昨晩梅ケ枝亭のお座敷へ一緒に行つた時は何時もと鳥渡も變りはなかつたのよ、何だかお酒は隨分飮けた樣だけれど、それが今思へばいつもと違つて、たま〳〵思ひ出した樣に、

「××樣お盃をいたゞきませう」とつッかけた樣に云つては、ぐい〳〵飮んで居たの。

其お座敷が濟むと妾はすぐ歸つたけれど、澄江姐さんはそれから秋月へ行つたの、だから妾それからの事は鳥渡も知らないのよ。

あの濱の家の小鈴姐さんがネ

「澄江ちやんも藝妓らしくもない、屹度彼の人を柳家の千松ちやんに取られたのを苦にしてこんな思ひきつた事をしたんだわ、隨分氣の小さい妓だわネ」つて云つて居たけれど、妾そんな事でじやないと思ふわ、なんであの澄江姐さんがそんな事位で……。ネ姐さん？だつて澄江姐さんには澤井さんて立派な旦那がチヤンとあるんだもの、なんであんないけ好かないズングリのなまづ髭なんか……。

姐さん、あの遂此間澄江姐さんは妾に斯う云つたの

「小春ちやんお前さんはネ一本になつて立派な旦那が出來たら決して浮氣をするんじやなくつてよ、眞實其旦那に心中立てするんだわ、いくら浮氣商賣の藝妓だからつて、初生な生娘だつて其道は同じ事だからネ、小春ちやんそれが眞實の藝妓らしい藝妓なんだから」つて。澄江姐さんは時々斯うしたしんみりした事を云つて聞かせるので、妾はいつもの樣に溫順しくアイつて聞いて居たの。

あの……姐さん妾先刻小用に行かうとしたら茶の間でお女將さんとあやめ姐さんがあのネ、「どうも澄江ちやんは姙娠して居るらしいわ」つて云つて居てよ、

ネ、姐さん、もうそれが眞實だつたら屹度澄江姐さんは……。澄江さんも餘り氣の小さい——。

「三ケ日も濟まない內に緣喜でもない」つてお女將さんはこぼして居るけれど、妾は澄江姐さんが氣の毒で

こんな思ひきつた事をした澄江姐さんの心持を妾聞きたい、そつとたゞ妾ばつかりが……。（天黛）

○さすらひ

麴町　琴子

神田の裏通りの賣出し騷ぎの中を歩くともなく歩いて私は東明館の横手へ出た、そして中西屋の前の赤い電柱をめがけて驅けた。丁度駿河臺の方から來た電車が二三人の乘客をのせた處で車掌は寒さうに首をのばしてあたりを見廻した機會だつた、縮緬の二枚裾を重く蹴返して男のやうに飛びのると同時に鈴はチリ〳〵と鳴らされる――ともう車はぐいと動いて「御危ふございます」と後から手をそへられて居た。

何かにそゝのかされたやうな氣分になつてついと右側へ腰を下すと「切符は？」と器械的なトーンを帶びた聲がひからびた頭腦へヅシンとひゞいた、みると鈍い眼の光は暗綠色のショールにかりにとまらせたブローチの邊を走つて居た。

回數券を一枚きつて「乘換はありません」と云ふ、急に指先の冷たいのを感じて外見も構はず右の手を左のひぢへ左の指で右の腕を握つて袖の中の暖をとらうとした。

一體何處へ行くつもりなんだらう！と考へてみても解らない、今日は朝から頭が重く氣が滅入て仕方がないので御飯もヌキに昨夜の晴着が出てるのを幸ひ（もちあぐんた身體を書棚へよせて室中を見まはした時にやゝ紅みをおびた裾の色がわけもなく氣に入つてしまつたので）引かけて出てきたのだつた。

一人住居の氣樂さはどんな普通はづれた眞似をしようと苦情を云ふものはなかつたけれど獨り居てやるせない自分自身をもてあましてるよりも外には氣の晴れるやうなこともあらうかと夢の中のかげのやうな自分をあかるい街中へさらしに出た、があの御祭りさわぎの浮つ調子の華やかな色調のドン底にも「生活難」と云ふ灰色が含まれてるそれを觀るとたまらなく傷ましい氣分に襲はれて別に乘らうと意思したわけでもないにいつか電車にのつてしまつた――

不規律な生活にはとうに馴れきつてあへて珍らしい事でもなかつたが四五日の間晝夜を轉倒してた爲、身體の中心を失つたやうな氣分魂ばかりがぬけ出しててに居るやうに思はれてつひふら〳〵してくるのを時時車掌のよび聲と強い動搖とではつとなる、いつとは

なしに足の指先がつめたいのを感じてうすよごれたキヤヲコの新らしい足袋をみつめながら暫らくはつくりつけの人形のやうに身動きもしないで居た。

呉服橋と云ふ聲を聞くと何といふわけはながつたがふと下りてみたい氣分になつた眞先に立て車掌臺へゆきまだ動搖の止まぬうち切符を渡して段を下りる、幾人かの乘客をのせて電車はやがて走つて行つた。

濠の向ふから吹いて來る風は縞御召の袖に寒かつたコートも着て居なかつたのだ――とショールの前をかき合せながらバナヽを賣る店先までうか／＼と歩いて行つた。

氣がつくといつの間にか自分はまた電車の中に坐つて居る、龜澤町行き！深川――と知ると覺えずあはい笑も浮んだがそれも淋しいものだつた。

ふと顔をあげると時計はもう十時をすてしまはつて居た、今つから何處へ行かう！火の氣もない宿へ歸りともない、と云つて比較的に話の合た雪江も昨日郷里に歸つたしまさかてんな樣子をして日本橋の伯母さんも尋ねられない、圖書館か、そんなら此車へのるんぢやなかつた。

圖書館へ行て偶像のいくつかと一緒になつて赤印の押された頁を繰るのもあんまり面白いことぢやない――顔を兩手の間へ埋めて靈のすゝり泣きを聞くやうな態度でやるせない氣分を鎭めようとした。

＊　＊　＊　＊　＊

一日を電車の中で暮して八時過ぎに宿へ歸つたら郷里から厚い手紙が來てゐた、母が持病で床につききりだと云ふ――出來るならば歸つてくれ、少しでもよろこばしてやつてくれ、毎日お前の噂の出ないことはない、と父の手蹟で文字も覺束なげに墨の色さへ薄かつた。

私には兩親があるのだつた――はじめて知つたやうなこの感に打たれてくらい室にしばらくの間失心して立てゐた。（地黄）

○或女の手紙

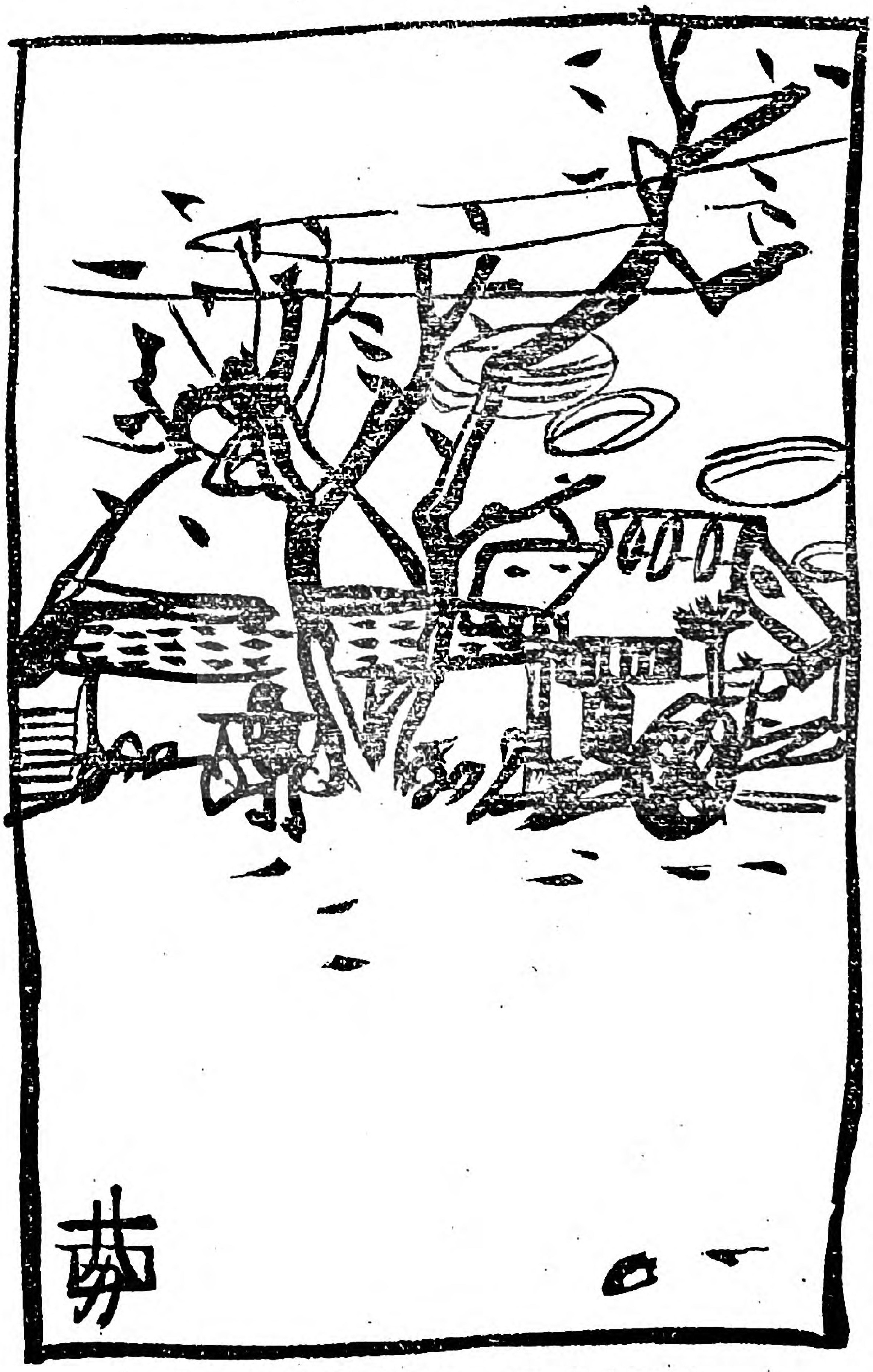
東京　葉子

從姉さん、從姉さん、私は又お聞かせしなくつてはならない樣な事が起りましたのよ。でこの手紙を書きます――

今日ね龍さんが來たんです。家を御年始廻りの殿にしたもんですから、袴をとつて長火鉢の前に坐り込み

ましたつけ——私と對合つて——。母様は客間の方に年始客のお相手をして居りましたの。龍さんてばいきなり、

「あゝ嫌な正月だつまんない詰んない」つて云ふんでせう、私又例のだと思つたんですよ。凡そ龍様には満足な事があつたためしが無いんですからねえ。でも今日は平日の調子と違ふんですよ。私、返辭する様な言葉がないから默つて居ましたの。



（入賞）木枯　山口縣　糯畑かの子

「東京なんかに居たつて詰んないや、俺ァもう此六月に札幌へ行つちやあんだ誰が何てつたつて——西と東へ別れるんだ……」伏せてゐた瞳を瞥と龍さんに注ぐと、充血した眼のふちに涙の浮んでゐるのを見ました。肅然とした様子をしながら私の心は（例のさ、例のさ）と裏切するんです。私はね、

龍さんの泣かさるべき言葉には泣かされないで、龍さんの言葉に動かされる様な甘い心を持つて居ない私の

心が悲しうございましたの。龍さんの涙が瞼に溢れる時、私の悲しみも絶頂に達して私は泣き伏して了ひましたの。でも私はかうして悲しみの緒が開かれると漸次龍さんの言葉が身に沁みて來て結局は龍さんの心に泣かされて了ふんです。そしてねそんな時はもう〱親も兄弟もいらない、いつそ龍さんに一身を投出して了はふとまで思つちまいますのよ。でもよくしたことには私が泣く時と云つたらどんなに感が迫つても思ふ事が一句も言葉になつて出せないと云ふ事です。だから何事もなく行くのですわねえ。人事の様に可笑くなつちまいますわ。私と云つたら眼の腫れ上る程泣いても翌日になるとケロリと忘れて了ふんですよ。堪らない程慕はしく思つても離れて居ると左程にも思はれなくなつ了ひますの。平生は龍さんを意久地なしだと思つて居ますのよ。ほんとにあんな意志の薄弱い人もありません。戀人としては適つて居るけれど夫と賴るべき人ぢやありませんわ――から思つて居乍らどういふもんでせうねえ、ふつとした機から何もかも要らない程溜らなくなつて了ふんですもの。理性が無いならいつそお七の様になり度うございますわ。

二人が別れる時はどうするでせうねえ。屹度龍さんは默つて運命の儘に委すでせうよ。私は口惜しいと思ひ乍らも矢張り奈何仕樣も無いんですもの。でもね今の處そんな事は深く考へられませんの、頭の中を一寸鳥影がさした位にしか。運命の前にはおど〱してゐる二人の醜い姿が自分乍ら淺ましく腹立たしくつて溜りません。

そして又此頃はね、變な病が起りましたの。家に何か面白くない事が有ますとね「もう誰の世話になるもんか、見榮も何もかまはない、自立の道を立てゝ自由な生活がしたい」と頻に思ひますのよ。それもね矢張り事件があるとひよつくり頭を擡げる考へなんですの冷靜になつた頭や平和の時はもうコロッと忘れてゐるんですからね。ひよつとすると病氣なのかもしれませんわね。

私の心を解して下さるのは從姉さん丈けよ。今日もお腹ん中の事を悉皆さらけ出したらやつと淸々しましたの。何時もくだらない事と思召すでせうけれど勘忍して下さいね。(入賞)

○手紙

長野　樋口優香子

「〆吉姐さん居らしつて？」とんきような聲でから云ひながら、手かけの所の大分すれて破れの三つ四つもある障子をガラツと開けて、お雛妓の五郎が中へころがる樣にかけ込んだ。そして薄暗ひ六疊の藝者部屋で、くの字なりになつて艶物の小說を讀んで居る〆吉の鼻の先へ、花川家内〆吉樣へと女文字で書いてある手紙を投る樣にしておいた。

〆吉はそつとそれを取つて裏をかへし、小さく「たかより」と只これだけ書いてある字を不安さうに見つめて居たが、「まゝよッ」といつた樣にビリ〳〵と封の口を切つて卷紙を出した。

日頃は何かといろ〳〵御世話樣に相成候由有難く御禮申上候、ついては今日家內の者皆留守に相成私一人に候へば御話も致したく、かた〴〵是非御出かけ下さる樣御待ち申居り候　　かしこ。

ときれいな手蹟で書いて終りに佐藤として有るのを見てはじめて、いつもあの淸月で合ふ喜き客の細君だなと思つた。

〆吉はも一度封袋へ入れた手紙を出して前より細心に讀み終ると、そのまゝクシヤ〳〵にして懷中の奥の方へおし込んだまゝ、しつかり手でおさへて、昨日御座敷のかへりに佐藤さんの家の前を通りながら、車の上からひよいと二階の窓を見上げた時見た、濃い眉と人並より高い鼻、そしてくらい寂しい顏の佐藤さんの細君を思ひ出して、ぞつと身戰ひした。

思ひ出した樣に〆吉は、いきなりふところから片手を出すと、細いきやしやな指先で側にあつた赤い羅宇の長煙管に白梅を詰めて、スパ〳〵つゞけ樣に三吹はかり吸ふと、フーツと器用に鼻から煙をはひた。

そしてやけにポンと長火鉢のふちでたゝき落した吸殼を雁首で灰の中へ一つ〳〵突つこんで、煙管を投り出した。

〆吉は美しい眉に心もち八の字をよせてちよつと軀戰ひすると、「おゝ寒い」といひながら立つて掛竿にあつた、はでな御召の半天をひつかけてまた火鉢の前にどつかり坐つて、小さくなつた火を一所へ集めながらジツと今の手紙の事を考へた。

ぼんやりして居ると表の格子戶が開いて景氣のいゝリンの音がはなれのこゝまで聞えた。

五郎は急に何か思ひ出した事でも有るやうに、今迄だまつて見て居た古い、表紙の半分も切れてなくなつた文藝倶樂部の口繪の所をふせて、よく吹き込んで、

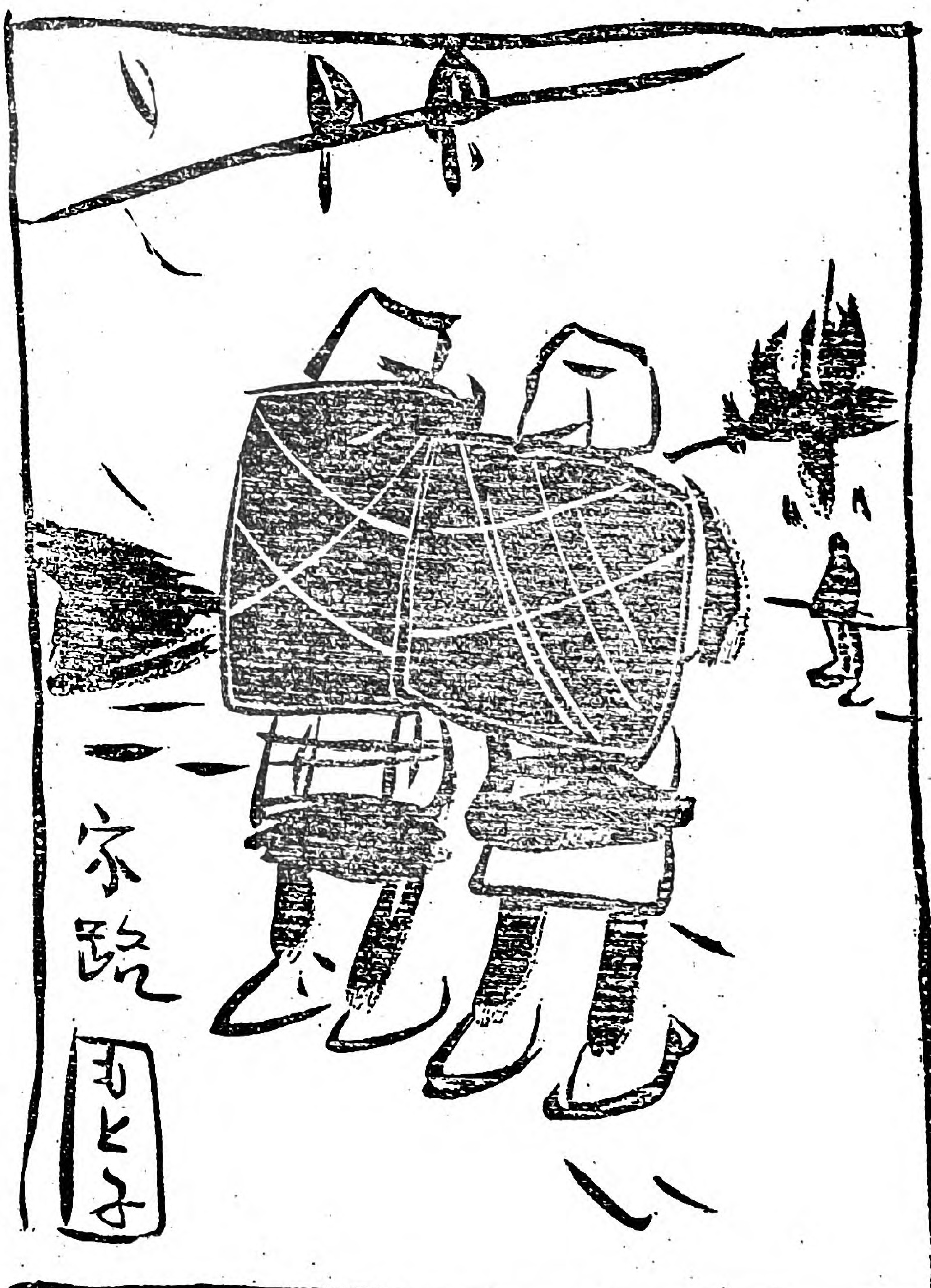
つや〱したたんすの上に投り上げるとバタ〱とあわてゝ出て行つた。ともう店の方で面白さうにくつたくのない笑ひ聲で話して居た。
その聲で先刻おけいこに出かけた小米が歸へつたのだなと思つた。そして平常は前になつてさわぎやの〆吉は今日はそれがたまらなく、うるさいと云つたやうな顔をして、舌うちした。
〆吉は今夜あたり佐藤さんから呼び出しが來るだろうと思つて、店の方で電話の音がするともしやといく度も立ひざした。
其して今夜佐藤さんに合つたらすぐこの手紙を見せてやろうと想つて、ふところから出すと丁寧にしわをのばして帶の間へはさんだ。
〆吉はいつか家つきの娘の佐藤さんの細君の話を幾度もきかされて居た、その度隨分我儘な人だと思つてゐたので、こんどの此手紙にも種々な事がひそんで居るのだろうと思つた。
〆吉は何となし寂しいやうな影におそはれて、ぎゆつと肩をすぼめると、ジッと障子の破れをみつめてゐた目に、なみだを浮べた。
臺所の方で下女が鼻歌を唄ひながら夕飯の御米をといでゐる。

○晴れた日

土佐　譽田順子

電車の響はもうずつと後になつてゐた。
自分の立つてゐる道が、黄色に衰へをみせた下生の草が柔い日光を浴びて、チラチラ光つてゐる野の中を白く長く一筋に續いてゐるのをみた時、谷子は、ほつとして立止つた。ひとの云ふた聲も、自分がどなる聲も同じ様に耳元であつかましく、もつれ合ふ様に思ふ暗い小い家の中に行場もなかつた詰つてゐた心が急にサラ〱と、群書にまろく豊かにのべられた、空の下に伸びひろがつてゆく様な好い氣持がした、沈默に燻ぶつてこはばつてゐた、官能の一つ〱輕く快くほぐれて行つて大きい、いき〱したいきをした。
十二月と云つても、こゝら邊は雲の蔽ひかぶさつた澁い日は餘り無い。よく晴れた空の色の冴えかへつた常磐木に交じつて紅葉の色は、火の様に燃えてゐる野の中には同じ様な形の森や木立が、いくつもあつて其間からはきつと紫紺色の藁屋根や、黒い瓦屋根が、首を出してゐる。道からは少し離れた、田の畔に三脚

を据ゑて、若い書家が筆を動かしてゐた。日光は袷の背を透して暖い快さを輕く身内にそゝる。谷子は何となくうつとりして、しみ〴〵と物靜かな晩秋の心の中に吸はれて行つた。ひつそりした野の中から少しはざわつく處へ出た。腰の圓い百姓の娘が底の小石まで數へられさうに綺麗に澄んだ流れで太きい大根を洗つてゐた。覗くと軒に甘さうな柿のブラ〳〵してゐるのや日向に莚を敷いて大根を切つてゐるのや同じ様な小い家の並んでゐる間々拔けると、そばからの散らばつてゐる畑續きの木立に包まれた姉の新しい二階がみえた。屋根に干した布團の白いのが庭の大きい楊櫻の木の青い間からみえた、谷子は今朝とはまるつきり違つた小鳥の和毛のふくらみの樣に柔かに暖い胸懐かしく姉の姿を描いた。



家路　澁谷　井上もと

門口の無花果の木に立てかけて姉は紅絹の裏を張つてゐた。

「ちつとも出て來なかつたのね。」白い指先で水をうつて器用に小皺を伸ばしてゐる姉のかう云つた、鼻の高い橫顏をジッとみた。黑地に紅を散らした襟は白粉で汚くふち取られてゐた、恰好の可い丸髷が美しく光つてゐた。谷子は「姉樣もとう／＼人並の女房になつたか。」としみ／＼思つた、けれど、之は姉ばつかりの姿では無くつて、おきそこの時に蔽はれた運命の陰にはかうした自分の姿が冷く坐つてゐるのだ、と思ふ。ホッとして氣が付くと道で折つてきた野菊や、萱の一束が、目に入つた。そうしてこれを折つたすぐ先刻の自分の柔かに可愛らしく世間離れのしてゐた自分の心を思ひ出して、幼い夢をみてゐた樣な氣がした。もう笑ふに笑はれぬ樣にしがんだ重い心になつて、どれも之も自分にかなぐりついてゐる暗い家の、母や、父や幼い、妹、弟の顏をジッと睨んでゐた。

「姉さん、竹山の姉さんだ。」かう云つて書齋の窓から義弟の眺が首を出した。頰の赤い瞳の澄んだ十八にしては無邪氣な顏をみると、例の樣に袂に餅菓子の無いのを、自分でも物足らず思ふた。「ヤあ、谷さんか？」姉の夫の良吉が眺の後に重つてかう云つた。「何かお書きでも？ほんとに此處ら邊り靜かで好い。」谷子は姉の傍を二三歩離れて窓の方へ近寄りながらかう云つた。

「いゝや、平凡な靜けさぢや仕方が無いうんともつと落葉の音でも身に沁む樣な處か、でなけりや鐵鎚の樣な事件が鎖の樣に連鎖して起つてくる樣な處かで無くちや、とても心棒できんのさ。」かう云つて大きいあくびをした。谷子は汚い口髭をジッと見詰めてゐたが、默つて緣に腰をかけた。

向ふの圓い丘の黃色い草が、風の吹き樣によつてテラ／＼光るのを、暫くみてゐた。姉が手を洗つて上つたので四人は良吉の書齋に集つた。

「今頃は何だなあ、女子が馬鹿にえくたがつてきて現在御亭主の祿をはいみながら切に亭主不幸の文句を並べてる奴がえらい女だつてね、一つ御亭主を離れ業の一幕を拜見したいもんだ、何が女子に何ができるもんか自分の手足もよう働かさん先から自由を與へよなんて之だからいかん、働きさへすりや自由は得られるさ。どうだ谷さん。」良吉はかう云つて谷子をみた。「まあ、とても女は現實にや生きられないらしい、現在、現實に生きてる、と云つてる人達さへ其現實にぶつかる度

に痛い思をして逃れ樣逃れ樣としてるんだから。」姉はかう云つて蜜柑を剝いてゐた。二人は谷子の顏をみたが、谷子は、もう默つてゐた。

約束の男が來たので良吉と眺とは身輕く裝へて、鐵砲を擔いで出て行つた。

裏の木立で、チ、チ、チ、と小鳥が鳴いてゐた。谷子は、三人の姿が、丘の彼方へかくれるのを待つてゐた。

「昨日村岡が來ましてね。」かう云つたが姉は默つて丘の方をみてゐた。「村役場の用で高知へ出て來たつて、晝頃から大分灯ともし頃まで、病氣でやつと起きてるお父樣を、せめて、せめて、ねえ、あれ五年經過すりや無効だつてね、もう四年になるから、尙の事せいてるかしら、訴訟するとか何とかつて、ねえ。」「そんな事私に云つて來たつて仕方が無い。」姉はかう云つて笑つた。谷子は、母の顏を思出したが、もうそれを云ふ氣にもなれなかつた。

「村岡も元は地所はあつたし金廻りもよかつたつてねけども二人の息子を大學へ入れて一人は死ぬし一人は始末にならん道樂者だつて、それで、あの爺樣、六十にもなつて村役場の書記なんかやつてる始末だから、百の證文を命から二番目にもしてるんだわね、思ふと氣の毒にもなる。」

「訴へられるといつそ好いわね、さうなつた段にや山田や村山の叔母樣もどうかしてくれようし、それに、あのお父樣の事だもの、それんばかりの金を持つてこん事は無かろうよ、親だつて、尊敬したり信用したりしてちや馬鹿な目に逢ふ。」姉は、今迄もいゝかげん世話をしてやつた事を云つた。父は養子であつた。養子にはお極りのさんざ、道樂をやつた揚句、故郷の家まで、捨てなくちやならなくなつた事や、其時母がもつとしつかりしてくれたら、こんな愚な目には逢はなかつたろうに、と云ふ樣な事を、姉は委しく話した。さうしてかう云つた。

「谷ちやん、あの家の桎梏に繫がれていくら呻吟したつて一生浮ばれやしないわ。」谷子はホッと太息した。

「家を出よう、自己の生活の爲めに。」かう思つたのはこれまで幾度あつたか知れなかつた。けれど、そこへまで行くと、谷子の弱い心はきつとぶつかつた。そこには何も無いたゞ貧しい侘しく衰へた母の顏だけである、けれど何樣しても、谷子には其母の顏をつきかけるだけ勇氣が出なかつた。谷子は自分に添ふてくれぬ

冷い姉をうらめしくも思つた。いつのまにか西の空には雲の出て夕日は鈍う雲まに、うすれていつた。

階上の書齋より

葉舟生

一月二十三日

今朝この三月號の投書を一應讀み了つた。それで、こゝに批評する廿篇だけを殘した。で、今回は感想を書く前に批評を書く事とする。

葉子の「或女の手紙」は、不充分ではあるが女が男に執着して引づられて行く心持ちが書かれて居る。その感じが、私信らしい說明の不完全さで表はれて來て居る。山崎都鳥の「電話」はやはり肝甚の處の說明が不明晰であつた。それに、全體がなげやりすぎる。かすみの「解けぬ日記」は面白い側面觀だが、一向に銳く見詰めきつた點が無い。その爲めに全體として極めて粗雜に成つた。つゆ子の「若き詩人」は白鳥氏の一都の人」を讀んで、同じやうな感情の經驗のある女が自分の物語をしたものである。一寸情熱のある若々しい作だが、それをずつと通り過した程の幼稚な程度に居るものである。喬江の「いさかひ」この藝術は惡く面白味の無い田舍稿のやうなものである。藝のチヤームが少しも無い。楓子の「門」さばけない心持で書いた作だ。藝術は凡てその書く人のものだと言ふ事を忘れないでほしい。この人などは、筆は達者だが、如何してもその書く心が進んで居るとは思はれぬ。長谷川未女子の「臨終」は氣が充ちて書かれたと思ふ。しかし、如何にもコンエンシナルである。さだ子の「お君」は折角面白い材料だが未熟を極めて居る。矢澤榮子の「友情」も如何にも型のやうな感情が書いてある。貞枝の「妹」はもう少しシムプリフワイする事を大切に思つて欲しい。凄い話だが如何にも或る人の駄辨を聞いて居る感がある。わかばの「年の暮」は蓍い。あまり蓍い。はる子「のきぐすり」は一寸面白いと思つたが、未熟である。月草女の「山寺」はぞんざいに書きなぐつたものだ。もつと、眞面目に書いてほしい。しかし、この人は自身でそれを意識して居るのでないかもしれぬ。何はともかく、あまり薄弱な藝術であつた。梨田順子の「晴れた日」は矢張り田舍稿くさい作だが、この人には中々しつかりした處がある。自分の田舍臭いと言ふのは決して素朴をいとふ心からではないのである。無智と理解の不足とを厭ふ心からである。學子の「さすらひ」は一寸面白かつた。自分はこれを讀みながら、可成、皮肉にこの人の內生活の底を見はしたが、やはり一點、その心のやるせなさを同感した。勿論さう推奬するに足りる程の作ではない。世良田優子の「春の岡」は極く幼稚なロマンチツクな一插話だ。甘い事と、洞察の無い事とは無類だ。多枝子の「人妻から」は近來見る事が出來ない程のいゝ作であつた。この作に向つては自分は特別の取り扱ひをし度く思ふ。夕美の「軍曹」は簡單な作しかし、この簡單は心持のいゝ簡單であつた。雁梨子の「姐さん滝江姐さんが」は例に依つてすらつとした作。しかし自分はこの作の結末の處がもつと凄い人間の疑問に觸れて居なかつたのを不思議に思つた。作者は女らしく器用になつてしまつたのみで、如何にもその藝術がたゞ事に近くなろうとして居る。自分は折角誑を嘔して居た人が、思ふやうに足が進まぬのをもどかしく思ふ。この作なども、缺點は無い。勝れて居るのだが、その、薄さが心細い。礪山優香子の「手紙」はやはり如何にも眞の人間の愛憎の恐に觸れた銳さが足りぬ。しかし下手ではない。

さて、以上で今回の選評はすんだ。で、次には、順序として、一月の小說を紹介する。自分は可成努力してこの一月の小說を讀んだ。自分の

手にある雜誌は、中央公論、早稻田文學、新小說、文章世界、太陽、ザムボア、新潮、秀才文壇、スバル、詩歌、女子文壇位にすぎぬ。しかし、その十種ばかりの雜誌でも、今月の分量は非常に多かつた。自分はそれを努力して讀んだ。そして激しく失望した。

丁度一週間ばかり前に、自分は一友人から、やはり努力して讀んだが、と自分の思つてるのと同樣の感を書いた端書を受取つた。自分はその時に、その友人の端書を見詰めて沈思せずには居られなかつた。

その端書に斯う書いてあつた。

僕は努力して、實際努力して、新年諸雜誌の文壇諸家の作を讀んだ。殆んど讀み盡した。そして文壇の數年間の意味あるらしかつた諸運動が根底から起つたものでなかつたのではあるまいかといふ樣な感に襲はれた事を君に訴へる。實際この點に於ては自分達は眞面目に考へねばならぬ事であると思つて居た。殊に記者はこの一點に於て、ずつと以前から言葉では表はされない疑問があつた。それを今こゝで書けば非常に長くもなり、又むづかしくも成りすぎるから止すが、多くの場合に創作界に對する聲が、少しも正當に自分の眞實の要求から出た聲でなかつた事。粗雜な刺撃に對して、極めて幼稚な驚嘆の多かつた事。自分はこれ等の多くの雷同の聲の今も尙、騷がしいのを聞くしかも、その創作を見ると、以外に貧しいのに驚かざるを得ない。



圖書館にて　大阪　長谷川多津子

自分がこゝに諸君にすゝめ得るものは、正宗白鳥氏の「茶の間」(太陽)の一篇にすぎぬ。この作に向つても、自分には多くの注文がある。その觀察の根本になつて居る作者の目が、まだ極く世間並である事が、不足を言ひ度い處であるが、全體のヒントの取り方、描き方、第一にこの何でもない場景の中から、人間の生活の一片を摘出して來ようとした作者が勝れて居ると思はずには居られまい。同氏の「草乳香」(文章世界)も面白い。

自分は世間の所謂批評家と言ふ人々の部類ではない。それで又、諸君に對して決して、さう言ふ職務を帶びて居るものでも無い。たゞ自分は

自分の讀書雜感の一部をこゝに公にして、諸君と談話をしようと思ふものである。

自分は近頃泉鏡花氏の「歌行燈」(近代文藝叢書第六)を讀んだ。その一讀の後の感想を書いて見たいと思ふ。この藝術は極めてモノトナスな、シムプルな、古典的な笛の響である。しかも、決して原始的な生命に肉迫して來るものではない或る文明の中に生れて來た忘れがたみである。これを讀んだ時には、その中に作者が巧んだ凡ての機智と、思考とは極めて幼い心をそゝる道具であるに過ぎずして、たゞ、その底に殘つて來る一つの音——笛の竹が鳴り得る一つの音のみが心に殘つて來るのを覺える。自分達はこの藝術の立つて居る地點よりも、むしろ更に原始に歸る事を希望し、努力して居るものである。自分はこの作者に向つては、覺醒呼はりの如き事をするのが失禮だと思ふ。たが、斯う言ふ藝術に對して自分達は如何なる心持を抱くかと云ふ事が自分達の問題である。

自分は尚は森田草平氏の「自叙傳」と德田秋聲氏の「黴」とを讀んだ。德田氏の作に向つてはこの文の公になると同じ月に、文章世界で所感を述べる事になつて居るから、こゝでは略す。森田氏の作については次號に所感の一端を述べたいと思つて居る。

次に自分は佐藤露蕣子氏の「意外」について所感を述べてこの稿を終る事とする。この作は自分にはさうよい作とは思はれぬ。大體として流れて行くやうな筆ではあるが、この作者の頭が意外に進んでは居ない。この一篇を見ても、また說明の不足した點、拙方のやはな點が多い。意外に薄弱な作であつた。

●●記者曰　右の評中にあるたへ子さんの『人妻から』は如何にも傑作ですが、少し發表を憚かるので、選者及び作者には氣の毒でしたが除きました、其代り同じたへ女の近作『年始』を本欄に加へました。

○解けぬ日記

東京　かすみ

海棠の蕾紅くなり、桃の花はホロ〳〵と散る——春の太陽は溫たかに、野にも山にも情けの光を惠んで居る時であつた。

母の手に引かれ乍ら私が、百花園の枯木の門をくゞつたのは。友禪の舞ひの袖のいと長き。九つの頃だつたと、覺えて居る。

「かすみやお汝いゝかへ母樣と此處へ來た等と。家庭に歸つて父樣に云ふのではないよ。父樣がね……何處へ行つたのと。聞いたならば母樣と二人で、お花見に行つたと、云へばいゝのだよ」木立の中を縫ひ乍ら母は私の耳に囁やいた。是が現在の私だつたならば「什麼してど？」と。位は疑がうかも知れないが、其頃は何も知らなかつた。世の中の凡ての人は、私を可愛がつて呉れる人許り。斯う思つて居た時分の私なれば。「汝がね母樣と百花園へ行つたと。父樣に云ふならば此母樣は死んで了ふのだよ。かすみ母樣は死んでもいゝかへ」母の白き顏——黑き瞳に玉なす涙は光つて見えた銀鼠縮緬の羽織の袖につかまつて、

「母樣死んぢやあ嫌や？」私は小聲で云つた。

「厭やら默つておいで」と。云つて、笑つた。其笑顏は——現在思ひ出せば、寂しい裡に故と微笑を造つた樣な笑顏であつた。

私は、母のことを知つて居る樣だけれど。何にも觸らないのである。

私の現在の母が、眞の母で無いと。云ふ事は明らかだけれど。前の母！（自殺して此世を永劫に去りし、）あれは私の眞の母であろうか？私は現在の父の眞の子であろうか？誰に聞いても、誰が見ても、私は家庭の者には、誰にも似てないと云ふ。

前の母も、現在の義母も、私に辛く當る等と。其麼ことは、露程もありはしない。

益々私は解らなく成る……

机の前に坐つて鉛筆を持つたまゝ、九つの頃の百花園庭のことを幻影に描いた。

「兄樣！私のことは何卒御心配なさらずに。」母は、ハンケチで涙を拭ひ乍ら、男の膝に眼を落して、私のことはかまつて呉れずに。「母樣と」私は二度迄呼んだけれど。何とも返辭がなかつた。

「困つたことになつたなあ！離緣仕度はないか？」

「離緣！」母は驚いた樣に——「世間の手前も有りますもの」

「其れも想だなあ！」男は、暗い面に私を顧見て、そして、母の顏を見競べて居た。

百花園で逢つた。彼の男の人。生れて私は、後にも前にも、一度しか逢つたとはない男なのだ。彼れは、母の兄樣であろうか？年月は、過ぎて——重なつて逝くけれど、私の胸には、未だに消えない——百花園の或る日の夢の幕は？

男の人と、母と、年と共に、私の疑問は深く成る許りだ——深くなるばかりだ。

現在の母も、私を可愛がつて呉れる！益々解らないあゝ解らない、わからない——。

空の晴れた美くしい宵であるけれど。私の心のみは暗い過去の頁！其は、懷かしい、思ふことは、澤山あるが——此處に漲ぎつてゐる、一種の醜くい黑雲はあゝ什麼しても、私を暗い女にして了ふのだ。別れる時だ！彼の男の人は斯んなことを云つたつけ。

「己の子であり乍ら……己で育てる事が出來ないとは

忌々しいと思ふけれど。女々しくもう思ふまいよ、是も泣くに泣かれぬ約束だ。」して見ると彼男は私の眞の父！想ではないかしら？

種々の事が滅茶苦茶に。私の頭裡を掻きむしる。して又ボーッと。夢の様に、烟の様に消えて了ふ。





詩

河井醉茗選

○物の音

筑紫　饒子

うすい板を打ち震す樣な低い／＼濁
つたオルガンの音が靜に漂ふて來
る――
刻々に黑ずんで行く赫色の建物の中
から――
暗綠色に深く憂へとぢたガラスの瞳
から――
泣きいぢけた樣な裸木の梢から――
寒さにこり固つた樣な常綠木の蔭か
ら――
黃色に素枯れた芝生の上から
冷たい石垣の肌から
賴りなささうに低く／＼――
思も――出もない、望もない、さて
又考ゆる事もない、たゞ淋しく冷た
い私の心に、忍びする樣にのぞいて、
見る樣に漂ふて來る――何とはなし
に悲しい調べ、何を物語るのであら
う、此の寒い重たい夕暮の大氣の下
をかいくゞつて、地にすれ／″＼覺束
ない姿して忍びよつて來る――漂ふ
て來る――私の心に、心に――
何とはなしに誘れて見たい、しみじ
みと涙ながしてきいて見たい――。
なつかしきオルガンの低音よ、
鉛色に光つて居た雲、漸くに黑く黑
く
天より地に、天より地に、おほはれ
て行く、低く／＼なつかしき音は未
だ漂ふて居る覺束ない姿して（天賞）

煩はしくて少々困るところもあるが、これだけの氣分を持つてゐるのはえらい（評）

○北國の初冬

富山　村山　咲子

暗き空のいろ
北のくに
冬はてゝよりはじまらん
すべてのもの薄暗くかなしく、
僅に殘れる小さき草の青の色にも、
いたづらなる悲みは漂よふ、
日の光見る事もなく
氷雨なる日は重なりて、ぬかるみ。
街の醜さ、人の足はたゆげに見ゆ。
見よ、鋸の歯の如き荒き空氣は、柔
き肌に痛む。
懶き雨の音と、枯れし梢のそのゝき
と、悲み易き吾心を誘ひて、
淋く暗き日は、より始まりぬ。（地賞）

嚴肅に出來た（評）

○人は言ふとて

東京　白鳥　正江

人は言ふとてわたしはわたし、

大理石の廊下に眠りたい、
連れ彈きの音の心よさ。
調子はづれにかき亂す
冬の大空の眞晝の恐怖と吐息、
色どられたる奇しき國の姿、
水死の人の黒髮に日ぞ照りそゝぐし
ほらしさ。
褪めし女の苦き瞳に澱むなやみと
歡樂の極て朱のおびえ、顫ひ咽ぶ、
夜もすがら物足らぬ心に
トランプ切る音のきかまほしく。……
人は言ふとてわたしはわたし、
棟も三寸下るといふしづか夜に
黒暗に燃ゆる朱の如き怨念と嫉妬の
焰
胸に掛けし鏡の生々しく戰慄す
凄き面と呪咀の血の冷々とかゞやく
丑の刻詣りがなつかしい。

青くかすかなる息、
うるみなく光る心の臟
のどけくもとげ〲しき
人の心の煉獄へ。——
人は言ふとてやすらけし、
おもちやの人形を毀すとき。……
强き歎きのその匂ひ。（人賞）

スバル、ザンボア、三田文學、文章世界、白樺などから來たなま〲しい思想を、白いおしろいと、黒い煤とで練り交ぜたやうで、此お化粧は出來損ひだが、白粉は御園にかぎり香油は椿にかざる世の中に、斯う云ふ異つた化粧法のあらはれて來るのは賴母しい、たゞをかしいと言つて忘れて了ふべきものでない（評）

○暮時のおそれ

神戸市　足立　春子

灰色に濁つて大空の傷ましさ
いつも
不安さうに慄ひて居る宇宙の嘆きよ
あゝ、暮時のみじめさよ——
蔽被さつた樣な雲のあひだから

弱々しい光線の洩れて來る
其刹那と、また
氣まぐれのやうに消え失せて仕舞ふ
その刹那とに
注射器を挿し込まれた時の樣に
强い不安と
弱い恐怖と
私の胸に殘して逝く…………
あゝあゝ
十一月の弱い光線よ
汝の果敢ない命は
汝の悲しい胸の中は
今
今はてしなく濁つた宇宙の
深い嘆とともに
私のやるせない漂泊の心と共に
冷たい、冷たい
月の光りに
吸ひつくされて仕舞ふのか………。

斯う云ふ處に遲延停滯してゐると、發達が後れる、大いに覺め、大いに驚き、大いにうたへ、おちついて心の充實を考へよ（評）

○春風　　葉子

春風のなつか
しみは
小娘の微かな
乳房のふくら
みも、
色白の丹次郎
様にそと觸つ
たのさへ、
足の裏をそつ
とかゝれして
そばゆさ、
みいちやんが
思はせぶりな
事わいな。

流行を趁ふものだとはねつけて了へばそれまでだが、女も氣の利いたことを云ふやうになつたのを欣ぶ(評)

○明け方の灯

大阪市　杉山花枝

夢より醒めぬ街のあけがたの瓦斯の
光、
蒼白い、つめたいさびしい、曉の灯
よ。
手水鉢のつらゝのやうな、



春雨　　山口縣　松尾姫小松

あの病む女の
細い血の氣の
ない手のやう
な、
白水仙の花の
やうな、
わかい戀のさ
めぎはのやう
な。
つめたい、さ
びしい、あを
い、
明方の瓦斯の
灯の嘲笑よ。
何の實
骨ばかりの痩
せた木の枝に
たゞ一つ赤い果實、

大きい美しい甘さうな實よ。
何だろう、何の實だろう
此長い秋冬を、凩にも落されず、
鳥にもついばまれず、
誇るやうに冷嘲やうに、
赤く〱夕日に光つて居る
何の實だろう。
あゝ……あの岩の上から手をのばして、
枝をたわめたら取れるだろう、
とらうかとつてみようか
あゝ止さう氣持がわるい。
赤い實は勝ち誇つたやうに、
ゆら〱と搖れて、赤い〱
まつ赤なわらひした。
あゝ厭だ見るのもいやだ、
ほんとに何と云ふ毒の實だろう。

明方の灯　方が心持が表はれてゐる、實の方はわざとらしくて細工ものと一目に分る、兎に角あなたも進んで來た(評)

○朝の氣

信濃　二葉子

ひや〱とひや〱と
曉の空を冷く流れよる朝の氣よ
春風吹いて
荒れつくした冬枯の寂しい野邊に
枯れはてたみにくい草の下から
やうやう芽生した若草の
まだ柔かい綠葉ににくい遲霜が降りそゝぐやうに
暖かい床をはなれたぬくみのまだ頰や白い手に殘つてるか柔い肌や
去りやらぬ甘い夢の香を追ふて止まぬ私の心は
戰いてかすかにうちふるふ。
朝もやは靜かにたちこめて
森も野も山も
薄紫の柔かさうな其腕にいだかれて安らけき夢は守り行く
いつまでもいつまでもさめないとの樣に
ひや〱とひや〱と
曉の空を冷く流れよる朝の氣よ

手とか、肌とか、溫みとか、柔かさとか、女が女自らの官能のはたらきに興味を持つやうになつてきたのも確に一進歩であらう、此詩は極めて好いと褒めるほどでもないが、右に云つたやうなことが眼についた(評)

○冬の日

菊　子

ほろゝほろゝと山茶花の散る、
風もないしづかな冬の日。
ゆつたりと、心のどかにも、こうたるみのある
甘い若草の野に唯一人、
思ふきり其甘い香に醉はされつゝ、
しづかに身をば横たへた時のやうに、
障子越しやわらかき風なき冬の日の光よ。
雪のしづく、ぽとり〱
其度にかすかに身ぶるふ山茶花の、
あわきかげ——春のやうな心もち、
とろけるやうな——
おゝ小鳥が啼く、
やはりうれしいのかしら、
障子をあけて見た、まぶしい。
小鳥よ——散つた花のあたりに集つてゐたのが
一時にどつとたつた、
おゝ眞赤な南天の實の下からも。
野も山も草も木も、
いきづいたやうに、私の心も、
ぱつと夢から、さめたやうに、
いまゝでわだかまつてゐた、思ひ出が、
一つ一つ
白銀の形よき玉となつて、
心のおくからまろびでさうな、
彼のはてしないしろがねの野面を、
ころ〱とところげてゆくやうな
冬の日の暖き光のもとに、
私のこゝろは春にかへつた。

快い感覺がある、次にはもつと形を整へなさい(評)

○霖雨と切株

金澤　ひらさき

この雨に——嶽の小路を登りゆく、

石工の群が悩ように、
その泥濘の山道を、
合はす小唄　泣かうわな、
この霖雨に——。

この雨に——朝湯歸りの半玉が
褄からげたる爪紅の、
素足に銀の雨ちれば、
蛇の目の傘のその裏で、
眉が動いてそつとよる。
この霖雨に——。

こゝには通ふ街道筋、
その路傍の栗の木が、
切り倒されて晩秋の、
大天地によこたはる、
取り殘されし切株の、
その切株のいぢらしう。

この雨が——眞赤に染めた切株の、
血のやうな色が目に泌めば
刺でさゝれたうす痛さ。
街道行の人々の、
足早になる夕まぐれ
この霖雨に——。

歌つてゐる人は面白さうだが、讀んでるものはそれほど面白く感じない(評)

○油皿

齋賀　琴子

歸省に夜御燈明をあげようと
塵の積つた佛壇の
油皿をまづ見やつた。

ぬらくとしたぶ気味な液體
夢に見た底なし沼の水のよな色
青い焔と不與なひゞき
すゝけた白木の位牌の文字は
智光院何々と不鮮明なり……

油皿に眼を着けたのは非凡だが、只それだけで内容は何もない、殊に佛壇の描寫などはよろしくない、反省を乞ふ(評)



朝鮮婦人の砧　朝鮮　ふね子

○淡雪の夜の歌

仙臺　藤村八千代

紅さし指に光ゝ指輪の金
冷めたく心に沁みて
薄青きわが愛愁淡くふくらみゆけば
ちらくと落ちてくる
思はせぶりな淡雪もあはれかなしや。

桃色の灯しほらしくまたゝけば
湯上りの肌の白粉の
ほのかにも溶けてゆく心持
カナリヤは小さき籠の中に躍り
黒猫は金茶の瞳を光らして歌ふ。
ちらちらと落ちてくる
思はせぶりな淡雪はかなしや。

誰やらの眞似だけれどうまい(評)

○悩める心

京都　夢みる女

我が心にまつはれる
淡のごとき悩みよ
くろがねの重き扉はゆくてに
かたく鎖されてあり
「開けよ——開けよ」と心の叫ぶ時
あゝ灰色に勞れしわが心は
そを開くべき術なきに
訊ぐみつゝうなだるゝ
さらにまた
「汝が今の脚下に安住の地をもとめずや」
とまたも心はかく叫ぶ
何故かくもまどひ
はた煩ふ我が心ぞ
黒鐵の重き扉はゆくてにかたく
鎖されてあり

詩を愛する心は貴ぶべし、枝の上下は君に問はず（評）

○沼

N子

水々しき空、オレンジ色に輝きて
射すともなしに亂れ入る
薄き、薄き夕日の影は
靜かなる夢に迷へる沼の面に
淡ふ降り注げり……
あゝ小暗き水の憂惱
しめやかに凭り添ふ
かすかにふるへる空と心と。——
さればまた黙したる沼のしゞまよ

ものゝみな沈める中に
氷のやうな冷たきハートを抱いて
限りなき哀愁にひとりなく私は
あゝお前が懐しい
その清いこゝろが……

おゝまた黙した水の面よ
夢の悩み……さてはさらぼひる記憶の斷片よ。
——あはれそれさへもすでに——
あまりに古く。
なほまた小さしや心みな、幼き日の悲しき想ひ
出の——あゝその想ひ出の。……

○夜の湯

靜香

朦朧と
電氣のかすむ
白き月光の
おぼろ夜——。

水蒸氣の……
白雲に
亂れあふ
曲線美。

黒髪のさゞめきや
みどりの髪のさゝやき……
ほそき腕にコスモスの
なよやかさ——

何の香か
レート——クラブ——
みにくき花も
つやゝかに笑む
ギヤマンの戸のうち

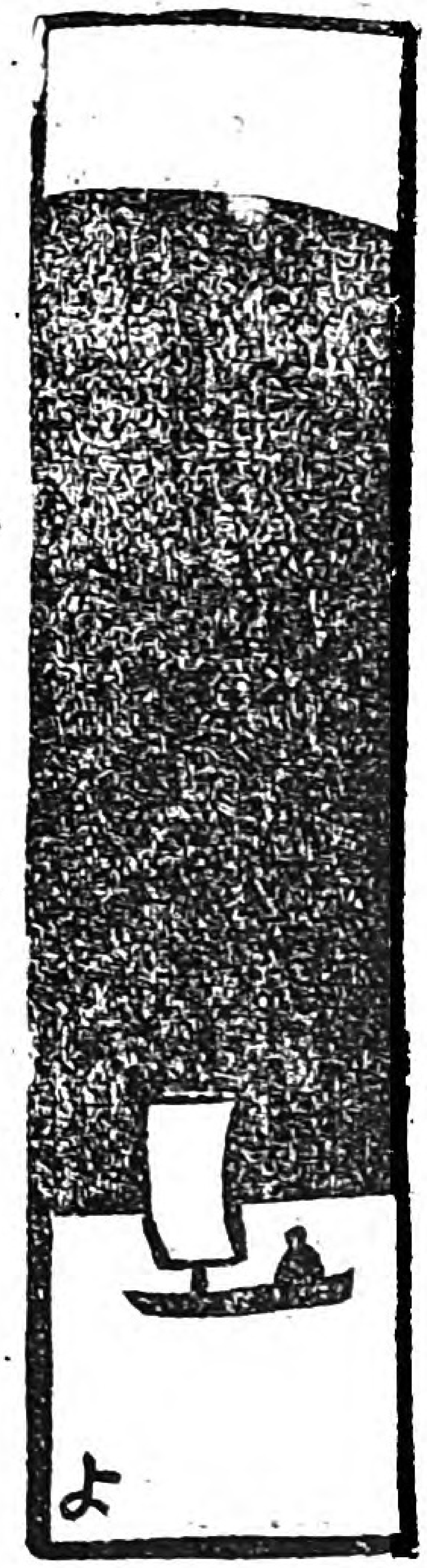
○冬の太陽

さだ

薄曇りたる空の色の惱ましき憂愁と、重く冷たい夕べの情ない風よ……
それ等の上より、覊束なき薄き光りを投ぐる、冬の太陽の痛ましさ——

草も樹も、ありし昔の榮華を夢見る人の樣に、可憐しくもうなだれ、
萬象は枯死せるが如き中に
雄々しくも氣高く
水仙は咲き出したれども……
遣瀬なき吐息に、萎へんとする花の白く淋しき嘆かひ——

黒きカアテンの病院の窓より
壯健なる人の活動を羨しげにも眺めやる、病人の瞳の如くにも……
弱々しく力なき冬の太陽の痛ましさよ……



自然（散文）　編輯局選

○野の一つ家に宿る

信濃　百瀬美水

昨夜は、とうとう誰も來なかつた。私は、小さい弟と二人きりでこの曠野のひとつ家にとまつた。この家は、果樹栽培事業のために建てられた家である。

本當に昨夜は淋しかつた。しかし少しも怖くはなかつた。月あかりだつたなら、昨夜兄は來られたのであつたらうけれど、寒い北風が吹いて、雪が舞ひさうな暗い晩だつたので厭になつたらしい。私は、こゝへやうやく二度とまつたきりである。過ぎし夏の頃、兄と弟と私と、三人でとまつたときは、本當に樂しかつた。障子をあけ放して涼しい月を見ながら、瓜を食べた。

こゑを限りに唱歌もうたつた、夜中頃、ふと目をあくと何の鳥か。高く啼いてとほつた。夜、くひなやしぎが啼く、と兄がいつた。私は、當時のことを思ひ出してたまらなくとまりかつたので、昨夕、歸るべきだのに歸らなんだのであつた。母はきつと、あんな所に二人きりで、怖くて淋しくて困つてゐるだらうと、心配されたに違ひない。弟は、平氣でスヤ〳〵と眠つてゐたが、私は、時々目をあいた何となく不安でならなかつた。西を流れる奈良井川の音が、高くサラ〳〵と響いてゐた。ふとこゝはひとつ家だ、と氣がつくと限りなく心細くなつて、そつと弟にさはつてみた。風は全くやんでゐて、新らしい故か、家が時々ミシンと響いた。それより外は何の音もなかつた。私は、淋しい心細いと思つてゐる中にいつか眠つてしまつた。何時頃だつたか知らない。私が便所に起きたとき、黒雲が空一面に掩ひかぶさつてゐた、松本市の電氣燈が眞紅に見えて、實に美しかつた。山々は黒ずみ、ぼうつと枯野が灰色になつてゐるだけでその外は何も見えなかつた。夜明頃、こたつに火が終へてしまつて、何處からとなく風がきて、弟までが目をさましてしまつた。炭をおこして二人はそのまゝおきてゐた。遠く隣村の鶏の聲が聞えた。まもなく、あけの鐘が響いて、夜はあけた。何といふ靜な朝であらう。そよとの風もない。

空も美しく晴れてゐる。夏であつたならりんどうの一面に咲いてゐる露しげき芝原をふんで奈良井川まで顔洗ひに行つて、どんなにか、心地がよいであらうけれど、今はもう寒くて〳〵何も出來はしない。人家が遠くに見える。林も遠くに見える。唯一面、茫々とした枯野………。その中の小さいこの一つ家に、パッと朝の光がさしこんで、隅々まであかるくなつた。（地賞）

第一、場所が珍しいこと、第二、文章を氣取らぬこと、第三、眞實を描いたこと、此の三要素が揃つてゐるから、此文章は讀者を感動せしめるのだ。稚氣はあるが、それは未だ若いからだらう（評）

○石垣の町

長崎市　三根千佐子

二町餘り連つた石垣の下の賑やかな市場の町を、毎朝毎夕、私はいつも歩いて行く。やゝそりぎみな石垣の上に建てられたペンキぬりの洋館や、硝子窓の多い家が塀越しに見える、折々は人なだれ打つ朝のどよみの中にかぐら太皷の音が洩れて、天満宮の社も神さびて見ゆる。

大半は豊かな人の庭で枝ぶり面白う土培はれた、つゝじ桃、牡丹等名も知らぬ木や、自然の力に生立つた草に、ひらめく折々の花は、葩は、人ごみの中に心急ぎ行く私の眼を仰向かせた。

石垣の下にトタン屋根をならべた幾つかの小さな家にさま〴〵な青物をあきなふ人、また露乍らの花と色と香を籠に集めた花賣り、それらを求めようと何處からともなく集まり來る、さま〴〵の人のさま〴〵な面、さま〴〵な姿を一つ一つにはつきり描いて見様としても只黒つぽい衣をまとふた、白い顔や黄色い面の人々が青物と花のあひ間になだれ打つさまのぼんやり思ひ浮べらるゝ許り、赤いものゝちら〳〵とするのは髷の手柄か若い女の帯の色でもあつたらう。

崖に紅葉した大方の木の葉のほろ〳〵と散る夕ぐれ、今し方降り込んだ時雨に叩き付られては土に沁み着落葉を踏んで足駄の爪先にぬかるみを氣遣ひ乍ら、傘をつぼめて群れた人々の何處にか散つた跡に賣れ殘りの果物を寂しう列べた其の町を歩いた時、上手な日本語でいつも田舎のあきんどを捕へては無理に小間物を賣付て居る散髪の支那人が少しばかりの品物を仕まひかけてしきりと崖の方を見上げて居た。

其處は石垣をくづして上の町に通はれる斜な坂が三ツ許り造られた所で、三つの車が止まつて居た、△△とすり硝子の丸い軒燈にしるされたしぶぬりの門を出たり

であらう、一人の男と蝶々髷に薄い空色の羽織の衿を思ひきりぬいた女が二人乘つて居る、面長な前の女が振り反つて、につこと笑むと其まゝ中折れの人を乘せた車を先にすうつと坂を下りて行つた。

私は此の樣な女を見る時、それに何のかゝはりもないが幼い日別れた一人の友を思ひ出さずには居られない

其友は少さい頃から眼を病んで居た本の包をおはせられ赤い辨當の袋をさげさせられてどの樣にすかされても(學校はいやだ)とすゝり上げてこばんだ兒であつた。

定紋の付いた見臺に可愛いゝ手をもたせて、同じ紋を打たはでな肩衣に優しい肩をつゝんで、赤白だんだらの房がゆらめく花かんざしの頭を少しかしげて語り出る聲のふしまはしの、末は末はと多くの人にまたれた其友はどうして居よう。

私は友の白う濁つた眼を思ひ乍ら、石垣のつきる所まで來た時崖の小松は青うこけはいつもながらの綠色であつたけれど、其所にある一もとの柳はまばらに病葉を止めた枝が寂しうたれて居た。(入賞)



雲と家　水月　太宰ちせ

物を細かく觀るといふ態度が何より結構だ、殊に長崎のやうなローカルカラーの著しい町に住んでゐて、細かい觀察をし得る人は羨しい。併し此君の文章には癖がある、多くのことを一時に言はうとして文脈が混雜す

る、細かく描くと云ふことゝ文章に語句の屑の多いといふことゝは大いに異ふ、記者は少しばかり添削を加へて置いた、作者たるもの物を見る心の細かく働くやうに、文章に表はす時の手際も細かく働かし、且正しく、なげやりをしないやうに、働かせて行けばあなたの前途には光明がある(評)

○山峽

加藤白光

城山へ雲の影がさして徐々に動くのを、はつきりと見出したのは、學校の裏の芝生に坐つて雑誌をよんでゐた時であつた。秋の——午後の光はあまり強くはない。そよ〳〵と風が吹く度に黄に染んだ稻がさや〳〵と音をたて、露草とかやつり草とがひよろ〳〵と搖れてゐる、ばつたが飛ぶ——いなごがはねる——かすかに〳〵蟲が鳴く。後の川の音の殆ど意識に上らないほど感情はやはらいでゐた。十月のスバルを手にしてから三日目のこと、自分の歌の上の方に十首ばかり書き續けたのはその時のことであつた。十月會の人々に會つたのも其の日の夕方であつた。——ふは〳〵した風が吹いて來てともするとランプの火を消さうとする暗い室汽車の時間を氣にしながらも、おつとりとして秋の山峽の空氣を味つてくれる人々の態度が堪らなく嬉しかつた。旅の歌をと願つたときも、秋と、旅情——若人——しつくり調和したのは更に〳〵嬉しかつた。それから二十日ばかり經つて後、都からの消息に、百舌はもう東京には聞くことがまれになつたとあつた。返しに毎日聞かないことはないと書いてから、少し經つたとある日曜日に久し振りで鐵道線路を通つた。もう稻も刈られて畑には新しく麥が青く芽をふいてゐる處もある。崖になつた斂きはには、はぜと、小楢と雜草とが入り亂れて蔭の色彩は沈んでゐるけれども美しい。畫としては不完全ではあるけれど見すごすのは惜しい氣がして、去年書いた安倍の山奥の寫生を卒業記念に母校に殘して置いた事が心外で堪らない。

間借りをしてゐる今の家が、家と家との間であつて、眺望がないからこんな望が起るのであらう、簞笥の横に机を直したみぢめな居室——ときた生活の貧しさが浮んでくる。總てがせゝこましい。城山も——頭を壓す樣で煩しい。狹い〳〵山峽の小さな村。

これでも大きい庭園と幾間かの部屋とがあつて、常住そこから外に出なかつたら或は廣いと思ふかもしれないけれど、外出ばかりしてゐると、まれにはぼうつと限りない目路も欲しい。白鳥のゐる島へこんな事を思ひ出すときもあつた。併しこの想も筋肉がだん〳〵緊つてくるに從ひうすらいできた。

初霜を見たのはまだ夜の明けない中、師團對抗演習を見にいつた十一月二十日、薄く蝋を引いた樣な橋の上であつた。もう今はすこし寒い朝など向ひの家の屋根が眞白になつてゐるのを見かける。霜が降りる頃になると木の葉の散るべきは散り、色づくものは一層鮮かになる。學校園はさびれてきた。運動場の落葉樹はもう大方空になつて唯楓が紅の濃淡を具合よく染めて一本立つてゐる。風のない靜な日和、私は敎室で窓の方に脊を向けてゐると、ぽか〳〵とよい心地になつて、もう日向ぼつこする時節が來たのだ。この時不導體のガラス迄が手にふれて溫みを感じさせる。枯草にねそべつて本でも讀みたいと思ふけれど、後ろの芝生にはものゝ一時間も坐つてをられない。強い風が吹いてくる譯ではないけれども、もう郊外の時節ではない。仕事は家でするやうになつた。狹くるしい山峽も些細に觀察すべき時がきたのであらう。(十二月に入つて)

自然は冷かなものだらうけれど、こんなに冷かに見て了ふのは惜しいやうだ(評)

○朝

伊豆西島しをり

堅木の下駄は霜柱を蹴りながらともすれば小石につまづく道である右側の山に紫色の煙があがつて幽かに野火が燃えてる。來るべき春の懐かしい情調に絲遊が火の上にちらほら忙しく立ちのぼる。馬が白い息を吐く赤い紐つけた鈴が音を立てゝ馬子の草履が霜道に吸ひつく山椿の滑らかな葉面には豐かな日の光りが輝ぎる、忍び足に從いて來た二人の女生徒

大切な教科書をしつかとかゝへてゐる『當番でせう—お急ぎなさいよ』はにかんだまゝ俯向いてゐる『お大事にいらつしやい』道をゆづつてやる默禮して行過ぎた。後は又寂然とした、遥かに山が三重に横はつてゐるのは城壁を成してゐる、路は迂曲して尙續いた平坦である、單調である、次の落葉林をぬけるといつもの家の前へ來た、跛者で虛弱なお内儀さんは大儀さうに毎日毎日石臼をひく、目の荒らい石の面にずりつけられた物はたら〳〵と白く流れた、其は豆腐で有つた亭主はどてらを着て長火鉢の前に煙管をくわへ乍ら見て居る、夕方私の歸る頃には何所へ行くやらゐない。濕つた土の上で石臼を廻すお内儀さんばかりだ。活動を止めると飢渴を覺えて絕命する、自らの生を一日も伸ばさうとして、單調でも何でも關はない、生きてゐるだけには生きて居やうと石臼をひく、是を毎日繰返して眺めて通る自分も類は同じ事だと思つてハタと立ち止まつて重い石臼の手元を見つめた。が、然し是も或は有意味かも知らぬ默々としてゐる内に人生に大なるヒントを與へてゐるのだ！さうだ！たからやつぱし同じ事だ私だつても——と、足早やに歩き出した、馬子も馬も、とうに行つて影もない、私はとり殘された……此所から學校迄は二丁程ある、肩掛を強く巻き直して急いで職員室の眞赤に起きた炭火を囲ひ乍ら、木柵の續いた家を過ぎた。校庭に自分の影を寫した時、私のひそかなる生命の假の置場と、しみ〴〵校舍の光りをまぶしく思つてホロりとした。どつさり椅子によつて火に手をかざした時爪の稍々長いのが氣にかゝるので、はさみを出して切り初めた「火に爪を入ると狂氣になる」とて祖母は必ずとめた「成れば面白い」と聊か浮いた心持になつて爪を眞赤な火の上で切つた。ゆとりのある今朝の心！小鳥が巢を出て屋根の上に思案顏してやがて行方知らず飛び去つた。

交意のつゞかないところがあつて、全體に不完全だが、また全體に何處か一道の生氣がある(評)



梅咲く日　　大阪　大関里の子

○氷點

龍山　あき子

割合に温い日が二三日續いた後、今朝の冷さは甚しい昨夜かしげた御米も、殘りの御菜も、箸も立たないくらゐ氷り塞ちてゐる、水道なんか金物にふるゝと手がくつゝいて、皮が、むけさうだ。くらくら沸かした御湯を、掛けても〳〵、水は出ない。來客はある弱つて了よ

何が不自由何が不足と云ふけれど、水無き程、不自由な物は外に無いと思ふ。十一時十二時、未だ出ない。ひちりんに炭も幾度かつぎ替へたけれど出さうにもないじれつたくて〳〵、終には泣き度くなつて鼻が何度かつまつた。仕方ないので、おとなりから、大きなバケツを兩方にさげてやつと歸つたらにくらしいシヤー〳〵出て來て、火も何も、じく〳〵してゐる、をかしいやら、うれしいやらで、私は無暗に、少しゆるんだねぢをかちや〳〵やつたら、勢よく出たもの此度は凍らぬ樣に、ぽたりぽたりと落して置く。

小紋羽織引つかけて、京城に行つた。葉は落ち盡して枯木の樣な、白楊の木立の中に、幾百か立ち並ぶ官舍の前を小走りに、漢江通りに出た。折柄通り合せた。鐵路行き電車に乘り、北漢山の方に向つた、十日以前の雪が消えやらで其儘殘つてゐる。

南大門で下車して、誌友でもあり、畫友でもある数子さんを、蓬來町に訪ねたけれど、尋ねあぐんで大平町に寄つて歸つた。

三時二十分少し早いけれど、川田樣が、おさそひでしたから連れ立ちて出勤する。十六の少女と、二十の女と、私は何だか恥しい、何時まで小さな方と一所に歩かねば成らぬのか情け無い、何時まで人のそしりの的に成らねばならぬのか、私にはわからぬ。

たいぶ朝鮮らしい色が出て來た、くだらぬ泣き言ならべてるひまに周圍の觀察でも能くした方が何んなに爲めになるか知れない（評）

○幼き印象

大阪市　杉　山　花　枝

何時であつたか、忘れました。何所だつたらう、それも覺えては居ません。たゞ私は祖母に負はれて、人も通らぬ山道を而かも夜更けて通つたと思ひます。

其夜は月も出て居ないし、螢も飛んでは居ません、それに私の脊中には毛布のやうな物がきせられてあつたから多分冬の夜だつたでせう。

祖母は何の用事があつてこんな夜更けについぞ通つた事もない山道を、何所に行くのだらう、と思ふと幼心にもいぶかしさと、おそろしさに、脊中からそつと「おばあさん、」と呼んでみた。「あいよ」、とかすかに答ふる祖母の聲はふるへて居たと思ひます。

それから祖母は何所へ行つたか、何用だつたか、ちつとも覺えては居ません。たゞあの山道を通つた時のさびしさと、恐ろしさばかり幼い印象となつて胸に殘つて忘られないのです。

それからも其時の事を時々思ひ出しては、あの時あれから祖母さんは何所へ、何しに行つたのですかと、きいてみたくては「おばーさん」と云つて祖母の顏をみつめるのが癖となりました。

けれど今日まできた一度も私は其夜の事を祖母に云ひ出してきいてみた事もなし、祖母も云つた事もありません。十五年もながい間大切な秘密のやうにだいじに胸にしまつて置いて時々思ひ出してみては又元の通り直して置く私の幼い印象はこれなのです。

これだけではあんまりたよりない、話になりませんね（評）

○橋の上より

羽後　小　島　健　子

今、霧烟が消えたばかり、私は橋の上に立つて居ります。昨日の消え殘りの雪は家々の北向きの屋根にばかり丁度白い夜具でも干した樣に見えます。

下には淸い子吉川は音もなく流れて其下流の中島の綠な松林の間には最早白い水蒸氣を吐いて挽材精米の機械が働いて居ります。

川向ふの小さな水車小屋から鷄が曉を告ぐると直ぐそれに答へる樣にこちらの造船所からも初鷄の下手な鳴き聲が聞えました、此度に鷄が止めずに鳴き聲を競ふのも刺殿ん坊の河岸の飲食店の戸を叩くもの丶樣でいとをかしくあります。

今まで玩弄の樣に岸に繫がれて居た五隻の新潟船の三隻目の船が少し動揺たと思ふとそれから細い烟が昇り始めた。

身輕に裝ふた新夫婦らしい男女が鷄の聲の洩る丶水車小屋に、入つて行つた。

自然に周囲が賑かしくなつて、亂れ髮の儘で水を汲んで行く下女も五人六人。

河岸の旅館の二階の窓から髮を分けた若い男が歯磨楊枝をくわへた儘、橋の方を眺めて居た。

圏點を附けた處だけが好い(評)

○朝の深呼吸

東京　島　貞子

裏山に霜が白く草の緑を消してゐる朝、淡青の霧浮ぶ空には夢の様にまたゆふべの星が一つのこつて居る

さめたカツフエ器から立つほとぼりの様な私の白い息のみ淋しい冬の道端を流るゝ時、私は不思議な種プライドを感じたのだ。

何等の恐怖もなく、それは尊い清淨をもつた、現實は冷風が波動して霧晴るゝ虚空を凝視すべく。——

私の便の虚はかゞやいた、小指にはめられた小さきダイヤかと許りに。あゝかゝる時の永遠にし。つゞけよかし。中窓の欄干に凭れて默思ずれば曾て習つた唱歌を再び記憶する。

Merry Spring. 處女の情緒にきたいな顫動を覺えたと思ふ。

葉のないカリンが寂しく揺ぐ、其してかぐはしい露の降りしきつたのを見た私は、一人此の日プライドを得たのである。熱烈に裏山づたひを濶歩して見た夜死した光線があかるく裝う頃。うす黄色の雲が掩うたきのふつてカムサされた今、工場の汽笛がなり響いて居る。

玻璃霜が凝してとけて行くのをみまもれるモーニングは何ほど美くしかつたらう。B生の君の逕の様なタイプを聯想さす生きた色彩、銀笛を吹くかと聞く清らかなSprin.の囁きが自分の胸をそゝられて秘めた嬉れしさをそゝられて了つたかと恐怖るゝせつなに、冷風にきは立つ我が息のなま温さ。——濃緑ゞ澤有る樫の木は強いのである、カーキ色のカリンの幹を忙しく流れる露 美麗な與がらず白銀のきらめきは優れて居るが、

私は神秘な尊さをさとりました、此の日處女の筆を染めて君に消息を書く默思しそむる第一日でありますもの。(よろこび聞ゆる日)

何の事とも分らぬ文章を書く人だが、比較的分つてきたのが、最近の此作だ、まだ〳〵もつと眼を覺さねといけない(評)

○霧の朝

靜江

そよと吹く風の音もあはれに聞える霜月の朝であつた。父の用事で、洛東のある寺へ行つての歸り出町橋まで來ると、あたりは深い霧の爲、萬象皆ぼうとしてしまつて、光の最も強い太陽は霧の中から、くつきりとうつくしく輝いて丁度、赤い大なお鏡さんの様であつた、其うつくしい事は中々言葉につくせん程である。白々としたさうして、にごつた水の間から、紅のルービーが光つて居る様だ。しばし佇ずんで其うつくしさにあこがれて居ると、何處からか、笛の聲がして來る。たしか秋の出らしいのが、吹く秋風と和して又、水の流と合せて、おもしろくも又ゆかしくも聞えた。

下を見おろすと、清い鴨の河原には、四五人の者が、白い布を水にひたして居る、又其色と音とが、何んとも云ひ得る事が出來ない。

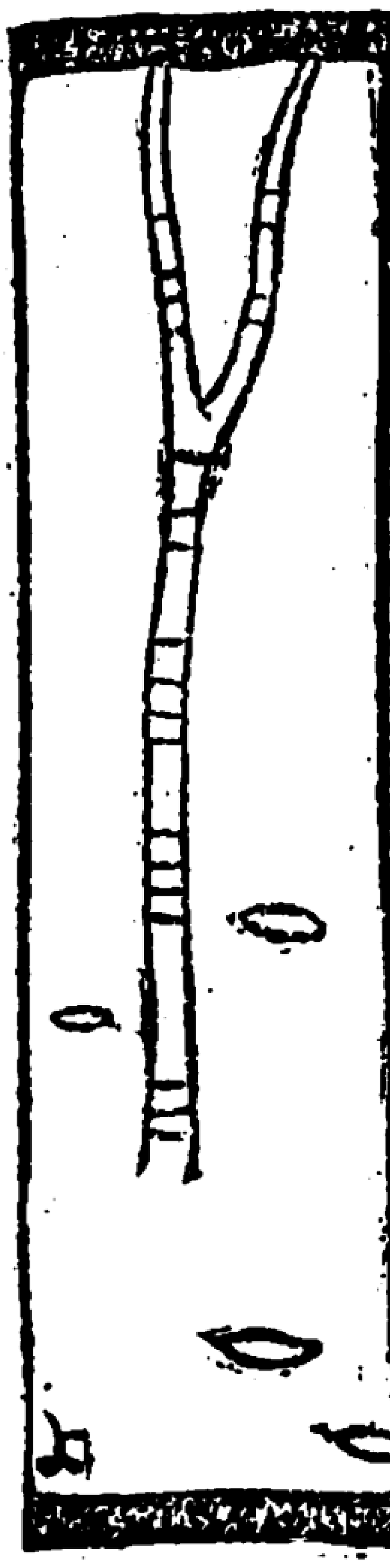
あゝ此美しき色彩の長しへにと思ふも悲し、つかの間に霧は風と共に見えなくなつて、早太陽は、かつと、強く輝いて來た。

○雨の公園

臺北　尾方みつ子

雨の日……靜かな睡氣を誘ふやうに春雨が降る日であつた。人通り少ない公園に足を入れると、折から小晴れとなつた空に灰色の雲が小さくちぎれちぎれて、西へ西へと走つて行く……小鳥が何羽も葉がくれにぬれた翼をばたく〳〵さして、餌を探してゐる。

滿々と水を湛へた池の面は眞青に澄みきつて、風吹く毎に木の葉を浮べたさゞ波が向ふの岸さしてさら〳〵とすゝんでゆく。池邊の芭蕉、想思樹、柳なんどが今洗ひあげたかのやうに緑濃く、麗はしくなつて、絶えず身ぶるひしつゝ、白銀の玉をば惜しげもなく全身からふり落して居る。



蚤の目

啄木鳥

▲ひとりの胸(百合香)作者が二千五百年由緒たゞしき名家の血を傳へてゐることを知れる人は、二十の坂を越せる今日までもたゞルールと呼べる人形を抱いて、日々涙を忘れつゝある口ーマンスを記憶してほしい。人形は三年のむかし北歐の或都會より贈られしものなりき。世間の義理や人情にひかされ、薄つぺらな父子の情に動かされて、愛人を棄てたる人よ、泣け君は涙のかぎり泣かねば罪は淨められないと師なる人に罵られて「ひとりの胸」をルールの傾に訴へ寒夜麻布臺の月に泣けるもの。情熱すれど文これに伴はず、言悲しめど筆亦したがはず。

▲歸宅道、かすみ)本所二つ目の四つ角で沈默せる男に逢つた、「あゝ昔の人!今何を思ひ何をおもはう、苦しき記憶よ」草の門の作と見ちがへる程内容が酷似してゐる。また是れ女子の秘密。

▲追懐(齋賀學子)上京前お針屋に通ふ頃、廻り道しては東京の空を望んで長嘆したことを書いたのだが、山も無ければ河も無い。

▲葬る日(島貞子)ギラ〳〵光るやうな強い文字がつゞられてあるけれど宛字が激しいし、脈絡もしどろもどろた、誰かに見て貰へばすぐいゝ作が出來さうだけれど。

▲快い音(靜香)同性の愛を讃嘆したのらしいがおつかなびつくりだから却て物にならない。

▲友情(野の花)同性相抱いて北國の海に沈める友を悼んだもの、死の神が海の上から手を擧げて招いたなどと想像を加へたゝめにつまらなくなつた。

▲北の國にて(村山呉子)この人が土佐を出てから後の行動は、大凡解るが、心理狀態は書いたものによつてはとても解けぬ「私の心は破れてゐる」を書いた當時、記者も尠からず動かされたが、會津の梨花さんを初め滿腹の同情をそゝいだ文を寄せた人が多いけれど今は皆アツケにとられてゐることと思ふ。知りつゝ他を愚にするのではあるまいけれど。

▲結着(矢枝子)やつぱり嫁に行かうと決心したとの事。生存競爭がこはいの老い行くのがいやだのと餘りねんねが過ぎる、お嫁樣となるの〻嬉しさは乞ふこれを内藤千代子の文に見よ。

▲殘りの火(明星)雁の音り(たより)古挺(鋑)逃出す途且(途端)宛字もかうなるとお愛嬌なり。「恩愛のたつな切るに切られず」轡をはめられたと見える「古人の言葉にも妻の弱さは六十年の不作とあります」さやうさやう女大學に有つたつけ。

▲木賊を嚙む心もち(夕凪)奇拔な題なれど、内容はオールドミスに落つるを悲んで、誰か來て強く〳〵刺戟して明るい女としてほしいがと言ふに過ぎぬ。

▲少女の悲哀(山本芳子)面かぶりた。女にならうとする頃のやるせなき悲みとやらがめつたに書いてある秋雨の日(塚越稚子)も同型。秀才文壇も文章世界も當時滿員と見える。

▲思ひ出し笑(くさいちご)桑山の陰で手を握られようとした、あののろまた、誰が寫眞なんか呉れてやる轉校しられていゝキビだわね。

▲沒書嘆(田村はつ子)田村さんは日本女學校の出身にして望月れい子、木村章子等の先蹤なれど、文運つねにつたなく臙下流に沈滯するを嘆ずる人、梨花さんは其閱歷と心の苦みとを兩つながらよそに見て、一箪をも着くるを肯んぜず、徒に悶々として破れたる境遇に泣ける人。共に與に線を畫して一歩をも他に出でざらんとす。破壞なるかな。

▲督促(宮坂はつ代)ある貧家の子がよく學校を休むので督促に行つたら親爺に凄い目で睨まれた。口惜しい〳〵とホト、ギス一流の寫生文にありさうな記。

▲新春(筑紫鐵子)夕方からお向うに琵琶が初まる、女のくせに「琵琶ひく女!口が裂けろ!」琵琶が嫌ひなのか、女が彈くから惡いのか。

▲眼病(今村春子)「稻の葉で目を突いてがんちになつた、日月も星もさ

さぬ身が悲しい」夜雨も不具者だけれどあの通威張つてるぢやありませんか、不具者には住むべき世界が無いなんてあれは嘘です、がつかりせずに回り來る春をお待ちなさい。

▲なやみ(青柳)矢張やるせないのである。も少し女らしく書けないものか、サフランの花の微なふるへのやうな胸、暗い惡魔の美しい空想の糸をズタ／＼に切りさいなむやうな風、全篇この調子だから、其舌たるさ加減想像すべし。

▲日記の中より(下野N)をさなし。

▲寂しい思(長谷川未女子)「いゝかいと優しく首を抱かれた時なぜか頬に涙が傳はりましたのを兄は目早く見つけて拭いて下さいました」停車場でだ。尤夜は夜だが。

▲過去の夢(明ノ星)「友と手をつらねて海岸に立ち其薄命なる樹?物語に泣いたのも昔となつた。友は東都に理想を果し、自分は依然として教鞭を執つて自然の寂しさに泣いてゐる」いつも言ふことだが、筆を執て書く以上印象を明らかにするよう、第一は讀者に何ものかを示さねばならぬ義理が有る、曖昧模糊も事によりけりで、かう言つては惡からうのあゝしてはいけなからうのとつまらぬしんしやくをするので、獨合點になつて了ふのが多いのだ。覺めよ覺めよ、日すでに東天に上れり。

▲水の流(浮草)「日記帳にしようと雜記帳を買て來た「日誌」では平凡だからちと風流な名をと思つてさん／＼考へて「水の流とした」可愛らしいお孃さんの元三の日記である、いゝも惡いも無いので困る。京都の要司村福子の文の下手でもないが上手でも無いのに似てゐる。

▲森にて(上田郁子)「燻銀のやうな森、あをざめた手の神經」おきまり文句だ、またかと思ふ。

▲思出(椰頁みな子)「いつも逢ふ美しの君、荒い柄のお召を裾長う牡丹色のおみ帶お白粉は有るか無きかのお色の白さ、黒い瞳長い眉毛それは酒田敏子さんだつた、」夜雨集を見よ敏子はすでに亡き人ならずや。

▲早婚(大關花子)「人は早婚だといふけれど親がしろといふからした、女なれば女の道を踏んで女の道を盡さう、世に早婚を忌む人はきつと御飯を炊くことも知らないのだよ」罵倒し得て當れりや否やは知らず、斯くともこんなことを考へる女は幸福だ、どぶ泥を呑んで玉の井よりも甘しとし、相手なくてひとり在らんよりは寧犬たり猫たることを望む者である、度しがたい哉。

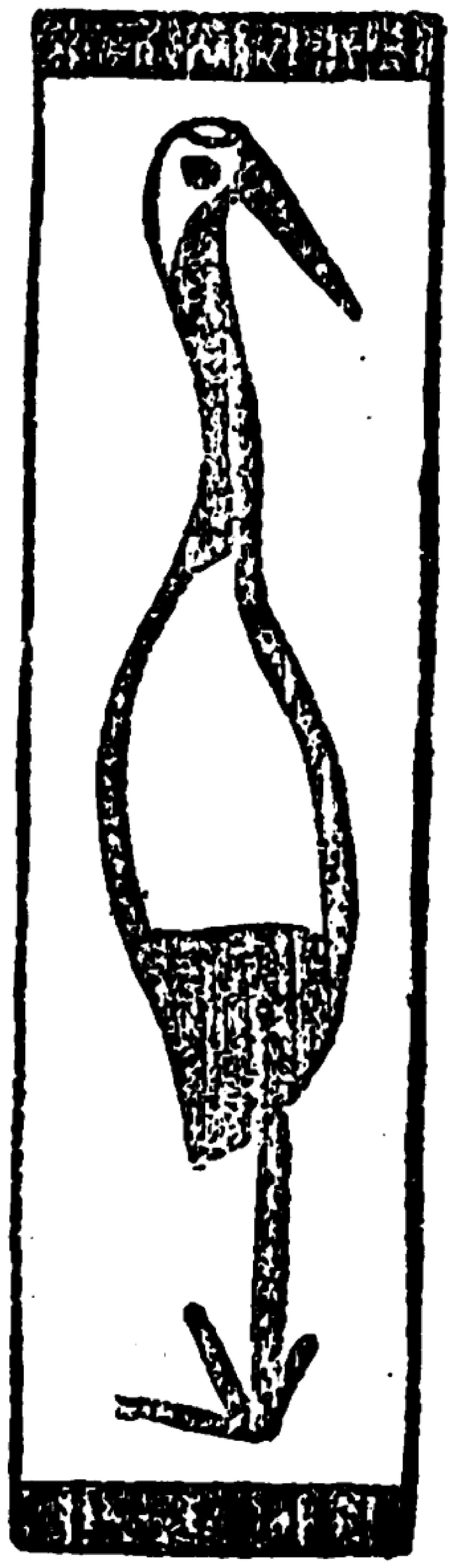
女なれば女の道を行く、それは立派な覺悟なれど、結婚以外に女の道は無いとすれば、女位くだらなく女位なさけないものはあるまい「かなしむ勿れ君はたゞ、いなごの如く生めば足る」とわが友はうたつた、以て幸福なる君達への賤とするに足る。

處女は、崑崙の玉よりも尊く、曉天の星よりもいさぎよし、地に擇ばれ天に問はるゝ者は處女なり、處女の純潔は絶對なり、處女の威厳は帝王も犯すべからず。何ぞやこれをやぶれたる履のごとく棄てゝ、軀を匹夫にあたへて悔いず、强顔其幸福を語るを爲す。知らずや、犬豚だも且結婚す。

▲別宴(大分みね子)「引替へ／＼七度まで友は着かへて出た、金ぴかの打かけ姿は花やかだつた、美しかつた金紗、銀紗のいろ／＼に眩されて唯もうまあお美しいといふより外なき二十餘人の女に交つて自分は酒に醉はされたのである。囚はれに行く身に何の光榮かある、夢のやうに人形のやうに、嫁いで行つて、目さめた時の友には何の誇りが殘らうたゞ一夜一つ髑髏！」一代の榮花を一夜に縮めて尊き處女の命の亡び行く日もと知らずよろこび勇んで行く者は無論こけすけだが、どういふ積りでわざわざ人を呼んで仕度を見せるのだらう、關東には無いが、無論東京にも無い三々九度の盃は喜劇の幕明きと思つてる自分だから、嫁に行くとて盛裝する女を見ると、氷の如き冷笑が唇に浮ぶ。(以上S)

▲馬齢又一を加ふ。お孃さんもいつか婆々さんになつて、甘つたれてばかりもゐられなくなるから滑稽だ、若い奥さんとして喧傳された小川せん子もかぞへ年二十になり、望月れい子も重い髪を結ふやうになつた。今は十代の人として殘る者木村章子河野まき子の二人のみ。耻かしがりの夕ばしも字の上手な江森美子も、いつまでもすましてゐられなくなつて來た。さあ大梵鐘が鳴る、日が暮れる、嫁に行かずんばあるべからず。

▲嫁にいらずのもいゝが本も讀んで貰ひたい。此頃つく／＼情けなく感ずるのは讀書力の乏しさだ。おのろけも「我はもよ安見子獲たり、皆人の獲がてにすとふ安見子獲たり」の輕い所から「吉野山峰の白雪踏分て入にし人の跡ぞ戀しき」の絶頂に立てば難有いが、自分のばかを廣告するのが多いのだから無殘だ。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　仙臺市　きくぢ

戀といふ赤きほのほはいと深き心にあれど白き花めづ

○（地賞）　茨城　浮舟

袖うらの青き綸子にふるゝ時身はをのゝきぬ強きうれひに

○（人賞）　岡山縣　入江今子

素足して君がましろき百合をつむ姿をおもふ夕月夜かな

佳作

○　羽後　小島けん

幼き日鞘失ひし小刀のくもりの去らん時もなきかな

○　長崎市　三根千佐子

丈高きオランダ人に馴れよりていなゝく馬のいとよろしけれ

○　岩手　露草

自らが輕んずるまでなりしとも知らでや君はよきふみたまふ

○　本郷　平塚白百合

身にしみて匂ひ覺ゆる春の夜の鏡の中の黒髮の色

○　美作　葉蘭

わりなくも灯は赤々と目開きて我上に照るあぢきなきかな

○　信濃　熊原とし

春の雪すこし積りぬ笹の葉にさびし心の疵あとのごと

○　大阪　三木白菊

水のごと靜まり果てしわが胸にさしぬ綠の初夏の日は

○　琴子

いつの日か魔のほら穴に近づきて毒ある風に身を包まれし

○　伊豆　加藤篤子

たよらなる光りの中に一筋の風のおこりぬもの語る時

○　茨城　田村はつ子

白楊の若芽にそゝぐなつかしき雨のおときゝ物おもひする

○　岡山縣　藍舟子

七少女一室にありてそを守る男のわれのわかきおもひで

○ 岐阜縣 佐藤史子

如月の風の悲しき褐色の若芽の顫ふ風の悲しさ

○ 三國町 堀端葦月

悪戯に人のゝしれば鼠來て夜は髪ぬくと云ひし母上

○ 宮城縣 齋藤靜子

一生に一日よろこびある如く竹林に散る紅椿かな

○ 岩内 美耶子

幾度か御文やくにためらひぬわすれんためになすならねばか

○ 千葉縣 松崎きよ子

若き日の夢の墓場のふるさとよそこにいたりて泣かんとねがひ

○ 福岡縣 橋本みつよ

われ戀ふる人ありと知り其日より強き女のかなしみをする

○ 伯耆 新田春子

春の夜の若き役者が化粧する鏡にゆるゝ灯火のかげ

○ 大阪 中戸花枝

母上にとりのこされし人の子はあれのに住まふ心地こそすれ

○ 堺市 西村みち子

冷やけきわが手のひらを胸にあてしらべくるしき人を思ひぬ

○ 石川縣 靈梅翠月

がた馬車に乗りたる人は馬を見て皆涙すれ春のくれがた

○ 群馬 知世野

めでたくも盛りなりけり我がよはひされども寂し世をはばかれば

○ 伊豆 しげる

きれぐ\のよきかの甘襲秘め置きて一つにつゞり舞衣にせむ

○ 伊豆 上原京紋子

白梅の一つの甘香を放ち少女の心ものに驚く

○ 秋田 石田美子

ものはみな美しかりき君とわれよりて語りし如月の宵

○ 岡山市 立岡房之

嫁ぐ子の島田にさせる簪のかゞやく色を妬みそめつる

○ 仙臺市 櫻子

我胸の思ひは遠き北のはて雪ふる里の君ゆゑに泣く

○ 仙臺市 赤間とし子

堪へがたき戀のおもひは激しくも吾が胸かみぬいかにすべけん

○ 岡山市 日下部新子

棉の花ひらりくと散りにけり羽子つく人の黒髪の上

○ 伊豆 水の花

霜月の野をゆく人は戀といふ眞夏の花を見しや見ざるや

○ 下野 高村多喜子

青春は日毎ひごとに身を去れどつゆ變りなしそのかみの夢

○ 群馬縣 宮田くじ子

友もなし戀人もなし今日の身は汝にまじりてちらまし櫻

○ 信濃 長谷川未女子

戀知れどさり氣なげにもよそほひて寂しくありぬ少女子なれば

○ 奈良縣 奥内美代子

あじきなく君を見つめてこの戀の末を思へば涙しながる

○ 呉市 山本哲子

あら浪のさわぎし胸もいつしかと帆走る心地すいとうれしけれ

○　大津　露草

わが心大理石のごと時々に冷たくなりて何事か耻づ

○　岡山市　冨山千登勢

そのかみのかたみの花は色あせぬ君のなさけは知りがたけれど

○　長崎　愛花

新らしき春迎へぬと云ひながら年を重ねしかなしみをする

○　後志　櫻井露香

今はたゞ一人の君に捧げたる我身なりやと思ひて笑みぬ

○　宇都宮　松井緑子

しめやかに澄みて悲しき秋の夜を涙ながらに琴たゝくかな

○　福井　明の星

いと熱き玉といへどもひゆる時ありとこそきけ戀はわれせじ

○　福島市　吉岡なを子

梅の香の清く漂ふ春の宵法師尋ねん桜川の里に

○　福島市　遠藤喜美子

嫁ぐてふ君が齡を數へては身を寂しみぬ何となけれど

○　波島　美津子

のどかなる春の夕べに灯ともして歩めば悲し人戀ふる我れ

○　王子町　大浪露香

初秋の野分の風は我が頬をば物知りがほにあざけりて吹く

○　岩見澤　清川ゆき子

しづむ日の藻岩の山にあかき頃たゞなにとなくなみだしてゐぬ

○　近江　鈴蘭

春たちぬヴヰオロン樂の美しき調べ心地に遠の山より

○　福井縣　佐藤智惠子

千里にも思ふ心をかよはする夢のこひしと人二人云ふ

○　會津　桑原仙子

わが二十嫁ぎ車に花かざる日も近づきぬ山ざくら咲く

○　奈良縣　東本勝野

戸に凭りて春の富士の嶺眺めやる人美くしき夕月夜かな

○　大阪市　金田ふみ子

女の神を拜むが如く胸をどる春の朝に君を見る時

○　若狭　城子

よくもかく熟睡せしよと轉寢の眼ざめしのちにわれをおもひぬ

○　茨城縣　中島靜花

葉をすべるしづくの音の淋しさは今日この頃の我が胸に似る

○　佐渡　わくらば子

かりそめの風にも浪のあらく立ち遠方見えぬ島のさびしさ

○　大阪　梅邑愛花

とき色の櫻模樣の衣かさねおぼろ月夜を小琴ひく人

○　大阪　つゆ

花咲きておぼろ月よきこの宵を何にうれひて泣きますや君

○　水戸　濱路

火の上にふとふれ合ひし君が手とこの罪をのみざんげす神に

○　備中　小田美鳥

君や來む我や行かむとはかなくもさだめえずして過ぎぬこの日も

○　石川　まさ枝

狂ふなる血潮をむねにかつしづめ母と衣ぬふ幾日ぞわれ

○　大阪　村田艶子

紅き花手すさびて居りやるせなき戀路に似たるこの紅き花

○　神戸市　足立春子

天ッ神このさすらひの少女子を哀れに思す御心の雨

○　三重縣　駒越くに子

加茂川の水のひゞきと明方の千鳥のこゑに去りもかねたる

○　近江　千代香

戀なるか會はねば泡と消ゆべきを會ふが罪なり思ひのつのる

○　滋賀縣　市川久子

若き身の誇りも知らず戀知らず馬を友としおくる日のうし

○　横濱　夕野萩子

美しき西の都の追懐はルビーの如く我胸に照る

○　伊賀　中村こま子

月冴えて高燈臺のうすあかし松影寒く二人行く影

○　金澤　しはくみ

つよかれな戀人とよぶ[illegible]れよりも五つ上にておはするなれば

○　神奈川縣　しうん子

親ゆゑにあぢけなき世をかこちつゝ猶戀し合ふあこがれごゝろ

○　小樽　吉成愛子

いくたびか結び直せどくせづける髪わびてなく少女子われは

○　徳島縣　龜田きん子

みづからの心いさめて嫁ぎこし去年の今日とふと泣かれぬる

○　淺草　藤本和歌子

我に似て夢趁ふ身かやひもすがら花より花へ蝶の狂ほし

○　萩の里　姫小松

戀人を見捨てしわれのこしかたをけものと云はゞやうたらふべし

○　東京　横谷幸子

きらきらと朧月照る途にあまたみ佛のり來と思ふ

○　久留米　紅潮汀子

初東風は淡く降りつむ門松の雪をば少し散らして行きぬ

○　筑紫饒子

玉の如火の如かつは花の如世にうたはるゝ戀にこがるゝ

○　美作　ほうし

水よりも雪よりもいと冷たきはつれなき人の御胸御ことば

○　龍山　あき子

くれなゐの南天の實の落つる時君を想ふて寂しく笑みぬ

○　東京　島貞子

夜の夢ははからず覺めて息ずなり靜やかに聞く春の夜の雨

○　淡路　内海千鳥子

かず多く君のたまひし文がらは錦にあやにかへぬたからぞ

○　渡島　露子

あるまじく心奪はれ喜びしその若き日の戀かへりこよ

○　茨城縣　中島九二子

佐保姫のみ化粧水のこぼれ落ち春雨となり若草の萠ゆ

○　東京　赤蜻蛉

かりそめの君が言葉も我が胸にはやちの如きなみをおこしぬ

○　城南　小島美雪

かなしくも君と別れてふりむけば森のとばりに隔てられぬる

○　秋田縣　千代子

我が戀は瑠璃の光に輝きぬ軒のたるひに日の映ゆる時

○　茨城縣　直井はる子

子等あつめ物語など讀みてあり春の日遍き芝生の上に

○　米澤　相田とみ子

さらさらと窓に音する白雪は天の少女の訪づれに似る

○　大分　露草

妻とはた母と呼ばるゝ十七の從妹の顔を淋しとぞ見し

○　京都　中野ふみ子

エスの手に指さゝせ給へる大いなる空を仰ぎて泣きぬ少女は

○　信濃　二葉子

忘れんと云ひて別れし人なれど忘るは寂し忘れずばうし

○　淺草　藤井葉都子

宵やかにもやの匂ひてたそがるゝ海邊の家に紅椿さく

○　岡山市　石井幸子

浮世をばのがれて住める此いほり月と花とを戀人として

○　加賀　村田いと子

たち並ぶ松に白帆の影見えぬ戀の話をなさぬはわろし

○　横濱　渡邊房子

小車のかへりおそしとながむれば梅の小枝に鶯ぞ鳴く

○　牛込　西村しのぶ

悲しきは夜會がへりの君を待つ正月の夜の獨り寢の床

○　東京　瑞野つゆ子

深川や櫓の音など聞く人の黑襟やさし春の灯火

○　美作　黑瀬みのる

戀すれば小鳥の如き我胸も果しもしらに擴がりてゆく

○　信濃　世良田優子

十五の子戀はしらねど吾樞紅き花もて飾らんと云ふ

○　信濃　百瀬流琳
いかめしき大建物の眞白なる棟木の上の春の夜の月

○　東京　藤田美夜子
若き身は淋しき憖ひはた夜の賑はしき町好みて歩む

○　新潟縣　きく子
ほし紺の色の赤きをわれ一人かぞへつくしてなすこともなし（病床にて）

○　松前　川原華子
降り積る雪の解けゆくその如くうら安き日の來りけるかな

○　神戸市　緑髪子
人は云ふ墓場に迷ふ夜の風にふれ來りしや汝の冷たさ

○　沼津　山縣梅圃
去年の秋共にながめし庭の菊おぼつかなくも霜枯ぞせし

○　山口縣　椰瓦美那子
清らなる少女の指はさうび花のけたかさありて口づけぬ君

○　京都　松本つる子
春の神此の山里に訪れてみどりの絹をはりぬなつかし

○　青森　長尾にしき
狂ふなる大海原も何時しかに靜まりにけり胸はしからず

○　岐阜　若原千春
はてもなき洞か魔道かしらねども明きを恐れ君と我が行く

○　京橋　中山芙蓉
下に着る紅の衣なつかしやけしに似たれば戀に似たれば

○　府下　早川妙子
うきことの胸に滿つればひとみまづ戀しきものゝ色を見るかな

○　埼玉縣　中澤高子
息つけば面影消えぬ自らのまだしらぬ戀戀しかる戀

○　長野縣　唐澤喜惠子
何ひとも忍ばん我もまた君にゆるさるゝ事いと多ければ

○　三河　紅夢
花に蝶浮かるゝ春の夢なるかいにしへのこれ物語かや

○　奈良縣　上田萌人
愍石にうずく我影うつる時衰ろへしなど心おもひぬ

○　京都　宮原みどり
常夏の咲く家に居てをもしろく夜の波聽きし淡きおもひで

○　京都市　ほづ枝
霧の海燈臺に吹く笛の音に危く歩む黑船なりや

○　前橋　みづ枝
なほ一つやきのこしたる文がらを枕にしきてぬるとしらじな

○　越中　宮崎政子
紅の椅子に身をよせ少女子はばらの匂ひに微笑ぞする

○　群馬　はゝ木
たらちねのくしき眞清水掬へども底なる慈愛いやわきにわく

○　廣島縣　兒玉喜美子
ましろなる君がかたほに花ちると心淋しくほゝ笑めるわれ

○　橋本蝶
蝶一つ雨の小徑にまよひ來ぬ夕べの草にふしおくれけん

○　大阪　杉山花枝
淋しさを感ぜずといふ强きことおもひ初めにきわが二十三

○　山尾路　長澤美也子
初夜の鐘淋しくひゞく山寺に涙の如く散る櫻かな

○　仙臺　橋本志久子
そよ風や波の花ちる小ゆるぎの磯に遊びし春は來たれど

○　足利町　飯塚米子
さまよへば別れし野べぞしのばるゝはかなき色のさくら草かな

○　舞鶴　雲子
戀すてふ名のたちてよりあはれにも胸のとゞろく日のつゞく我

○　伯耆　新田文子
ひとすぢの主知らぬ子の黑髮に一時ものを思ひけるかな

○　愛知縣　中村白百合
高き木の上の寒さを見出しぬかすかに顫ふ雀の胸に

○　備前　武士きく子
迷かそも君の心はしりがたしと云ひ給ふがうらめしき哉

○　紀伊　宇田すゞ子

生と死の賣手買手の熟しめる病院に吾れゆくかこの日に

○　宇都宮　宇佐美園子

名も知らず我が琴の音に來ては合す夜ごとの笛をゝかめてあれど

○　信濃　南郷世珊子

紫の水晶に似る山に入る夕陽の神よわれを召しませ

○　水戸市　根佐木まさ子

別れたる人の戀しさ醉蕾なる君に似し人春の灯に浮く

○　秋田　愛子

實船枕に秘してへねし夜のゆめにも逢はぬわが思ふ人

○　信濃　三村利惠子

むなしかる我心をばむちうたん人もあらなく年の行くかな

○　德島縣　蔦紅

美しき心に住める僻のきずつかじやゝ涙にぢみぬ

○　三國町　德永廣子

彼の宵の君が諭しの情あるそのみ瞳のいまだ忘れず

○　東京　辰巳吉野

二月てふ春を迎へて我宿の梅咲き出でぬおもふことなし

○　下關　江村ちか子

白鴿は屋根にねむれり淺草の觀音堂のひるのしづけさ

○　愛媛　夕風

鏡屋の前を行く時小走りにそむきて過ぐる弱き子われは

○　和歌山　都田操

少女子は樂しからずや大空につばさを延べて日に千度舞ふ

○　王子町　高木夕香子

白刄もて我にせまりしにくき人も逝きしときゝて涙こぼれぬ

○　千住　白妙女

瞳を伏せて物思ふ身の悲しけれむかしの君をひたおもひつゝ

○　福島縣　近野菊枝子

今日も又冬枯れの道歩むなり冷たき影に追ひ追はれつゝ

○　千葉　伊東さく子

文机の近きまどにて初音する鶯ゆかしゝら梅の花

○　上毛　司城小庄

ねころべば君によりそふ心地しぬ草あたゝかきひるの春の野

○　若狹　時岡ふじ子

エプロンの白きを見ても花園に立ちし淋しき君の面見ゆ

○　金澤市　德永廣子

皿踏みし鼠の音に胸さわぐ人知れず書く戀の文哉

○　京都府　木下かをる

わがむねのもゆる思ひと語らひし戀もいつしかさめてはかなし

○　京都　壽賀子

荒さみ行く今の心をふり返り靜かに見るはたへがたきかな

○　山城　紫の花

夢に見し君が面かげ今更に忘れあたはぬ胸のくるしさ

○　山口縣　石津文子

並び行く小車二つ春の日のキラ〳〵てりて花ちりかゝる

○　若狹　津田たき子

板家根のつゝけるまちもいつとなく春めきてきぬよき衣ほし

○　備中　小見山春子

忘れ得ず有りとあらゆる姿する夢の人見る戀しきおのれ

○　青森　清子

戀ひしたふ君と道にて逢ふ時はとゞろ〳〵胸に紅き花咲く

○　水口　ほたるぐさ

文に書くその牛ばだに相見ては云ひいでがたきわが身としらぬ

○　花まさき

ゆくりなく君おもひいで若き日のわづらひ多き心をしるす

○　京都市　うら野

けさの事忘れんとして手毬をばかゝる少女の指のふるひよ

○　磯村春子

山茶花の紅はゝかなし新妻の我袖に散りやがて萎るゝ

○　土佐　番田順子

灰色のかなしき思ひしみ〴〵と身に溶みくる十二月かな

○

秋雨や七つの灯をば打つらね友とつぎゆくふるさとのまち

周防　重原美女子

○

春來れば野にも山にも咲く花を見捨ていかに雁の行くらん

高知縣　中園秋花

○

明日知らぬ露の命と知りつゝもなほ戀したふ哀れなる身よ

讃岐　たみ子

○

春の夜のまたきに月のかくるゝか文かく人のわぶらんものを

淡路　清木春子

○

うたゝねの我を起して黄に匂ふ夕日の中に小鳥かくれぬ

伊豆　しをり

○

年は逝く雲は流るゝ柔かに哀愁の語の影をおとして

和泉　北野克子

○

初戀に苦しむ我をかへり見て我とわが身をのゝく日あり

廣島縣　今井村子

○

我れも亦匂ふ櫻と諸共に世に惜まれて散らんとぞ思ふ

滋賀縣　紘翆子

○

緑り濃き庭の小松に折鶴をそとゝまらせて笑める妹

姫路　靜子

○

わが戀のしら玉君が紅の心か大き牡丹花咲く

宮城縣　長谷川紫葉

○

窓あけて吹きいる風に身をゆだね尙はも悲しく思ひつゞけぬ

大阪市　謦志水秀子

○

花ならば白菊の花氣高さは鵠にも似たる君が御姿

羽前　英子

○

心はも淸き尊き少女ゆゑ男の媚にゆるさじとおもふ

大阪市　雅子

○

春の月婣して在す十人の紅友染の匂ひめでたし

大阪市　小泉貞子

○

幹黒き松に苦しき身を寄せて白帆ながめぬ春の終日

仙臺市　登喜子

○

かにかくに文なきものと思ひしが悲しきことのもとなりしかな

若狹　長谷川英

○

やはらかき少女の胸にすくすくと草のやうにものびてゆく戀

東京　紅子

○

やすらかに幼子ねむる愛らしさそれとも思ふ春の夜の月

諏訪　石田ひさ

○

父はゝの語らふ談わが上に及ぶとしりて胸なる夕

新犇鶴　木下かをる

○

雪の朝衣かさねて爐によりて花咲く頃のことなどを云ふ

仙臺　橋本志久子

○

いそのかみ昔は知らず小屏風の鋲の黄金に灯うつるがよし

芝區　三輪鳶衣子

○

木枯の遠く悲しきひゞきして人の戀しき埋火のもと

山田市　岡村弘子

○

背のびして口づけもせむコスモスは戀にやせたる我にふさはし

大阪　舜草

○

花も葉も皆かれはてし我が庭のひろきにひとつかはせみ下りぬ

府下　荒井春子

○

生き別れ恨むは道にあらねども淋しきものを父上われは

秋田縣　森嘉久子

○

墓場よりかのあさましき怨靈が迯ひ出しぞと君に文かく

渡島　田山淸子

○

何となく悲しき日なり雪ふりてくらし夜まで泣かむと思ふ

信濃　工藤淸子

○

三つばかり年下の子とはしやきて笑へるがふと悲しくなりぬ

若狹　英子

○

秀でたる才もつ人の終りにも似ずや紅葉のうつくしく散る

横濱　渡邊房子

○

あはれにも時雨の中の桐の葉に煙のはひて碁れゆくものか

愛知縣　芳子

○

水色の窓掛かゝげくれなゐに海の彼方の日おつるを見る

和歌山　都田操



人事（散文）　編輯局選

○母

土佐　誉田順子

雪のある處から無い處へ、日光がまはつたのであらう。今までは、陰氣くさかつた障子が、寂しい暖みのある黄色い、光にぬれて、もうい丶かげんに、ひからびた軒のほし大根のかげが、フラ〳〵ゆれてゐる。塗骨が、ハツキリ浮き上つて、かうして、ほんの少しでも光がさすと黄な、淡い匂を覺えて、い丶氣持がする。

私は縁にでゝみた。

空には、八つ手や蜘蛛の化物みたいな雲が、どす黒く額をそめて、がんばつてゐる。あゝ、あの光も、ぢきに、うすれてしまふんだらう、門口の大きい欅がたいしや色の、ボツつりした、蕾をもつて、しめつた梢の先が、赤ンぼの指の先ばかりに、チラ〳〵光つてゐる、縁先から、すぐ續いてゐる、可成廣い、桑畑の枝から枝へ渡した、さゝがにの糸が、風の吹き樣によつてチラ、チラ、金色に輝いたり白く光つたり、消えたりする、私は、い丶物をみつけたやうな氣になつてみてゐた。

向うの山の、乾からびた萱草を、ふみ別けて南天の、房を、もつた男の子が五人上つてゆく、「わな」をかけに行くのだらう、萱の中には、楓のみばえ、か何かだらう、葉のまつかに、燃えてゐるのがまじつてゐる。

山の下の小道を、勢こんで、自轉車を、かけらしてゆく、米屋の小僧らしい、また、騰つたんだな、米が騰ると母が可愛想だ。「かう、あがつちや、米代と税と、小遣錢とに、お父樣の取るものが、やつと足つてゆくだけで、着物は一枚も出來んで。」よく云ふ、私は、それを、きくのが、たまらない。勝氣な母は、私より五つも六つも下の子が、ぢき、きれいな、娘さんになつて賣られるのをみて、氣がもめる、だらう「何あにお母樣、嫁入りなんて、馬鹿らしくつて正氣でできる沙汰ぢや無いんですね、私も、ひとりで、貧乏して食ふに困るか、色狂にでもなつたらゆくかも知れない、けども、それにや紋付は過ぎてますはね」云つては見る

が、母は矢張りやるせなげに、太息をしてゐる。山地の婆様の、大社參だとかで、ドヤ〳〵人が通る。「何を云うても、としやまひぢやものなほる事はあるまいが義理にでも參つてやらなけりや、」皆から云つて、出てゆくのである、あの群に私の母も交つてゐる。

「何ンぼ、八幡樣が、えらいとて、病の祈りをしたて知るもんかな、それあ知つてるけど、鄉に入れば鄉に從へつて、人並にせにや人の訪ひても無くなるで。」愚かなまねをやつてゐる。「人は皆仕合せだ。神樣にお祈りしてなほると思ふたり、芝居を見に行つて面白がつたり、私しや面白いものが無いで、樂しみが無い、こここで一つ、うんと錢を溜めて、又うんと使うてみたいけれど、それはできんて、面白い人は仕合せぢや、のう。」「不意と、畑の草なんか引いてゐると、しみ〴〵かう云う事がある。「けども、仕合せ、不仕合せも、何も人と比べる樣なものぢや無いんですもの。」私は橫顏をジッとみてゐると、何となく、痛々しくなつてくるのである、私は、今、皆に交じつて母は、何を思うてゐるのだろうと思つた。(天賞)

餘りに亂暴な筆跡に愛想を盡して、隨分この君には辛く當つたが、文章の巧いのにはいつも感心する、ローカルカラーも出てゐるし、個性も明らかだ。皆削つたが「かう言つて」がついて廻るのはどうしたものか。(評)

此一文は自然の方に加へるべきものかも知れぬ、自然の描寫が甚だうまいもの、併し母と云ふ題意が、人事だから假に人事の首位に置くもの丶、散文の二欄を通じて、見るべき一篇だ(評)

○暗い夜

大分　紅い花

冷い兩手に頰を押さへて私は外に出ました。

あゝ、このほてり――何に憧憬れたのか、私は何も別に、これといふ奇麗な物も見はしないのに……あのかたくるしい新聞の二面記事を、祖父樣に讀んであげたからなのか知ら。

暗い夜の世界は徐々に老いて行く――。

じつと闇に透して西の方を見ると、黒い森がお化の眞似をして、風の神の冷たい膝にうなりながら泣いてゐる。

私は平らな石に腰を下しました、冷さも、寒さも、感じなかつた肉體に、冷い、冷つてい或物は流れて、着物のしまめから、細い糸の隙まから、ひや〳〵と押し掛けて來る。たまらなさに立ち上らうとしてまた思ひ止まつた。

ま白い足袋のぬくもりと、座蒲團の柔らかさで溫まつ

てゐた足にも、遠慮なく夜風は吹く。ことく〜と下駄の音も立てず、肉の冷さも忍んで私は沈默を續けたまゝ四邊を見廻しました。

幾つもく〜段になつた田が、たゞ黒く見えて、其のある一角に腰を下した私は、恰度、汽船の下等室に、幾日もく〜起臥した女の樣にぐつたりと重い疲れを覺えてゐた。遣瀨ない、苦しげな長い息が、紅いか青いかも知れない唇から洩れてるぢやないか。

鋭い星の笑ましげな光り——其の微かな光がさし込まうく〜とあせつてゐる一つの草家そこには若い男女が住んでゐる。丸髷に赤い手柄ははえて、後れ毛が、黒い眼といはず柔らかげな頰といはず、溢れ掛つて、何處からともなく迷ひくる輕い風に動いてゐるだらう。自分の唇から出る息にふれたから彼のように品よくゆれてゐるのだなとでも男は思つて笑つてゐるだらう。懷しい良人の笑顏を故しらぬまゝ女は見て、また微笑むだらう。この笑ひが老いて終つたら……と悲しい思ひも湧くのである。

淡明い障子がおともなく開いた。今まで樂しい囁きに醉うてゐた灯の光りは、パッとひろがつて、すぐ近くの川を越えて、しだいに淡れてゆく。こんな暗い所に腰かけてゐようより、あの光のさした明るい中に立つて、今私の思つてゐるまゝを思ひ續けたなら、あるひは悲しいことも明るくなるかもしれないに、あゝ私に



涙の女　深川　矢澤榮

は、弱い私にはわづか四五間先きのあかるみに歩み寄る事は出來ないのかしら。

さつきから知らぬまにくみ合はした手を、そつと袂の中に入れて、じつと自分で右と左を握つてみました右の掌のぬくもりに左の手のかふは冷たくふれた。

あゝかつては、かつては……

障子はいつともなくとざされて、うす黒い雲の千斷れ目から、弱い星の光りがもれ軒を透して家の中に入らう〱と努めてゐる。うつとりあてなく見入つた眸に、荒つぽい白味がかつた着物のしまが映つて、紅い花の心の底を見ぬきたいやうに輝いて居ました。何かしら解らないある物が……。（地賞）

この人が女なら、他日の造詣はかるべからず。されどこの文はかつて出たる臼井冷花の文をまねたるものである、しかも艶麗は遠く彼に及ばず。（評）

○日光の宿り

H、H、子

火鉢の灰をかきならしながら、霜枯の日光、夜のうら寂しさを味はつた。川の水音を初めて雨かと思つた。電燈は柔かい溫い光を靜かに投げて無言のふたりを包んでゐる。電車が通る――レールの響は遠くからつたはつてくる。都のさまが思はれて母の姿が浮び出る。せう事なしに『お銚子こちらへ頂きませう……』と手にうけた自分のかげが悲しかつた。

宿帳をもつてきた番頭は、音をたてないように障子を締めて去る。影を送つて『妻君の役がつとまつてゐるかい』と私の膝をついて笑ふ。

『私にはとてもつとまりせんわ……』と私は悲しい淋しい心を強ひて笑つたけれど、その實口惜しいのだ。銚子のもちやうをしらない私は、教へられながら、つぐ酒を一口呑んで、酒のむとお父さんに云ふな、と云ふ。ほゝ笑んだまゝうなづいて見せた。廊下の時計は、いつか十一まで音をたてたけれど、おつもりにしようともしない。

小さい事に對して、決して惡い顏をするな――女にいちいち惡い顏されると癖にさわるから、と出がけに兄に教へられた。どうせ辛き運命の醜きかげを逐ふのだあでを半衿に埋めて處女を終る夜――暗い生涯に入り行くはじめの夜の、はかない人の妻のかげを描いて見た。

醉ひの廻つたどんよりした瞳をおほきく見はつて、『これでもなあ君‥‥お前にはよほど遠慮してゐるんだよ

それをさ、御姫様然とすましかへつて、ひかへてゐられちや、實際恐縮してしまふ……さあ……』と盃を進める――そして細い眼して笑ふのだ――狂態？――と私は唇を噛んだまゝ、思ひを殺してうけるのだ。あゝにがい。

『逃げたつて、もう逃がさんぞ、働くばかりなら奉公にくる、養子になんぞくるもんか……』

『泣くつたつていゝよ…これから先きが永いのだ、二十年も三十年もかうして一緒に暮すのだ……アハヽヽヽ』……と陽氣に笑つた聲が私の胸をかけ廻る（入賞）

夢中醉ひ臥す巫山の雲、覺め來りて涙落つ湘江の水。慘なる哉この心の苦。狂態描き了へて結ぶらく「……陽氣に笑つた聲が私の胸をかけ廻る」一語何すれぞ重きこと千鈞の如き。われ等新婚賦を讃むこと一再に留まらず、而して多くは唾棄すべき中冓の私語のみ、今これ有り。清涙君が爲に流る。（評）

原「笑ふ聲が私の胸をかき廻されるやうだ」とあり、改作は土に點じて金と爲せるもの、作者夜雨に謝せざるべからず（評）

○印象

紅予

尋常一年か二年の時だつたらう、作文の時間に先生が昨日公園へ行つた事を、何とでも一口づゝ話してみよと云つた。最初に名指された子が、きのふ公園へゆきましたら櫻の花がたくさん咲いて居て大そう綺麗でした、てな事をのべた。次が私に當つた、さて何と云つていゝかわからない、どんな事でもいゝから……と責められるが、いふべき事は初めの人が皆云つて仕舞つたやうで、自分が新に何といつたものであらうか、どうしても口に出ない。とう〳〵黒板の隅に私の名まへが書かれた、ぞつとした、拭ふべからざる恥辱を浴びたやうな氣がして、その字を見るのがもう堪らぬ思ひがされた。

次々と人はみんなそれ〴〵に延べた未だつぼみの木もあつたとか、散つたのもあつたとか――中には人と同じ事を云つたのでも先生はニコ〳〵と點頭いた、私は同じ事云つてもいゝのか知らと不服だ。た、それでも同類四五人の名が黒板に並んだ頃、「皆さん紙に書いて出しなさい」となつたので、私は泣き泣き兎に角人の云つたのにならつてかき始めた、それに一寸こんな事をそへた。

『……よその學校の生徒さんもたくさん來て居られてたいそう面白うでざいました』

頭を去らぬ黒板のあの字が終日いやな〳〵思ひをさせて、翌日、未だあのまゝになつて居るのかどうかと、

ドキ〳〵し乍ら教室をのぞくと、跡方もなく消してあつたのでホッとした。

二三日の後、私と外に二人は、みんな包をかゝへて歸つて仕舞つたあとのガランとした教室に、一番前側の机で、與へられた罫紙に先日の作文を淸書して居た、何とか會に出すのだといつて運ばれたのだ。先生は三人に一々字くばり等を敎へて側について居られた。

先日の恥辱、今日の名譽、私はあの誰も云はなかつた終りの一句が効があつたのだと思つて居る。

作文の道豈他あらんや。人の未だ言はざることを言ひ人の未だ語らざることを語るものは常に一位に在ることを得。其事愈高ければ其名愈高し。

昔は王昭君、漢宮より出でて胡都に嫁げる時、或は上馬啼紅頰といひ、或は可憐着書漢宮衣といひ、絶色天下無一失難再得といひ、風沙無情面如玉といひ、古來其薄命を傷まざるは無かりしに、ひとり世にすねたる王安石有り、歌うて曰く、漢恩自淺胡自深(カンノオンハオノヅカラアサクコハオノヅカラフカシ)。人生樂在相知心(ジンセイノタノシミハコヽロヲアヒシルニアリ)と。腐儒之を以て不倫と爲せど。かれも亦賣られたる明妃の却て死所を得たるを思ふ。唯模倣を知りて、個性を描くを知らざる者はあはれむべきかな(評)

○狂女

本鄕　平塚白百合

青いやうな月光がボーッとうるみを持つて、霜は白金の金粉をこぼしてゐるやう、そして何事か起る前の靜けさのやうに、街も樹木もヒッソリと、冬には不似合の夜である。

其處へフト眞に思ひがけもない故鄕の親類から、よし野、かう云ふ娘が只一人で、車をのりつけた。はぎ暦ももう十枚足らずといふ年暮のせわしい數へ日何しに來たろうといふ疑惑は一樣に家人のかほに渡つた。

よし野は何にも云はぬ。

火鉢のへりをなでゝゐた手がいつかやんで、うつむきがちな小さいハリネヅミの目のやうな瞳からは涙が押し出されるやうに出てくる。

母は皆あちらにお出で！かう云つて人をはらつた。

一時間の後に母の肩にすがつて、涙であらつたやうなよし野の顏を、胸痛く見た。

よし野は二日許、屛風の影や炬燵ぶとんにかくれて泣いた。

よし野は心をさゝげた只一人の男があるのだ。

そのうわさは、もう親類中、公然の秘密となつて、春にならばと云ひ合せてゐた。

そこへ何もなく不意によし野は入つて來たとき、父や母許でなく、家中は汽船の通つた川波のやうに荒れ動

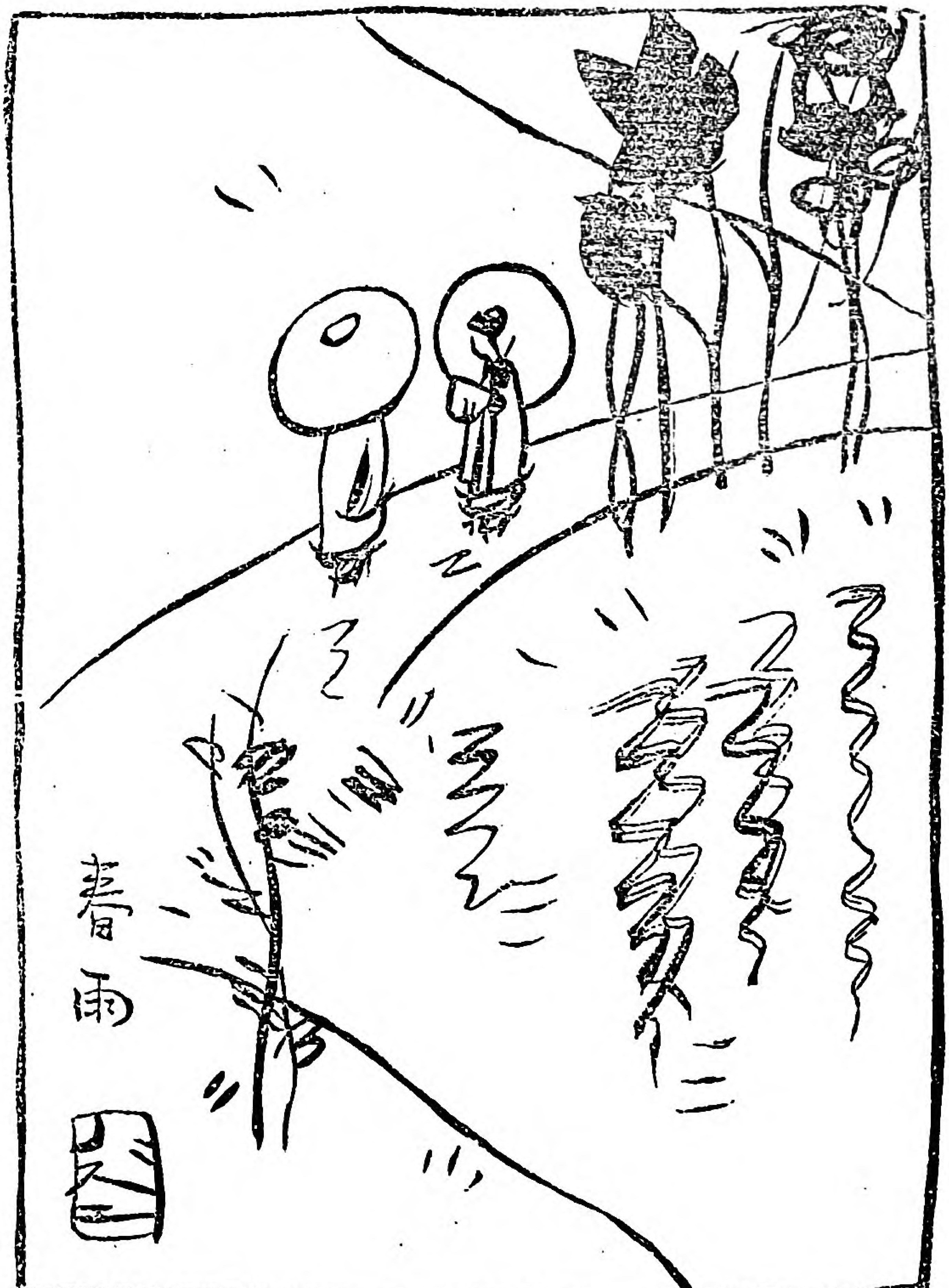
揺いた。
三日目の午後、故郷からは六錢切手が目につく厚い手紙がとゞいた。

父はだまつてその長い手紙を膝の上にひろげた。そうして何時迄も同じ處を見てゐるやうだつた。

その夕——

根もなくよし野の頭は亂れてしまつた。そうして、あかれた男の名をなつかしさうに呼んでは何處に反響があると云つた風に耳を傾けてゐる。それが次第に呼びつゞけられると、障子も襖もへだてなく、何者にか誘はれるやうに突きすゝんで、凄じい響と、神經的に上ずつた高いこゑが家中にふるへる。その様子がたまらなく酷たらしい。

母は夜中、から夜具をムックリはねてぬけ出されると身ぶるひが出るといふ。狂體になると無理に冷たい凍るやうな水道の出口に頭を打たせた。



春　雨　　長野縣　秋丘こずゑ

よし野の意識は夜の沈靜に誘はれて狂ふのである。度度水に打たせる髮は油をぬるときもない。櫛の齒すらよくは通らずに丸められて、ほぐされて、只くりかへされる。

よし野はあれで終るでせうか。

父の眉の邊には苦痛の色があざやかによまれる。

動坂へ歸へろう、かう思つて玄關迄出た事もあつたけれど、私の薄氷のやうに薄い破れやすい心は、懸念しながらも、現實に勝ち得ずふれて行く人を、熱い目して見なければ止まなかつた。

靜かに考へるとき、よし野は美しい戀を味つた女だ。一人からその心をうつさなかつたそれが、私のもつと美しいと思ふ戀である。戀とは只一人であつてほしい。一人から一人へと移るそんな淺いものではあるまい。只一人であつてこそ戀の價値も崇いものであろう。てんな清い玉のやうな戀を育て得ずによし野は狂ひの人となつてしまつた。よし野の口から男の名が唄のやうに流れる!! 私は哀詩をきくやうにそのこゑを聞く。そして感じやすい胸は涙を一ぱいにして、引立てるやうに水口につれて行く母の姿が、荒くうつるのであつた。

何の辭も、いやみもなく書かれてゐるのが好いと思ふ(評)

◎十年後

備中　小見山春子

お母樣夫では上げてやりませうか私くどい樣ですけれどせめて盆のお正月迄もと思ふのですよ、けれどどうせ一度は、身體が大きいので今にも上なくては見っともない私思切上げます長く延んだ毛が衝いて眼を痛めます臆夫にしても可愛ものを、上げたら最後もう此儘顔は見られない、悲しさ名殘惜しさに前に廻り横に眺めて手が鈍ぶつた、昨日丁寧に剃つてやつた額は一體に白い顔に一際目立つ美しさ濃い眉毛は際立つて一層濃く見えるけれど、生際の短い毛は幾等チックを塗つたとて上らないで、厭になつた、此儘短い毛が延びておとなしく根迄居くのは未だ數月の辛抱を經なくてはと思ふと、漆の樣な髮、奇麗な可愛らしいお顔と稱めたたへた人々に當分會はし度いと迄思つた、といても〳〵根が揃はなくて、上げた當分横に垂れた毛ピンと上に向いて跳ね上つたお轉婆らしいなどと思ひ續けた。

丁度私が尋常四年の冬だつたまだ後丈上げてお稚兒髷結つて友仙の派手な被布着て其頃拜命した監督生の徽章を懸て何の苦勞もないので、白い盞しの或日お習字してる間に私の姿を水板へ先生がお書きなさつたお友達の大方は大人らしく横や前迄上げてこと羨望に堪へなかつた矢先書いて頂いた自分の姿が餘りに小供々々して居たので羞かしくて仕方がなくなり來年からお正月からと云ふ母樣や姉樣に散々すねて、倒に上げて貰つた私は夢中で嬉しかつたけれど姉樣は細い指先で髮を結んで下さる度自分の事にして早く延びよと丁寧にお茶や時々髮附で上げして下さつたが短い毛を附け樣として髮附の爲に毛が引釣る事があつた時等縮子附じやない事よついねと優しく私の機嫌を傷ねない樣に心をお遣いなさつたが何時も同じ事を繰り返して矢張下して居た方が可愛らしかつたと仰つた事が今尚耳に殘つて居る今は去き姉樣も矢張今の私の樣なそうして上げて下さつたとおもふと。今後十年彌生は誰の髮を上げてやるだろう十年短い樣で長い十年。お嫁入前の彌生お母樣と可愛い子供の膝にむつかる自分を空想して、婦人のお小使にはどうしても大すぎると仰つた保險金も其頃受取られると思ふと希望の胸が騷々敷動いて珍らしく微笑んだ。

珍らしく私も微笑した。かつて長曾我部菊子の作に妹の髪を上げるといふのがあつた、其子も今は十六か十七かになる、尤春子さんは奥さんだが。（評）

○偽らぬ女の心

茨城　耬斗榮

「そりやあね、私だつて允分に人りやしないけれどそう〳〵いゝ處ばかりはなしさ、いゝ加減に決めてしまはなけりやあ、何時迄經つたつてさいげんがないぢやないか？」と母はいふ。

「いやです〳〵誰があんな――××風情に……それも前途に目的があるとか、將來に望みを有するとかいふならまだしも、考へても見て下さいまし、あの人格であの係累でいゝえ、いゝえ、決して地位や財產を望むわけではありませんけど、正直な話しが詩人でもないのに淸貧に甘んじるといふ事は出來ませんわ、少なくも此の心を解してくれる人でなくては…」心には思つたけれど、どうしても口へは出せなかつた額をふせてみじろぎもせぬ娘の行爲を何と見たろう、あゝ母は何と解したろう？淡き表情は竟に何の甲斐もなかつた「沈默は卽ち承諾を意味するもの」こんな簡易の判決のもとに、はなしは用捨なく進行したらしい。私の眞摯に熟考しなければならぬ時が來たのである。

聰、父母のいとし子として育くまれたる子は、矢張父母の命令に服從しなければならない義務があるのだろうか？自己の性を拋つてまで他に從はなければならないのが、世に生し女の運命なんだろうか？こんなことを思つて、悶えて、一睡もせぬ夜がもう幾夜か續いた。



小春日和　井上艶子

犧牲の結婚――囚はれたる人妻――あゝなんて悲慘な叫びであろう。母樣もあんまりな。父さまは男だもの、娘の心の奥深く秘むる思ひをぞんじあらうはずがない、只刹那の喜びに滿足して居らつしやるのだものを……。

「――犧牲です、あゝいつの世か犧牲に泣くものが絕えるでせう」泣いて去つた人を今更ながら思はずには居られなかつた。

「君よ、み心靜め給へ、おなじ思ひになく我れあるを

亂るゝ情緖を靜めんがために、風號ぶ黃昏の街をあてもなく彷徨つたふと、望む月波の秀峰!!!お、彼の人よ!!!

苦しき聲の十里の彼空に屆くものならば、どんな大きなこゑでも叫ばうものを。

目を閉づると淚が落ちる、人にはいはぬ胸の思ひに……

矛盾有り、撞着あり愛無き結婚の罪惡なるを知りつゝ、なほ賣られ行く女の淚をおもふ。（評）

○春近き日の朝

岡山市　富山千登勢

こなたの座敷はめでたい座敷――
鶴と雛とが拜を舞ふ――

賑やかなはしやいだ唄を歌つて、輕さうに杵の音が響く。外はまだ灰暗い、靜に星の崩れる朝である。

ねむい目を擦り擦り、それでもかひぐしく白のエプロンに緋縮緬の襷をかけて茶の間へ出ると、カツト明るい電燈の下に右往左往、皆忙しさうに動いてゐる羽織の上に襷をかけたのが、いかにも横着らしく見えるので、羽織を脱ぐと身の毛だつやうに寒い、今朝も大霜であらう。

臺所の庭では紺の筒袖に黄木綿の襷、同じ色の鉢巻をした男が三人、臼の中の糯を丸めたやうに柔く、暖ざうに湯氣の立つ餅の上に、いせいよく杵を打ち下して居る。庭の外に据ゑられた、昔噺の鬼の釜を思ひ起すやうな大きな釜の湯は、氣味の惡い程グラく沸たつて、其上に重ねられた幾つかの蒸籠からは、白く湯氣が立ち登つて居る。

めでためでたが三つ重なれば――
鶴が御門に巣をかける――

雙蓋に粉を敷いたりして居ると一番臼は搗けた、「サア搗けました」と輕さうに引つ下げて、間中角位の粉で白くなつた板の上に投げ出す、と後へはパツゝ湯氣を立てゝ蒸籠から、眞白く艶やかに蒸し上つた米がうつされる。三つの杵はまたそれを練り初める。

「サア、揉むんですよ」叔母さんの聲に板の前にかしこまると、お鏡を取つた後は小餅に切られる。節くれだつた鍛の足のやうな指で、小さく切つては投出し切つては投出す其早さ、お祖母さんに叔母さん、私の三人が一生懸命に揉んで居るけれど揉みきれない。まるで掌に握つて居るものを投出すやうである。切られて久しくなつたのは其儘冷えて恰好よくならない。

それはまだ前髮下げて、トンボの尻つ尾のやうに、それでもお下げの積りでやつと根にとゞく後の毛を頸根に括つてゐた頃であつた。邪魔になるといはれるのを泣いてまで無理に起きて、着物をきせてくれるものもないので前下りに着たなり此板の前に座つて、小さい手には餘るやうなのを危い手つきで丸めた。そして上の粉が剝げ餅の艶が出て光るやうになると、幾つも幾つも竝べられた外の餅の傍に竝べては小さな誇を感じるのであつた。

揉み終るとまた後のが搗ける、息を吐く間もない。手に取れば丁度十幾年かの昔、母が添寢の寢覺に懷深く探りあてた乳房の、それのやうに暖く柔いなど思ひながら、丸めては竝べ、丸めては竝べした、こんな事を幾度か繰返した後、水にひたつて白く艶のなくなつた桶の米は盡きた幾らかの祝儀をやると皆丁寧に禮をいふて歸る。

「ヨイサノヽ」の掛聲は冴えた駒下駄の音に和して遠く遠くなつて行くホツと一息すると茶の間の鐵瓶の蟬時雨しづかに夜はいつか明けておた。戸を繰る音。人の足音、車の響などあわたゞしく聞える

唄が少々お景物過るけれど、全體はうまく書けた。（評）

○冬の日

深川　矢澤榮子

冬の日が南側の緣側の障子のガラスを越して、文机の上一ぱいにさし込んだ。灰色の惡塵がさも馬鹿にした樣にゆつたりとうづまひて居る。口惜しいから目茶苦茶にかきまはすと、今更びつくりした樣にあはてゝさわぎ出す、さわいだかと思ふと又、冷笑した樣にゆつたりして居る、私はジツト太陽を見つめた、けれども弱い人間の目は、ギラくする強い光線に、にらまれてすぐ泪が眼一ぱいにたまつてしまつた。

フト目を本の上へおとすと、黃色や紅色の小さな玉がコロくころがつて居て、黑く書いて有る本の字が靑く見える、いくら眼をこすつてもやつぱりころくころがつて居る。いきなり障子をサラツと開けた、にくらしい塵が又ソツトさわぎ出した。

ツイと立つて緣側に出た、伯父の秘藏の紅梅が美しく咲きそろつたので素敵に俳佳つて見える、彼の花りんとつて見たいなと、變な氣が起つてソツト庭下駄をつゝかけて下りた、今日は誰も居ない、お竹も使に行つたし、けれどゝ何んだか氣がとがめて後を振りむいて見た、やつぱり誰も居やしない。

ビクくしながら手を段々上げて、一寸一花つまみ取らうとした時格子のリンが高く鳴つた、ハツト思つてゼイくと口笛吹いてごまかし

て居ると、緣側へ出て來たのは伯父様だ。
お歸りなさい、又後むきになつて口笛吹い居てると、信義はまだ歸らんのかい?
えゝ兄様はまだですよ學校の退は三時でせう。
大へん梅が咲きそろつたナア――、にこ〳〵しながら見て居る、そして大變嬉しさうだ、それは氣候のせいで咲くんだわ夏梅の花が咲いたらおもしろいけれども、寒中咲いたのにちつとも有がたくありはしない、と小さな聲で言つてやつた無論伯父さんの耳へ入るきづかひはないだらう。
伯母様はね横須賀の伯母様と芝居へ行つたのよ
ウンさつき電話でそんな事言つて來たつけ。
私が一人で留守番して居るのに同情もしないのよ。
やがて伯父様は又出かけて行つた、あゝ又一人だわ、一人で庭にばかり居ても面白くないから、信義様の室へ入つて、先日買つたばかりの萬年筆いたづらして居たけれども之もつまらない何んか無いかと家の中をグル〳〵さがしたけれど何にもない、あゝつまらないなチリン〳〵と又格子の音がしたと思つて居るところへ信義様が歸つて來た。
馬鹿に靜かじあ――ないか母様は?
横須賀の伯母様と帝國座へ行つたのよそれでね、



相撲見る人　失名女

あゝそれでお前はおるすばんと言ふ役だらうハヽヽ……
僕の方が聞かなくつたつて知つて居らア……
兄様まで斯うですものあゝやつぱり私は一人だわ……
萬年筆に氣が付くと面白いナア……
泥棒らしいのがはひりかけて戸をコト〳〵やるので、二尺八寸のダンビラを拔いて待ちかまへてゐたといふ孃さんである旦那様の兄さんの信義さんの萬年筆をイタヅラする位は屁でも無いのです。(所)

○暮の朝

茨城　芳野

風邪にばかりかゝるので、綿入の下へメンネルの單衣を姉さんに縫ふて着せられたけれどもやつぱり暖くはない、着れば着寒いつてほんとうに。
楊子くはへて裏流しへ行つたら、昨夜頭で運動致しましたと云ふやうな髮して、清子が水をつり上げて居るところ
體中ががた〳〵する程寒い。
しゆー〳〵事なしに日光のあたる風呂場の戸によつかゝつて井戸を見た。
白い暖かさうなけぶりを盛にはき出す。どこへ飛んで行くつもりなのでせう
母様から、井戸火事だとだまされて、見に行き〳〵したのはもう十とせもの昔に、なつてしまつたらうか。

今は云ふた人も居らないし、自分も云はれないやうに、大きくなつて御菓子を入れ〱した、腰上げはいつか赤いひもでさゝへるおはしよりと變つてしまつた。

幼かりし昔は、ほんとうになつかしい。

緣臺の上に、昨日清子が學校歸りに作さんとこの御嫁さんにもらつてきたのだといふ、冬菜?が五六本並いてあるのへ鶏がかゝつて、一心に青い處をつゝきまはつて居る。シー〱と、追つたけれども逃げないでにくらしいから、棚の小ざるにあつた、昨日のさつまいもの殘りをなげつけたら、逃げるかと思ひの外、もどつて來て、今のいもを食べ初めた默つて鳥の體を見て居つたら、けいとうの花のやうな、とさかが朝日に透いて、たとへやうのない程美しい。

玉子などは、どうでもよい、鳥を養ふには、眞白なのに限る、と思ふた。何故でもない、美しいからである。

ひよつと、目をうごかした時、長屋の側の、まきを積み重ねて、ある處に光るものを見た、それは、蜘蛛の巣であつた、よく見やうとすると風の工合で、絶えたり光つたりするので、ぢれつたくなつてしまつた。

「姉さんあきましたョ」「ハイョ」と答へて、取替へたての青竹のはねつるべを、ギウーと、音さして、つり上げて顔を洗つた。此頃の水は、割合に温かい。

　指先へ口のいきを吹きかけながら霜の眞白な庭へ出た。

職人等四五人してたき火に、おしりをまくつて、あたつて居る。ぼんやり、立つて見て居つたら、南の木戸から、隣のおとくさん淺黄の手拭かぶつて德利を片手に、「庭御借り申します、寒い朝だない」といふ。お醤油買に、行くらしいア、、私もあゝして、一度でよい、小さい德利さげて、お醤油買ひに行つて見たい！と思ふて、ぬれ緣へ上つて、門の外へ歩いて行く、おとくさんの姿を見つくした。

　これはいゝ。（評）

○をとめゆゑに

東京　藤田美夜

パッと電氣がつくと、皆の、のぼせた瞳が一樣に輝く。トランプにかるたに、夢中だつた若き人たちの、熱した頰を美しいと見た。

ヤ、〱づれかゝつたらしい高髷に、手をやつた時、金縁眼鏡とシャレた×さんの鋭い瞳が眞先に射る。あの眼!!!ほゝ、ゝ

去年の春迄はこの私が魅せられてゐたのだもの。何してあんなことを、想つたりしたんだらう?終ひ口元に冷笑が浮ぶ。

そしてこつちからも出來るだけ（あなたがなつかしいわ）といふやうな表情をみせてやつた。

つと、×さんの前に氣取つた坐りやうをした、ゆうさんの白粉でむらなしかし、輪廓の好い横顔をジツと眺めてみる。まつ毛の長い二重瞼のあのお瞳が、上を見るときは恰度西洋人形の樣だと×さんが云はれたさうな。お手付きを、いくらしてもその札をゆうさんに返さうともしないでニツと笑つて終ふ。

私に對しての思はせぶりか、はたそれを誇つて見せるのか…否々私は弱かつた。

こつちから、强いて嫌つて、別れた人ぢやないか。

かうさとると私は、心の底で我が勝利を叫ぶやうな氣がする。

けれど、もう一度、あの頃に復つて、氣のせい〱するやうに×さんを迷はせて私といふ形を、その胸に深く〱刻んでやりたいと切に、思つて見た。（七日の夜）

どうせ氣に入らないのは承知してゐるけれど、私のまるい顔には如何しても日本髪がいゝやうに思はれるからと、母樣にねだつて桃割に大きく結つて頂いた。これが日本髪の結ひ初めである。

「宅の母さんは私のことちつとも構つて下さらないのよ」と私はよく徃う友に云つた。だつて私の下に四人も弟や赤ちやんがゐるんですものね。その友は皆美しい高髷に上げてゐるので、私の好奇心は堪らなくなつて叔父さんの家へ行つたのを幸ひ從姉さんのをそのまゝおすゞさんに結つて貰つた。よく似合ふ、いゝお嫁さんだと叔父さんや叔母さんは仰有るけれど、父樣や母さんは何と仰るかしら。此間の桃割を見て、おさんの里歸りだとお笑ひなすつた父樣は……?

淸い鏡の面に私の笑顔が寫つてゐた。（ふつかし

×さんを迷はしてやつた程の女豪が、これまで島田に結はなんたといふのはちと受取れぬ、私共まで迷はさうとするのではあるまいけれど。（評）

○拔齒

前橋　みつ枝

何といふ靜かな暖い晩だらう。

母と長火鉢に向ひ合て、四つの手をかざしながら、長い沈默がつゞいた遠くから幼い唱歌の聲がトギレ〳〵にきこえて來る、人懷しい柔い情緒が、雲の樣に湧いてきて、お母さん、と母の手をきつと握つた。

アレ……何ですこれは？母の手に小さい堅いものがのつてのる、母はだまつて私に渡した。

うす黄色ろく死にはてた朽齒……母のむくろをつきつけられた樣なゾツとして私はそこへ投げ出した、年はとりたくないものだね！母は淋しい笑顔をしてつく〴〵と眺めてゐる。

顏をそむけた障子には、小さい丸髷と、大きい廂髮とが判然とうつてゐる、私は泣きたい程さびしく切なくなつてきた。（或る夜）

世に佛骨といふ物を遙々と印度から迎へとつて崇め奉れる坊さんがある。お母さんが百年の後には、礙ながつて放り出した齒も難有いものになるでせう。「遊藥の玉を欺く白露は釋迦の涙がありがたや、ところへ蛙が飛び出て、これはおれがの小便ぢや」（評）

○東都の兄へ

備前　我澤忘な草

兄さんてば、隨分な、面白いことうんと書いてよこせと云ふ癖に、タアちやんはいつも冗談ばつかり云つてよこすから僕のおへそが宿がへするつて、まア兄さんのおへソはお尻が輕いのネ、それぢア今日は眞面目に書いてよ。

先刻まで大聲あげて本の復習してた、茂ちやんふと聲がしなくなつてネ私不審に思つて襖をあけると、こはそも如何に、驚いたぢやありませんか、茂ちやんてば、父樣のフロツク着て、顏に八の字書いて目鏡かけてるのですもの私、まアつて云ふと、默れつて手をふるの默つて見てるとやがてフロツクヅロ〳〵曳きづつて、母樣のお室へ行くの、母樣はびつくりなすつて、みんな大笑ひ、笑止千萬兄さんのおへソが聯想されるわホ、先達つて××町の（從姉）露さんとこへ行くとネ、露さんのハスバンドホラ醫專のハイカラさんネ、隨分なのよ「竹さんは荘子に似合はぬハイカラだなア」つて露さんに囃やいてるの人を馬鹿にしてるわネ、露さんてばつゝゝて笑つてるのですもの、妾きかぬ顏して居たつけ、それであの人――「竹さんよくやんちや云ふから多分末子だらう」つて云ふのでしよう、妾大きい顏して「ホ誤解あそばすなしかも十四になる弟がでざいますよ」つて一本やり込めた時の氣味のよさ、今でも上出來だつたと思ふわ、あの位ひどい人つたらありやしないのよ、妾頭痛がするから歸るつて云ふとネ「ソリヤいゝ藥敬へてあげよう」つて眞顏で云ふのでしやう、妾何を云ふかと聞いてるとネ「水一合にアルコール二滴――それから驚くぢやアありませんか――モルヒネ五テキ」つて云ふのですもの、もう手がつけられないのよ、冗談にも程があるわネ、

それからまだ冗談云ふ人があるのよ、妾の好きな××先生よ、こんなこと仰しやるの、「岡山の方の女も立小便すると云ふ人があるが虚でしやう」つて、隨分ネエ、妾いかなしデーだつて坐つてするものがありますか」つて云はうと思つたんだけれど、あの妾惡まれちア厭だから默つて居るのよ、ホ、、、云つちやアいけないことよ。

極内證よ。

兄さん淺草へは變なものが居るから、學校から行かさないつてどんなもの、あの白首のお化ぢアなくつて、キツトうだと思ふわ妾、下略、コンコン狐より

狠大明人樣

この人には惡い癖が有る、男の先生といふ先生には「あなたなぜ奥さんをお貰ひなさらないの」とやたらに心配するのだ。ホシクても來手が無いんですと答へると、えゝうそよと言ふ。（評）

○納會の日

千住　白妙女

町は湯殿にと叔母樣は仰有る、勝手知つたる御湯殿の硝子戶あけると、雪より白き肌を半身浮べてきつと私の方を御見返した町さまの凉しい瞳、高髷をかすめて白い湯氣がほのぼのと登つて行く、封目かたき彼の君の玉章、紅こぼるゝ袂のふりにそと落せば、しばしと乞ふ樣になさる、何ゆゑ封切れませぬ、あざむいて嫁ぐ程の貴女ならば、今更氣弱な町樣でもないでせうに、私だつて見せ度くはない、遠からず新生涯に入るべき友に、淸さん何事もすべての過去は秘密に此のまゝはうむつてと、さゝやかれた、知るは私のみ、迷はぬ道をおいでなさい、誰にも語るまじと誓つた永久に、浜に嫁ぐ友の恐怖を知る、深き思出を殘してはうむつた町樣の半世を思へば、さすがに痛ましかつた、さなきだに我が陥き運命も思はれておくれ勝ちの町樣を引立てゝ何家の門前に立つた時は鳶の若者が松の飾り付けをして居た、花崗()敷石をいくつかふんで行く程に、重みあるりんとした、謠曲が聞える石崎樣の蟬丸と言へば、おくれて殘念でしたと仰有る、景淸、少し無理なれど是非との御所望に仕方なくシテを壽々樣に御願ひした、町樣の女郎花、浮かぬ御顏色に御翠さへしぶりがち御瞳にうるみさへ見える、早大文科の田中樣は時々の御言葉だへ、何日もゝ町樣に似ず口惜しき御樣子は少しもない、町さんも近々高砂やがあるそうですなと、言はれた、町樣の御胸の中は、決してをだやかでなかつたらう、初會はもう紅の手柄して、丸髷のマダム、などもれ聞ゆる、嬉しいとは思はぬ物をと仰有つた町樣、あゝ町樣、人なければ相抱いて泣くものを、笑ひさゞめく人々の、心ねたましさよ、來年の初會にはもう人妻、此の言葉がしきりと我が胸に繰り返へされる、街はづれの夕暮れはさすがに年末の忙しさ、ふたりは別々の思ひに沈んで夢の樣に足を運ばせた。

これも女、あれも女。(評)

○冬

伊豆　水の花

どこかで、女の人が本をよむ。細い聲がきれぎれにつゞいて行く。寂しい、嫌な聲だ、五枚の雨戶、パタパタ音させてしめる、床柱によりかゝつて、少しおちつくと、またきこえるやうだ、幾度か、自分の耳を疑つた、座つて、ぢつときいて居ると、今度ははつきりときこえる、細い寂しい、たまらぬ程、嫌な氣持がする、何故だらう、自分にも分らぬ、只きゝたくない、きくまいくと、兩方の袖で、耳をおさへて居ると、滅入るやうに、淋しい心地になつた、ぴつたり襖をたて切つて、眞暗になつた、次の間に、夜具引かぶつて寢てしまつた、寂しい聲は、きこえるのか、今度は自分からきかぬつもりでねむつた。

川から昇る湯氣が、白く朝の庭にたち込めて居る、其中に、盛りを過ぎた山茶花が、白く美しい、持て居る楊子で、枝をゆすると、ハラハラ散つた一つが熱湯のやうに見える川の中におちた瞬間に、水、水と口走つた、やつぱり水だつたらう、美しい色そのまゝに、流れて行てしまつた、何氣なく見た、向ふの二階の窓に、健二さんが、東向に机をすゑて、コンパスをいぢりながら、パツチリと目ばたきもせずに、今私のした事を見て居たさう明るく、日がさしさうになつたのに、かんかんとランプをつけてあるのが、如何にも子供らしく、可愛く見えた。

こゝからは、四五間はなれて居る。幾何の試驗のある、朝の心地…健さんの今の心地が、久し振で、しみじみと味はれた……あのランプの油のつきる頃の、なつかしい匂とまたゝきと共に……。

お祭りの日の、午後の日光を、紫、鼠、鳩羽色等の羽織の背にうけて、大勢の人が歸つて行く、その雜沓の中にぽつねんと立つて居る時、心は何物をか、とらへやうとしきりにあせる、次から次へ、はげしく視線を働らかせて、がつかりとつかれた目を、おちつかせた奧樣の顏は、ぽつと、白く浮き出て居ただけ、人形のやうな、美しさにながめられた、裏葉いろの、薄いショールの、着物に不調和な感じも、こゝでは只淋しく見えるのに、……まあ私はどうして笑つたのだらう、四つ五つの顏が、一齊に自分の方へ向いた、きまりの惡さに、「何がをかしいの」と問はれて、今五ッ位の女の子の、手からはなれた風船玉が、强い勢で、上へ上へと昇つて行くのを指さしたら、眞面目な友が、氣のどくさうに笑つて居た。

馬をひいて、十人、十五人、とつゞいて男子の群が行く、カラパンを聯想す

ると或人は云つた、三人目の、頰かぶりが、一寸會釋して通つて行つただまつて見つめて居たが分らない、二本目の街燈の光に、あゝ彼であつたと思ひついた。女郎花の束を、だまつておいてつた時、「孃さん栗花取つて來て上げますべえ」と云つた、朝の言葉を思ひ出して、なつかしい氣持で見送つたのも彼である。

いくつかの、馬が、暮れ初めた町へ、ジャラン／＼と云ふ、鈴の音を殘して消えて行く其鈴の音がとめどもなく、幼い時分のなつかしい思出を引起させる。

馬苦勞だか、馬方だか知らないが、十五六匹の馬の行くを見て、忽ちカラバンを聯想するとは、ゑらい頭だ、伊豆の國はサハラに近いと見えますね。（評）

○我さだめ

札幌　しづ

遅くなる／＼もう八時八時半とやう／＼の事で起きて御飯をかつこみさて又煙草を悠々と……それもう十分よりないぢやないか見てゐる人の方が氣が氣でないいえ大丈夫も一つとのんでさて風呂敷包をぶら下げて行く後姿あゝこんな兄樣がといつも思ひますが……それでも兄弟六人のうちの二人男そりや私の家でも大切なのですから母も云ひたい事も云はずに居りますのにそれでも夜遊んで朝おそい、兄朝學校に行く時などはつく／＼こんなふしだらでも男はそれ程尊いか私が男だつたらとは思ひますが、兄樣だつて」等と妹や私が申しましても「そりや男はちがひます」つて云はれる時、あゝ同じ人間でゐながら、男と女はそんなに價格が違ふのかしら



春隣　宇都宮　松本絲子

男より女が一段下の動物ならまだしも世の中につくすべき事でも男におとらずむしろ勝つてゐるかもしれぬくるしみも人の世のくるしみは女の方がたしかに多いその女がどうして卑められるのでせう生みの親すら男の子にはかなはないと私が一人憤慨した所で仕方がないが私は自分の兄に對して不平でたまらない。きたない事はなんでも女がするべきだ。女は男の小使だとスパリ／＼と煙草を呑んで環にふく時などはつく／＼女の運命はつらいと思ふ。男の方はよく女は女らしくぐず／＼云はずにした方がいゝよ等とよく申しますのねえ。女らしくつてどう云ふ事？たゞ默つて男にしたがひさへすればそれでよいの、女はそふ云ふ樣にすべきだといつ定められたのでせう、後に生れた女はしらぬ間に定められた、運命に泣きつゝ從はねばならない。

昔の女と今の女の思想はけつして等しき物ではないに、若き我友よ今の境遇？さだめにじつと我乞を託す事が出來ますの
女に生れたくて生れたんでもなかろうに、全く同情される。（評）

○二十歳

大阪　枝葉女

二十歳々々？とうとう二十歳になつてしまつた。あかんぼうから一足飛びに、二十歳になつたやうに思ふ。けれども〳〵、ぢつと、靜かに心を落ち付けて、能く〳〵考へて見ると悲しかつたり、苦しかつたり、嬉しかつたり、樂しかつたりした事もあるやうに、思ひます。否憶にありました。すると、やはり一年を十九へん夢の間に、過してしまつたのか知らん。だからもうもう十代の方の仲間入りは出來ないのだ。嫌だ〳〵どう考へても十代よりはなれ度ない。幼い時には早くあんなになりたいと思つた事もあつたけれども、そは、今の自分のやうな人でなくつて、實際二十歳の資格を充分に備へられて居た人を見た上の小供心に餘儀なかつたのだ。吁。私のこの眼この口この手この風姿どこに二十歳の眞價があるだらうか。あゝ情けないと思ふと夜の目もやすく眠られなくなつてしまつたらふか。人様の前で何して大きな顔して二十歳つて事が言はれるだらうか。其の都度母様繼しと今更ながらに亡き母を思ひ出しては幾度か人知れず涙を袖もて抑へた夜もあるやうになつた。思ひ出せば出す程、胸迫り、この後如何にせばやと、我が身の上のみ、案じられて、面白い事可笑い事、何事も、耳に入らず、只一人靜かな山奥にでも入つて一生氣樂に暮したいとまで、二十歳の春を迎へてからの自分の心は變になつてしまつた。

「この後をいかにせばや」つて、御心配遊ばさずともお馬に召せ〳〵と迎へに來ます、今に。（評）

○春の日

長崎　中村秋海棠

棠坊が始めて、ニンギ〳〵したつて、乳母やの喜びつたら、まるで、狂人でもは入り込んでる様な騒をして居る。乳母でさへ斯うだもの、まして、産んだ姉様が居被つしたら、どんなにかお喜び遊ばすだらうに、ひとり胸が一ぱいに成つて、涙さへ催して來た。

火熨斗をかけ終つてから、一寸、人形竿へ通すと、氣持がいゝ程、襟が折れて居る。私は着物なんど縫ふのは嫌だと云ふけれど、無性に言はれて、仕立て見れば、又嬉しい氣もする。矢張り私も女ですもの。

お孃様お手紙で御座いますと、持つて來た。誰かしらと見れば、芳子様、君は我が文筆の友、何日ぞや返事をやらなかつた時、餘りお聟様の事ばかり御案じ遊ばすと、東の方では泣いてる人が有りますよつて、隨分酷い事云ふ人。餘りせつせと縫つたせいか、頭が痛いので一寸、窓へよればもう日の光がない。見あぐる青白の空は、京で染め出した濱縮緬を夏の夕方華族様が・海岸を着ながして居られる様な想像が湧く。愛宕山の椎の木の端からは、はや新月が白く出て居る。街道の方では、今日の賣金を懷暖かに、家路に急ぐ馬子の歌も、たん〳〵と消えて行く。今頃は三菱職工の妻が、村の土橋に立つて靑服の夫を待つて居ると云ふ。晝の疲れを夕飯の膳に差向ひ、夫が語る仕事場の話を、妻は食べ散らしの片づけもしもあへず、にこやかに聞く樂しさは、之が眞のパラダイスにや。地位も、名譽も、富も功名心も、虛榮心も、捨てゝ、何の不服も言はず、淋しい此村に生活する、若い彼等は、あゝ實に罪のない人達かなと思つた。

さうです、彼等はのろけることを知らぬだけでも天國の人です。（評）

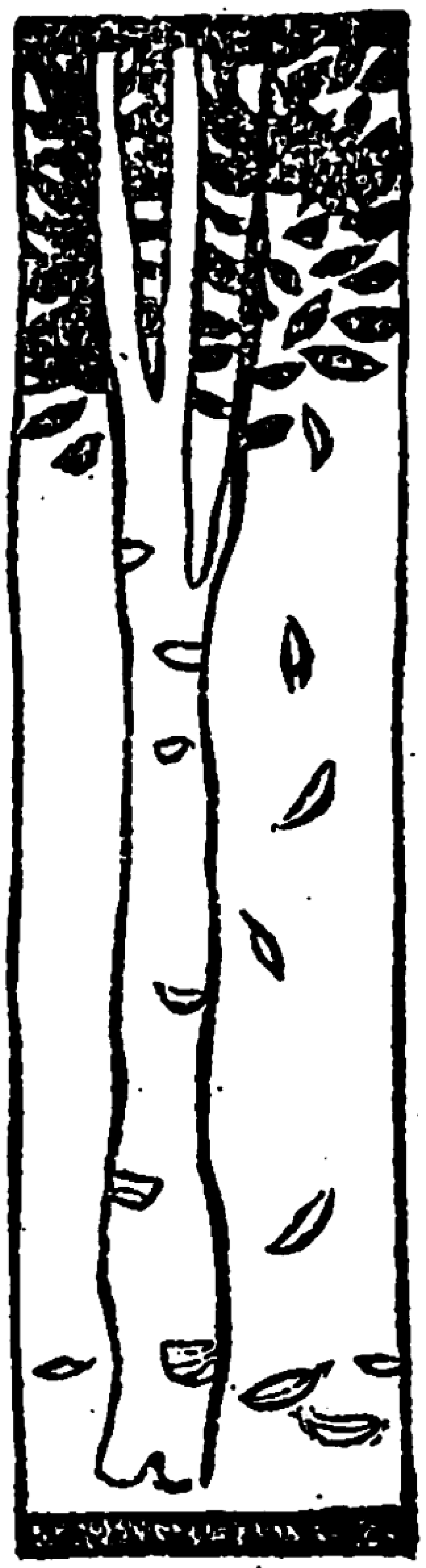
○御苑內

京都　くれたけ

此四五日それは景色が變つた。空の色に一種不徹底な曇りが深くとざし始めた。今日などさうした感が深かつた。

夕暮微かに迫る頃、御苑內を通つた。松が多いだけに寂れた姿が壓しつけるやうな事はないけれど、たそがれて行く空氣の戰きがいはん方なく冬らしい。黃色なもみぢが二三本殘つてゐる、鼠色の四邊に明るい色を浮ばせた。しかし散りに散りしいて居た。

朝毎の霜に痛められる芝草は、みるかげもなく衰れたつた。



○誇り

京都府　清香

强ひられて受けし今宵の一杯に胸くるはしくそとぬけ出でしうたげの席――人なき次の間はカーテンのすきもる夜風冷う歡樂に醉ふた若人の笑ひ聲が時々おし出された樣にきこえる、花模樣美しいテーブルクロッスの上に面伏する身そゞろ寒むをおぼえて靜に頭もたぐる刹那「美しき少女!!!」バラの造花に飾られた壁間の鏡に自分の姿を見出でて、かうした力ある叫が心の底からつたはつた、暮れゆく秋の日コスモス散り落る裏庭に胸にたゝんだ二尺の袂しつかとおさへて、逝くべき十七の生の赤や紫に彩られた甘い情緒をしたふてすゝりないた時、花はづかしい十八の姿を知らなかつた、あゝ!!!ハムサム!!!一絲亂さず結び上た桃割れの金丈長と寒椿の樣な眞紅の唇!!!ぬれ羽根色に大きく見はつたひとみと櫻色の兩ほゝ!!!何といふ美しい否むしろ神秘的な色彩であらう!!!藤色ちりめんの振袖の中の此手にも此胸にもけがれなき靑春の血潮は流れて居るのだあゝ誇り多い人生の春!淸くあれ美しくあれ!!!自分は只無意識に鏡にうつる我影に熱いキスを送つて居つた。（天賞）

餘りうますぎる、何か型があるのではあるまいか、若し眞に此れだけのことが作者の頭腦から出た感じたとすれば、前途が恐ろしいやうだ。（評）

○巷

靑森　長尾淸子

あまりお天氣が善いので、三里餘の道をがた馬車を借りてA市に出た、小邑からは何だか大都へでも出た氣で、物珍らしく市中を見步いた、僅か、三ケ月ばかりの内に店がひどく變つて居る、世の中は繁華になるにつけ、此樣に變遷しやすいのかと、何となしに淚がこぼれた、他から見て居やしないかと目をそつとふいて顏を上げると、同僚らしい人と三人づれで、H樣と突然り合ふ、嬉しいやら恥しいやら耳迄眞赤にして禮もそこく、振り返つて見たいが何となく思はれて、……洗濯屋に入たが胸がどんく手がわなくと振へて、自分で思ふ事が云へない、小僧等が變な面して、しげくと見る、漸くにして外へ出たが、依然として胸と手が動搖する。（地賞）

都ぞ春の錦なりける。（評）

○晴の會

大阪　笑花

いつもならば女中がお孃樣御目ざめ遊ばせと云つてくる聲聞きつゝも横着をきめ込んで起きない私が、今朝は女中のくるも待たず、床をはなれた。母樣が女中に今日は雨が降るから用心おしと云つて笑つて仰居る。九時過ぎからお化粧にとりかゝつた。髮はいつものルイザに卷き上げる母樣もこのルイザにはいつもさゆをひそめ遊ばす、元旦早々からはな聲出して母樣をこまらせたが、今日は女中相手の支度をした。さて母樣御覽になつて又やりなほし、ほんとに嫌らい、盗なんか一生着まいとおもつたがしかたない一人ではとても着られない、十八にもなつてほんとにお恥かしいわけですのとうく母樣に着せて貰つたのでもねなんだか狹

のところが氣にかゝつて？母樣いつもお芝居の〇〇みた樣な事なさるの、ほんとう私悲感しちやまふわ、だから影ではきゆく〳〵とお襟のとこ好くずるのよお重ねはうす納戸に蘭菊の裾模樣あの刺繍のした金絲がびかびか光つてほんとに心地好う御座いますわ、褪紅色の金絲竹に龍を織り出た厚板の帶立て矢に結んで下さる、支度がすつかり出來たから女中を供に今〇町の先生宅へ來た玄關には華やかな下足がずらりとならべてある御座敷へ上つて、一目見て驚いたのは、十二三の娘さんがお菓子の樣に美しくならんでおらしつた事、ほゝ笑まずには居られませんでした。さて皆樣に御あいさつしてお手前をしてお茶を頂いた、正面のお床には老松に鶴の軸、品位高き高尙なる水仙が薫ゆかしげに活られてある。二時頃先生六十一歲の御祝と紀念とを兼て總勢二十八人の寫眞をとる、それよりいろ〳〵の御馳走がはこばれる、先生のお謠曲やら、お箏やらで實に賑はしい事であつたお暇乞ひして歸つた時は丁度八時であつた。

（入賞）

大阪らしい心持のある作だ。（評）

○思ひ出

秋田市　曙光

嗚呼私はもう十八になつてしまひました、靑春十八＝華かな時代でありますけれど、いや他人ならば華かなのでせう、愉快なのでせう、けれども私にはこの華かな時代が悲みの的となるのです、嗚呼乙女十八、一日も早くすぎるのを喜びます。私の姉樣と云ふは落ついたそして口數の少い、人が話さなければ一日でも沈默しておる人なのでした、丁度十八の時、重い〳〵肋膜にかゝつたのです、そしていつも寢衣に顏を押しあてゝはさめ〴〵と一人で泣いておらつしやいました。私はなぐさめる言とては知らず又慰めやうとも思ひませんでした。

姉樣は泣いて〳〵菜の花の咲く五月頃、あの恐しい肺となつてとう〳〵なくなられました、私け別段悲しいとも思ひませんでした、そして三年過ぎた今日此頃、やう〳〵姉樣の事が胸に浮んで…ねても…先生のお話聞いておても…そして故なく涙が頰をつたはるのです。

山茶花咲く庭の木の下に行つては昔姉樣と遊んだ事を思ひ出してよゝと泣くのでありますっ私はいつまでもいつまでも、もゝの木の下におたい、雪が降つても。雨が降つても。只山茶花の木がなつかしくてたまらないのである。あの木の中には、きつと姉樣い靈があるに違ひない私はいつもかう思つてゐる。そして其の蕾がふくらんでくると、再び姉樣が立かへられるやうな氣がして……あしたに夕べに、蕾の花になるを待たれるのである。

○姉と弟をよみて

仙臺市　萩香

初作にお出しなさいました、龍代樣の、姉と弟をよんで私は泣かされました、幾度も、く〳〵、くりかへして、……弟さんの「ねても苦學したらどうかこうか行けるでせうね」と云ふところをよんで、私は、私は、聲を出して泣きました、あゝ、あめつちにおます神よ、此美しき情のあふるゝ、姉弟に幸をあたへ給へ、ふして、おねがひ申します、あなた方には、御父上はございませんそうですが、私には、母がありません。

クラスの方々は、夏冬のお休みには、一日も、早く、兩親のもとに歸へりたいと申します、其度ごとに、私はかなしくなります。

私にも、母があつたなら、故鄕によろこんで、歸れるのでせう、だけど今は、其なつかしい、故鄕には、つめたき、母のなきがらをはふむつて居る、墓があるばかりです、風の朝、月の夕べ、一日として、母を思はない時はありません、父はあつても遠くはなれては、私は、今日は、廣瀨河畔に、あすはすみだの畔と、ところをさだめぬ流浪のたびに、……あゝなぜに、私等は不幸なのでせうか、でも、私には妹も弟もないのはなにより幸ひです。

もし、妹か弟があつたら、またく〳〵、うき目を見る事でせう、龍代樣おなげき遊ばすな、天なるあなたの父上や、私の母はきつと〳〵、前途をてらしてくださるでせう、どうか、弟さんのためにつくして下さい、私も、神にいのつて居ります、いつかは今のくるしさを、笑ふてお話する事もございませうから、……

○磯の姉様へ

東京　紅　蔦

お姉様お變りなくつて？夕方のお熱は？私それぱかりが心がゝりですわ私毎日夕方になると、あの森戸様へ島が歸つてきて浪の音が高くなる頃、門の柱によつて、都の方をながめていらつしやるお姿を想ひます。夢見る様な眼ざしを、私もぢきに歸ります、も少しの間待つて居て下さい、あのお正月ももうすぎましたのね、今年も例年の通り四日に歌留多會がありました博兄様ハ空笑ひの高さも、江森様の黄金太夫も相變ずですわ、今年も黄金太夫様お得意になつて千代萩をなすつてよ、博兄様てば多美やにヌカ味噌のふたをしたかの、英様つかまへて君寶丹はなんておきゝになるんですもの、英様も負けずきつとかうだろうと思つて、ちやんと御持參なさんなと有仰るみんなくす〱笑ふ知らぬが佛の太夫様、顔をゆでたこの様にしてオホ……、みんなわざと人を押して、誰のきゝたくないのも同じだなんていふのですもの、政岡の忠義も千松のけなげさもメチヤ〱、とんだ大笑ひのたね、小さんのはなしをきくより可笑かつてよ、たから私きらはれても聞かせたいなんて人迷惑ねといつたら、兄様てば、お前のピツコの徒歩競走の様なピアノよりいゝつて仰有るのよ、ずゐぶんだわね、御自分のピアなんぞ、ねえ自分の事棚へ上げといて、あの福引でね、氣取屋の緻子様お芋をとつて大閉口なの、そのお顔たらオホ……ほんとに面白かつたわ、だけれど私姉様一人磯で淋しくくらしてゐらつしやると思ふと何となくこうすまない様な氣がして……やつぱり私姉様のおそばがいゝわ、もうこれからいつまでもおそばにゐてよ又二人で浪の音をきゝながらくらしませうね、では森田さんにもばあやにも宜しく夕風に當らぬ様氣をつけ遊ばせ。

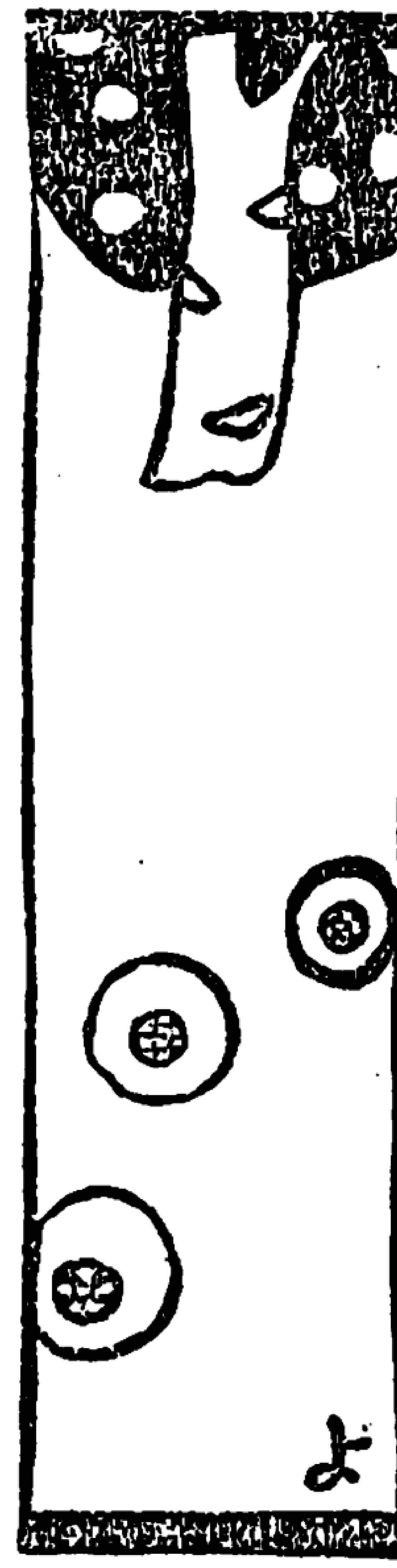


暖かい日　山口縣　宇吹しげ子

○雪のふる日に

水口　ほたるぐさ

處々つぎの當つた外套の袖よりハタ〱と雪を拂ひながらいつもの様に新聞をなげ込んで行く。トボ〱と一足一足殘る草履の跡をじつと見つめた。青黒い顔。光つた頬。ほこり色した頭髮のうるさきまでにのびた見苦しい姿が目に浮ぶ。彼方知る様に成つてから丁度一年位になるだろう。何處の生れか。何處より來しか。知るよしもないが表情の少ない曇りある目の底に一種云はれぬ淋しい光が宿つて居る。兩親もなければ妻子もないと聞いた。知らぬ他國に孤獨の生活はどんなにやるせないであらう。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）
桃活けて雛の賦を書く机かな　大阪　三木白菊

○（地賞）
馬臭き風に白梅散る日かな　下関　山本芳子

○（人賞）
湯に入れば落葉浮びて奈良の宿　奈良縣　上田郁子

佳作

春の水汲めば青しと思ひけり　群馬縣　新井つま子
水仙に聖の爪の長さかな　奈良縣　奥田美代子
春の水夢二が里を流れけり　牛込　辰巳吉野
使して歸れば月は山の端に　美作　橋本紫
櫻さく宿にも雨の迎へ傘　大分　一少女
思出づる野に一本の柳哉　上毛　小澤カナメ子
春の夜の灯をなびかすや舞の袖　宇都宮　宇佐美園子
冬の夜や笛吹く君の懐かしき　堺市　小林いし子
里に來て猿の遊ぶや冬の月　若狭　津田たき子

冬籠り日がな一日爐の邊り　神戸　清子
繭買ひてさて鶯も買ひにけり　徳島縣　君影草
蓬莱の風吹き上げて夜半の月　長崎市　永井圭子
劇場を出て雪をふむ戻りかな　京都府　木下かをる
手枕のうたゝね寒し暮の鐘　牛込　明星
淡雪や畠堀る人年若き　群馬縣　柴小鳥
鶯を月にとられて庭の梅　静岡縣　北川和巾
高下駄の泥の重みや梅の雨　東京　百島正次
おぼろ夜の都大路や辻講義　堺市　西村みち子
街はづれかるたに更けし聲もして　千住　白妙女
鳥多く生るゝ里や春の空　下関市　吉野君子
路に飛ぶ清書の紙や冬の朝　根室　齋藤ふじ
初夢を飛ばして響く寺の鐘　大阪　大関花子
椿咲いて紀伊の日和のつゞきけり　紀伊　宇田すが
山々を吹き丸めけり春の風　上毛　香はる子
初東風や公子は庭に草むしる　水戸市　根佐木まさ子
伸びあがり見送る人や夕月夜　呉市　山本哲子
風すさび雪のうづまく冬野かな　宮城縣　鶴子
大川を見下す家や爐を塞ぐ　備中　小見山春子
羽根つくに女禁ぜず寺の庭　大分　さくら
小夜ふけて月斜なり青すだれ　淡路　清水春子
日も暮れて少女うらめし藤の花　土佐　はぎ子
草むらにかくれて待てば月出る　高知縣　中岡秋花
水仙のかをる墓所や人戀し　周防　重原美女子
彈初やまだ手の凍て今朝の窓　大阪市　寺井しぐれ
寒月や櫻の多き君が庵　土佐　響田順子
二階からひつぱつて見る柳かな　沼津　山縣梅園
木犀の香に戀つのる此窓や　備前　武士きく子
初夢を共にかたるや母の前　舞鶴　雪子
桑畑に蚕群がるみぞれ哉　茨城　田村紫色女
紅梅にうぐひすの聲落ちて來る　深川　矢澤榮子

澁蛇の目紺蛇の目春の傘多し	大阪市	小泉良子
ひき初めの音は流れて加茂の水	滋賀縣	絃聲子
電線にかゝるや紙鳶のそれも春	京都	森本俊子
萌え出づる草香はしき紫野	城南	小島美雪
夕陽の色どる壁や干大根	岡山市	宮山千登勢
紅梅の窓に眼を病む美人かな	宇都宮	松井清子
若菜摘む野邊のひろさや晝の月	茨城	浮舟
今上げる凧にとびつく弟哉	福井	明ノ星
冬枯や木を伐る斧の音高く	仙臺市	赤間とし子
つれづれや杜鵑一聲夜はたけぬ	廣島縣	兒玉喜美子
竹の葉のかるき動きや春の風		橋本蝶
ひとり行く僧さむげなり枯れすゝき	山口縣	花の宴
若水を汲み遊ひけり姉妹	渡島	露華
瀧の音も高う聞えて初日の出	神戸市	足立春子
よき人の屠蘇に醉ひ伏す發哉	麻布	小倉ため
寒月や木太刀の響き梅の花	滋賀縣	市川久子
朧夜の酒に人呼ぶ小窓かな	同	孝子
美しき思ひ出もあり春の月	同	たゞ子
打たゝむショールの脱毛春寒う	福島市	遠藤喜美子
羽子板に戀もありける少女かな	北海道	美津子
此雛にかしづく我や十七年	王子町	大浪露香
あれもこれも縫ひたや着たや年の暮	奈良縣	東本勝野
竹にも薪折る音や夜半の雪	下野	高村多喜子
雛抱いて市より歸る小提灯	埼玉縣	中澤高子
訪ひつれど主人は在らず春の鳥	長野縣	唐澤喜惠子
梅咲くや水田勝なる麓村	京都市	宮原みどり
花さくや小倉山莊此奥に	山城	木の花
春蘭は美人の如し霜の庭	前橋市	みづ枝
紅梅の窓に散る夜や歌がるた	富山縣	宮崎曾戸子
寒行や御僧の跫の凍りがち	大分	小原芳香
積むと見しを積らで雪の日暮るゝ	新潟縣	片田紫紅子
縁に出で夜の花見る詩人かな	松前	川原華子
春寒や鎖にうつる不二の山	山口縣	椰眞美那子
塵の世を拔けて遊ばん月の下	青森	長尾にしき
音もせで貓落ちぬ雪の朝	岐阜	若原千春
春雨にそよぐ花あり小町寺	京都市	中野ふみ子
羽子の音に開く小窓や春日影	美作	水田邦子
荒海に鯨も浮かず雪の空	久留米	橋本巣芽乃
松の上に鶴とも見えて殘る雪	加賀	勝崎きく子
おぼろ夜や柳並木のアーク燈	東京	瑞野露子
掃きよせた米食ふ土間の嫁が君	横濱	夕野萩子
朝草にそへてもどるや土筆	島根縣	加藤紅葉
春風の吹きそめにけり雪の上	下澁谷	小原愛子
富士見ゆる濱邊の家や桃も咲く	淡路	内海千鳥子
鶯に明け行く宿や竹の奥	群馬縣	冷花子
春の水瓢すゝいで戻りけり	上毛	つめたい花
高樓に箏の音もあらん春の月	群馬縣	金澤てる
丸木橋渡りかねたる梅の花	備前	佐久間みどり子
蝶舞ひて上巳も近き日向哉	仙臺市	姫野ゆり子
花の上の塔なつかしや京の空	同	新木あさ子
箏の爪滑り落ちたり春の宵	同	藤村八千代
稲刈りて菊に酒くむ里の人	同	きくぢ
草の屋に兄弟多し雪戰	宇陽	松井綠子
朝寒を甚五が宿の槌の音	宇都宮	松井玉子
立ち並ぶ冬枯の木や堂一字	仙臺市	野田幸子
亡き姉の形見なりけり歌骨牌	福島市	吉岡なを子
公達は花つぶてして春の月	北海道	失名
君故に家を出にけり春の雨	王子町	大浪せい子
見返へれば宿の戀しや今朝の霜	奈良縣	上田茄人
春雨や獄衣濡るゝ若芽垣	越中	宮崎政子
朧夜の姫路に下りし夜汽車哉	東京	横谷幸子

各地誌友評論（五）

一記者

▲横濱（上）

◎空の明るい、水の青い、人の多い港、何處となく自由な、放縱な空氣の流動してゐる港、港の人の手に産れた藝術に多少でも其影響があるとすれば、誌友の作物に就いて見ても一層其事を確實に證據立たしむることが出來るであらう。

◎本誌の小說壇には不思議に横濱の人が活動してゐる松田梅子、松田妙子、松井靜代、岡本千鶴子等實に其錚々たるものである。松田姉妹は神奈川の人であるが神奈川を横濱に入れても不自然でなからう。

◎作者を批評する前に記者は隱れたる一つの事實を告げよう、それは松田梅子、妙子の兩女が雙生兒であると云ふ事である、雙生兒といふことも一つの自然現象であるから、何等耻る處も、憚る處もない、而かも偶ま此兩女性とも、同じく小說を書き、同じ思想を抱き同じ傾向に進んだのは、雙生兒といふ事實と關聯して一種の興味を感ぜしむる。

◎序だから今一つ隱れたる事實を讀者に告げやう、梅子と云ひ、妙子と云ひ、其筆蹟の酷肖してゐることは殆ど鑑別に苦しむ位で、記者は初め此二人が投書を見て同一人だとばかり思つてゐた、處が同胞だと分つて世にも此れ位肖た同胞もあるものかと思つた。惜むらくは兩女とも未だ其寫眞を發表しないから、其容貌に於ても文字の如く肖てゐるや否やを知ることが出來ない、知つてゐる人は首肯する處があるだらう。

◎梅子も妙子もデカダンの氣風を帶びてゐる點に於て横濱育ちたることは爭はれない、千鶴子は其尤も烈しいものだが、梅子妙子よりは根底が淺い。二人は思想の上に於て殆ど一致してゐる、只其作物の技倆に於て吾人は梅子の方が一歩進んでゐるやうに思ふ。比較研究をするつもりで讀み返さないから、確とした斷言は出來ないが、何うも梅子の方が藝術的才分が稍ゆたからしい。今、參考の爲め昨年一月以來の兩女の作を左に分列してみよう。

梅子　灰色娘。煙草の香。吳さんと女。葉茶。別れてゐる間（感想文）

歎かい顔(課題)。姉。別れた人へ(感想文)。結婚後。
妙子　若い人々。姐。氣迷ひ。別れた後(感想文)。

◎作の數に於ても梅子の方が多い、兩女とも昨年の五六月頃までは殆んど毎號のやうに顔を出した。そして半季ばかり消息を絶つてゐたが、十二月號に『別れて後』の感想文が出で、二月號に小說『結婚後』が出た。讀者は此間の消息を窺知し得るであらうか。

◎何事も發表し盡くした記者は、最後まで發表すべき材料を持つてゐる、實に、妙子は東京に嫁し、梅子は大阪に嫁したので、それは此處三四ヶ月前の事であらうと思ふ。斯くて同じ日に生れ、同じ心に生き、同じ哀愁を抱いてゐた兩女は、東西の二大都會に別れ去つて、各自新しい生活に入つたのである。

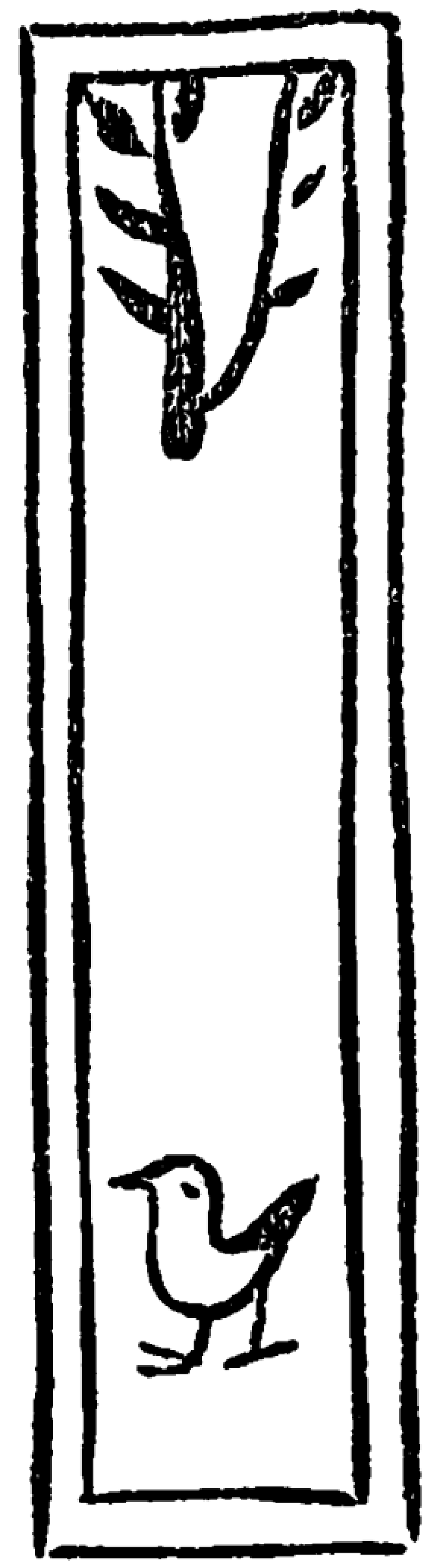
◎小說の選者水野葉舟氏は、梅子妙子の兩人に望を囑して嚴忠言を與へた、而して氏の毎も繰返して言つた兩女の特色は、力强いと云ふことであつた。全く女性にしては觀察の力が强く且鋭かつた、囚はれてゐなかつた、人生を輕く見なかつた。其點が偶ま橫濱と云ふやうな暗さと、明るさとの兩極端を持つた地方色と合致し、限られたる取材とは云ひながら、潑溂たる生氣を其作物の上に發揮した。

◎梅子及び妙子の君、君達兩人は今や遠く百二十里を隔てゝゐる、更に此一年間に於て境遇の上では何百里何千里を隔てたか知れぬ。さりながら曾て其胸に燻きしめた藝術の香は、其美しき晴着の薫よりも高く且永く殘るべき性質を持つてゐる、之を了知した時に猶ほ兩女の上に未來の生命あらんことを祈つて置く。

◎千鶴子は右の二人に比べると遙に幼稚だ、併し幼稚なものは成長する、現に成長しつゝあることを吾輩は知つてゐる。千鶴子は折々忘れたやうに散文などを書いた、散文にも耽美派に見るやうな思ひ切つた描寫があつた。

◎未だ多くの作例を引くほどでもないが、『娘時代』の『海水浴場の女』。一月號の『銀貨』。此二篇の技倆から推して、此人も小說は描けると云ふことは言へる、且此人にも橫濱の感化が與つて力あると云ふことが出來る只それ以上、今は多くを言ふ時でなからうと思ふ。

◎松井靜代は月草女の雅號を持つてゐる、初め東京に在つたが不遇にして橫濱に去つた、最近活動を續けてゐる一人である、散文家としての小川せん子、臼井冷花等も亦橫濱の產、此等に湘南地方の諸女を併せ、今一回橫濱の誌友を語つてみよう。



評論　編輯局選

○電話の開通

近江　鈴蘭

あゝ、電話の開通は如何に、吾が町を新らしく飾つたか……。年寄達は、昔の驛路の面影を想起しては、その變轉の著るしさを語り合つてゐる。廣くもない町の兩側に建てられた電柱や屋上の電線は、たしかに沈んだこの町を復活させた。煤煙の少ない清らかな吾町は仰ぐと大空がくつきりと青くその間に横に渡つてゐる電線が、宛然音符紙の五線のやうで、何となく華かな味がある、町の何處を通つても、チリリンと云ふ電鈴のなつてゐないことはない、受話器を取り上げ、一寸首をかしげて、何か話て居る島田髷の人にも、變つた趣が見える。公務につく人とては女先生の他になかつたのに、肩上の深い可愛い少女が朝々局へ行く、其の姿を見ても人々は違つた感がすると見え、意味深い眼で見送つてゐる、丁稚小僧が、サイクルをとばして注文を聞きに來ることが少々減つたやうだ、町全體の空氣が電燈の點火と相俟つて、益々新らしく活氣付いて來るだらう。私たちは寒いのにショールを卷いて用足しに外へ出ることが少くなつたのを悦び、然して細い線に傳つて來る、色々の人の聲を、聞いては話してゐる姿態を想像して異つた興味を湧かしてゐる。

電話の開通は確かに、或るヒントを、吾が町に、與へつゝあると、私は思ふ。(入賞)

評論文としては少し無理かも知れぬが、題意は評論的である描寫も眞實だ、評論と云ふ意に拘泥せず特に今回は是を入選せしめた(評)

○斷片錄

朝花

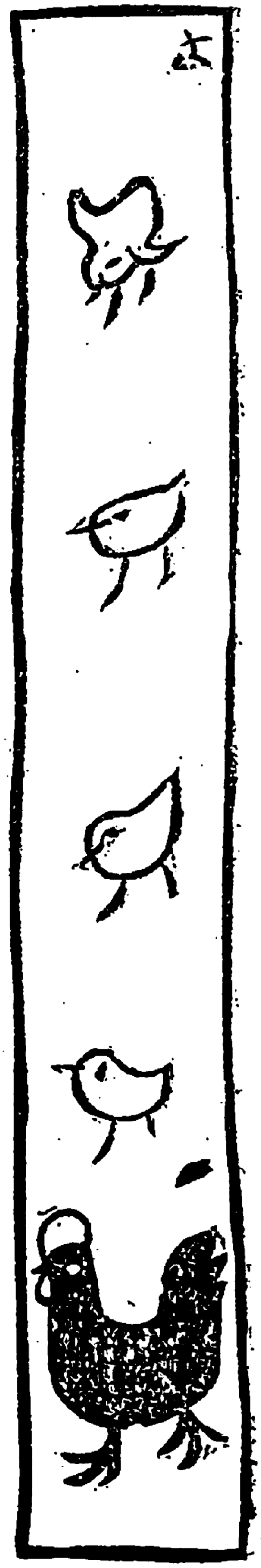
△青空に浮いてゐる春の雲のやうな心が欲しい、皆さんは餘りにいらくくしてゐます。

△善良なる意味の自由結婚は、形式的なる干涉結婚より尊いと思ひます。

△人生の曝露は恐ろしいと思ひます、いつかは恐く曝露される日が來るでせうか、其時は尤も恐ろしい時代です、我等の信頼すべきものよ、早く現れよ。

△女は自覺といふ文字に囚はれないやうにしなければならぬ。眞の自覺は自覺などゝ叫んでゐない人の心にあると思ひます。

こんな短い評論もたまには面白いから歡迎します(評)



誌友くらぶ

書籍交換

○　岡山縣小田郡矢掛町　中西梨花

▲皆さんのうちで今の婦人お持ちの方がおありですれば私のもつて居る女學世界でも何でも交換しては下さいませんか。買ひそこねて困つてますの、それに若杉さんの画がはりや夜雨先生の袖香爐が是非拜見したいと思つてますので―

○　群馬縣鬼石町相生町福田方　柴小鳥

▲不用の書、幻影、獨歩の愛の通信。文章新字典、和歌新字典。夢二畫集春の巻、自然と人生古今才媛文集。

△入用の書、詩歌の集めたるもの（新派のものにて）誰の著したのでもよし、交換のぞみの御方はハガキで……。

○　下關市三百目東中山井岡方　木本濃生子

▲女學世界拾壹巻第參號から拾貳巻貳號迄揃つてゐます御入用の御方がありましたら何號でも御通知次第贈ります小説それから寄生木妹思ひ出の記なども相當の品と交換致しましやう。

○　上總國山武郡上堺村南　佐瀨秋江子

▲持つて居る書物。「獨歩集」上下「自然と人生」「花紅葉」「ポツケツト美文大觀」「夢二畫集」春「啄」「文章新辭典」「思出の記」「俳句作法」「秀才文壇」以上。

△求むる物。「乙女の秘密日記」「夢二畫集」春以外其他文章繪畫に因んだ物なら何れにても貸借又望みにより相當の物なら交換も致します。

○　水戸在吉田五二鈴木せい方　高橋

▲誌友様の内で金色夜叉か蘆村操の煩悶記か何れか御持の方は御讓り下さいそして右の所まで御知らせ下さいませんか。

○　攝津池田驛前局區内九谷坂上平三郎方　しな子

▲持つてゐる分「夢二畫集」（旅冬の巻のぞく外）「金色夜叉」「乳姉妹」「寄生木」「スイートホーム」「徒然草」「不如婦」。

△「和歌集文章雜誌」「早稻田文學三田文學ホトヽギス青鞜スバル」夢二畫集冬旅の巻右送り下されば妾もすぐ送ります。

○　和歌山縣海草郡和歌浦町前田脳病院内　ハナ子

▲新不如婦、新已が罪を御持の方は私のスイートホーム小看護婦、乳姉妹と御交換下さいませ。

○　群馬縣多野郡鬼石町相生町　新井冷花子

▲所有書籍竹久夢二――野に山に同人の――小供の國、女子文壇、秀才文壇登月增刊等。

△求めたき書、誰の詩集――歌集にてもよろし又如何なる文藝書にても御一報を。

○　京橋區楠町十一　宇佐美喜代子

▲不用の分。本誌六年四と五、七年五と十と十二地方の婦人都會の婦人今の婦人婦人世界六巻四五、六、七、十、婦女界四巻四青鞜初號新家庭。右御入用の方は郵税封入御申込下されば御送り申ます尚御手紙の交際も御ねがひ申ます

○　群馬縣多野郡鬼石町相生町一五六新井屋方　新井靜江

▲私のもとに應用新案漢詩と新體詩、自然と人生、我が散文詩、歌二冊等あります、みなさんの文章の作り方美文の資料晶子和歌集花右御交換被下方は葉書にて御一報ください。

○　神奈川縣高座郡田名村　齋藤勝子

▲持つて居る書物『漢和大辭典』『浪六の八軒長屋』『社交談話法』『模範美文』『ヒザクリ毛』『愁芙蓉』

△譲たい書『和英大辭典』『新體詩歌自在』『現代文章寶典』『藤村詩集』『俳句大辭典』右の書と御交換下さる方は至急御返事下さい

◎　兵庫縣川邊郡池田驛前山本村二〇〇阪上平三郎方　小ゆり

▲持つてゐる書物。夢二畫集野に山に、旅の巻、春の巻、冬の巻、櫻さく國、乳姉妹、金色夜叉後編少女の戀、徒然草、己が罪、魔風戀風、前編、中編、以上不用の分。

△求むる書物。文章講義録全部、三教書院發袖珍文庫の何れにても、萬葉集、土佐日記、文藝倶樂部、早稻田文學、三田文學、青鞜、スバル、文章雜誌ならば何冊にてもよろしゆうございますからお望の書と交換申します。

○　茨城縣新治郡高濱町　立川武子

▲女學講義録全部廿四巻お譲り申したし、お望みのお方は御一報を願ひます。

○個人消息

野上川上にて　紫陽花女

▲宇田すが子様　失禮ですがあなたは田中村の方なのでせう。もと田中村の方へ行つて居た西川先生を御存じでおらつしやいますか。私は紙上で名を省いて居りますが西川先生の郷里の者で御座います。お作を拜見いたしまして同じ郡の方だけに、一しほおなつかしう存じます。とこしへに誌上に發展遊ばす様、かげながら祈つて居ります。

○　消子

▲廣丘の三村利惠子様　度々御手紙有難うございます嬉しくいつも拜見いたします末長く妹と思召して御敎導を願ひますそれから私の家は大町より西方約二里ばかりの山奥ですが當地迄御出なさるのがいやなら大町迄お出なさいませ屹度合はれますから。

○　東京府下北豐島郡王子町　大浪せい子

▲鹽田はん子様　六年前當町に教鞭を取つておらしつた鹽田はん子様と被仰る方の御住所御存じの方は誠に恐れ入りますが次號で御知らせ下さいましな、御年は三十前後と記憶してますの御願ひでございますそれから上十條の姫百合様御遊びに御出遊ばせな。

○　富山重子

▲近江の芳子様　時々おたよりありがたう存じます。去年十二月一日再び富山の地に參りました。葉書でも差し上げたいと存じますけれどあなたの御事情を思うては止まります。しとしとと降り積む雪の美しさも初めて知りましたが、此頃ではもうあきあき致します。どうぞお體御大切に遊ばしませ私の住所は以前とは違ひますけれど、誌上にて明しかねますゆゑ、お便り下さる時には矢張以前のところでも亦國許の方でもかまひません。どうぞおはげみ下さいませ。さよなら。

○　京都市下珠數屋町東洞院西入　中野婦美子

▲神田の莊樹秀子様　八月には美しい雜誌御送り下さいまして有難うございました。其御禮として本月（十日）粟田燒と京名所の繪葉書御送り致しましたからどうか御受取りの程御願ひ申します、之からも度々レターの交換を御願ひ申します。

○　京都市松屋町丸太町下四東　志賀絹江

▲京都の三宅壽賀子様　貴孃第一高小を御卒業遊ばしたのですつてね。私野菊様にきいてよ同校で御なつかしいわ以後御交際を願ます誌友のお姉様方にも不束者ですが以後レター頂戴ね

○　神戸市兵庫佐比江町九四　北野秋波江

▲神戸港の女様　私は御文拜讀致しましてよ

りおなつかしさに、日を送つて居ります、どうかお親しい御交際を願ひます、つたないながら御返書は出します 其外誌上の皆樣にもお見捨てなく御交際のほどお願ひ致します、何も知らん、あはれな者ですけれどきつと〳〵誠の心より御交際致しますから。

○　彦根　よ　し

▲重●●●子樣　富山にお居でなさるのですか、私は誠に御無沙汰ばかり致して居りましてすみませんお國からお妹樣がお手紙下さいますのに私はつひぞお伺ひ申した事もなく、誠に失禮ばかり致して居ります 惡からずおゆるし下さいまし寒さの折折角御身御大切に遊ばせ。

○　信濃、クラシックな村

▲大●●●●●阪のヲダケ、カヅヱ樣　御端書有難う、御住所御書き下さいませんので 直接御禮申上る事が出來ません 殘念に思つて居ります、誌上を拜借して厚く〳〵御禮申上ます、猶今後も宜敷く……。

○　鳥取縣八頭郡國英村山手　小　林　英　子

▲井●●●●●●上都美子樣　神奈川縣小田原町の皆樣よ昨年十月六日に御上京なさいました御地萬年の四井上都美子樣の現住所を御ぞんじの方はくわしく御報して頂戴な御禮はきつと致します何卒ね。

○　臺北市驛官舍百十七龜川方　小　林　春　子

▲世●●●●●●羅郡の吉原樣　私事留守中御手紙下されました由なれど家内の者不注意の爲失しました故御返事を差し上げられぬわけどうぞ 御許し下さいませ此の度轉居いたしました。

○　京都市花屋町西洞院東入　久　芳　は　づ　枝

▲牛●●●●●●込のかよ子樣　溜池の好子樣八ツ山の雅香樣おなつかしきお玉章うれしう御座います、早速お慰みに淸水燒をお送り致しました毀れずに着きましたか、妾は好子樣のお近くの或る女學校に居つたものです、こちらへ來てから最う二年になります、八月頃には上京する筈ですから其の時は屹度お伺ひ致します。

○　群馬縣佐波郡剛志村大字上武士村　門　倉　く　ら　子

▲前●●●●●橋のみづ枝樣　は椎名八重子樣と親友で御座いますか私は八重子樣とは兄弟も及ばぬ程の親友で御座いますが哀れなる最後をなされたので妾は其の當時泣いて食物さへも進まぬ程でした貴女樣よ御差支無くば御交際を願ひます。

○　水戸　柏　う　め　の

▲横●●●●●●濱の牛田元子樣　しばらく御無沙汰いたしましたが其後お變りもございませんか實はたびたびお伺ひ致すのでしたが御住所がわかり兼ねますので……。何卒お知らせ下さいませ。

○　大阪　ゑ　み　香

▲岡●●●●●●●山赤磐郡の矢部瑠璃子樣　もしや貴女才女樣じや御座いませんか敏子で御座いますおたより下さいね？違つたら御免遊ばせよ、德島の伊澤樣たび〳〵御たより下さいましてありがたう御座いましたスイートホームが八日に參りましたから御安心下さいませいづれおたよりを參らせます

○　橫濱野毛町二五七石井方　淺　川　仙

▲横●●●●●●濱の須藤千歲樣　若しや貴女は山形縣の御生れではありませんかそれならばわたくしはんとになつかしうそんじます御忘れ遊ばしたかぞんじませんが小學校の尋常三四年の頃の同級生で御座います何卒次號で御返事御聞かせ下さいまし。

記者より

賞品を送りましたに就いて、左の方々から禮狀が參りました、此處に芳名を揭げて置きます。
杉若里子。立石りか。望月れい。松井淸子。松井靜代。前島優梨子。田村はつ子。加藤音子。古那夢。小見山春子。筑紫饒子。百瀨ひで。川井さかえ。河崎八重。菊田芙蓉。小じま。名倉ちづる。絹谷百合。木村春子。佐藤やよい。矢口貞子。荒木さたへ。田沼みさを木下春。青柳。美濃部環子。神近市子。加藤幸子。金田よしえ。泣果子。水島學桂。新兔さかえ。赤い花。若葉。町田。島本。波の花等

交　際

○　東京市牛込區山吹町二六伏木藤津方　み　お　つ　く　し

▲寂●●●●しい生活　かうして他人の家で間借して居る私をあはれと思召さばせめて美はしき心もて交はつて下さい。繪葉書をお送り下さらば何よりうれしくキットお返事は致しますから。皆樣よ！一人でも心から交はつて下さいよ！

○

常陸水戸局區内石川原古田土留次郎方　根崎久子

▲水戸より●●●●　皆樣三月は偕樂園の梅花が滿開して當月は日曜祭日毎に東京よりの觀梅列車が運轉さ　ますから御出遊ばせな二月號にて雜誌交換御願しましたら南方の花の交換が加藤爲子樣始め外十三名の方から十一日迄にありましたが筆蹟が男子方らしい故御斷り致します御手紙下された二十二名の中女子の方は廣島縣三篠町の金尾治子樣だけですの繪はがき交換を御願致します男子の方は御斷り通學上右記へ轉居

○

Ko Tama Piru Cal U. S. A.

▲アメリカより●●●●●●　戀ひしき皆々さま方はさぞ賑たかく面白い御正月御迎への御事と存じます私は生れて此方今年の樣な淋しい悲しい御正月を迎へたことはありません、去年の三月渡米した者でありますが其後は本誌を無二の友として慕して居ります何卒御知り置きをねがひます。

○

本鄕區向島天神町一ノ三五竹宮方　木村美知子

▲愛讀者●●●　私は昨年の十月から文壇の愛讀者となりました、付うど誌友の皆さん今後御見捨なく御交際を願ます繪はがきなどの交換もねそしてアノ……美しい交際ならば異性の方でもかまひませんわ……

○

大阪南區笠屋町五十一　尾竹一枝

▲告白●●　異性と—私を思つてゐる方が多い樣です。けれど私は—やつぱり女です。私の特種な形をした囚はれない文字と、私の放縱性を帶びた一種の我儘な文句を異性と思はせるでしやう。けれど——それは全く、根のない考へだらうと思ひます。とにかく、私は變りものです。然し自ら、變り物たらんと、勤めてはゐない私は——強きものよ、汝は女なり——と、之れの好い解釋に作られつゝ有る女と思つて下さい。私には、個性と、自然と姦嬲より外ナッシングの女なのです、そして私は、此の三つの生々しい字格のうちから藝術品を見出そうと思つてゐるのでずそれを見出す爲に、私は、油畫も描いたり、燒畵もしたり、木版もしたりエッチングもやりかけてゐます。——私はこうした女に作り上げられて行くのです——日本畫と云ふ私の生立は二人の伯父によつて守られて行きます。——私は、とにかく、女と云ふものです。——

○

德島　伊澤照子

▲皆樣に御注意までに●●●●●●　去る二月號の文壇で私のホネームン所持のことを承知したので一週間乳姉妹と換讀してくれと申込まれましたので私は先着ではあり直に應じて二月一日送本しましたが其後乳姉妹も送つて下さらねば又お手紙も下さいませんあまり不思議ですから問合せしましたがお返事がありませんきつと僞られたことと存じます幾多の愛讀者諸姉樣方僞りの多い世の中ですお氣をお付け遊せ。

○

大阪市南區天王寺大道三丁目四二六二　松澤豐子

▲朝顏種子分與●●●●●　誌友の皆樣、朝顏を培養せんと思召の方は、參錢郵劵五枚を添へて御申越下されば朝顏種子百種交りと同培養法とを分與致します。

○

備前八濱町大字吉澤町九百九十七番地　女子文壇誌友會幹事

▲博愛賢明の誌友の諸孃へ●●●●●●●●●　不肖等相圖り今回女子文壇誌友會を設け同時に本誌々友獨特の技を廣く文界に發揮せん目的にて『誌友』てふ雜誌を年四回發行し會員に配布いたします。先づ第一卷第一號『春の卷』を來る四月初旬發行し卷頭に名士の文章を紹介し次に四十四年一月號より十二月號迄の和歌、俳句、各秀逸を御芳名と共に順次表彰し其より誌友諸孃より御投稿を乞ひ得るところの文章を各贊助員（地方斯道の名士）の選を得て揭載せんとす、入會希望の方は至急申込あれ。

○

仙臺市空堀町井上方　妙香

▲松島●●　誌友のみな樣日本三景の一の松島を御見物においで下さいな御案内をいたしませうそして政岡の墓にも御案内をいたしますゆゑきつとよ。

○

小石川區柳町二十番地鎌倉親吉方　池田宮子

▲文藝好き●●●●　諸姉樣方私も本誌の愛讀者なるが至つて初心者なのよ何卒御交際して頂戴な？ね!!!なほ繪葉書の御交換もして下さいな御手紙も句や歌を書いて御返事は屹度いたしますわ、ですけれど下手の横好きのよ。

○

東京市京橋區新佃西町三ノ五藤谷方　新葉

▲青春の焔●●●●　にもゆる妾共のハートをそゝる

春が參りました誌友の皆樣御奮ひ遊ばせレター寫眞、繪葉書の交換は相變はらず。

○ 名古屋市西區鹽町通小舟町森田清七方　吉　乘　雪

▲繪ハガキ好　追々と暖かになりました三度の御飯を忘るゝ程繪葉書及びレターの交換が好きですからどうかどし〳〵御送り下さい御禮致しますからどんな御方でもよろしい。

○ 大阪市南區鰻谷東三丁一八七　龜　山　芳　子

▲四年級　妾は只今女學校四年生で御座ります以後皆樣に御交際を願ひます何卒御寫眞御送附下され先着十名には美しきリボンと寫眞を以て御禮いたします其外編物造花なども御送り下さいませ。

○ 京都市上京區三條北裏白川筋西入小森甲子郎樣にて　佐　藤　保　子

▲西京より　私は初めて御目もじ申す不束者で御座いますが誌上の御姉樣方何卒可愛がって下さいまし御玉章下さらば御返事は必ず致します。詩や歌は大好きなのです。

○ 岡山縣邑久郡笠加村上笠加青光詩社　赤　木　妙　子

▲廻覽雜誌　親愛なる誌友の皆樣嬉しい春が參りましたのね私は永らく本誌を愛讀して居ります不束者ですが、今度同志の者と謀りまして世の文學の愛好者と共に相互に詩想を交換し多數の同好者と相親しみ互に交誼を厚ふするの目的で青光詩社ふ設立致しました而して毎月廻覽雜誌を發行するのですよ、是非〳〵皆樣御入社して下さいまし社費は少しも要しませんわ、作品は何でも宜しいから澤山投書して下さい、お願ひ致します。

○ 福岡縣福岡市荒戶町通四永田裁縫所内より　西　川　千　代　子

▲お手紙　御なつかしい誌上の皆樣私は前より愛讀して居たんですよ何卒ふつゝかものですが以後御交りを願ます皆樣方愚なものですが何卒〳〵御ひまの折にはレター御めぐみ下さいませね私もつまらぬながらつたなき筆もて御返事さし上ます故きつと皆樣レター御みぐみ下さいね私御願ひですよ。

○ 千葉縣千葉町本町一丁目矢野方　菅　野　夕　波

▲花の繪葉書　私は筮袖が浦の邊りに自然の音樂を友として淋しく暮す賤が女、私も二月より𦾔有る本誌の愛讀者の一人となりました何卒御美しき御筆の跡や繪葉書の御交換を願ひますあたしは花の繪葉書が一ばん好き。

○ 梳かをる里にて　松　浦　靜　香　子

▲編もの　あの皆樣編物や造花お惠み下さいな相當の御禮は必らず〳〵いたしますからどうぞお願ひしますよもし下さるお方がございましたら誌上で一寸お知らせ下さいまし、住所申上げますから？……

○ 東京府下日暮里村八六九小野崎力　小　野　崎　悅　子

▲懷しき皆樣へ　私は毎日東京の片田舍より たゞ一人で淋しく通學して居る者です、どうぞ優しい皆樣松の綠の行末永く親しく姉妹の樣に御交りを願ひます妾一時的の方は大きらひよどうぞ御玉章を下さい、きつと返事は差上げますよ。

○ 仙臺北の町にて　赤　間　く　に　子

▲仙臺より　もう懷しい春がきますわね、私は此の間から本誌を愛讀しておますさうしてく〳〵幼い者ですけれどもまあ出來るだけは投書してみるつもりでございます。皆樣、どうぞよろしく。

○ 京都市下京區楊梅通東仲筋角　野　田　ゑ　ん

▲京都より　皆樣へ私は去年の十一月よりこの淸い女子文壇の愛讀者となりましたから不束者ですが何卒皆々樣永久に御交際下さい。

○ 靜岡縣小笠郡河城村富田　北　川　和　子

▲靜岡縣より　妾には姉もなく親友も無く妹は有れど小學校へも參らぬくらゐの少女故何卒皆樣私を妹と思つて末長く御玉章の御交換を願ひます情ある姉上樣方よ。

○ 秋田縣南秋田郡面潟村岡本　宮　田　み　や　子

▲新顏　皆樣！私は娘時代より の愛讀者ですわ。新顏の愛讀者子古顏の才媛の追々減つて行くのに新顏の投書家が多く來のは、實に嬉しい現象ね！けど……私の樣な新顏の讀者でも矢張り古顏の才媛を懷しう存じますわ。

雜報

東京だより

△風靜かに日麗かなる紀元節の正午頃、赤坂見附の高臺の上に巍然として聳ゆる學習院女學部階上の一室より突如火を失し、見る〳〵火焰天を捲いて、さしもの大建築瞬く間に灰燼に歸した。同校は人も知る如く華族女學校として下田歌子女史時代よりの古き歷史を有し、上は竹の園生の御姬宮より、華族上流の貴婦人を敎育する我國唯一の女學校であつたが、一朝に其面影を失つたのは惜むに餘りあることである。

△文藝委員會と云ふものがあつて、文壇の學者逵が委員となり、過去一年間の優勝なる作物に對し推奬することになつてゐる、處が委員の中に新しい派と、舊い派があつて、新しい派は戀愛を描いたものでも、作品さへ優れてゐれば推擧すべしと云ひ、古い派は作物は好くても戀愛を描いたものなどは一切排斥しようとしてゐる此爭ひが偶ま世に傳へたので、文壇彌治馬黛は面白い見物ぞとのやうに騷いでゐる。

△此頃また生活難の聲が高い、獨り日本だけではなく、世界を通じて生活難に困つてゐる、其折柄米價騰貴して細民は益す生活の窮地に陷つて行くと云ふことだ。生活難は一方に於て人間を賢くし、一方に於て人間の心を荒くする、生活の容易い時は、世に太平の象あり、生活の困難な時は、人に疲勞の色あり、猶は且生活難問題はあらゆる人生問題と交涉し、隨つて婦人問題にも大影響を與へる、此方面からしても現代の婦人は自覺を促されてゐるのは確かだ。

△宗敎と云ふことも、近頃の一つの問題だが、吾等は神道とか、佛敎とか、基督敎とか云ふやうな意味でなく、宗敎と云ふことを考へたい、或は宗敎と云はぬかも知れぬが、兎に角從來の宗敎が持つてゐたやうな權威と、信念とを吾等に與へてくれるものが欲しい、道德の破壞も已むなしとして、吾等の抱いてゐる正義とか、誠實とか云ふものに、もつと強い色彩と、音響との伴ふやうにしたい、然うでないと多くの群衆は徒に動搖するばかりで、後から來るものに何と指示して好いか分らなくなる。

春のカーテン

▲梅の花は淋しいから見に行く人は少い、梅の名所なんて云つても、名ばかりで然う行く人はなからうと思ふ。

▲櫻草摘も年々盛んになるが、時期は三月末から四月へかけてゞある、今に取りつくされることだらうが、一面にはまたそれだけ廣い地面に傳播されるのだから深く咎むることも出來ない

▲菫はもう野に咲いてゐる、蒲公英も咲いてゐる、土筆も出てゐる。

▲東京に生れた人で、雲雀の聲を知らないと云ふやうな婦人は幾許もあるだらう、地方の人は生れながら自然に接觸してゐるから好い。

▲此頃、絹を絞つたショールが流行る、毛の厚ぼつたいのは流行らなくなりさうだ、流行の變化は實に早い。

新刊

○散文詩集 習・作・　福永挽歌作

若い心の輝きと香ひとを盛つた詩的散文の集編である。今までの散文詩―リズムを少くとも要件とした散文詩――の型から逃れて、自由なそして華やかな道を步んで行かうとする作者の新しい試みと努力の前には、明るい活氣ある都會の日の輝きが聯想される。篇中の習作二十七編いづれも強く我が心を刺戟した――白――（價四十錢、東京淺草下平右衛門町岡村盛花堂發行）

○雪・月・花・書・簡　桑田春風編

色彩と音樂の濃厚な空氣の中に呼吸する女の書簡を澤山集めたものである。歡樂の中に芽ぐむやるせなき悲哀、𢌞燜せる心の苦しい呻き――蜜のやうな舌たるい甘い文字が、皆さうした經色の感を語つてゐる。若い夫人やお孃樣と云つた風の人に、是非一度でも可いから斯ういふ日かげ者の手紙を讀んで貰ひたい。（價五十錢、前同所發行）

○紅・噴・隨・筆・　兒玉花外著

兒玉花外氏の小品文集である、收むる處約五十篇、一篇として氏の生命の充實してゐないものはない、氏は多血にして且多涙、能く憤り、能く熱す、氏の文字は直ちに氏の熱情より來る、元來詩人肌の人だから、詩的熱情が散文となつて現れたのである、新しい言葉で云へば此も一種の散文詩であらう、製本の體裁も甚だ好い（定價金四十錢、前同所發行）

大冊三百頁

四月特別號の内容

◎春の日記◎

令夫人あり、文士あり、新聞記者あり、學者あり、さまざまな人のさまざまな日記を集めたるものなり、日記の興味は、生活の興味なり。

◎櫻の名所◎

全國津々浦々より寄せ來れる櫻の名所の記事は誠に陽春四月、櫻花の候の讀物として此上ふさはしきはなし

◎暗き心明き心◎

本誌特有の若き婦人の告白と感想とは、更に新しき人の手に依りて、新しき訴を爲し來る。

◎菊池幽芳氏◎

氏は又新らしき婦人論を發表せらる

(小說) 森鷗外氏 森田草平氏

▲食味の感想▼

最も若き感情を抱ける現代の青年文士十數名の食味に對する感想を聽いて、之を世に示さんとす。食味の如き習慣的のものも、人間の心の新たなると共に、如何に新しくなりつゝゆくか、此の如く普遍的の問題にして、又此の如く個性の明かなる問題はなかるべしと信ず、讀者の興味の動かさるゝと大なるべし。

▲文壇名家の小品文
▲學者名流の婦人談
▲醫學者の婦人生理談
▲猿丸太夫の耳袋
▲詩人歌人の近作
▲おもしろき番附
▲近古文學の研究
▲氣の利いた挿繪
▲誌友の自由なる創作

▲大阪東京優劣論

東京と大阪は現時我邦に於ける東西の二大都會なると共に、又世界有數の大都會たり、此兩都の優劣を成るべく多方面に、成るべく公平に、研究し、評論せんとす、本誌の立脚地として殊に婦人、風俗、文學思想等の方面に重きを置くは勿論なり。大阪東京の諸君は勿論、何れの地の人が見るも面白き記事なり。

三月

三月三日雛祭る頃から、世は春らしくなります、空の色、風のおとなひ、何となく柔かに暖かに、町に風船賣る人も、紙の造り花賣る人も春と云ふ心持が動いて來るやうで、都會は都會のやうに、田舎は田舎のやうに、からりとした明るい天地が開けてきます。

初春の心持は、何となく甘い哀愁を感じさせます、生に疲れたものも、青春の血の燃ゆるものも、娘にならんとするものも、男にならんとするものも、お嫁にならんとするも、凡てがスヰートな感じに打たれて、今の境遇から出て行きたいやうな、木の芽のめぐんだ林の中を歩いてみたいやうな、下萠の草を敷いて行く雲を見てゐたいやうな、表に水を撒いた都會の大通りを通つてみたいやうな、淡い放浪的氣分の起る時です、もう春になりきつて了ふと、だらけていけませんが、春にならうとする頃の氣分は、それほどだらけてはゐない、而かも縛られてゐるものが解かれたやうな、ゆるみの起る時です詩を知つてゐる者は歌ひたく、文を知つてゐる者は書きたく然して詩も歌も成らずに感興の與る時です。

大祭日　二十三日（春季皇靈祭）
日曜　三日　十日　十七日　二十四日　三十一日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回（一月、四月、七月、十月）定期號を特別三百頁の大册として發行することになりましたなほ左の定價表を詳しく御覽下さい

○本誌投稿及び懸賞規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること、▲小說と詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす、▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て厳に締切る

▲小說と散文は　▲天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』圖畫『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し短きものは此限にりあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品ふ贈呈し金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇　定價　毎月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◉特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘
◉普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘
◉半年分（特別二冊 普通四冊）前金壹圓九錢　送料拾壹錢
◉壹年分（特別四冊 普通八冊）前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、其他の月は皆普通號です。

▲從前の定期增刊は無くなりました

申込注意

注文は總て前金のこと、振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等割引	一頁貳拾五圓	半頁拾圓	一行四拾錢
貳等割引	一頁貳拾圓	（半頁廿四字 三十二行）	（一行ヵ數字 二十四字詰）
參等割引	一頁拾五圓		

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十五年二月二十五日印刷納本
明治四十五年三月一日第八年第參號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、巨明堂、大阪盛文館外

第八年第參號（三月一日發行）

女子文壇

明治四十五年二月廿五日印刷納本

（明治三十八年十二月十九日第三種郵便物認可）



▲女子文壇定價 拾五錢 郵稅五厘